

博士論文

『源氏物語』の「食」の連環

二〇一六年三月

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

荻田みどり

立命館大学審査博士論文

『源氏物語』の「食」の連環

A Study of meal description in *Genji Monogatari*

2016年3月

March 2016

立命館大学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程

Doctoral Program in Humanities

Graduate School of Letters

Ritsumeikan University

荻田 みどり

OGITA Midori

研究指導教員：中西 健治教授

Supervisor: Professor NAKANISHI Kenji

『源氏物語』の「食」の連環 目次

凡例	5
序章 問題提起と本論の構成	7
第一部 「食」の視線・意識	19
第一章 藤壺宮と柏木の死を結ぶ柑子	19
一 共通する「不食」表現	19
二 観察される死	19
i 藤壺宮の死	19
ii 柏木の死	19
三 柑子の性質	19
四 触る行為の親密性	19
五 柏木の容態が投げかける因果	19
六 柏木における「はかなし」	19
七 消え入る「灯火」と「泡」の喩	19
第二章 「不食」の女三の宮に見える成長	43
一 繰り返す女三の宮の「不食」	43
二 「不食」による影響	43
三 「おどろおどろしからぬ病」と「不食」	43
四 出家を決意する女三の宮	43
五 出家断行の要因	43
六 女三の宮の「不食」から「食」へ	43
第三章 光源氏の「不食」への眼差し	61
一 光源氏の視点	61
二 往来する光源氏	61
三 共食の思想	61
四 「食」を勧める意義	61
五 朱雀院との対面が再現する場	61
六 見る光源氏と見られる光源氏	61

第四章	中の君の「不食」と述懐……………	81
一	中の君についての先行研究と問題提起……………	
二	中の君の懐妊と並行する匂宮の結婚……………	
三	月が回顧させる宇治……………	
四	「見苦し」と思われる行動と心理……………	
五	匂宮と中の君の関係の変化……………	
六	中の君の心の安定……………	
第五章	垣間見る匂宮の食事……………	109
一	中将の君の視点……………	
二	垣間見ること……………	
三	食事を垣間見ること……………	
四	御粥・強飯の食事を垣間見ること……………	
五	匂宮の食事を垣間見ること……………	
六	浮舟の運命の先導者……………	
付章一	「騒ぐ」周囲の視線の作用……………	127
一	「騒ぐ」の語義……………	
二	「騒ぐ」人物……………	
i	地方育ちの者……………	
ii	幼子……………	
iii	光源氏・内大臣……………	
iv	自然……………	
三	「騒ぐ」ことによる作用……………	
i	行動の抑制……………	
ii	行動の促進……………	
iii	静かさの強調……………	
四	中心人物と周囲の関係……………	
付章二	「ののしる」が及ぼす影響力——「騒ぐ」と比較して……………	149
一	「ののしる」の語義と先行研究……………	
二	「ののしる」の持つ影響力……………	
三	「ののしる」が生み出す領域の内外……………	
四	祈禱する声と効験……………	
五	物の怪と祈禱の攻防……………	
六	「ののしり騒ぐ」と「騒ぎののしる」……………	
七	遠ざかる「ののしる」声……………	

第二部	交流の媒介となる「食」の働き……………	173
第一章	光源氏の大堰での食事……………	173
一	食事する光源氏ともてなす明石の君	二
二	「うちとく」光源氏	
三	くだものと強飯の性質	四
四	「うちとけ」ぬ明石の君	
五	明石の君の身のほど意識	
第二章	玉鬘に贈るかりのこ——「柑子、橘などやうに紛らはして」……………	195
一	玉鬘物語の先行研究	二
二	山吹が想起させる玉鬘	
三	かりのこを贈る	四
四	「柑子、橘などやうに紛らはして」贈る意味	
五	光源氏と玉鬘の関係の終焉	
第三章	塩の歌に寄せる想い……………	209
一	製塩の地、須磨	二
二	塩の歌の世界	
三	塩の歌を贈る	四
四	潮の力	
五	塩の実景	六
六	須磨を想起させ続ける「塩」	
七	関係を結ぶ塩の歌	
第四章	くだものをさし出す弁の尼——「くだもの急ぎ」に見えた薫の姿……………	231
一	従来の解釈と問題の所在	二
二	東屋巻の弁の尼の役割	
三	弁の尼の和歌とくだものの役割	四
四	東屋巻巻末に描かれた意味	
五	「食」と交わる薫の性質	六
六	弁の尼が動かす物語	

結章 『源氏物語』における「食」の取捨選択……………	253
——胡蝶巻の中宮御読経における「引茶」をめぐつて——	
一 儀礼の中の「食」……………	
二 描かれなかつた「食」……………	
三 季御読経の中の引茶……………	
四 中宮御読経と秋好中宮……………	
五 法会の公式性と春秋争いの終結……………	
六 今後の展望……………	
初出・原題一覧……………	269

凡例

一、主な引用本文は、原則として以下を使用する。巻・頁数は引用本文の末尾の括弧内に示した。

・『源氏物語』『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『落窪物語』『蜻蛉日記』『和漢朗詠集』『枕草子』『紫式部日記』『栄花物語』『大鏡』『狭衣物語』『とりかへばや物語』『無名草子』

…『新編日本古典文学全集』小学館（本論の中では『新編全集』と略す。）

・『うつほ物語』…室城秀之氏『うつほ物語 全』おうふう 一九九五年十月

・『今昔物語集』…『新日本古典文学大系』岩波書店

一、『源氏物語』古注釈の引用本文は、原則として以下を使用する。

・『紫明抄』『河海抄』…玉上琢彌氏編『紫明抄・河海抄』角川書店 一九六八年六月

・『花鳥余情』…中野幸一氏編『源氏物語古注釈叢刊』第二巻 武蔵野書院 一九七八年十二月

・『光源氏一部歌』『弄花抄』『細流抄』『一葉抄』『萬水一露』『林逸抄』『孟津抄』『岷江入楚』

…『源氏物語古注集成』桜楓社

・『源氏物語湖月抄』…有川武彦氏校訂『源氏物語湖月抄 増注』講談社

一、和歌の引用は、原則として以下を使用する。巻・部立・歌番号を末尾の括弧内に示した。

・『万葉集』…佐竹昭広氏・木下正俊氏・小島憲之氏『補訂版万葉集本文篇』塙書房 一九九八年二月

・私家集…『新編私家集大成』for Windows CD-ROM版 エムワイ企画

・その他の和歌集に所収の和歌…『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2 角川書店

一、引用にあたっては、便宜的に主語・目的語・発話者・和歌の詠み手等の注記や傍線・傍点を私に付した箇所がある。

凡 例

- 一、引用本文の頭に、便宜的に資料番号や記号を付した箇所がある。
- 一、引用文中の「／」は、改行を示す。

序章 問題提起と本論の構成

人の営みの中で揺れ動く心情を描くことに、『源氏物語』の本質がある。作中人物の心情は、周囲の環境や動きに左右されながら変化する。物語に意図的に切り取られた当時の生活風景は、豊かな心情描写を支えている。

『源氏物語』では、色とりどりの装束、きらびやかな調度品、見事な庭園など、衣生活・住生活は饒舌に語られる。それに対し、もう一つの生活の基本要素である食生活についての描写は、あまりに限定的である。具体的な食べ物をあまり描こうとせず、食器などの間接表現や「物」などの抽象的表現によって食事を示す。「食」を描くことに消極的な印象を受ける。このことについては、「食」の露骨表現の忌避を指摘する戸田秀典氏⁽³⁾、「点景」としての文学表現に着目する神野藤昭夫氏⁽⁴⁾、食事の日常性に着目する伊藤博氏⁽⁵⁾などの論がある。

ただし、描かれている「食」の傾向は、大きく晴れと曇りの二つに分けられる。晴れの場における「食」は、例えば、光源氏の元服の折、「折櫃物、籠物」(桐壺卷①四七頁)が帝に供され、「屯食、祿の唐櫃」(同)が所狭しと並べられているように、それほど忌避されているようには見えない。寧ろ、描写から儀礼の盛大さ、賑々しさが窺える。『紫明抄』や『河海抄』を始めとした古注釈でも注目されている。「屯食事」を立項して、歴史上の先例を引く。他にも、婚礼や産養、年賀、行幸など、様々な晴れの場に「食」が描かれている。儀礼や饗宴の次第については、倉林正次氏による詳細な研究がある⁽⁶⁾。儀礼において「食」が重要な要素であったことが検証されている。

このような晴れの場の「食」は、『源氏物語』以前から多く描かれてきた。特に、饗宴の文学といわれる『うつほ物語』では、年中行事や饗宴、産養など、膨大な「食」が列挙されている。『伊勢物語』でも、宴や饗応での酒や盃の描写が多く見られる。例えば、惟喬親王章段の八二・八三段、その前後、八一段、八五段にも酒の描写が集中して見える。酒肴ではないが、八橋で男が詠んだ歌により、持っていた乾飯がふやけてしまったという九段

も、座において「食」が有効に機能している例だろう。『落窪物語』では、落窪の姫君と少将道頼の結婚二日目の供応、三日夜の餅が準備から作法に至るまで詳細に描かれている。三日夜の餅が二人の仲を結ぶ重要な儀礼であり、食事の準備に奔走するあこぎの姿から、主人への並々ならぬ誠意が伝わる。上代に遡れば、記紀や『万葉集』において、日本は「食国」^{ヲスミ}と呼ばれていた。「食」は国を統治することとも結びついていたという⁹⁶。晴れの場における「食」とは、場に彩りを与え、同じ場で食することにより、貴族社会での信頼関係や共同体内の帰属意識を高め得るものなのである。

一方、褻の場での「食」は、前掲の先行研究で述べられているように、忌避する意識が見える。「物語の出で来はじめの祖」である『竹取物語』では、迎えの天人が、かぐや姫に不死の薬を渡して、「壺なる御薬たてまつれ。穢き所の物きこしめしたれば、御心地悪しからむものぞ」(七四頁)という。現世を「穢き所」といい、現世の食べ物を口にしたことを、天人は悪しざまに非難する。現世の穢れを払うための物が不死の薬である。かぐや姫は不死の薬を舐め、月に昇天する。現世の食べ物と対照的に描かれる不死の薬が、帝に渡されることも、「食」と権力の関係において、示唆的である。

「食」への穢れ意識は、『古事記』上巻における穀物起源神話からも知られる。オオゲツヒメは神々に求められて、鼻、口、尻から食べ物を出し調理する。これを見たスサノオは、食べ物を汚くしているのだと思い、オオゲツヒメを殺してしまう。その死体の頭には蚕が、目には稲の種子が、耳には粟が、鼻には小豆が、陰部には麦が、尻には大豆が生る。『日本書紀』巻第一神代上第五段の一書第一一にも、スサノオでなくツクヨミ、オオゲツヒメでなくウケモチ、穀物の生る部位が異なるなど、違いはあるが、同様の穀物起源神話が見られる。このように、神話の時代から、「食」は口など身体の局部との密接な関係を持ち、それが穢れの意識にもつながっていた⁹⁷。

『枕草子』では、「かりのこ。削り氷に甘葛入れて、あたらしき鉢に入れたる。」(「あてなるもの」九八頁)、「御物まゐるほどにや、箸、匙など取りまぜて鳴りたる、をかし。」(「心にくきもの」三二九頁)などのように、高級

感や奥ゆかしさを感じさせる「物」に好印象を持つ一方で、酒癖の悪い人（「にくきもの」六六頁）や物を食べながら話をする人（「聞きにくきもの」四五四頁）など、「食」によって品なく見せる「行為」に否定的な印象を持っている。これらも、口などの局部が焦点化されて描かれている。藤本宗利氏は、「にげなきもの」章段において、老いた人物の「食」に関わる行為が複数描かれ（二〇一頁）、その直前に老女の妊娠や若い男との情事について記されていることについて、「性的なイメージを具えたものが、食行為と番えられて、肉体の醜悪さを言挙げしていることは興味深い。」と食欲と性欲の肉体的性について述べる⁷⁰。園山千里氏は、「方弘は、いみじう」章段において、笑いにされる方弘が隠れて、独りつまみ食いをする行為（二一一頁）に着目し、他の独りで食べる例を挙げながら、「ただひとりで、むさぼり食うその行為は、新たな人間関係の発展を閉ざしてしまう。つまり、その人物が食べ物を契機として自己の世界にのめり込んでいくことを際立たせているのだ。」と指摘する⁷¹。飲食を共にする共同体の規定から外れた行為によって、共同体から逸脱する方弘の人物像を読み取る。

褻の場において「食」への執着を思わせる行動が、貴族的な価値観から外れていたともいえる。筒井筒で知られる『伊勢物語』二三段では、化粧をして夫の帰りを待つ女と、自らしゃもじで飯を盛る高安の女が対照的に描かれている。男は、二人の女の姿を見、前者にはこの上ない愛しさを感じ、後者には幻滅して二度と通わなかった。「食」の準備に携わる生活感を嫌ったためであろう。『落窪物語』において、落窪の姫君が閉じ込められた物置のような部屋には、「酢、酒、魚など」（巻之一 一〇三頁）が乱雑に置かれていた。「食」によって落窪の姫君に相応しくない場所であることを示している。

『土佐日記』において、都から離れた滞在先や船中では歯固や小豆粥などをせず、年中行事の雰囲気を感じられないことを残念に思う。また、その土地で食する食べ物により、都への恋しさが語られる。つまり、晴れの場での「食」は都の貴族意識につながり、褻の場での「食」には鄙びた意識を持つ。

褻の「食」が、「生命を維持するために、他の生を呑みこむという本質」を持ち、秩序ある世界にとって「異種

の世界の猥雑さ」との交接を示すことについては、藤本宗利氏が『源氏物語』中の「食ふ」という語に焦点を当てて論じている⁽⁹⁾。「食」と性が結びつくことは、常夏巻の冒頭、釣殿での飲食場面において、男たちの「玉鬘への想いを、食うことにぶつけ」ていることを指摘する津島昭宏氏の論⁽¹⁰⁾もある。また、松井健児氏は、横笛巻における幼児の薫が筍にしゃぶりつく様子について、小児の生命力を示すとともに、薫の無心によだれを垂らして「食べる」ことに集中する姿が、老いゆく光源氏の不安や恐怖を掻き立てることを述べる⁽¹¹⁾。高橋亨氏の説⁽¹²⁾を引きながら、柏木と女三の宮との密通を想起させていることにも言及している。最近では、食欲のない落葉の宮や浮舟の身体性に関わることを論じた堀江マサ子氏の論⁽¹³⁾もある。

ただし、襲の「食」といつても、一概に忌避観念や本能的欲求に通じるとは言い難い。例えば、末摘花との一夜の後、二条院に帰邸した光源氏が、頭中将と共に朝食をとっている（末摘花巻①二八五頁）。玉上琢彌氏は、この場面について、「あたりまえの日常生活なのだが、それだけにわざわざ書かれるのには、やはり、それ相当の作者の計算があるようだ。」と指摘する⁽¹⁴⁾。室城秀之氏も、「物語は、日常的な飲食場面は描かない。それゆえに、飲食場面が描かれた際には、それを描くことによつて何を語ろうとしたのかに注意深くありたい。」と喚起している⁽¹⁵⁾。また、木谷眞理子氏は、他作品や史料を引用しながら、訪問先で食べ物を供するか否か、供する食べ物の種類により、「主人と客人の関係が映し出されている」ことを説く⁽¹⁶⁾。別の論考では、夕霧巻で夕霧が食事する描写に焦点を当て、食事による社会性について述べる⁽¹⁷⁾。

つまり、儀礼空間とも穢れ意識とも異なる、一見日常に見える「食」描写についても、意識的な要素が介在する。「食」への意識、すなわち「食」を通じて動く人物の感情や認識は、時に作中人物の心情に寄り添い、時に語り手によつて読者に投げかけられている。食べ物や食事する人物に注目するだけでなく、その描写方法、表現の取捨選択や、「食」の周りにいる人物の心情・行動など、様々なレベルで、もっと網羅的に考察する余地がある。特に、『源氏物語』では、隔たった場面に同じ「食」が置かれていることで、密接に関連し合っている場合がある。

重層的に「食」への意識を検証することで、細やかな心情にさらなる深みを与える。「食」は、主題に関わる事件や人物関係の近くに置かれていることもまま見え、単なる背景ではなく、物語を読み解く糸口になり得る。本論は、『源氏物語』の「食」に焦点を当てて文脈を読み解くことにより、物語の読みの世界を多面的にすることを目的とする。

なお、本論において、口に含み摂取するものや行動、状態の全てを、鍵括弧を付して「食」と、広く捉える¹⁸⁾。例えば、次のようなものは「食」の範疇に含まれる。

- ・ 具体的な食べ物（比喻表現も含む）
- ・ 酒
- ・ 薬
- ・ 食事を抽象的に表現する「もの」「饗」など
- ・ 食器、御膳など、間接的に食事を示す物
- ・ 「食べる」ことを示す用言「きこしめす」「まゐる」など
- ・ 食べ物に「触る」、食べ物を見るなどの用言
- ・ 食べ物を提供する、給仕する、食べることを促す用言
- ・ 調理に関する人・物
- ・ 「穀倉院」「大炊殿」など「食」を暗示させる場所

また、全くの「食」記述とはいいい難いが、「痩す」「肥ゆ」など、食事の有無が影響するであろう身体の状態を表す語も、考察の視界にはある。これらを合わせると、『源氏物語』において、「食」に関わる語は七〇〇語以上に上る。少ないといわれながらも、「食」は登場人物の傍らに現出している。

勿論、打消の形をとっている場合もある。「食」の露骨表現を避ける傾向のある『源氏物語』においては、食欲

がないことを表す語が「食」記述全体の約一割見られる。本論では、「不食」の描写をも含めて、「食」描写であると捉える。食べないこと、口に含まないことを特筆して述べる場合、「不食」という語を用いる。

『源氏物語』以後、平安時代後期物語や中世王朝物語の「食」記述は、減少傾向にある。用例数でいえば、それぞれの作品の「食」記述は『源氏物語』の十分の一にも満たない。その中で専ら描かれるのは、病や懐妊などの体調不良により食事をしない描写や薬を服用する描写である。儀礼や饗宴の描写自体が少なくなることとも関わり、『うつほ物語』のような「食」の列記は見られなくなる。作り物語において、「食」記述の性質は『源氏物語』を境に変化していると考えられる。「食」記述自体が少なくなる中で、「不食」という「食」が描かれ続けることは、「不食」表現が体調不良を印象深く描くために必要であったともいえるだろう。つまり、『源氏物語』は「食」描写においても、後代の作品に大きな影響を与え、転換点になったのである。『源氏物語』を中心に据えて「食」の描写を考察することで、「食」「不食」の両面の性質を考察することができる。後代への影響や受容を考える上でも意義がある。

そこで、第一部では、「食」を見る視点・視線に着眼する。『源氏物語』において、作中人物は常に語り手を含めた周囲の人物から見られている。見られていることを意識することで、行動や心情にも影響を及ぼしている。共同体への帰属意識や穢れ意識という両義性を持つ「食」が、視覚と交わることで浮き彫りにされる心理を読み解く。

視点とは、物事を見る立場のことである。視線とは、視点となる人物を起点として、見ている対象とを結ぶ線であり方向性を意味する。神野藤昭夫氏は、「〈視点〉とは、一般的には、〈語り〉の視点」のことをいう。語り手が、物語世界を語りすすめてゆく際、特に物語世界に登場する人々とのような関係にあるか、ということである。⁽⁹⁾と定義する⁽⁹⁾。『源氏物語』の〈語り〉の視点について、先行研究により既に大きく取り上げて論じられているところである。『源氏物語』の語り手は、作中人物の傍にいる女房のような人物と想定されている⁽¹⁰⁾。特に、

草子地には、語り手の主観⁽²⁾が立ち現れる。地の文でありながら、語り手が作中人物に同化して物事を見ている場合もある。玉上琢彌氏は、橋姫巻において薫が宇治の姫君を垣間見る場面の敬語の有無を例に取り、「いつしか姫君たちに敬語がなくなるのは、そのさまを作者が読者に語るのではなく、作者は消え失せて、薫の目で覗くことになったからである。すなわち読者が薫の目をもつて覗く、読者も消えて、薫となりきるようになるのである、と考えたい。」と分析する⁽²⁾。垣間見が王朝物語を構成する重要な手法の一つであることを提唱した今井源衛氏は、「読者はその文章を通して、一方には「見る者」の目を借りて「見られる者」の容姿を眺めつつ、他方では作者の解説によつて、直接「見る者」の動きと心理とを知り得る」と述べ、「見る者」と「見られる者」の二つの側面から物語が語られていることを論じている⁽³⁾。特に、『落窪物語』以降は、「「見る者」の視線の移動に随つて逐次に寫しとつて行くと云ふ寫生的態度」が明確になっているという。以上のような視点・視線の論理を「食」に投影させ、人々が「食」「不食」を見ることで、どのような意識が働いているのか、その意識が物語展開にどのような影響をもたらしているのかを明らかにする。

第一部第一章では、藤壺宮の臨終場面で語られる表現「柑子などをだに触れさせたまはず」と、酷似する表現が、重態の柏木にも見られることの意義を考察する。柏木は自身の状態を自己分析できず、人々から見られることで、「死にゆく者」となる。具体的、直接的な「柑子」「触る」という表現によつて、密通の罪に苦しむ二人を連関させる。同様の記述を繰り返すことで、藤壺宮と同じく柏木が、密通の罪に苦しみ死にゆくことを、藤壺宮の死を看取った光源氏に顕示していることを指摘する。

第一部第二章では、最も「不食」描写の多い女三の宮に焦点を当て、その描写の役割を検証する。女三の宮の「不食」は、懐妊と関わつて起こる。「不食」が周囲から見られ、乳母や女房の苦言を引き起こす。そのことが、他者の目を気にする源氏の行動を制限し、密通について他者に責任転嫁ばかりしていた女三の宮の自戒の念にながつている。「食」は人の生き死にに関わる。出産後の女三の宮は、「不食」によつて死が意識されつつも、死

ではなく出家を希求する。ここに死と出家との相違点が見出せること、若君を守る母として、女三の宮の成長が垣間見えることを述べる。

第一部第三章では、源氏が紫の上と女三の宮、二人の「不食」の様子を見つめることの意義を確認する。若菜下巻の紫の上発病から柏木巻の女三の宮出家まで、紫の上と女三の宮は対照的に描かれる。その中で、共食、また共に食べないことと場の関係により、源氏が紫の上と心を通わせ、女三の宮から心理的に離れていく様子が描かれている。「不食」状態の二人を見つめる源氏を、さらに見る周囲の視線により、源氏の行動が制御されていることに言及する。

第一部第四章では、宇治の中の君の食欲不振の様子が、彼女の妊娠初期に三度繰り返されていることに着目する。この描写は、匂宮と六の君との結婚が決まり、通うようになることと並行して語られている。これに伴う中の君の心情の移り変わりと、周囲の女房や、懐妊自体に気づかない匂宮が「不食」の中の君を見て「見苦し」ということの意味を問う。「見苦し」の語義を検討した上で、中の君が周囲から孤立し、匂宮との心情の齟齬が大きくなっていく様子を読み取る。

第一部第五章では、浮舟の母中将の君が、上流貴族である匂宮の食事を垣間見る場面の意図を論じる。まず、垣間見る行為が観察者の価値観に基づくことを述べる。垣間見る人の心を動かすため、垣間見られる人の教養の高さや美点が提示される。中将の君が、公私ともに優れた匂宮の様子を垣間見ることにより、これまでの中将の君の価値観を突き崩し、浮舟を薫と娶せる理想を抱き始める。食事する姿は、長年東国で暮らしてきた中将の君にとっても分かりやすい形で、よりリアリティをもって匂宮のすばらしさを示すことができる。中将の君にとって、上流貴族の敷居を下げるために相応のものであったことを示す。

さらに、付章として、視線の観点から派生した問題に着目する。「食」に限らず、作中の中心的な人物は周囲の人物の行動を意識している。周囲の視線の動きに影響を受けながら、物語は展開している。このことを、語の用

例分析を中心として、明らかにする。

付章一では、「騒ぐ」の用例を分析し、その役割を分類考察する。「騒ぐ」とは、都人（貴族）の価値観とは異なる動作である。体面を守るため周囲の視線を避ける中心人物は、騒がしさにより行動が抑制される。一方で、騒がしさの合間を縫って行動が促進されている。また、騒がしさと中心人物が対比的に描かれることで、冷静さを保つ中心人物の心情に深く立ち入ることが可能となっていることを解き明かす。

付章二では、「騒ぐ」と類似する語である「ののしる」の作用を、「騒ぐ」と比較分析する。動作に重きが置かれる「騒ぐ」に対し、「ののしる」は音声に主眼がある。「ののしる」という行動は、対象とする人物に一方的・直線的に向けられると同時に、周囲へも拡散する性質を持つ。また、「ののしる」には影響を及ぼす範囲があり、その視覚的・聴覚的領域の内外によって心情の差異が生まれる性質があることを提示する。さらに、病に苦しむ人物の周囲で行われる祈禱や物の怪の様子において、「騒ぐ」や「ののしる」表現がよく見られる。その違いについても言及する。

第二部では、一方的な視線だけではなく、人と人とが交流する上で、「食」がお互いの心情を動かす媒介として効果的に用いられていることを論じる。このような交流の場とは、訪問先で対峙するときはもとより、贈物や和歌においても考察する必要がある。具体的な物を伴う場合もあるが、和歌に詠み込まれた言葉の上だけの「食」もありうる。様々なレベルで人間関係を示す「食」によって、物語世界が変化していることを提起する。

第二部第一章では、源氏が明石の君の住む大堰邸で食事する一場面を手がかりに、源氏と明石の君との関係を考察する。『枕草子』に恋人の家で食事をするのは興ざめだと語られるように、基本的に上流貴族は外出先で食事すべきではないとされる。それにもかかわらず、源氏は「うちとく」行為として、明石の君のもとで食事をする。「うちとく」という語の性質を検討し、源氏と明石の君の「うちとく」行為に対する心情のずれを読み取る。また、明石の君の自尊心を保つために鄭重に供する食事が、「くだもの、強飯」であったことを指摘する。

第二部第二章では、源氏が玉鬘にかりのこを贈る、真木柱の一場面を中心に、源氏と玉鬘の関係を考察する。源氏は山吹を見て、鬚黒のもとで住むようになった玉鬘を忘れがたく思う。他作品や和歌の用例を確認した上で、三月の景物であるかりのこが、源氏が周囲に覚られない形で、玉鬘への想いをほめかすのに適したものであったことを示す。さらに、かりのこを「柑子、橘」などのように「紛らは」していることで、胡蝶巻の源氏が玉鬘に思慕を告げた場面を想起させる。源氏の諦めきれない想いを示しながらも、この場面によつて、皮肉にも、源氏と玉鬘の仲が完全に破綻する重要な場面であることを説く。

第二部第三章では、和歌に多く用いられる「塩」が、特に源氏の須磨・明石での暮らしを想起させ、源氏が遠く離れた都の女君と通じ合うために使われていることを考察する。須磨は、もとは製塩の地でありながら、当時既に廃れてしまっていた。源氏は言葉の上で塩の仮想世界を作り、遠路を結ぶ。「高潮」により、源氏が明石に移ることで、实景の塩の世界が現れる。また、实景を知る明石一族にとっては、塩の歌は一族の結束を強めるものとなる。さらに、火葬の煙を塩焼きの煙に見立てることにより、源氏の須磨退去を思い出させながらも、現世と死後の隔絶した場所を結ぶ役割をも果たしていることを論じる。

第二部第四章では、東屋巻巻末に、弁の尼から薫にくだものがさし出されている場面の意義について考察する。弁の尼は、くだものの敷紙に和歌をしたためている。弁の尼とその和歌の役割について論証する。すなわち、弁の尼は一見薫に同調し、亡き大君の形代となる浮舟との仲立ちをするものの、薫の浮舟への執着を抑制し、大君追慕の情を喚起させている。この場面が置かれることにより、大君追慕の物語から浮舟を中心とした物語への足掛かりになっていることを提起する。また、敷紙に書かれた和歌に目を凝らす薫の姿は、「くだもの急ぎ」に見えた。薫がくだものを急いで食べたがっているように見えた、という従来受容されてきた解釈の背景に、薫の、普段表に出さない異性への執着を「食」に仮託する性質が、『源氏物語』を通して形成されていることを指摘する。

以上の考察により、「食」の描写にあらゆる角度から注目することで、「食」が作中人物の心情に大きな影響を

において、「食」と人物の関わりが身体的な問題と絡めて述べられている。

(14) 玉上琢彌氏『源氏物語評釈』第八巻 角川書店 一九六七年三月

(15) 室城秀之氏「物語と食——鶉飼いのことなど」(『文学に描かれた日本の「食」のすがた——古代から江戸時代まで』至文堂 二〇〇八年十月)

(16) 木谷眞理子氏「源氏物語と食」(『成蹊国文』四〇 二〇〇七年三月)

(17) 木谷眞理子氏「夕霧巻と食」(『成蹊大学文学部紀要』四三 二〇〇八年三月)

(18) ミハイール・バフチン氏が提示したラブレールの小説における饗宴のイメージにおいて、「大きく開けた口というモチーフは『パンタグリユエル』の主導的モチーフであって、これと結びついているのみこむというモチーフは、肉体のイメージと飲み食いのイメージのまさに境界線に位置する」と論じるように(ミハイール・バフチン氏著、川端香男里氏訳『フランソワ・ラブレールの作品と中世ルネッサンスの民衆文化』せりか書房 一九八〇年六月)、食べる行為は口と密接な関係にある。それを概括したい。

(19) 神野藤昭夫氏「視点」(『国文学解釈と教材の研究』二八・一六 一九八三年十二月)

(20) 玉上琢彌氏『源氏物語研究』(『源氏物語評釈』別巻一) 角川書店 一九六六年三月

(21) 土方洋一氏「語り」(『国文学解釈と教材の研究』四〇・九 一九九五年七月)は、「実体的な語り手の主観的限定的視点から語るということを方法化することによって、物語言説と物語内容をはじめから相対化するような視座が獲得されている。」と述べる。また、三谷邦明氏「物語文学の〈視線〉——視ることの禁忌あるいは〈語り〉の饗宴——」(『物語文学の言説』有精堂出版 一九九二年十月、初出は「物語研究」二 一九八八年八月)は、「〈語り〉と〈視点〉(〈視線〉との密接な関係を説き、時に話者の言葉が「語り手の眼差しによって解釈され」直すことも指摘している。

(22) 玉上琢彌氏「敬語の文学的考察——源氏物語の本性(その二)——」(『源氏物語評釈』別巻一 一九六六年三月)

(23) 今井源衛氏「古代小説創作上の一手法——垣間見に就いて——」(『国語と国文学』二五・三 一九四八年三月)

第一部 「食」の視線・意識

第一章 藤壺宮と柏木の死を結ぶ柑子

一 共通する「不食」表現

『源氏物語』の「不食」表現のほとんどは、「ものなどきこしめさず」のような抽象描写である。「(御)くだもの」さえ拒絶して食欲がないことを示す描写は六例見えるが、どのようなくだものかは分からない。具体的な食べ物を挙げ、それさえ触れようとしないほど食欲がない、と表現される例は、次の二例のみである。

女房「月ごろなやませたまへる御心地に、御行ひを時の間もたゆませたまはずさせたまふ積もりの、いとどいたうくづほれさせたまへるに、このごろとなりては、柑子などをだに触れさせたまはずなりにたれば、頼みどころなくならせたまひにたること」

(薄雲卷②四四五頁)

さるは、たちまちにおどろおどろしき御心地のさまにもあらず、月ごろ物などをさらにまゐらざりけるに、いとどはかなき柑子などをだに触れたまはず、ただ、やうやう物に引き入るるやうにぞ見えたまふ。

(若菜下卷④二八三頁)

薄雲卷の例は、藤壺宮の臨終の場面である。見舞いに訪れた光源氏に対し、女房が藤壺宮の容態を詳しく説明する。この後、藤壺宮が源氏に最期の言葉を述べ、源氏が返答しているうちに亡くなる。

若菜下巻の例は、病み患う柏木の様子である。朱雀院御賀の試楽で、柏木は容態が悪化するものの、急変するような病状ではない。食事がすすまない状態が数ヶ月続き、ますます「はかなき柑子など」さえ触れなくなる。

ただ、だんだん何かに引き籠っていくように見える。柏木の「柑子などをだに触れたまはず」という表現が、藤壺宮の臨終の場面を想起させていることは、明らかである。しかし、柏木は若菜下巻において絶命するわけではない。朱雀院御賀を経て若菜下巻を閉じ、柏木の膨大な述懐を含む柏木巻において、柏木は亡くなる。

では、なぜ若菜下巻のこの場面で、柏木の重態の状況が、藤壺宮臨終の表現を繰り返す必要があったのだろうか。また、なぜそれが「柑子」などさえ触れないという「不食」表現であったのか。本章では、表現の反復の意図とともに、『源氏物語』における「柑子」が示す世界を考察する。

二 観察される死

i 藤壺宮の死

三十七歳の厄年を迎えた藤壺宮は、春の初めからの病が三月に重くなった。自身は「今年はかならずのがるまじき年と思ひたまへつれど、」（薄雲巻②四四三頁）と、死を予期していた。だが、藤壺宮は仏事や勤行も普段通り行っていた。そのため、周囲は悪化するまで気づかなかった。見舞いのための冷泉帝の行幸に随行した源氏も、いつもの不調と気を許していたことを後悔する。この数年諦めていた藤壺宮への思慕が頭をもたげってくる。この気持ちをもう一度訴えないままになってしまいうことに耐えられず、源氏は再度見舞う。この時にはもう、源氏も藤壺宮の死を覚悟していた。

「近き御几帳」（四四五頁）に近寄り、女房に藤壺宮の容態を尋ねる。「親しきかぎり」（同）の女房が「こまかに」（同）説明する。幾月も患いながら、勤行を怠ることなく行ったことが積もり積もって病状が悪化し、柑子な

どをさえ触れなくなったために、頼みの綱もなくなったという。冷泉帝が行幸し見舞った折には、仏事を普段通りに執り行っていたことを述べているが、日常的な食事の話には及ばなかった。まして、「柑子」という具体物をもって語るなどない。いくら触れないという打消表現とはいえ、話題にすることで、藤壺宮が、過去柑子を食していた姿を如実に想像させる。藤壺宮の女房は、その「柑子」さえ触れない藤壺宮の様子を源氏に語るのである。『萬水一露』が「親しきかぎり」の筆頭に、源氏と藤壺宮との密通を手引きした王命婦を挙げているように、源氏と藤壺宮との仲をも知っていた女房が語ったものと思われる。女房も、源氏だからこそ、藤壺宮の声がほかに聞こえる「近き御几帳」にまで近づけることを許し、藤壺宮の状況を詳細に話す。

しかし、先の見舞いは冷泉帝の付き添いだったものの、今回は二度目の見舞いである。源氏も既に最期と覚悟して訪問している。なぜこの場面で藤壺宮の臨終までの経緯が語られる必要があったのだろうか。

藤壺宮の死については、清水好子氏^③や藤本勝義氏^④が冷泉帝に出生の真相を明かすために必要だったと述べている。冷泉帝は、藤壺宮の死後、自身が源氏と藤壺宮の子であることを知り、臣下としてではない源氏の栄華をもたらす。その源氏が藤壺宮の臨終に立ち会い、最期の言葉を聞いている。

藤壺「院の御遺言にかなひて、内裏の御後見仕うまつりたまふこと、年ごろ思ひ知りはべること多かれど、何につけてかはその心寄せことなるさまをも漏らしきこえむとのみ、のどかに思ひはべりけるを、いまなむあはれに口惜しく」

(薄雲卷②四四六頁)

森一郎氏が「かような公事にせよ藤壺が感謝の言葉をつたえることは、源氏と藤壺の関係にあたたかな情感を流露させるものであるから、源氏と藤壺の間の心の紐帯からすれば、それは愛情の表白にほかならぬではないか」と述べる^⑤ように、藤壺宮の最期の言葉は、源氏に対する想いを含んでいる。冷泉帝の還幸後、源氏の二度目の見舞いの前に、藤壺宮は「御心の中に思しつづくるに、高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく、心の中に飽かず思ふ

ことも人にまさりける身、と思し知らる。」(四四五頁)と、自身の人生の総括として述懐している。藤壺宮の「高き宿世、世の栄え」も「飽かず思ふこと」も、源氏との関係を措いては語れない、冷泉帝の存在に裏打ちされる。

藤壺宮は出家後、冷泉帝の母として、後見役の源氏と政治的な協力関係を築くが、情愛の念は訴え得なかった。「頼みどころ」がなくなつた今、藤壺宮はそれを悟り、柑子という具体的な食べ物をもつて「不食」状態を女房に語らせる。冷泉帝の行幸時の公式な場では語れないことである。この話によって、政治的な関係でしか相見えることのなかつた、源氏と藤壺宮の私的な時間を埋める。藤壺宮の述懐と最期の言葉との連関は、先学の研究でも指摘されるところである⁵⁾が、この最期の言葉を聞く源氏の存在が、藤壺宮の死の役割を決定づけている。藤壺宮の臨終に至るまでの私事も含む詳細な説明は、最期の言葉を、公事だけではなく私情を内在させて、源氏に解させる。柑子さえ触れないという説明は、源氏との長年の私的な関係を補いながら、源氏を死にゆく藤壺宮の観察者たらしめている。

ii 柏木の死

藤壺宮が自身の死を予期していたのに対し、柏木は死の運命を分析することができない。朱雀院御賀の試楽の後、柏木は、「例の、いとおどろおどろしき酔ひにもあらぬを、いかなればかかるならむ、つつましものを思ひつるに、気のはりぬるにや、」(若菜下巻④二八一頁)と思つている。深酔いしたわけでもないのに、どうしてこう苦しいのかと疑問が空転し、自身の心弱さを把握し切れていない。死の直前の夕霧との対話においても、「いかう今日明日としもやはと、みづからながら知らぬ命のほどを思ひのどめはべりけるもはかなくなむ。」(柏木巻④三一七頁)と話している。自らの寿命が今日明日となることさえ分かつていなかったことは、藤壺宮と異なる。

そもそも、柏木が死に至るほどの病となった直接の原因は、朱雀院御賀の試楽での源氏との対面である。柏木自身、臨終の床で夕霧に対し、

六条院にいささかなる事の違ひ目ありて、月ごろ、心の中に、かしこまり申すことなむはべりしを、いと本意なう、世の中心細う思ひなりて、病づきぬとおぼえはべしに、召しありて、院の御賀の樂所の試みの日参りて、御気色を賜はりしに、なほゆるされぬ御心ばへあるさまに御眼尻を見たてまつりはべりて、いとど世にながらへむことも憚り多うおぼえなりはべりて、あぢきなう思ひたまへしに心の騒ぎそめて、かく静まらずなりぬるになむ。

(柏木卷④三一六頁)

と、試楽の日に自身を許していない源氏の「御眼尻」を見たために、動悸が静まらなくなったことを、打ち明けられている。

源氏の「目」に対する柏木の恐懼は、密通直後の場面において、「この院に目を側められたてまつらむことは、いと恐ろしく恥づかしくおぼゆ。」(若菜下卷④二三〇頁)と語られ、その後も「空に目つきたるやうにおぼえし」(二五八頁)、「いかでかは目をも見あはせてまつらむ、」(同)と繰り返して描かれている。試楽の場面においては、「御目とまれど」(二七五頁)、「うち見やりたまふ」(二八〇頁)、「御覧じ咎めて」(同)とあり、柏木は直接源氏の「目」に晒されている。この「目」については、『無名草子』が、源氏が柏木を「睨み殺したまへる」(一九九頁)と評したのを始めとして、様々な論究が為されている⁵⁾。源氏自身がどこまで意識的に柏木を追い込んでいたかはわからないが、源氏の視覚的圧迫の連続により柏木は悩乱する。

以前にまして病み患う柏木は、母北の方の再三の訴えに従い、妻落葉の宮の邸から親元に戻る。柏木を待ち受けていた父母と大臣邸の人々は、「大殿に待ちうけきこえたまひて、よろづに騒ぎたまふ。」(若菜下卷④二八三頁)と、柏木の帰邸に大騒ぎする。しかしながら、「さるは」という逆接が続くように、柏木の病状は、大騒ぎするほ

どではない。食欲がなく、ますます「はかなき柑子」にさえ触れなくなるが、柑子の拒否が死に直結することはない。父母が柏木の重態を知り騒ぐ様子は、前の場面にも描かれていた（二八一頁）。強調される父母たちの騒がしさとは無縁であるかのように、「ただ、やうやう物に引き入るるやうにぞ見えたまふ。」と、柏木は自身の内側に籠っていく。「引き入らるる」という受動態ではなく、柏木自らが何か「引き入るる」^⑤ようであることが、他者（ここでは柏木の父母）から「見えたまふ」のである。

柏木は、自身の様子を自分で見ることはしない。他者から見られることにより死の運命が確定されていく。その契機は、源氏であり、また、落葉の宮との夫婦の縁を引き裂いてまでも柏木を引き取った、父母である。親元に帰ることで、騒がしさに囲まれ、柏木は内へ籠るしなくなる。その行き場のなさ、周囲にも死を確信させる。

とはいえ、実際に柏木の死が描かれるのは柏木巻である。この巻は、巻頭から柏木の述懐で埋め尽くされている。柏木は苦悩の果てに、親兄弟に見守られながら、「泡の消え入るやう」（柏木巻④三一八頁）に亡くなる。今西祐一郎氏は、柏木の死の叙述において、これまでの物語で見られた「死なれた者」の哀しみを述べることから、「死にゆく者」の内面を述べることへと転換した^⑥と述べる。死を悟っていた藤壺宮がなぜ死ぬのかを問題にできなかったのに対し、柏木は死を自覚することで、理解に苦しむ自身の運命を問い続ける。自ら死を悟ることのできない柏木が煩悶する姿を描くためには、周囲から「死にゆく者」として意識され扱われる必要があった。

柏木が柑子さえ触れないことなどの容態説明の直後に、柏木の「有職」（若菜下巻④二八四頁）である人となりが見られる。世間の人々の誰もかれもが、柏木の病状を聞き、惜しむ。仲の良い夕霧はもとより、帝や朱雀院、源氏さえもが柏木を見舞う。柏木は源氏に「見られる」ことにより死への歩みを進める。そして、父母や世間から幾重にも惜しまれ、「死にゆく者」として「見られる」ことにより、自身が「死にゆく者」であることを自覚する。

藤壺宮を含め柏木以前の死は葬儀をもって死者を惜しんだのに対し、既に若菜下巻で哀悼された柏木の葬儀は、描かれることがない。柏木の死は、いかに彼が苦しみ死に至ったかを見つめる人々の視線に、筆が尽くされている。

三 柑子の性質

では、二人をつなぐ「柑子」とはどのようなものなのだろうか。

まず、大きさとしては、『伊勢物語』第八七段に「その石の上に走りかかる水は、小柑子、栗の大きさにてこぼれ落つ。」(一九一頁)とある。『源氏物語』中の「柑子」に大小の別はないが、小柑子で栗くらいの大きさであったことが分かる。『うつほ物語』蔵開中巻では、式部卿宮の中の君が仲忠に父兼雅宛の文を入れた柑子を投げている。手で投げられるほどの大きさなのだろう。

『源氏物語』中における「柑子」の用例は四例ある。当該の二例と、真木柱巻、若菜上巻に一例ずつ見られる。『河海抄』は薄雲巻の柑子について、「聖武天皇神龜二年柑子從唐国来殖種結子／又本草云柑子無毒云々仍病者宜食敷」(／は改行)と注し、柑子の起源を述べた上で、病気の者が食べるとよいとする。平安中期に成立した日本現存最古の医学書である『医心方』では、味は甘酸っぱく、橘よりおいしいとする⁽⁹⁾。積淡(痰積)には橘の皮以上に効き、また、胃腸の調子を整え、解熱、解毒作用についても効能を持つ。確かに、薬として有効だったといえる。また、『本草和名』には、霜の後に収穫され、その美味により「甘子」と名付けられたと、名の由来が説明されている⁽⁹⁾。

『小右記』正暦元(九九〇)年十二月十七日条には、「戊午、小柑子・栗・署預等令奉院、」^(ママ)とあり、実資が円

融法皇に小柑子などを献じている⁽¹⁰⁾。前日の記事に「早朝参一乗寺（円融院＝執筆注）、即候御前、被仰雑事之次仰云、従去月心神不例、飲食難受、菓子難見者、小選退出、」とある。円融法皇が前月より心神を患い、飲食もままならぬ様子であるという。病体の円融法皇でも食べやすいものとして、甘酸っぱく美味である柑子を献じたのだろう。ただし、医者からではなく実資自身が献じていることから、菓というよりも見舞いの品として見るべきだろう。

『金葉和歌集』二度本には、

れいならぬことありてわづらひけるころ、上東門院に柑子たてまつるとて人にかかせてたてまつりける

堀河右大臣

つかへつるこの身のほどをかぞふればあはれこずゑになりけるかな

御返し

上東門院

すぎきける月日のほどもしられつつこのみを見るもあはれなるかな

（『金葉和歌集』二度本卷九 雑部上 五六二・五六三）

とある。堀河右大臣藤原頼宗が、上東門院彰子に柑子を贈っている。病気を患っている堀河右大臣が贈り主であることから、見舞いの品でさえない。柑子という「木の実」を掛詞として用い、若い先長からぬ「この身」を嘆じている。

説話の世界では、柑子は「招福、致富のシンボル」⁽¹¹⁾であった。藁しべ長者の話で有名な『今昔物語集』巻第一六第二八話「参長谷男、依観音助得富語」では、青侍が女に頼まれ、藁筋にくくりつけた虻を、陸奥国紙に包んだ大柑子三つと交換する。その後も物々交換を繰り返して、裕福になる。青侍は、「此レ観音ノ御助也ケリ」⁽¹²⁾（③五四五頁）と観音に感謝する。このような物々交換の始めが「大柑子三ツ」⁽¹³⁾（③五四四頁）である。三つの柑子は、『世継物語』第四二話の藤原頼通の夢や、『撰集抄』巻六第一話で中国の皇帝から与えられた宝として登場する。

説話ではないが、前述した『うつほ物語』蔵開中巻では、兼雅が訪問の遠のいた女三人にそれぞれ大柑子を贈る。女三人がそれぞれ歌を添えた柑子・橘・栗を、兼雅の子仲忠に投げつけた、その返事としてである。兼雅は、大柑子の中をくり抜いて金を入れ、返歌をつけ、三人それぞれに贈っている。三つの柑子説話を念頭に置いた挿話であろう。三人の女君の中で、式部卿宮の中の君は、「結び置きてわがたらちねは別れにきいかにせよとて忘れ果てしぞ」（五六七頁）という、関係を結びながらも自身を忘れてしまった兼雅を恨む歌を、柑子につけている。それに対し、兼雅が大柑子に入れて贈った返歌「契り置きし昔の人も忘れずて君をば訪はぬ我かあらぬか」（五六八頁）では、関係が間遠になってしまったことが本意ではなかったと弁解している。中の君の父式部卿宮が亡くなったことが話題に上り、兼雅が「昔の人も忘れず」と返していることは、昔の人を思い起こさせる橘に似た機能である。ただし、兼雅が中の君を訪ねなかった事実は認めており、懐旧の情とは異なった様相が窺える。兼雅は他の女君二人にも大柑子を贈っているが、これは仲忠に勧められたためである。初めは、三つの歌を見て、「この中の君の返り言はせむ」（五六七頁）と考えていた。返歌を入れる物として大柑子を選んだのも、ないがしろにしていた中の君との関係を特に結び直す意図があるのではないだろうか。

さらに、『うつほ物語』蔵開上巻では、「白き絹に柑子を包めるやうに見えて、いと白くうつくしげなり。」（五一八頁）と、生後五十日が祝われるいぬ宮を柑子に喩えている。既に頸がすわっているいぬ宮の生命力とともに、白い絹に包まれた愛らしさが感じられる。

さて、『源氏物語』に戻ると、当該の二例以外の「柑子」は、病者に関わるものではない。ここで、残り二例（真木柱巻・若菜上巻）について見ておこう。

真木柱巻と若菜上巻の二例は、いずれも別の食べ物と併記されている点で共通する。真木柱巻は橘と、若菜上巻は椿餅、梨とである。ただし、真木柱巻に見える例は、本物の柑子ではない。鬚黒邸に引き取られた玉鬘に対し、源氏がかりのこ（鴨の卵）を「柑子、橘などやうに紛らはして、」（真木柱巻③三九四頁）贈る。これについ

ては第二部第二章で詳しく論じるが、「柑子、橘など」のうちの「橘」は、胡蝶巻で源氏が玉鬘に恋慕の情を打ち明けた場面を想起させている。玉鬘にしか分からぬように、源氏のあやくな気持ちを訴えている。

若菜上巻の例は、六条院での蹴鞠後の宴の場面である。

大殿御覧じおこせて、源氏「上達部の座、いと軽々しや。こなたにこそ」とて、対の南面に入りたまへれば、みなそなたに参りたまひぬ。宮も、みなほりたまひて御物語したまふ。次々の殿上人は、簀子に円座召して、わざとなく、椿餅、梨、柑子やうの物ども、さまざまに、箱の蓋どもにとりませつつあるを、若き人々そばれとり食ふ。さるべき干物ばかりして、御土器まるる。

衛門督は、いといたく思ひしめりて、ややもすれば、花の木に目をつけてながめやる。

(若菜上巻④一四二頁)

源氏は上達部の席が軽々しいと、対の南面に呼び入れ、殿上人ばかりが残る。「若き人々」は、椿餅、梨、柑子などが取り混ぜられてあるのを、戯れながら取って食べている。同じく若き殿上人であるはずの柏木は、物思いに沈み、ぼんやりと桜の木を眺めている。柏木が女三の宮を垣間見た直後の様子である。柏木は、桜の木に女三の宮の着ていた桜の織物の細長を重ね、煩悶する。

衛門督、つまり若き殿上人である柏木が、実際に供された物を食べたかどうかは描かれませんが、この場に源氏から供された食べ物が具体的に描かれ、その中に柑子が含まれていることは注目されよう。源氏の与り知らぬところで、柏木は女三の宮を垣間見る。源氏は「御覧じおこ」すものの、柏木の異変には気づかず、語り手の視界から消える。語り手は、源氏の退場後も、若き人々に視線を送り続ける。柏木の近くに語り手の視点があるからこそ、女三の宮を垣間見したことや、放心状態の柏木が描かれる。語り手は、この場に置かれている「食」に、単なるくだものではなく、柑子などの具体性を与えている。

『源氏物語』に、柑子が三つである例は見られない。が、柑子四例を見てきた時に、少ない用例数ながら、常

に柑子の傍には犯してはならない女君の存在があることが考え合わされる。柑子の甘美さは、密通の罪のように心を惑わせる力をも孕んでいるのか。この柑子の用例の初例が、薄雲巻の藤壺宮の臨終の折である。柑子さえ拒絶し生きる術のなくなった藤壺宮の姿を描き出す。次に、源氏はかりのこを柑子、橘などのように紛らわせ、鬢黒の妻となった玉鬘に、誰にも知られない形で愛情をほのめかす。若菜上巻では、柏木が女三の宮を垣間見た直後に、源氏によって他の菓子と取り混ぜて供されている。源氏は、垣間見という非常事態を見過ごしたまま、舞台から退場する。柏木と女三の宮との関係露頭後、源氏は、柏木を執拗なまで見咎める。若菜下巻の終盤で、源氏の目に恐懼した柏木は、柑子さえ触れない状態に陥る。

このように、柑子が描かれているとき、不義の関係がほのめかされている。招福のシンボルであった柑子は、『源氏物語』の主題ともいえる「ものまぎれ」の関係を結び、拒絶されることによって、現世での関係の破綻を暗示する役割の一端を担っているのではないだろうか。

四 触る行為の親密性

「柑子」の拒否については、食べるか食べないかではなく、触れるか触れないかに焦点が当てられている。「見ることが既に男女の逢瀬を意味し、また、相手を犯し、支配する意味で用いられた平安期において、「触る」という行為はさらに緊密な関係を意味する⁽¹²⁾。

『源氏物語』中の「触る」の用例二三例⁽¹³⁾において、触れる対象は、「袖」などの衣服が最も多い（八例）。うち和歌に四例、和歌の連接句に一例見られる。和歌表現に多いことから、「触る」が愛情表現を含んだものであるといえる。次に、楽器⁽¹⁴⁾（七例）、食（五例）が続く。また、一五例（触れさせるのを「うたて」とする一例

を含む)、つまり約六五パーセントが否定表現である。肯定表現は、ほとんどが衣服に「触る」例である。「朝餉のけしきばかりふれさせたまひて、」(桐壺卷①三六頁)のみ衣服ではないが、桐壺更衣の死を悲しむ桐壺帝の、食欲のない描写の一部で、「けしきばかり」とあることから、消極的な表現である。否定表現が多いことは、「触る」という行為への憚りである。「触る」行為の持つ積極性、親密性が考え合わされる。

藤壺宮臨終の場面から遡って、賢木巻に、同じく藤壺宮が食べ物を供されて拒否している場面がある。ここでは、「御くだもの」とあり、「柑子」に比べると抽象表現である。

④君(光源氏)は、塗籠の戸の細目に開きたるを、やを押し開けて、御屏風のはさまに伝ひ入りたまひぬ。めづらしくうれしきにも、涙落ちて見たてまつりたまふ。⑤藤壺「なほ、いと苦しいこそあれ。世や尽きぬらむ」とて、外の方を見出だしたまへるかたはら目、⑥言ひ知らずなまめかしう見ゆ。御くだものをだにとて、まゐりすゑたり。箱の蓋などにも、なつかしきさまにてあれど、見入れたまはず、世の中をいたう思しなやめる気色にて、のどかにながめ入りたまへる、いみじうらうたげなり。髪ざし、頭つき、御髪のかかりたるさま、限りなきにははしきなど、ただかの対の姫君に違ふところなし。⑦年ごろすこし思ひ忘れたまへりつるを、あさましきまでおぼえたまへるかなと見たまふままに、すこしもの思ひのはるけどころある心地したまふ。

(賢木巻②一〇九頁)

源氏が藤壺宮の寝所に忍び寄った場面である。先に、語りの視点の移り変わりについて見ておく。④では、語り手の視点から、源氏が塗籠の戸を押し開けて、御屏風の間を伝って、部屋に入り込んだ様子が描かれる。⑤では、藤壺宮の苦しそうな声が語られ、その姿を源氏が見ている。『新編全集』頭注で、「かたはら目」以降、「藤壺の苦悩とかかわりなく、その優美な姿態に感動する源氏の視点に即して語られる。」と注されているように、⑥で語られる藤壺宮の姿や、藤壺宮の脇に置かれているくだもの、これを藤壺宮が見ようとしてもしないことなどは、

語り手と源氏の目が同化していると捉えられる。そのため、藤壺宮の姿は「髪ざし、頭つき、御髪のかかりたるさま」などのような、少し離れた所から「かたはら目」でもわかる、頭部の描写にとどまる。「御くだもの」は、どのようなかほはわからない。この後、源氏は、「やをら御帳の内にかかづらひ入りて、」（一一〇頁）藤壺宮の御衣の袂を引き鳴らす。藤壺宮は御衣を脱ぎ捨て逃げる。「御くだもの」に「触れない」のではなく、見向きもしない藤壺宮の様子が源氏の目を通して直前に描かれることは、源氏が藤壺宮に寄せる密かな好意に対し、藤壺宮が頑なに拒否する構図の伏線を思わせる。

藤壺宮の女房が臨終の場面で、柑子などさえ「触れさせたまはず」と述べる。第二節 i で述べたように、親密な物言いが源氏と藤壺宮の親密だった関係を匂わせる。ただし、藤壺宮の臨終に際し、触れた過去さえ甲斐なく、「頼みどころ」がなくなっている。だからこそ、最期に藤壺宮は、源氏に対して恋愛関係を越えた真心からの感謝の念を述べることができるのだろう。

柏木の場合は、若菜上巻で供されていた柑子を、若菜下巻では触れることさえできなくなる。二つの柑子により、柏木は、藤壺宮と同じく密通の罪に苦しみ、死を決定づけられている。また、若菜上巻の柑子は、源氏によって供されている。源氏は、自ら女三の宮の近くに柏木を招き入れ、柏木が女三の宮を垣間見たことに気づかぬまま退場し、六年後密通を許す。柏木の密通から死に至る苦悩は、源氏自らが撒いた種ともいえるものだったのである。

五 柏木の容態が投げかける因果

藤壺宮の死は皆に惜しまれ、言葉が尽くされていた。では、なぜ柏木が死を確定づけられる場面において、「柑

子などをだに触れたまはず」という表現が選ばれたのだろう。

柏木が柑子に触れなくなる様子は、父母や邸の者の視点によるものだが、直後に「さる時の有職のかくものしたまへば、世の中惜しみあたらしがりて、」（若菜下巻④二八四頁）とあり、世間に漏れ聞こえている。源氏にも伝わっている。「六条院にも、いと口惜しきわざなりと思しおどろきて、御とぶらひに、たびたび、ねむごろに父大臣にも聞こえたまふ。」（同）とあり、源氏は柏木の容態を聞いて驚く。臨終の柏木を見舞った夕霧の口からも「かく重りたまへるよしをも聞きおどろき嘆きたまふこと、限りなうこそ口惜しがり申したまふりしか。」（柏木卷④三一七頁）と、源氏の驚きが強調されている。

柏木の柑子拒否が藤壺宮を想起させることは、これまでも述べてきた。藤壺宮が柑子さえ触れない状態にあったことは、藤壺宮の側近の女房と、最期を看取った源氏のみが知っている。清水好子氏は、「若菜両巻が起筆されたのはあきらかに第一部の藤壺との密通事件を念頭においてのこと」であり、第二部は第一部の登場人物を再登場させたり、様々な事件が顧みられたりすることによって、光源氏の「一生の意味が問い直されている」と述べる⁽¹⁵⁾。また、朱雀院御賀の試楽で源氏が柏木を見遣って発した言葉、「さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり」（若菜下巻④二八〇頁）は、柏木の死への決定打となるものである。植田恭代氏は「皮肉にも、かつての藤壺との罪を抱える光源氏じしんに、鋭くはね返ってくる」と指摘する⁽¹⁶⁾。

その報いは、柏木の死が確定づけられた直後、既に表れている。朱雀院御賀は延引に延引を重ね、年も押し迫ってようやく催される。しかし、「やむごとなき上達部」（若菜下巻④二八四頁）である柏木の重態により、人々は嘆き沈み、御賀は何だか物足りないように感じられている。武者小路辰子氏は、賀宴を祝う者、祝われる者、参加者等により行事の性格が決定づけられていることを論じている⁽¹⁷⁾。朱雀院御賀は、主催者である女三の宮や源氏、祝われる朱雀院、柏木含め一族の不参加や人々の関心が柏木に向いている状況などの全てによつて、「ものすさまじき」（二八四頁）ものにさせられている。若菜卷は、朱雀院の病や出家意志の表明を発端として、苦悩が

連鎖する様が描かれてきた。朱雀院御賀の空虚さは、その苦悩の連鎖の閉じめとして、関わった全ての者を飲み込んでゆく。年を喜ぶ賀宴が、年に追い立てられていく。「ものすさまじき」御賀の最たる要因は、世間から柏木の死が確定されることであり、かつ、御賀の試楽で柏木の死を決定づけた源氏に、柏木の詳細な容態を知られることであつた。

六 柏木における「はかなし」

柏木と藤壺宮に共通する「柑子などをだに触れたまはず」を中心に、これまで述べてきた。だが、若菜下巻では、薄雲巻では見られなかつた「はかなき」が「柑子」を修飾している。なぜ、単純に同様の表現を用いることをせず、「はかなき」という語を付随させたのだろうか。

「はかなき〈食べ物〉」という表現を『源氏物語』中に求めると八例見える。「柑子」以外は「(御) くだもの」(四例) か「もの」(二例) である。薄雲巻の大堰邸で源氏が「はかなきくだもの、強飯」(薄雲巻②四四一頁)ばかりは食するという例以外は、全て拒否する表現である。この例外においても、「ここはかかる所なれど」(同)と逆接を伴うように、通常食べない場所での食事であり、消極的な意味を込める⁽¹⁸⁾。「もの」は勿論、「くだもの」もまた、具体性を欠く食べ物である。その食べ物の軽さを強調するための「はかなき」である。

若紫巻において、若紫が祖母尼君の死を悲しみ食欲をなくしている。少納言は「夜昼恋ひきこえたまふに、はかなきものも聞こしめさず」(若紫巻①二四八頁)と父兵部卿宮に語る。兵部卿宮は、祖母尼君の死により若紫を引き取ろうと考えている。少納言には、若紫の食欲減退を語ることで引き取りの時期を延ばし、若紫を源氏に引き渡したい意図がある。この思惑が、表現を誇張させる。兵部卿宮は、心細く泣く若紫の愛おしさに、帰り際、

今日明日にも引き取ることを決める。少納言の意図から外れた事態となる。

では、「柑子」という具体的な食べ物に、さらに「はかなき」を強調させるのはなぜだろうか。柏木の「はかなき柑子など」さえ触れない様子は、息子の重態に冷静でいられずに騒ぐ父母たちの視点である。以前から食欲がなかったことに加えて、「はかなき柑子などをだに」という過剰な演出が入っていると見るべきだろう。反対に考えると、過剰な演出を入れることは、息子の重態だからである。柏木を見守る目が「はかなき」と語らしめる。ただし、唐木順三氏によると、「はかなし」は「存在そのものの属性」であり、「存在と主體、客觀と主觀」とが合わさったものであるという⁽³⁾。「柑子」や柏木の父母だけでなく、「はかなき柑子」に触れない柏木自身にも、「はかなき」と形容される要素を見ておく必要があるだろう。

まず、若菜上巻において、柏木の得意とする蹴鞠が「はかなきこと」と述べられていることに注目したい。

かくはかなきことなれど、よきあしきけぢめあるをいどみつ、我も劣らじと思ひ顔なる中に、衛門督のかりそめに立ちまじりたまへる足もとに並ぶ人なかりけり。

(若菜上巻④一三八頁)

源氏「太政大臣の、よろづのことにたち並びて勝負の定めしたまひし中に、鞠なむえ及ばずなりにし。はかなきことは伝へあるまじけれど、ものの筋はなほこよなかりけり。いと目も及ばずかしこうこそ見えつれ」とのたまへば、

(若菜上巻④一四四頁)

前者は、源氏に促され、夕霧や柏木も庭に下りて、蹴鞠をする場面である。蹴鞠の技において、柏木の足元に及ぶ人はいないという。後者は、源氏の言である。柏木の父太政大臣もまた、蹴鞠が得意だったと柏木に語っている。「はかなきこと」である蹴鞠は、秘伝というものはないだろうに、親子そろって蹴鞠の技量がすばらしいと褒める。これに対し、柏木は、公務の面などでは源氏に勝てない「家の風」(若菜上巻④一四四頁)を卑下する。

二つの用例は、共通して逆接が連なる。蹴鞠の上手をいうよりも、柏木が劣位に貶められている現在の世情を露呈している。しかも、この二例の間に、柏木が女三の宮を垣間見ている。「はかなきこと」である蹴鞠により、垣間見の場が生み出されている。しかし、垣間見直後の夢心地の中で、柏木は、女三の宮の夫である源氏の優位性を痛感させられる。柏木と女三の宮の密事の発端に、「はかなきこと」が置かれていることは、注意すべきである。

次に、柏木の視点から用いられる「はかなし」の用例（類語を含む）を見てみる。すると、全て女三の宮との関わりを示すものである。

初めに見られる例は、若菜上巻の蹴鞠の直前の場面である。

〔1〕そのをりより語らひつきにける女房のたよりに、御ありさまなども聞き伝ふるを慰めに思ふぞ、はかなかりける。

（若菜上巻④一三五頁）

女三の宮が降嫁してもなお、柏木は女三の宮のことを諦め切れない。馴染みの女房を頼りにして、女三の宮の様子を伝え聞くことを慰めにしてきた。とはいえ、自身の想いが届くことはない。時に、降嫁した女三の宮が紫の上の威勢に圧されて不遇な扱いを受けていると聞く。世間の噂を耳にするだけの状況は、柏木にとってははかないものであった。始まってもいない女三の宮との関係が、柏木にとって既にはかないものとして認識されている。この悶々とした柏木の想いが女三の宮の垣間見によって膨張し続け、密通へとつながる。

柏木は、ついに女三の宮のもとに忍び込む。その明け方のこと、柏木の詠んだ歌に対して、女三の宮が返歌する。この女三の宮の声が「はかなげに」と形容される。

〔2〕柏木起きてゆく空も知られぬあけぐれに**いづくの露のかかる袖なり**

と、引き出でて愁へきこゆれば、出でなむとするにすこし慰めたまひて、

女三の宮 あけぐれの空にうき身は消えななむ夢なりけりと見てもやむべく

とはかなげにのたまふ声の、若くをかしげなるを、聞きさすやうにて出でぬる魂は、まことに身を離れてとまりぬる心地す。

(若菜下巻④二二八頁)

女三の宮は、柏木の突然の出現に、恐ろしさのあまり、当初声を発することもできなかつた。あけぐれになって、柏木が「起きてゆく…」歌を詠み、帰る素振りを見せたことで、ようやく返歌する心の余裕が生まれる。柏木は、女三の宮の「はかなげ」な声の調子を、「若くをかしげなる」と感じている。

また、柏木が今際の際に贈った消息、「いまはとて燃えむ煙もむすぼほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ／あはれとだにのたまはせよ。心のどめて、人やりならぬ闇にまどはむ道の光にもしはべらむ」(柏木巻④二九一頁)に対して、女三の宮から返書が届く。この女三の宮の筆跡を「いとかなげに」(二九六頁)と形容している。

柏木による女三の宮の視覚的な印象としては、女三の宮のもとに忍び込んだ際、「わななきたまふさま、水のやうに汗も流れて、ものもおぼえたまはぬ気色、いとあはれにらうたげなり。」(若菜下巻④二二四頁)や「いとさばかり気高う恥づかしげにはあらで、なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの、あてにいみじく思ゆることぞ、人に似させたまはざりける。」(二二五頁)、「院にも、今は、いかでかは見えたてまつらんと悲しく心細くていと幼げに泣きたまふを、いとかたじけなく、あはれと見たてまつりて、」(二二六頁)などがある。すなわち、若さ(幼さ)と「あはれ」が繰り返し語られている。対して、別れ際の柏木に向けられた声や、今際の際に贈った消息に対する返書の筆跡が、「はかなげに」と評されている。女三の宮が無意識に放つ雰囲気ではなく、いわば極限状態の柏木に放たれ、柏木が受け取るものが「はかなげ」なのである。つまり、「はかなげ」とは、柏木の主観を通じた女三の宮の佇まいをいう。柏木は、女三の宮の声や筆跡に、自身との「はかなげ」な関係を見ているのではないだろうか。

また、女三の宮からの返書は、小侍従から受け取ったものである。柏木は、父大臣が手配した加持祈禱を抜け出して、小侍従から女三の宮の様子を聞く。

〔3〕宮も、ものをのみ恥づかしうつつましと思したるさまを語る。さて、うちしめり、面瘦せたまへらむ御さまの、面影に見たてまつる心地して思ひやられたまへば、げにあくがるらむ魂や行き通ふらむなど、いとどしき心地も乱るれば、柏木「今さらに、この御事よ、かけても聞こえじ。この世は、かう、はかなくて過ぎぬるを、長き世の絆にもこそと思ふなむいといとほしき。心苦しき御事を、たひらかにとだにいかで聞きおいたてまつらむ。

(柏木卷④二九五頁)

柏木の胸中には、破線部「げにあくがるらむ魂や行き通ふらむ」と思われるほど、面瘦せた女三の宮の姿がありありと浮かんでいる。直前の柏木の言葉にも、「まどひそめにし魂の、身にも還らずなりにしを、かの院の内にあくがれ歩かば、結びとどめたまへよ」(二九五頁)とあり、女三の宮との密通の際にも、「2」の破線部に、「聞きさすやうにて出でぬる魂は、まことに身を離れてとまりぬる心地す」(若菜下卷④二二九頁)とあった。既に柏木の魂が身から離れて、女三の宮のもとにとどまるように感じている。柏木は、「この世は、かう、はかなくて過ぎぬる」(柏木卷④二九五頁)と、過ぎてしまった「この世」をはかなく思い、後の世の妨げになることを鬱々と考える。「過ぎぬる」と、完了の助動詞「ぬ」を用いていることから、玉上琢彌氏や『新編全集』頭注が説くように、「数度の逢瀬で終わってしまった」⁽⁹⁰⁾現世、つまり女三の宮との仲と捉えるべきである。

柏木は、女三の宮からの返書を読み、「いでや、この煙ばかりこそはこの世の思ひ出ならめ。はかなくもありけるかな」(二九六頁)と涙の激しさを増す。女三の宮の返歌「立ちそひて消えやしなましようきことを思ひみだるる煙くらべに」(同)は、自身の苦悩と柏木の苦悩のどちらが激しいかを比べるため、「思ひ」の「火」(掛詞)の縁語である「煙」となって消えてしまいたいという歌である。柏木の気持ちに寄り添うものでは決してない。が、

魂が身から離れそうなほど、女三の宮を慕う柏木にとっては、女三の宮から返歌をもらったということが重要である。その上、女三の宮の歌も、柏木と一緒に煙になって消えてしまいたいと詠まれている。女三の宮の本来意図するところではないであろう「立ちそひて」に対し、柏木は「あはれにかたじけなし」(同)と感じ入る。柏木の返歌「行く方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ち、は離れじ」(同)の五句目からも、「立つ煙」を介して女三の宮への強い執着が窺える。だからこそ、柏木は女三の宮とつながる「煙」を「はかなく」感じている。

柏木から「はかなし」と語られる最後の用例は、臨終の場面にある。柏木は、臨終の床に夕霧を招く。自身が源氏の不興を買ったことに苦しんだ末、病臥したことを語る。そして、「亡からむ後にも、この勘事ゆるされたらむなむ、御徳にはべるべき」(三二六頁)と、自分の死後にでも、源氏の怒りが解けることを夕霧に願う。

〔4〕^{夕霧}「いかなる御心の鬼にかは。さらにさやうなる御気色もなく、かく重りたまへるよしをも聞きおどろき嘆きたまふこと、限りなうこそ口惜しがり申したまふめりしか。など、かく思ふことあるにては、今まで残いたまひつらむ。こなたかなた明らめ申すべかりけるものを。いまは、言ふかひなしや」とて、とり返さまほしう悲しく思さる。^{柏木}「げにいささかも隙ありつるをり、聞こえうけたまはるべうこそはべりけれ。されど、いとかう今日明日としもやはと、みづからながら知らぬ命のほどを思ひのどめはべりけるもはかなくなむ。このことはさらに御心より漏らしたまふまじ。さるべきついでではべらむをりには、御用意加へたまへとて、聞こえおくになむ。一条にものしたまふ宮、事にふれてとぶらひきこえたまへ。心苦しきさまにて、院などにも聞こしめされたまはむを、つくろひたまへ」などのたまふ。

(柏木卷④三一七頁)

夕霧は今まで事情を打ち明けてくれなかった柏木の水臭さに文句を言いながらも、破線部の「いまは、言ふかひなしや」という言葉には、既に諦念がこもる。柏木自身も、「いとかう今日明日としもやはと、みづからながら知らぬ命のほどを思ひのどめはべりけるもはかなくなむ」と、これほど早く死期が訪れるとは思わなかったこと

を言い訳としている。「はかなくなむ」は、老少不定の念であるが、「思ひのどめはべりけるも」とあることから、「はかな」いことは命の話だけではない。死を前にした柏木の「この世」Ⅱ「女三の宮との関係」のはかなさが、胸中に駆け巡っているのだろう。「はかなくなむ」の次文、「このことはさらに御心より漏らしたまふまじ。」において、源氏との確執を口外しないよう念を押している。この確執が女三の宮との密通を契機とするものであり、女三の宮への「はかなき」気持ちと関わって、再度話題にしているのだろう。

以上見てきたように、柏木における「はかなし」は、女三の宮との関係を映す鏡である。若菜下巻において、柏木は親元に戻る以前から既に食欲をなくしていた。しかし、夫婦の関係よりも親子の縁を第一とする親元に戻ることに、落葉の宮と別れるだけでなく、女三の宮との関係も絶望的なものとなった。それゆえ柏木は自身の内面に引き入るしかない。魂だけが外へ出ようとする。「はかなき柑子などをだに」触れられなくなったことは、重態を騒ぎ立てる柏木の父母の視点である。確かに、父母は柏木の密通を知る由もない。だが、柏木の容態を見ている父母の視線を、語り手が語るのである。その入れ子式の描写が、柏木の前に置かれた柑子に、柏木のはかなさをも映し出す。「はかなき」が「柑子」を修飾することは、「はかなき」関係により、「はかなきこと」を得意とする太政大臣一族の嫡子を失う末路をも表すのではないだろうか。

七 消え入る「灯火」と「泡」の喩

朱雀院御賀の試楽の後、さらに悪化した柏木は親元に戻る。心配し騒ぐ父母や惜しむ世間をよそに、柏木はますます柑子などの食べ物さえ触れなくなり、何かに引き入っていく。周囲の騒がしさから、抽象的な食事、具体的な「柑子」、そして柏木の内面へと、次第に語り手が柏木に焦点を当てる。それにより、柏木は「死にゆく者」

と認められる。同じく密通により苦しみ死した藤壺宮を想起させながら、柏木は、「はかなき」女三の宮との関係に、ますます触れ得なくなる。そのことに絶望し、柏木は死へと突き進む。

柏木は「泡の消え入るやうに」（柏木巻④三一八頁）亡くなる。石田讓二氏は、『河海抄』に注記された引歌等によりながら、「かなはざるに似た恋に死んだこの青年の死を叙するふさはしい表現」と評している⁽²⁾。だがそれだけではなく、「泡」が他者の力によつてたゆたう柏木を印象づけるものであるといえるのではないだろうか。対する藤壺宮は、「灯火などの消え入るやうにてはたまひぬれば」（薄雲巻②四四七頁）と亡くなる。自ら燃える「灯火」に喩えられる藤壺宮の生と、「泡」のように他の力に身を任せる柏木とが対照される。

一方、追い詰めた源氏にも「死にゆく」柏木の容態は伝えられる。「柑子」さえ触れない柏木の姿は、藤壺宮の死を近くで看取った源氏に対し、因果応報ともいえる運命を認識させ、自身のこれまでを問い直させる。それにより、若菜下巻末尾の女三の宮主催の朱雀院御賀までも物足りないものとなる。柑子は、密通により苦しみ死に至った藤壺宮と柏木を結ぶことで、藤壺の死によつてもたらされた、源氏の栄華が崩れる様を映し出すのである。

注

- ① 清水好子氏「藤壺の死」（『講座源氏物語の世界』第四集 有斐閣 一九八〇年十一月）
- ② 藤本勝義氏「源氏物語『薄雲』巻論——栄華と悲傷の構造——」（『源氏物語の探究』第十輯 風間書房 一九八五年十月）
- ③ 森一郎氏「藤壺宮の実像」（『源氏物語作中人物論』笠間書院 一九七九年十二月）
- ④ 前掲森氏論文、石坂晶子氏「〈なやみ〉と〈身体〉の病理学——藤壺をめぐる言説——」（『源氏研究』五 二〇〇〇年四月）
- ⑤ 高橋亨氏「源氏物語の〈ことば〉と〈思想〉」（『源氏物語の対位法』東京大学出版会 一九八二年五月）は、「柏木

においては、心的な幻想と身体との短絡が、極度なまでに「目」の意識を通じてなされている」と述べ、柏木が源氏の「目」を恐れる理由として、「古代における〈見る〉という行為のありように由来するもの」と説いた。その他、秋山虔氏「柏木の生と死」（『講座源氏物語の世界』第七集 有斐閣 一九八二年五月）、三田村雅子氏「源氏物語の見る／見られる」（『源氏物語感覚の論理』有精堂 一九九六年三月）、日向一雅氏「柏木物語の方法——光源氏の陰面の物語あるいは宿世の物語の構造——」（『源氏物語の準拠と話型』至文堂 一九九九年三月）、松井健児氏「受苦の深みへ」（『源氏物語の生活世界』翰林書房 二〇〇〇年五月）、袴田光康氏「敗者の眼差し——「見る」ことの呪力」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』三五 若菜下（後半） 至文堂 二〇〇四年六月）などでも指摘されている。

- ⑤ 『源氏物語大成』によれば、この部分の助動詞の異同はない。
- ⑥ 今西祐一郎氏「哀傷と死——源氏物語試論——」（『国語国文』四八・八 一九七九年八月）
- ⑦ 『医心方』（覆刻日本古典全集）現代思潮社 一九七八年二月、橘は「味辛」と記される。
- ⑧ 『本草和名』（『続群書類従』三〇輯下 続群書類従完成会 一九二八年七月）
- ⑨ 『小右記』（大日本古記録）岩波書店 一九五九年三月
- ⑩ 稲垣泰一氏「橘と柑子の話」（『新編日本古典文学全集』今昔物語集(3) 古典への招待 小学館）
- ⑪ 増田繁夫氏「平安貴族たちの性愛」（『平安貴族の結婚・愛情・性愛——多妻制社会の男と女』青簡舎 二〇〇九年十月）では、S・フロイトやアイブル・アイベスフェルトの論を引きながら、他者との接触行為の繰り返しだが、母子、あるいは男女の「愛情」と呼ばれる感情を育むこと、「社会生活の中で男女が互いに相手を長い時間直視するような機会」がほとんどない平安貴族たちにとって、「一般に男女のふれあいは、必然的に性交へ到る前段階をなすものとしてのそれであることが多かった」ことと述べられている。
- ⑫ 「触る」は多くが「事に触れて」「類に触れて」などの意で用いられるが、「〈物〉に手を触れる」という表現に限定して検討した。
- ⑬ 中川正美氏「源氏物語の主題と音楽」（『源氏物語と音楽』和泉書院 一九九一年十二月）では、『源氏物語』における楽器を「女の愛と生という主題を追求」するものであると述べられる。
- ⑭ 清水好子氏「源氏物語の主題と方法——若菜上・下巻について——」（『源氏物語研究と資料——古代文学論叢第一輯——』武蔵野書院 一九六九年六月）
- ⑮ 植田恭代氏「『源氏物語』にみる法皇朱雀院の五十賀——権威と迷妄——」（『跡見学園女子大学国文学科報』三〇 二〇〇二年三月）
- ⑯ 武者小路辰子氏「若菜巻の賀宴」（『日本文学』一四・六 一九六五年六月）
- ⑰ この場面については、第二部第一章で改めて考察する。
- ⑱ 唐木順三氏『無常』筑摩書房 一九六四年二月

⑧ 玉上琢彌氏 『源氏物語評釈』第八卷 角川書店 一九六七年三月
⑨ 石田穰二氏 「源氏物語における四つの死——歌語のことなど——」
(『源氏物語論集』桜楓社 一九七一年十一月)

第二章 「不食」の女三の宮に見える成長

一 繰り返す女三の宮の「不食」

『源氏物語』における「不食」の要因が「物思いや病・懐妊等」であることについては、木谷眞理子氏によって言及されている^(三)。何か食べ物(「物」などの抽象的表現、「湯」(薬湯)のような口に入れる物も全て含む)を食べない、見ることもしない、嫌がるなど、「食べ物+拒否する」表現を抽出すると、四〇例三一場面を数える。その中で、最も多く描かれる人物が、女三の宮である(七例(若菜下巻で二例、柏木巻で五例)。女三の宮は、柏木との密通により懐妊するが、光源氏に不義の事実を知られてしまう。出産後、物思いの苦しみに耐えかねて、出家する。このような女三の宮の来歴の中で、なぜ「食」描写が繰り返されるのだろうか。本章では、若菜下巻から柏木巻における、女三の宮を中心とした「食」の描写を追いながら、食事拒否の描写がどのような役割を担っているかを考察する。

二 「不食」による影響

まず、女三の宮における「不食」表現の初例が、次の「1」の場面である。

「1」 姫宮は、あやしかりしことを思し嘆きしより、やがて例のさまにもおはせず、なやましくしたまへど、おどろおどろしくはあらず、立ちぬる月より物聞こしめさで、いたく青みそこなはれたまふ。かの人(柏木)は、わりなく思ひあまる時々は夢のやうに見たてまつりけれど、宮(女三の宮)は、尽きせずわりな

きことに思したり。院（光源氏）をいみじく怖ぢきこえたまへる御心に、ありさまも人のほども等しくだにやはある、いたくよしめき、なまめきたれば、おほかたの人目にこそ、なべての人にはまさりてめでらるれ、幼くよりさるたぐひなき御ありさまにならひたまへる御心には、めざましくのみ見たまふほどに、かくなやみわたりたまふはあはれなる御宿世にぞありける。御乳母たち見たてまつり咎めて、院の渡らせたまふこともいとたまさかなるをつぶやき恨みたてまつる。

（若菜下巻④二四三頁）

柏木との不義に思い悩んで以降、女三の宮は体調が悪くなる。前月五月より食事をしなくなることは、懐妊の徴候を示している。傍線部の後、柏木が女三の宮との逢瀬を「夢」のように思っていることが語られている。一方の女三の宮は、柏木との一件を「尽きせずわりなきこと」と思い、源氏を恐れてばかりいる。密通を現実の出来事として柏木を拒絶する。ただ、柏木は二の次で、源氏の反応ばかりを気にかける。

乳母たちは、女三の宮の懐妊に気付くと、源氏がなかなか六条院を訪れないことに、一方的に不満を募らせる。女三の宮が柏木と密通し、源氏を恐れていることは知るよしもない。

〔1〕の直後、源氏が女三の宮の体調不良を聞いて、「渡りたまふ」（若菜下巻④二四四頁）ことが記されている。ただし、すぐに場面が六条院へ切り替わるわけではない。髪を洗い少しはさっぱりとした紫の上と、源氏は歌を詠み交わしている。それから再度、「渡りたまひぬ」（二四六頁）と記される。源氏は、「内裏にも院にも聞きめさむところ」（同）を気にし、体調が悪いと聞いてから数日経ったため渡ったという。体面に留意し、日数の経過とともに、ようやく重い腰をあげた様子が窺える。

〔2〕は、ようやく六条院を訪れた源氏が、また二条院に戻った後の場面である。この日の朝、源氏は六条院で柏木の手紙を見つけていた。柏木が女三の宮に送った手紙を持って、悶々としたまま二条院に戻る。小侍従は、密事が源氏に露顕したことを女三の宮に伝える。大変な事態になったと、女三の宮の思慮の浅さを、遠慮もなく

責め立てる。

〔2〕答へもしたまはで、ただ泣きにのみぞ泣きたまふ。いとなやましましげにて、つゆばかりの物も聞こしめさねば、女房「かくなやましくせさせたまふを、見おきたてまつりたまひて、今は、おこたりはてたまひにたる御あつかひに、心を入れたまへること」とつらく思ひ言ふ。

(若菜下巻④二五二頁)

女三の宮は小侍従の非難にただ泣くしかない。気分悪そうにして、まったく何も食べない。事情を知らない女房たちは、女三の宮の様子を見て同情する。泣き暮れる女三の宮を放置して、源氏が復調したはずの紫の上の世話に熱心なことを責め立てる。紫の上は、「1」の直前、「思ひ起こして御湯などいささかまゐるけにや、六月になりてぞ時々御頭もたげたまひける。」(若菜下巻④二四三頁)と、小康状態になっていた。それでもまだ源氏は心配で、紫の上にかかりきりである。「2」の破線部「おこたりはてたまひにたる」という、女三の宮の女房の見方には、やや誇張があるが、女三の宮の体調の悪さを前にしているだけに、紫の上よりも女三の宮を優先すべきとの考えが読み取れる。

しかし、源氏は二条院へ戻った後、なかなか六条院へ渡る気になれない。紫の上は、「もろともに帰りてを。心のどかにあらむ」(二五七頁)と、いずれ紫の上と一緒に六条院に戻り、ゆったりと過ごしたいとは語らっている。女三の宮を気遣って、すぐに六条院へ渡るわけではない。密事を知った源氏は、女三の宮のために六条院へ戻るという考えを持ってないのである。

勿論、帝や朱雀院のことは気にかかる。少しでも粗略に扱えば、帝や朱雀院が心配するため心苦しいと、源氏は紫の上に語っている。紫の上は、帝よりも当の女三の宮が恨めしく思っているだろうことこそ心苦しい、とたしなめる。女三の宮本人が咎めずとも、「よからぬさまに聞こえなす人々かならずあらん」(二五六頁)と、女三の宮の周囲で陰口を言う存在を指摘している。紫の上の卓見に対して、源氏は「国王の御心」(二五七頁)ばかり

気にしていた考えの浅さを苦笑して言い紛らわす。

とはいえ、源氏はこれまで、「よからぬさまに聞こえなす人々」の存在を気にしなかったわけではない。女三の宮の周囲には、輿入れにも付き随ってきた乳母たちがいる。女三の宮の乳母は複数人いる^①。その中には、兄左大弁を通じて源氏の内情を探り、女三の宮の嬪候補として、朱雀院に源氏を推挙した乳母もいる^②。発言力を持つ乳母が悪い噂を立て、朱雀院などに伝わることを、源氏は危惧していたはずである。既に結婚初期、昼間に源氏が女三の宮のもとを訪れた折、「御乳母などやうの老いしらへる人々ぞ、いでや、この御ありさま一ところこそめでたけれ、めざましきことはありなむかし、とうちまぜて思ふもありけり。」（若菜上巻④七三頁）と、今後の不安を感じている乳母もいた^③。源氏は、乳母たちの存在を意識しながらも、紫の上のように素直に女三の宮を心配する気にはなれない。寧ろ、女三の宮からどんどん心が離れていく。

〔1〕〔2〕で見られた、乳母や女房の不満は、帝や朱雀院の意向を気にする源氏にとっても、無視できるものではない。〔1〕の後、乗り気ではないものの、源氏は六条院へ渡る。ここで、女三の宮と柏木の密通を知る。密事露頭後の〔2〕では、〔1〕と同様に、周囲の声を気にしつつも、源氏はそのまま二条院に居続ける。紫の上から指摘を受けても、女三の宮の看病をするという考えには至れない。密通の前後に同様の場面を設置することにより、源氏が女三の宮への態度を硬化させ、女三の宮から遠ざかるうとしていることが対比的に確認できる。

乳母たちは、結婚当初から、源氏の愛情の薄さに不安を抱いていた。女三の宮自身は、「みづからは何心もなくものはかなき御ほどにて、」（若菜上巻④七三頁）源氏の夜離れを特段気にしている様子はない。〔1〕でも、乳母たちは源氏の訪れの少なさに不平を漏らしている。乳母たちは密通の事実を知らない。それゆえ、女三の宮が源氏を恐れる気持ちを体調不良からくる不安と誤解し、女三の宮がないがしろにされる状況を捨て置けない。乳母たちは、女三の宮の内親王たる血統に重きを置き、女三の宮の心情に寄り添うわけではないのである^④。

〔2〕の後、源氏が六条院を訪れないまま、日が経つ。女三の宮にも心情の変化が表れている。

〔3〕 姫宮は、かく渡りたまはぬ日ごろの経るも、人の御つらさにのみ思すを、今は、わが御怠りうちまぜてかくなりぬると思すに、院（朱雀院）も聞こしめしつけていかに思しめさむと、世の中つつましくなん。

（若菜下巻④二五七頁）

女三の宮はこれまで、源氏の訪れがないことに対し、源氏の「御つらさ」ばかりを思っていた。しかし、密通露頭後の「今は、わが御怠り」のためと考える。「1」で他者に責任転嫁していた心情が、自責の念に駆られていく。女三の宮は、乳母たちの思惑の通りに源氏に輿入れし、考えないまま過ごしてきた。密通という、乳母たちに言えない秘密を抱いたことで、状況は変わる。乳母たちの源氏への苦言が一人歩きし、源氏は密事を抱える六条院へ促される。密事を知った源氏の態度は、明らかに悪化する。女三の宮は、自身が陥った窮地が、自らの招いたものであるという認識に至る。

したがって、事情を知らない乳母や女房の苦言を生み出す女三の宮の「不食」表現は、源氏の女三の宮への態度悪化と、女三の宮の心情変化を浮き彫りにする。女三の宮が食べないことは、巡り巡って女三の宮の心情に圧力を与える。圧力をかけられることで、「幼さ」「いはけなさ」「おぼつかなさ」などが取沙汰されてきた女三の宮は、乳母たちの笠の下から脱却し、思考する姿、自らを省みる姿を見せるようになる。

三 「おどろおどろしからぬ病」と「不食」

では、なぜ乳母や女房の小言のきっかけが、女三の宮の「不食」描写だったのだろうか。

再度「1」を見てみる。「姫宮は、あやしかりしことを思し嘆きしより、やがて例のさまにもおはせず、なやましくしたまへど、おどろおどろしくはあらず、立ちぬる月より物聞こしめさで、いたく青みそこなはれたまふ。」

(若菜下巻④二四三頁)とあり、女三の宮の物思いが肉体的な体調不良へと変わっていく様が描かれている。

食欲がないことが描かれる直前には、「おどろおどろしくはあらず」と語られている。「おどろおどろし」は『源氏物語』中に六八例あり、音声等を中心として大げさ、大仰な様子を表す。打消の語を伴う例は二七例、「おどろおどろしく言ふな。」(夕顔巻①一六八頁)と禁止している例が一例あり、病に関わる一五例(うち一例は柏木の酔いによる懊悩)は全て打消の語を伴っている。打消の語を伴うと、「たいした症状でなく」のように訳されるが、『孟津抄』は、御法巻冒頭における紫の上の「いとおどろおどろしうはあらず」(御法巻④四九三頁)という描写について、「きと取しきるやうにもなく、又よくもなきやう也。わろき病相也」と、好ましくない症状であることに注意を払っている。島内景二氏は、『源氏物語』中の「おどろおどろしからぬ」病一五例のうち一〇例(一人中七人)が死に至ることを示した上で、その「作中人物は、何かしら〈損なわれた状態〉にあるのであって、それは〈病〉よりも広い概念だと考えることが可能だろう」と述べ、「おどろおどろしからぬ」病を「充足されることのない精神的欠損」だと定義する⁶⁾。また、松岡智之氏は、「激しい病苦をとまわらないものの徐々に人を死に導く「おどろおどろしからぬ」病は、人を美しく病み衰えさせ、この物語独特の死相の美を作品上に現出させる。」と、「おどろおどろしからぬ」病の意義を論じている⁷⁾。

確かに、「おどろおどろしからぬ病」は死に通じることが多く、死への懸念を読者に感じさせる機能があるのだろう。では、作中人物の周囲からは、どのように見られているのだろうか。前後の文脈から確認する。

まず、若菜下巻の柏木の例を見てみよう。朱雀院御賀の試楽を欠席しようとしている柏木に対して、父である致仕大臣は、「なか、返さひ申されける。ひがひがしきやうに、院にも聞こしめさむを、おどろおどろしき病にもあらず、助けて参りたまへ」(若菜下巻④二七四頁)と説得する。「おどろおどろしき病」ではないのだからと、我慢して参上するよう促している。「おどろおどろしき病」でないという容態は、御賀の試楽を欠席するほどの症状とは思われていない。

次に、椎本巻では、山寺に籠った八の宮が、自身の容態を阿闍梨に説明している。「ことにおどろおどろしくはあらず、そこはかとなく苦しうなむ。すこしもよろしくならば、いま、念じて」（椎本巻⑤一八八頁）と、何となく苦しく、少し良くなれば下山しようと述べている。八の宮はこのまま宇治の邸に戻ることなく亡くなるのだが、「すこしよろしくならば」とあることから、「おどろおどろしくはあらず」という容態には、まだ快復への希望が窺える。

『孟津抄』の注を前掲した御法巻の冒頭を確認すると、「いとおどろおどろしうはあらねど、年月重なれば、頼もしげなく、いとどあえかになりまさりたまへるを、」（御法巻④四九三頁）とある。「おどろおどろしうはあらねど」から「頼もしげなく」思われるには、時間の経過が必要であるようだ。

ただし、浮舟巻では、薫が匂宮を見舞い、「不便なるわざかな。おどろおどろしからぬ御心地のさすがに日数経るはいとあしきわざにはべる。御風邪よくつくろはせたまへ」（浮舟巻⑥一四〇頁）と言葉をかける。「おどろおどろしからぬ」状態が何日も続くことを懸念している。

薄雲巻では、病状が悪化した藤壺宮が、「今年はかならずのがるまじき年と思ひたまへつれど、おどろおどろしき心地にもはべらざりつれば、命の限り知り顔にはべらむも、人やうたてことごとしう思はむと憚りてなむ、功德のことなどもわざと例よりもとりわきてしもはべらずなりにける。」（薄雲巻②四四三頁）と述べていた。「おどろおどろし」くない状況で寿命を悟っているような顔をすることは憚られると、藤壺宮は、特別な祈禱もさせなかったという。

したがって、「おどろおどろしからぬ病」とは、その状態が長く続くことで不安を与えるものの、基本的には病状が外部に見えない状態である。快復不能と思うにはまだ早い段階といえる。

「おどろおどろしからぬ病」という記述が「不食」と共に描かれることは、女三の宮だけではない。次の〔4〕柏木、〔5〕大君の重態の様子にも見られる。

〔4〕さるは、たちまちにおどろおどろしき御心地のさまにもあらず、月ごろ物などをさらにまゐらざりけるに、いとどはかなき柑子などをだに触れたまはず、ただやうやう物に引き入るるやうにぞ見えたまふ。

(若菜下巻④二八三頁)

〔5〕例の、老人出で来て御ありさま聞こゆ。弁の君「そこはかと痛きところもなく、おどろおどろしからぬ御なやみに、物をなむさらに聞こしめさぬ。もとより、人に似たまはずあえかにおはします中に、この宮の御事出で来にし後、いとどもの思したるさまにて、はかなき御くだものだに御覧じ入れざりしつものにや、あさましく弱くなりたまひて、さらに頼むべくも見えたまはず。世に心憂くはべりける身の命の長さにて、かかることを見てまつれば、まづいかで先立ちきこえなむと思ひたまへ入りはべり」と言ひもやらず泣くさま、ことわりなり。

(総角巻⑤三一五頁)

〔4〕の柏木については、第一部第一章で考察したが、「おどろおどろしき御心地」ではなく、食べ物をお口にせず、触れることさえしないことで、だんだん何かに引き込まれるように周囲から見える。〔5〕については、弁の君が大君の容態を薫に説明している場面である。大君は「おどろおどろしからぬ御なやみ」であるのに、食事をしない。もともと弱い身体である上に、匂宮が妹中の君をないがしろにすることを気かけ、ますます物思いを深める。「はかなき御くだもの」さえ見向きもしなくなったことが積もりに積もって、衰弱し、「頼むべくも見え」ない状態になったという。

〔4〕〔5〕は、「不食」描写の後に、破線部「見えたまふ」または「見えたまはず」とある。つまり、共に病状の視覚化が言及されている。「おどろおどろしからぬ病」とは、表情などからは窺い知れないものである。しかし、食事をしないことで、病状の悪化を他者に見せることになる。「おどろおどろしからぬ病」は、確かに今後病状が悪化する懸念はあるものの、それ自体が死をもたらすわけではない。「おどろおどろしからぬ」という人目に

つかない水面下で、病が徐々に進行している。食べない姿によって、病状が周囲に察知させられるようになる。この過程に、着目する必要があるだろう。

『源氏物語』の主な登場人物は、女房たちによって食事を管理されている。食べる時は準備されたものを供され、食べていないことは周囲に一目瞭然である。食事という周囲の目に見える行為だからこそ、事情を知らない人の口にまで上りやすくなる。女三の宮の「不食」状態も、乳母や女房たちの目に映ることで、源氏への苦言につながっている。この苦言が源氏の行動を制御し、女三の宮の心情に変化を与えている。

四 出家を決意する女三の宮

柏木巻に至り、女三の宮の出産後、出家に至るまで、食べないことが繰り返して描かれる。「6」は女三の宮が薫を出産し、産養が催された後の場面である。

「6」宮は、さばかりひはづなる御さまにて、いとむくつけう、ならばぬことの恐ろしう思されけるに、御湯なども聞こしめさず、身の心憂きことをかかるにつけても思し入れば、さはれ、このついでにも死なばやと思す。大殿（光源氏）は、いとよう人目を飾り思せど、まだむつかしげにおはするなどを、とりわきても見たてまつりたまはずなどあれば、老いしらへる人などは、女房「いでや、おろそかにもおはしますかな。めづらしうさし出でたまへる御ありさまの、かばかりゆゆしきまでにおはしますを」とうつくしみきこゆれば、片耳に聞きたまひて、さのみこそは思し隔つることもまさらめと恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ。

（柏木巻④三〇〇頁）

女三の宮は出産の恐ろしさから、薬湯なども服用しない。源氏は、生まれた若君を見ようとしめない。源氏の冷淡な態度に対し、老女房たちは恨み言をいう。ここでも、「不食」表現と女房の苦言が近接して描かれる。女三の宮はこの苦言を聞き、心揺さぶられる。

ここで、女三の宮の二つの願望表現「死なばや」と「尼にもなりなばや」に注目する。『新編全集』頭注は、「理性を超えて衝動につき動かされがち。」と注する。しかし、女三の宮の「不食」表現が周囲の小言を生み、さらに源氏の行動や女三の宮の心情に影響を与えている。このような若菜下巻と同様の、一連の流れを見る時、単なる「衝動」とは言い切れないのではないか。

女三の宮は、体調不良の「ついでに」死にたいと思うが、源氏を非難する女房の言葉を聞き、「尼にもなりなばや」と考えを変えている。女三の宮の考えを変える女房の言葉とは、源氏が生まれた子に対しても冷淡な態度を取っているという内容である。これまでも、源氏の訪れは稀で、密通発覚以後はさらに疎遠になっていた。しかし、出産を経た女三の宮にとって、生まれた子の養い手が必要である。源氏を頼れないことは大問題である。かすかだが、女三の宮の母としての自覚がここに垣間見える。沢田正子氏は、「消極的ではあるが一筋の母性の光を見る思いがする」と指摘し^⑧、大坂富美子氏は、「子に源氏の愛情がかけられないことを見て、そして憎しみは今後増していくであろうことを予感し、それを母としてつらいと感じ、子を守る為に生きることを思い立つのである。贖罪のためには、死ではなく出家を考えたのである。女三宮の母性が子の為に生きることを選び取ったということである。」と述べる^⑨。「不食」状態を周囲から見られることにより、周囲は源氏への恨み言を投げかけ、女三の宮も源氏に対する不信感が強まっている。「消極的」な母性は、周囲に見られ、周囲の反応に促されることで生まれている。

死と出家とは俗世においてほぼ同義にも見えるが、女三の宮は異なる意味を見出している。「なほ、え生きたるまじき心地なむしはべるを、かかる人は罪も重かなり、尼になりて、もしそれにや生きとまると試み、また亡く

なるとも、罪を失ふことにもやとなむ思ひはべる」(柏木巻④三〇一頁)と、源氏に対して、死ではなく出家を選ぶ理由を筋道立てて述べていることからいえる。生きていられないような心地がするが、出産で死ぬことは罪が重いため、尼になることで命が過ぎ止められるなら試してみたい、またそのまま亡くなったとしても、罪が消えるかもしれないという。女三の宮の出家という判断に至る糸口が、食べないという状態である。死につながる「不食」状態から「死なばや」という願望を導きながらも、女三の宮は周囲の反応によって生きることを選択し、出家へとすり替えている。

なお、女三の宮が源氏に出家の意志を説明する様子は、「常の御けはひよりはいとおとなびて聞こえたまふ」(同)と形容されている。『湖月抄』は「女三はつねはかやうには、きと物のたまふ事はなきなるべし。是実は霊のいはせまゐらするなるべし」と注し、藤井貞和氏も六条御息所の死霊の関与を指摘している⁽¹⁰⁾。だが、藤本勝義氏や三村友希氏が述べるように、物の怪の出現は女三の宮の苦悩と連関している。藤本氏は、冷泉帝皇女尊子内親王の突然の剃髪を例に挙げた上で、「女三宮出家は、内的必然性と憑霊現象との両面が、等しく併存している」とし⁽¹¹⁾、三村友希氏は「苦しみを声にできない」紫の上と女三の宮に物の怪が共感したため、「病や出家にまで追い込まれた二人の苦悩や痛みを代弁しているのである」と述べる⁽¹²⁾。首肯される意見である。出家の意志は、「不食」を見られることを起点とした、一連の心情変化の流れの先にある。女三の宮は、周囲の苦言から源氏の態度の悪化を実感し、何をしたいか、何を優先すべきかを考えるようになる。物の怪が女三の宮に取り憑いていようとも、その結果導き出された出家の意志は、女三の宮個人の心情に由来するものである。

女三の宮が出家の意志を論理的に表明し、源氏や語り手が女三の宮の宮の様子を、普段よりも大人びていると捉えている。このことは、女三の宮が周囲の状況を察知し、思考する力を獲得していることを象徴しているのではないだろうか。密通により懐妊、出産を経験した女三の宮は、若君を前にして、源氏の庇護を当てにできなくなった時、乳母や女房たちの思考の下で守られているだけではいられなくなったのである。

五 出家断行の要因

女三の宮が出家の意志を宣言した後、源氏は逡巡しつつ女三の宮に薬湯を勧める。服用したかどうかは語られない。そのまま朱雀院が女三の宮を心配していることに話題は移る。さらに女三の宮の不食状態が続いている。

〔7〕さばかり弱りたまへる人（女三ノ宮）の物を聞こしめさで日ごろ経たまへば、いと頼もしげなくなりたまひて、年ごろ見たてまつらざりしほどよりも、院（朱雀院）のいと恋しくおぼえたまふを、女三の宮「またも見たてまつらざりぬるにや」といたう泣いたまふ。（女三ノ宮ガ源氏ニ）かく聞こえたまふさま、さるべき人して伝へ奏せさせたまひければ、いとたへがたう悲しと思して、あるまじきこととは思しめしながら、夜に隠れて出でさせたまへり。

（柏木卷④三〇三頁）

女三の宮の心情が詳細に描かれることに注意したい。女三の宮は何も食べないことが数日続いたため、ひどく頼りなくなり、父朱雀院のことを恋しく思う。数年会わなかった間よりも恋しいということから、体調不良が心に与える影響の大きさが窺われる。もう会えないままになるのではないかと涙する。女三の宮はこの気持ちを源氏に告げ、朱雀院にも伝えられる。朱雀院は無理を押しして六条院に渡ってくる。

〔7〕では、女三の宮の周りにいるはずの乳母や女房たちは描かれない。これまで見てきたような源氏への小言も記されない。若君への冷淡な態度から源氏に見切りをつけた女三の宮にとって、源氏を恐れる必要はない。女三の宮は、自分で源氏に出家への意志を述べ、朱雀院に会いたい旨を伝える。間接的に源氏を動かす必要もない。だからこそ、ここに乳母や女房たちの視点は登場しない。

女三の宮の直接の進言に、源氏は朱雀院に噂が伝わることを、気にしてはいられなくなる。女三の宮が会いたがっている旨を朱雀院に報告する。朱雀院は六条院を訪れる。女三の宮の出家を止めるためであったが、結果的に朱雀院の渡御こそが、女三の宮が出家を断行する要因となる。

朱雀院が六条院を訪れてから二度、女三の宮の「不食」が、源氏によって語られる。

〔8〕^{源氏}「わづらひたまふ御さま、ことなる御なやみにもはべらず、ただ月ごろ弱りたまへる御ありさまに、はかばかしう物などもまゐらぬつもりにや、かくものしたまふにこそ」など聞こえたまふ。

(柏木卷④三〇四頁)

〔9〕大殿の君(源氏)、うしと思す方も忘れて、こはいかなるべきことぞと悲しく口惜しければ、えたへたまはず、内に入りて、^{源氏}「なか、いくばくもはべるまじき身をふり棄てて、かうは思しなりにける。なほ、しばし心を静めたまひて、御湯まゐり、物などをも聞こしめせ。尊きことなりとも、御身弱うては行ひもしたまひてんや。かつはつくるひたまひてこそ」と聞こえたまへど、頭ふりて、いとつらうのたまふと思したり。

(柏木卷④三〇七頁)

〔8〕は、六条院を訪れた朱雀院が、女三の宮に對面する前の場面である。源氏から、女三の宮の容態が説明される。弱っていた上、しつかりした物も食べなかったことで、臥せるようになったという。その後對面した女三の宮は、泣いて出家を懇願する。この様子を見て、朱雀院は出家を容認する。源氏は、思惑と異なる容認に慌て、心を落ち着けて考え直すよう、女三の宮に説得を試みる。その〔9〕では、強い口調で薬湯や食事を勧めている。しかし、女三の宮の出家の意志は固い。女三の宮にとって、源氏の言葉は「いとつらうのたまふ」と思われるだけで、心には響かない。

源氏は再三にわたって、女三の宮が食事をしないことと、出家しようとしている現状を結び付けようとしてい

る。だが、それこそがそもそもの間違いであろう。「6」で見たように、「不食」は死につながるもので、出家意志と直接は関わらない。「8」については、密通の秘密を隠そうとする源氏の作為が働いている。ただし、朱雀院は、源氏が女三の宮にあまり好意を寄せていないことに気づいており、効果を発揮していない。「9」では、「うしと思す方も忘れて」とある。切羽詰った源氏は、女三の宮に食べるよう説得する。しかし、いかに源氏が食事を勧めようとも、女三の宮の出家の意志を覆す打開策にはならないのである。

六 女三の宮の「不食」から「食」へ

女三の宮が食べない状態は、まず懐妊と関わって起こる。周囲に見られ、周囲の反応を引き出すことにより、翻って女三の宮自身の心情に影響を与えていた。出産後の女三の宮は、若君を守る母として何をすべきか考えるようになる。考えた末の結論が出家である。源氏に出家を願い出る女三の宮の姿には、新たに「おとなび」た性質が垣間見える。自身の考えを持つようになるという意味での成長が窺える。幼さを完全に失ったとはいえないが、源氏を恐れてばかりいた女三の宮はもはやいない。

若君（薫）の五十日の祝において、源氏は尼姿の女三の宮を見て、「うつくしき子どもの心地」（柏木卷④三二一頁）と、愛着を感じる。自身を見限らず、「あはれ」（三二二頁）と思うよう、女三の宮に嘆願する。女三の宮は、「かかるさまの人は、ものあはれも知らぬものと聞きしを、ましてもとより知らぬことにて、いかがは聞こゆべからむ」（同）と、わかまえを知らない我が身を語る。女三の宮は、自分でも考えの足りぬ所を認めているが、そのことを口にして源氏と対等に対話できるほどに、思考が備わったということだろう。尼姿には不似合いな若々しさが、周囲から見られることで、外見と内面との不相応を映し出している。

「食」描写は人の生き死に関わり、人に見られることで、物語の主題を展開させる契機となる。それゆえ、

妊娠、出家と、生死の狭間の微妙な位置で揺れ動く女三の宮に、多く見られるのだろう。ただし、出家は死とは別物として考えられている。女三の宮の出家翻意を迫ろうと、源氏は食事を促すが、死でなく出家を志す女三の宮の心には響かないのである。

女三の宮が出家を果たした後の様子は、「すこし生き出でたまふやうなれど、なほ頼みがたげに見えたまふ。」（柏木卷④三一〇頁）と語られる。まだ「頼みがたげ」ではありつつも、出家したことで少しずつ「生きる」とに向かっている様子が見て取れる。出家後、女三の宮の「不食」が語られることはない。

最後に、女三の宮の「不食」描写が他の「食」描写との間を縫うように描かれていることに言及しておきたい。若菜下巻から横笛巻までの「食」・「不食」描写を次頁の【表1】に示した。

女三の宮の「不食」描写は、懐妊、密事露頭、出産、出家という、自身に関わる問題を展開させている。それとともに、隣接する「食」描写と対照し、生死の葛藤を描き出す。薫の産養と五十日の祝の間に、女三の宮の出家と柏木の死が描かれている。不義の子の生が世間から祝われる一方で、密通の当事者二人の生死に関わる心境を描き出すためである。最も周囲に見えやすい生死の形が、「食」・「不食」ではなかっただろうか。

横笛巻において、朱雀院から筍や野老などの山菜が贈られている。食べたことは描かれないものの、朱雀院の「世をわかれ入りなむ道はおくるとも同じところを君もたづねよ」（横笛巻④三四七頁）という歌に対し、女三の宮は「うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山路に思ひこそ入れ」（三四八頁）と、同様に「ところ（野老）」を用いて返歌している。これまで「不食」描写が繰り返されてきた女三の宮は、「食」を詠み込む歌によって、山菜の贈り主である朱雀院と心を通わせている。この筍は薫がかじっている。死ではなく出家を選んだ女三の宮の生が、薫へとつながれて、生命力を露わにしている。生死に関わる「食」を通じて、命の結びつきが見えてくるのである。

【表1】 若菜下巻から横笛巻までの「食」・「不食」描写

横笛		柏木		若菜下						巻				
薫	女三の宮	薫	女三の宮	—	柏木	柏木	女三の宮	源氏	源氏	女三の宮	紫の上	源氏・紫の上	主格	
食	(食)	食	不食	食	不食	不食	不食	食	食	不食	食	不食	食 or 不食	
薫、笛をかじる 朱雀院から笛等の贈り物		薫の五十日の祝 (柏木死去)		薫の産養 女三の宮、出家を願い果たす〔6〕〜〔9〕		試楽後、柏木悩乱〔4〕		朱雀院御賀の試楽 朱雀院御賀の試楽		源氏、柏木の文を見つける 女三の宮を見舞う		女三の宮懐妊〔1〕 紫の上、小康を得る		場面 () 内は引用本文の番号。 〔3〕は「食」記述ではない。

注

- ㉓ 木谷眞理子氏「源氏物語と食」(『成蹊国文』四〇 二〇〇七年三月)
- ㉔ 『養老令』「後宮職員令」によると、内親王には三人の乳母をつけることになっていた。
- ㉕ 女三の宮の乳母に関しては、後掲する久保重氏・吉海直人氏の他、倉田実氏「内親王女三の宮の婚姻と端役たち―承香殿女御・乳母たち・左中弁など」(『端役で光る源氏物語』世界思想社 二〇〇九年一月)、外山敦子氏「女三の宮の乳母―変貌させられる老女房―」(『源氏物語の老女房』新典社 二〇〇五年十月、初出は「女三の宮物語の始発と終焉―変貌する老女房―」(『古代文学研究 第二次』七 一九九八年十月) などがある。
- ㉖ 久保重氏「朱雀院女三の宮の乳母たち」(『源氏物語の探究』第一五輯 風間書房 一九九〇年十月、初出は「樟蔭国文学」二六 一九八九年三月)は、「めざましきこと」と思ったところに、気位の高い権威主義的な彼女らの意識の特殊性がうかがわれる」と指摘する。
- ㉗ 吉海直人氏「女三の宮の乳母達」(『源氏物語の乳母学―乳母のいる風景を読む―』世界思想社 二〇〇八年九月、初出は「女三の宮の乳母をめぐって」(『同志社女子大学日本語日本文学』一七 二〇〇五年六月)は、「乳母の論理のうえでそれぞれに養君と利己的に結び付いており、それが結果的に源氏の構築した六条院世界の秩序を侵犯することになっている」と述べる。
- ㉘ 島内景二氏「素材としての病」(『源氏物語の話型学』ペリかん社 一九八九年七月。初出は「源氏物語における病とその機能―素材から作品への階梯―」(『むらさき』一八 一九八一年七月))
- ㉙ 松岡智之氏「死―紫の上の死を中心に」(『源氏物語研究集成』第一巻 風間書房 二〇〇二年三月)
- ㉚ 沢田正子氏「源氏物語の母」(『源氏物語の探究』第六輯 一九八一年八月)
- ㉛ 大坂富美子氏「女三宮の成長―母性を契機として―」(『中古文学論攷』一五 一九九四年十二月)
- ㉜ 藤井貞和氏「光源氏物語主題論」(『源氏物語の始原と現在』冬樹社 一九八〇年五月)
- ㉝ 藤本勝義氏「源氏物語の死霊」(『源氏物語の〈物の怪〉―文学と記録の狭間―』笠間書院 一九九四年六月)
- ㉞ 三村友希氏「二人の紫の上―女三の宮の恋―」(『姫君たちの源氏物語―二人の紫の上―』翰林書房 二〇〇八年十月。初出は「跡見学園女子大学 国文学科報」二六 一九九八年三月)

第三章 光源氏の「不食」への眼差し

一 光源氏の視点

前章で、女三の宮に「不食」描写が繰り返されていることを辿ってきた。女三の宮は、懐妊の兆候が現れてから、出産、出家に至るまで、食べないことが周囲の人々から見られる。周囲から見られることで、巡り巡って、女三の宮の心情に変化を起こす。女三の宮が思考し、行動するようになる。また、女三の宮の「不食」描写は、柏木と女三の宮の密通が光源氏に露顕する前後に描かれている。前後の「不食」描写により、源氏の態度の変化をも映し出す。

女三の宮の「不食」描写は、若菜下巻では、懐妊の兆候を示している。紫の上が病臥し、小康を得たことと入れ替わりのように、女三の宮の体調不良が語られ始める。紫の上と女三の宮が対比的に描かれていることは、森一郎氏⁽²⁾や三村友希氏⁽³⁾などによって述べられている。が、食べない二人の女君を見つめる源氏の視点については、検討の余地がある。さらに、柏木巻では、源氏を主語として、女三の宮に食事を勧める描写も見られる。本章では、若菜下巻から柏木巻を中心として、紫の上や女三の宮の「不食」描写を、源氏の視点から考察する。源氏にとっての食べること、食べないことを位置づける。

二 往来する光源氏

まず、若菜下巻において、紫の上が発病してから、源氏が紫の上と女三の宮の間を行き来する様子を確認して

おこう。なお、山括弧内に、源氏の移動を示しておく。「三」は女三の宮、「紫」は紫の上を示す。

独り寝の夜、紫の上は急に胸が苦しくなる。夜が明けてから、源氏は紫の上の発病を知る。女三の宮の部屋から急いで紫の上のもとに渡るへ三↓紫①。紫の上は発熱し、食欲もなく、起き上がることもできない。源氏は紫の上の看病にかかりきりになる。容態が変わらないまま三月となる。試しに場所を変えてみようと、紫の上は二条院で静養を始める。勿論源氏も紫の上につき添う。六条院は火が消えたように閑散としている。その隙をついて、柏木は女三の宮のもとに忍び込む。賀茂の祭で都が賑わっている、四月十日頃のことである。周囲の視線は祭に向いている。

女三の宮は密通が人に漏れ聞こえることにおびえ、明るい所に出ようとしなない。源氏は女三の宮が気分を悪くしていると聞き、六条院へ渡るへ紫↓三①。すぐにも二条院に帰りたく思い、女三の宮をなだめるが、なかなか二条院へ戻れない。折から、紫の上危篤の知らせを受ける。源氏は取り乱しながら二条院に渡るへ三↓紫②。紫の上は六条院の死霊が取り憑いたためであった。何とか調伏されて紫の上は蘇生する。源氏は、この出来事にさらに不安感を増し、また六条院に渡らない日々が続く。

五月になり、紫の上の容態は多少落ち着いてくる。心痛する源氏を残して命果てることはよくないと心を奮い立たせ、「御湯などいささかまゐる」(若菜下巻④二四三頁) ようになる。六月には頭を上げられるようになる。

この頃から、女三の宮に懐妊の兆候が見え始める。気分が悪くなり、食事もしない。女三の宮の体調不良を聞き、源氏は六条院へ渡らざるを得なくなるへ紫↓三②。二、三日は六条院に泊まるものの、紫の上のことが心配で仕方ない。女三の宮はひどく沈んだ様子で、足早に立ち去ろうとする源氏に、歌を詠みかける。源氏は女三の宮の態度をいじらしく思い、その日は六条院に泊まる。翌日、柏木の文を発見する。あきれる源氏はそのまま二条院に戻りへ三↓紫③。再度文を見て、柏木の筆跡と断定する。そのまま紫の上のもとで数日過ごす。ただ、女三の宮のことを見放してしまおうとするとかえって恋しく思われる。表向きには普段と変わりなく六条院へ渡る

折もあるへ紫↓三③。対面すると訓戒を施すなど、女三の宮に厳しくあたる。

このように、源氏は、紫の上と女三の宮の体調に左右され、二人の間を行き来している。女三の宮から紫の上のもとへの移動は、紫の上の体調の急変によるところが大きい。源氏は慌てて渡っている。不在の折に急変しているため、なおさら紫の上から離れがたくなる。源氏が六条院に不在である間隙について、女三の宮と柏木の密通は起こる。

一方の、紫の上から女三の宮のもとへの移動も、女三の宮の体調不良を聞いてのことである。ただし、源氏の足取りは重い。紫の上のもとへ渡るように、切羽詰ったものではない。へ紫↓三②では、一旦、「かくなやみたまふと聞こしめしてぞ渡りたまふ。」（若菜下巻④二四四頁）とあるものの、実際に六条院に渡るまでに、紫の上と歌を交わす場面が挟み込まれる。帝や朱雀院への体裁を考え、「かかる雲間にさへやは絶え籠らむと思したちて渡りたまひぬ。」（二四六頁）とあるが、源氏の乗り気でない様子が窺えよう。渡ってしまったえば、すぐに紫の上のもとへ戻ることはためらわれる。源氏が六条院を去りかねている間に、紫の上の容態は急変する。源氏は紫の上の病状急変を見逃し、柏木を苛立たせ、果ては、柏木と女三の宮の密通を知る。

つまり、紫の上のもとでは、源氏の不在時に事態が悪化し、源氏を呼び寄せる。女三の宮のもとでは、源氏の不在時に起こった事象が、源氏が導かれることで、当事者たちの心情を波立たせ、事態をさらに悪化させる。双方の状態は、シーソーのようにつり合いを取って、源氏の移動を促している。その状況把握に「食」が関わっている点に、次節で着目する。

三 共食の思想

源氏の行動は、紫の上と女三の宮のもとで異なる。「食」描写においても、源氏の行動の差異が認められる。まず、紫の上の発病を聞き駆け付けた後の場面である。

〔1〕女御の御方（明石女御）より御消息あるに、「紫ノ上ガ）かくなやましくてなむ」と聞こえたまへるに、驚きてそなたより聞こえたまへるに、胸つぶれて急ぎ渡りたまへるに、いと苦しげにておはす。源氏「いかなる御心地ぞ」と探りたてまつりたまへば、いと熱くおはすれば、昨日聞こえたまひし御つつしみの筋など思しあはせたまひて、いと恐ろしく思さる。（源氏ハ）御粥などこなたにまゐらせられたれど御覧じも入れず、日一日添ひおはして、よろづに見たてまつり嘆きたまふ。紫ノ上ハ）はかなき御くだものをだに、いともうくしたまひて、起き上がりたまふこと絶えて、日ごろ経ぬ。

（若菜下巻④二一三頁）

源氏は紫の上の看病にかかりきりである。女房から朝食の粥をさし出されるが、見向きもしない。看病している者が食事をしない例は、この源氏のみである。紫の上は「はかなき御くだもの」さえ嫌がるほどで、源氏の心配を掻き立てる。看病する源氏、される紫の上が共に食事をせず、日が経つ。

源氏と紫の上が共に食事をしている姿は、紅葉賀巻で見られた。

〔2〕やがて御膝によりかかりて寝入りたまひぬれば、いと心苦しうて、源氏「今宵は出でずなりぬ」とのたまへば、みな立ちて、御膳などこなたにまゐらせたり。姫君起こしたてまつりたまひて、源氏「出でずなりぬ」と聞こえたまへば、慰みて起きたまへり。もろともに物などまゐる。いとほかなげにすさびて、紫「さらば寝たまひねかし」とあやふげに思ひたまへれば、かかるを見棄てては、いみじき道なりとも、おもむきがたくおぼえたまふ。

（紅葉賀①三三三頁）

紫の上は、源氏の外出を悲しむ。源氏は紫の上をかわいそうに思い、外出をやめ、食事を同じ部屋に用意させ

る。普通別々の部屋でとる食事を、一緒にとることで、源氏は紫の上を安心させようとする。だからこそ、源氏は「こなたに」用意させる。

男女が同じ場所で食事をする例は、他にも見られる。

〔3〕うち泣きたまへる（中ノ君ノ）気色の、限りなくあはれなるを見るにも、（匂宮ハ）かかればぞかしと
いとど心やましくて、我もほろほろとこぼしたまふぞ、色めかしき御心なるや。まことに、いみじき過ち
ありとも、ひたぶるにはえぞ疎みはつまじく、らうたげに心苦しきさまのしたまへれば、えも恨みはてた
まはず、のたまひさしつ、かつはこしらへきこえたまふ。

またの日も、心のどかに大殿籠り起きて、御手水、御粥などもこなたにまゐらす。

（宿木卷⑤四三六頁）

〔4〕帳の内に入りたまひぬれば、若君は、若き人、乳母などもあそびきこゆ。人々参り集まれど、なやましとて、大殿籠り暮らしつ。御台こなたにまゐる。

（東屋卷⑥四三頁）

〔3〕〔4〕は共に、匂宮が中の君の部屋で食事している様子である。〔3〕において、匂宮は、薫と中の君の仲を疑っている。中の君の魅力を見るにつけて、薫との間に過ちがあったとしても、中の君に愛想を尽かしてしまえないと思う。匂宮は、中の君の機嫌をとり、そのまま共寝する。翌日、朝食まで同室に準備させる。薫への嫉妬から、中の君と離れがたく思うためだろう。〔4〕においては、浮舟の母である中将の君が、夫婦水入らずで過ごす匂宮と中の君の様子を、垣間見ている^⑤。〔2〕と〔4〕は、いずれも「こなたに」と、場所の言及がある。末沢明子氏が、食事が描かれる時、場所が重要な要素となり得ることに言及している^⑥ように、普段とは異なり、二人が同じ場所で食べるということに意味があるといえる。

原田信男氏は、「同じ飲食物を体内に摂り入れることによって心を同じくするという発想は、古くから諸民族に

共通するところであった」と述べる⁽⁵⁾。「2」も「4」の例も、同じ場所で食事をとることによって、男女の仲を深めようとする意図のもとである。

対する「1」を再度確認すると、女房が粥を「こなたに」準備している。「1」でも場所に言及している。源氏は紫の上から目を離すのが心配であろう、という女房の配慮での「こなたに」である。それでも、源氏は紫の上のもとを離れようとせず、粥に見向きもしない。源氏が粥を食べないことは、紫の上への強い心配が窺えるが、紫の上が食べないから源氏も食べないともいえる。つまり、共に食事しないことで、源氏は紫の上と、心を同じくしようとしているのではないだろうか。

他方、源氏は女三の宮のもとで食事をとっている。紫の上の復調後、女三の宮を見舞い、二、三日滞在するへ紫↓三②。二条院に戻る直前の夜食、翌朝食と、二度の食事が描かれる。

「5」など思しやすらひて、なほ情なからむも心苦しければとまりたまひぬ。静心なくさすがにながめられたまひて、御くだものばかりまゐりなどして大殿籠りぬ。

まだ朝涼みのほどに渡りたまはむとて、とく起きたまふ。源氏「昨夜のかはほりを落として。これは風ぬるくこそありけれ」とて、御扇置きたまひて、昨日うたた寝したまへりし御座のあたりを立ちとまりて見たまふに、御褥のすこしまよひたるつまより、浅緑の薄様なる文の押しまきたる端見ゆるを、何心もなく引き出でて御覧ずるに、男の手なり。紙の香などいと艶に、ことさらめきたる書きざまなり。二重ねにこまごまと書きたるを見たまふに、紛るべき方なくその人の手なりけりと見たまひつ。御鏡などあけてまらする人は、なほ見たまふ文にこそはと心も知らぬに、小侍従見つけて、昨日の文の色と見るに、いといみじく胸つぶつぶと鳴る心地す。御粥などまゐる方に目も見やらず、いで、さりとも、それにはあらじ、いといみじく、さることはありなむや、隠いたまひてけむ、と思ひなす。

(若菜下巻④二四九頁)

源氏は二条院へ戻ろうと、女三の宮に暇乞いの挨拶をする。女三の宮は珍しく源氏を引き止める。源氏はこのまま立ち去るのも薄情に思われ、女三の宮のもともう一泊する。しかし、紫の上への気遣いから、源氏の心は落ち着かない。一つ目の傍線部の直前に、「静心なくさすがにながめられたまひて」とあり、源氏は紫の上へと思いを馳せている。紫の上を思いながら、くだものを食している。

翌朝、源氏は紫の上のもとへ早くに戻ろうと思い、早起きする。柏木の手紙を見つけたが、柏木に対する煩悶が描かれるのは、二条院に戻ってからである。「御粥などまゐり、着々と出かける準備を整える。眠っている女三の宮を置いて、二条院に戻る。この時点では、まだ源氏の心中で、柏木の手紙について整理しきれていないともいえるが、女三の宮の無邪気さに辟易し、「まだ朝涼みのほどに渡りたまはむ」という気持ちが加速しているのだろう。

したがって、源氏は、夜食・朝食をとりながら、胸中で紫の上を思っている。源氏の食事が描かれることは、紫の上も食べられるようになったことと通じている。離れた場所にいなながらも、共に食事をするので紫の上の思いを馳せる。若菜下巻の源氏は、場に関係なく、「食」「不食」の行動を紫の上と同じくすること、すなわち、同じ場で同じように食事しないことよって、また、同じ場におらずとも同様に食事することよって、紫の上と心を通わそうとする。それゆえ、「1」で食さなかった「御くだもの」「御粥」を「5」で描き出しているのではないだろうか。

「5」において、源氏と同じ六条院の空間にいるのは、女三の宮である。その女三の宮の食欲がないにもかかわらず、源氏は近くで食事する。源氏が食べることににより、紫の上と心を通わせる一方で、女三の宮との相容れない関係が浮き彫りになる。「2」のような「共食Ⅱ共に食べる」だけでなく、いわば「共不食Ⅱ二人とも食べない」によつても、源氏は紫の上と同調しようとする関係を示す。対する女三の宮とは、「不共食Ⅱ食べる・食べないを共有しない」によつて、同調し得ない関係が示されているのではないだろうか。

女三の宮に引き止められ、源氏は六条院にもう一泊滞在することになった。女三の宮の源氏を引き止める姿は、「いと若やかなるさましてのたまふは憎からずかし。」(若菜下巻④二四九頁)、「片なりなる御心にまかせて言ひ出でたまへるもらうたければ、」(同)と語られる。その未熟さに、源氏は心惹かれている。が、山田利博氏が「柏木との一件があつて、せつかく少しは成長したかと思われた女三の宮が、またもとの状態に戻ってしまうことによつて、この危機は呼び込まれてしまったのだと語られている」^⑤と述べるように、女三の宮の未熟さが、密通露頭につながっている。源氏は女三の宮に同情し、六条院に止まりながらも、紫の上を思っている。源氏のこの葛藤が「御くだものばかりまるる」様子に表れている。

翌朝の、源氏が粥を食べる姿は、小侍従の視点から描かれている。小侍従は前日、源氏がしばらく対屋に渡っている隙に、女三の宮に柏木の手紙を見せた。源氏が数日六条院にすることで、柏木が業を煮やし、思いの丈を書き連ねてよこした手紙である。小侍従は柏木に同情し、嫌がる女三の宮に何とかこの手紙を見せようとする。人が来たため、小侍従はその場を去る。女三の宮は柏木の手紙を褥の下にはさんだままにしてしまった。それにもかかわらず、女三の宮は源氏が二条院へ戻ろうとするのを引き止める。

翌朝、源氏は柏木の手紙を見つける。源氏が粥を食べながら眺めている手紙の色が、柏木のよこした手紙の色と似ていることに、小侍従は気づく。胸が高鳴り、「御粥などまゐる方に目も見やらず」にいる。「見やらず(見やる+打消の語)」とは、それほど例はないが、梅枝巻に、「しどろもどろに愛敬づき、見まほしければ、さらに残りどもにも目見やりたまはず。」(梅枝巻③四二〇頁)とある。源氏の美しい草仮名の書を螢宮はずっと見たいと思われ、他の人の草子には目もくれない。『紫式部日記』には、「内蔵の命婦は、舞人には目も見やらず、うちまもりうちまもりぞ泣きける。」(一八三頁)とある。臨時祭の奉幣使に選ばれた藤原教通の出立の儀式の折である。教通の乳母である内蔵の命婦は、舞人には目もくれず、教通の雄姿を見つめ感涙にむせている。つまり、通常なら注目するはずの行為に目がいけないことを示す。

〔5〕において、鏡を開けてさし出す他の女房は、手紙は源氏が見るべき内容の物と信じて疑わない。源氏の朝の支度に心を配り、手紙を見る行為も日常の一部だと思っている。小侍は、普通であれば粥を食べている源氏に注目すべき立場なのだろう。にもかかわらず、手紙が気になって仕方ない。手紙を見る行為が、食事という、女房たちに見られる日常の行為の中に埋もれている。小侍だけが、手紙を日常とは異なるものと識別する。密事が源氏に露顕した事実を、小侍だけが知り得るのである。

食事という行為により、源氏は離れた場所でも紫の上と通じ合おうとする。女三の宮は源氏を六条院に呼び寄せ、二条院へ戻ることを引き止める。逆に、六条院に留めることが密事露顕の契機となり、源氏と女三の宮の関係は切り離される。食事という日常の場面に紛らわせ、特定の人物のみに、源氏と紫の上、女三の宮それぞれの関係を露わにしているのである。

四 「食」を勧める意義

柏木巻に至り、源氏は夜も女三の宮のもとで休まない。昼に少し顔を見せるくらいの粗略な扱いになっている。女三の宮は出産を経験した恐ろしさから、生きていられそうも無く思う。このまま死ぬのは罪業が深いため、出家したいと願う。源氏は女三の宮の願いを聞き、「いとうたて、ゆゆしき御事なり。」(柏木巻④三〇二頁)と出家を思い止まらせようとする。また、「なほ、強く思しなれ。」(同)と、心を強くもって思い直すように言う。命がもたないわけではない、紫の上のように重態を乗り切り快復した例があるのだから、と、どちらの言葉も快復する可能性を強調する。この、源氏が発する二つの言葉に挟まれて、源氏の心中が語られている。

〔6〕御心の中には、まことに、さも思しよりてのたまはば、さやうにて見たてまつらむはあはれなりなむか

し、かつ見つつも、事にふれて心おかれたまはむが心苦しう、我ながらもえ思ひなほすまじう、うきことのうちまじりぬべきを、おのづからおろかに人の見咎むることもあらむが、いといとほしう、院などの聞こしめさむことも、わが怠りにのみこそはならめ、御なやみにことつけて、さもやなしたてまつりてまし、など思しよれど、

(柏木卷④三〇二頁)

源氏は、女三の宮への粗略な扱いを周囲に気づかれる前に、病気にかこつけて出家を了承してしまった方がよいのでは、と考えている。前章でも述べたことだが、ここでも、傍線部「人の見咎むることもあらむ」とあり、女房たちの苦言が念頭に置かれている。女三の宮の出家の話が朱雀院の耳に届いて、自身の過失と思われることを懸念している。それでも、傍線部の直前に「我ながらもえ思ひなほすまじう、うきことのうちまじりぬべき」と、自分では抑えられない、女三の宮に対する不快感が、行動に現れてしまうことを予測している。源氏は、出家了承を考えるものの、女三の宮の髪をもつたいたなくも思い、踏ん切りがつかない。そこで、再度出家を考え直すよう促し、薬湯を勧めている。次の「7」は、「6」に続く記述である。

「7」また、いとあたらしう、あはれに、かばかり遠き御髪の生ひ先を、しかやつきむことも心苦しければ、
源氏「なほ、強く思しなれ。けしうはおはせじ。限りと見ゆる人も、たひらかなる例近ければ、さすがに頼みある世になむ」など聞こえたまひて、御湯まゐりたまふ。いといたう青み痩せて、あさましうはかなげにてうち臥したまへる御さま、おほどきうつくしげなれば、いみじき過ちありとも、心弱くゆるしつべき御さまかなと見たてまつりたまふ。

(柏木卷④三〇二頁)

薬湯を勧められた女三の宮は、ひどく青く痩せて、はかなげで、おっとりとした、かわいらしげに見える。源氏は女三の宮の過ちを許してやりたくなる。薬湯は、過ちを許せないと思っていた女三の宮との、潤滑油のような役

割を果たしているように見える。源氏は、過去にも具合の悪い葵の上に薬湯を勧めていた。

〔8〕(女房ガ葵ノ上ノ) 臥したまへる所に御座近う参りたれば、(源氏ハ) 入りてものなど聞こえたまふ。御答へ時々聞こえたまふも、なほいと弱げなり。されど、むげに亡き人と思ひきこえし御ありさまを思し出づれば、夢の心地して、ゆゆしかりしほどのことどもなど聞こえたまふついでにも、かのむげに息も絶えたるやうにおはせしが、ひき返しつづつとたまひしことども思し出づるに心憂ければ、源氏「いさや、聞こえまほしきこといと多かれど、まだいとたゆげに思しためればこそ」とて、「御湯まぬれ」などさへあつかひきこえたまふを、何時ならひたまひけん、人々あはれがりきこゆ。

(葵卷②四四頁)

葵の上は、源氏の語りかけに時々返事をする。源氏に心を開きかけているように見える。薬湯を飲むよう促す源氏との関係が、周囲からは感慨深く思われる。葵の上が特に拒否している様子はなく、周囲も温かく見守っている。葵の上は薬湯を服用しているのだろう。しかし、源氏が薬湯を勧めるに至る心中には、葵の上を心配する気持ちとは別の思いが蟠っている。すなわち、傍線部の通り、六条御息所が葵の上に移り、「つづつとたまひしこと」などを思い出し、厭わしく思う。この回想を振り払うかのように、源氏は、話したいことが多いしながら、話しかける言葉を控え、薬湯を含ませる。源氏にとっては、会話を打ち切る口実なのである。つまり、源氏が食事を勧めることは、相手を看病し、相手との関係を円滑にする気持ちよりも、話を逸らす作用を期待してのことである。かいがいしく葵の上を世話する源氏の様子を、周囲は「何時ならひたまひけん」と見る。食事を勧めることは、源氏が習得した技術ともいえる。

女三の宮に対して、〔8〕の葵の上と同様のことを行っているのではないだろうか。源氏は、人に咎められることを避けたい。この機に乗じて女三の宮を出家させてもよいのでは、とも思うが、望み通り出家させるには忍びないとも思う。女三の宮に薬湯を勧めることによって、出家を容認する心中を払拭し、その場をとりつくる

おうとする。

さらに、朱雀院が六条院に渡った時にも、源氏は薬湯や食事を促している。

〔9〕大殿の君（源氏）、うしと思す方も忘れて、こはいかなるべきことぞと悲しく口惜しければ、えたへた
 まはず、内に入りて、源氏「などか、いくばくもはべるまじき身をふり棄てて、かうは思しなりにける。な
 ほ、しばし心を静めたまひて、御湯まゐり、物などをも聞こしめせ。尊きことなりとも、御身弱うては行
 ひもしたまひてんや。かつはつくろひたまひてこそ」と聞こえたまへど、頭ふりて、いとつらうのたまふ
 と思したり。

（柏木卷④三〇七頁）

朱雀院が出家を容認し、事態は差し迫る。源氏は、「うしと思す方も忘れて」、女三の宮の出家を思いとどめようとする。薬湯や食事を促すことは、既に決まりかけている出家の話題を逸らそうとする意図がある。〔7〕より言葉数が多く、出家までの時間を先延ばしにしようとする。また、何とか物を含ませようという強い口調になっている。しかし、女三の宮の意志は固い。源氏の言葉をつらいものと思うだけで、心には響かない。そのまま出家は断行される。

前章で述べたように、源氏の食事を促す行動は、出家を阻止することにつながる。食べないことが死とながるのに対し、出家は死とは似て非なるもので、生きていることに変わりないためである。出家を阻止された例を見てみよう。紫の上と大君の例である。

〔10〕源氏「あるまじくつらき御事なり。みづから深き本意あることなれど、とまりてさうざうしくおぼえたまひ、ある世に変わらん御ありさまのうしろめたさによりこそ、ながらふれ。つひにそのこと遂げなん後に、ともかくも思しなれ」などのみ妨げきこえたまふ。

（若菜下卷④一六七頁）

〔11〕^{源氏}「それはしも、あるまじきことになむ。さてかけ離れたまひなむ世に残りては、何のかひかあらむ。ただかく何となくて過ぐる年月なれど、明け暮れの隔てなきうれしさのみこそ、ますことなくおぼゆれ。なほ思ふさまことなる心のほどを見はてたまへ」とのみ聞こえたまふを、

(若菜下巻④二〇八頁)

〔12〕^{源氏}「昔より、みづからぞかかる本意深きを、とまりてさうざうしく思されん心苦しさにひかれつつ過ぐすを、さかさまにうち棄てたまはむとや思す」とのみ、惜しみきこえたまふに、

(若菜下巻④二一四頁)

〔13〕みな泣き騒ぎて、^{女房}「いとあるまじき御事なり。かくばかり思しまどふめる中納言殿も、いかがあへなきやうに思ひきこえたまはむ」と、似げなきことに思ひて、頼もし人(薫)にも申しつがねば、口惜しう思す。

(総角巻⑤三二四頁)

〔10〕〔11〕〔13〕は、出家が「あるまじき」ことであることが強調されている。〔10〕〔12〕では、源氏が紫の上の出家意志に反対している。藤井貞和氏は、源氏が紫の上の出家に反対する一本の論理が貫かれていることを述べる³⁾。すなわち、源氏自身が、紫の上への気がかりのために出家をためらっており、「源氏が出家をしないかぎり紫上は源氏との愛情の生活をつづけるべきであり、「源氏の側の理由によって紫上はついに出家をゆるされない」という言い分である。源氏は自身の主観的感情を何より優先させる。自分の気持ちを理解するよう紫の上に訴え、出家を思い止まるよう促している。〔13〕の大君の出家願望にしても、紫の上と同様、女房が「あるまじき御事」と否定した上で、薫の心情を持ち出し、説得している。したがって、出家に反対する場合、主観的な感情に訴えた方が効果的に働いている。

源氏は女三の宮に対し、「いとうたて、ゆゆしき御事なり。などでかさまでは思す。かかることは、さのみこそ

恐ろしかなれど、さてながらへぬわざならばこそあらめ」(柏木卷④三〇二頁)や「なほ、強く思しなれ。けしうはおはせじ。限りと見ゆる人も、たひらかなる例近ければ、さすがに頼みある世になむ」(同)と述べていた。他の快復した例を挙げたり、女三の宮のそれほど悪くない容態を説明したりしている。出家という事態を抽象化して、女三の宮自身の心持ちを樂天的に変化させようとしている。出家をやめさせようとする気持ちの切迫感の違いでもあるが、紫の上や大君の時とは異なり、努めて冷静に、出家志願者の心情に寄り添おうとする。客観的で強制力の弱い説得では、女三の宮の出家の意志を押しとどめることはできない。女三の宮は自身の心を優先して、出家を断行する。

五 朱雀院との対面が再現する場

女三の宮の出家は、朱雀院が六条院を訪れることで成立する。女三の宮の会いたいという願いによって朱雀院は六条院に引き寄せられる。朱雀院はまず源氏と対面し、女三の宮の容態の説明を受ける。

〔14〕御容貌異にても、なまめかしうなつかしきさまにうち忍びやつれたまひて、うるはしき御法服ならず、墨染の御姿あらまほしうきよなるも、うらやましく見たてまつりたまふ。例の、まづ涙落としたまふ。

源氏 「わづらひたまふ御さま、ことなる御なやみにもはべらず、ただ月ごろ弱りたまへる御ありさまに、はかばかしう物などもまゐらぬつもりにや、かくものしたまふにこそ」など聞こえたまふ。

(柏木卷④三〇四頁)

源氏は朱雀院の突然の来訪に恐縮しつつ、女三の宮の容態を説明する。容態を説明することは、病者と説明する相手をつなぐ行為である。食欲減退がこのような状態になった原因であるという言葉は、朱雀院に会いたいと

願ひ出た時の女三の宮の様子「さばかり弱りたまへる人の物を聞こしめさで日ごろ経たまへば、いと頼もしげなくなりたまひて」（柏木巻④三〇三頁）の繰り返いで、一見的確な説明のようである。しかし、これまで見てきたように、「不食」と出家意志は、直接は関わらない。『新編全集』頭注は、「ことなる御なやみにもはべらず」について、「出産に原因する病氣以外の何ものでもない。病悩の真相にふれまいとする言辭。」と注する。食欲がないことは、女房などの噂を通じて、以前から朱雀院の耳にも届いていたことだろう。源氏は、女三の宮の出家願望が、懐妊、出産を経て、長らく続いてきた「不食」状態と絡めての心境であることを強調する。絶対に打ち明けられない密通の秘密を抱え、出家を願うようになった女三の宮の真意をはぐらかさうとしている。また、自身の過失を最小限に抑えようとする狙いがあるため、容態の説明は作為的なものになる。

では、なぜ女三の宮の出家に朱雀院が立ち会う必要があったのだろうか。源氏の容態説明の直前に、破線部「例の、まづ涙落したまふ」とあることに注目したい。「例の」とは、若菜上巻で源氏が朱雀院を見舞い、出家した姿を見た際の涙、「変りたまへる御ありさま見たてまつりたまふに、来し方行く先くれて、悲しくとめがたく思さるれば、とみにもえたためらひたまはず。」（若菜上巻④四六頁）に通じる。源氏は、朱雀院の出家した姿を見て、自分も故桐壺院が亡くなった頃から出家の気持ちが強くなってきたが、いざとなるとためらわれていたことが恥ずかしくてならないと述べている。この対面の時、朱雀院から源氏に、女三の宮降嫁の話があった。源氏は朱雀院への同情に加え、藤壺宮の姪であるという女三の宮への興味も手伝って、降嫁を承引する。朱雀院の出家姿を見ることは、この時のことを思い出させる。朱雀院から後見を任された女三の宮が、今や出家を志している。朱雀院が女三の宮と対面する前に、源氏は女三の宮の症状をぼやかして語る。これによって、朱雀院への後ろめたさを和らげようとしているのである。

源氏の説明に対して、朱雀院の反応は特にない。朱雀院は女三の宮の前に通され、出家の願いを聞く。女三の宮の出家を認めるまでの朱雀院の心中が、次のようにある。

〔15〕御心の中、限りなううしろやすく譲りおきし御事を承けとりたまひて、さしも心ざし深からず、わが思ふやうにはあらぬ御気色を、事にふれつつ、年ごろ聞こしめし思しつめけること、色に出でて恨みきこえたまふべきにもあらねば、世の人の思ひ言ふらむところも口惜しう思しわたるに、かかるをりにもて離れなむも、何かは、人笑へに世を恨みたるけしきならで、さもあらざらむ、おほかたの後見には、なほ頼まれぬべき御おきてなるを、ただ預けおきたてまつりしるしには思ひなして、憎げに背くさまにはあらざとも、御処分に、広くおもしろき宮賜りたまへるを繕ひて住ませたてまつらむ、わがおはします世に、さる方にも、うしろめたからず聞きおき、また、かの大殿も、さ言ふとも、いとおろかにはよも思ひ放ちたまはじ、その心ばへをも見はてむ、と思ほしとりて、朱雀院「さらば、かくものしたるついでに、忌むこと受けたまはむをだに結縁にせむかし」とのたまはず。

(柏木巻④三〇六頁)

朱雀院は、この上なく安心だと思つて源氏に女三の宮を任せたのに、期待ほどではない二人の仲を、これまで伝え聞いていた。この機会に女三の宮が出家すれば、「人笑へ」とはならないだろうし、源氏の後見は、今後も頼りにできそうである。源氏が完全に見限ってしまうことはないだろうと考える。朱雀院は、出家後の女三の宮の後見を重視している。橋本ゆかり氏が述べるように、「朱雀院は世間の《噂》を常に意識し、光源氏は世間の《噂》と朱雀院への《噂》の二重の《噂》に取り囲まれて、それを意識していなければならなかった」⁸⁰。加えて、朱雀院は、源氏が周囲の目を気にしていることも察して、女三の宮の出家を了承する。源氏は朱雀院の前で女三の宮への情の薄さを隠そうとしていたが、他からの噂により、既に朱雀院は知っていた。源氏の体面を取り繕う言動は、よりはつきりと、女三の宮への不理解を映し出す。前章で述べたように、女三の宮にとっては、生まれたばかりの若君を守るための、死ではなく出家という選択であった。この選択は、源氏の後見をあてにする朱雀院の思惑とも一致する。

別れ際の「16」でも、朱雀院は、後の傍線部「さまに従ひて、なほ、思し放つまじく」と、源氏に女三の宮を見捨てぬよう釘を刺している。

〔16〕^{朱雀院}「世の中の、今日か明日かにおぼえはべりしほどに、また知る人もなくてただよはむことのあはれに避りがたうおぼえはべしかば、御本意にはあらざりけめど、かく聞こえて、年ごろは心やすく思ひたまへつるを、もしも生きとまりはべらば、さま異に變りて、人繁き住まひはつきなかるべきを、さるべき山里などにかへ離れたらむありさまも、また、さすがに心細かるべくや。さまに従ひて、なほ、思し放つまじく」など聞こえたまへば、

(柏木卷④三〇九頁)

朱雀院の言葉の初めに、再度これまでの経緯が述べられている。朱雀院は自身の命が危ぶまれた時に、女三の宮を後に残して死ぬことが心配だった。それゆえ、源氏に女三の宮の世話を託したという。この語り始めは、朱雀院が源氏に、女三の宮の後見を頼んだ際の切り出し方と類似する。若菜上巻で、朱雀院は、「今日か明日かとおぼえはべりつつ」(若菜上巻④四六頁)と、出家を決意した心中を語り始める。源氏が朱雀院の出家した姿を見て、涙した直後のことである。

女三の宮の出家の承認において、降嫁の承認と同様の、朱雀院と源氏の対面する舞台が設定される。女三の宮の幸せを思ってきた朱雀院の心情にも、決着をつける。若菜上巻は、「朱雀院の帝、ありし御幸の後、そのころほひより、例ならずなやみわたらせたまふ。」(若菜上巻④一七頁)と、朱雀院の病臥から語り始められていた。全ては朱雀院の心身の衰弱による将来の不安から始まり、女三の宮の出家によって、源氏の後見は確固たるものとなる。こうして、朱雀院父娘の物語は結末を見る。

六 見る光源氏と見られる光源氏

紫の上と時を同じくして、食べる、食べない源氏の状況が語られる。「食」描写から、紫の上に想いを馳せ、同調しようとする源氏の心情が看取される。それに対して、女三の宮が食べない時に源氏は食べ、同調し得ない二人の関係が描かれる。紫の上と女三の宮、それぞれの不調により、源氏は二人の間を行き来する。人々から見られる「食」「不食」という行為が、源氏の行動を操作するためである。また、人々の視線の隙をついて、女三の宮と柏木の密通が起こり、密事露頭を招く。密事露頭という重大事が特定の人物のみに知られることも、「食」が周囲から見られながらも、日常の行為の中に埋没しているためである。

源氏は女三の宮への疎ましい気持ちを抑えがたく思うが、一方で見捨てきれない気持ちも残っている。このよきな源氏の葛藤によって、紫の上の心は源氏から離れていく。源氏は、紫の上と心を通わせようと、離れた場所でも食事をとる。だが、源氏が食べようが食べまいが、紫の上の知るところではない。紫の上を想いながら食べることは、源氏の一方的なエゴに過ぎないのである。

女三の宮を思う源氏の葛藤は、柏木巻でより複雑になる。女三の宮は、出産を機に自身で物を考え行動し始め、出家願望を述べる。源氏は、出家の話を超えようと食事を勧めるが、女三の宮は受け付けない。朱雀院の六条院訪問は、出家を止めることを期待したものだったが、結果的に容認する原因となる。女三の宮が六条院に降嫁することになった根源である、朱雀院と源氏の対面の場をもって、女三の宮の物語に幕が引かれる。源氏の思惑は、完全に朱雀院と女三の宮親子の意向に飲み込まれ、これ以降源氏は、出家した女三の宮を後見する役目を全うするしかない。

「食」に関わる人を見つめる源氏は、同じく「食」を見つめる他の目を意識し、行動が制限されている。ただし、「食」に関わる人を見つめる源氏の姿は、他からも見られている。「食」を隠れ蓑に、源氏の独りよがりな思

惑が漏れ出てきていることを、周囲の視線は見逃さないのである。

注

- ㉔ 森一郎氏『源氏物語の方法』桜楓社 一九六九年六月
- ㉕ 三村友希氏『姫君たちの源氏物語―二人の紫の上―』翰林書房 二〇〇八年十月
- ㉖ 第一部第五章参照。中将の君は、匂宮の姿により、娘の結婚相手の理想像を思い描く。
- ㉗ 末沢明子氏『大堰山荘の強飯』（福岡女学院大学紀要 人文学部編）一八 二〇〇八年二月
- ㉘ 原田信男氏『食事の体系と共食・饗宴』（日本の社会史）第八卷 岩波書店 一九八七年三月
- ㉙ 山田利博氏『負性を帯びた主人公―女三の宮の造型をめぐる―』（源氏物語と平安文学）第三集 早稲田大学出版部 一九九三年五月
- ㉚ 藤井貞和氏『光源氏物語主題論』（源氏物語の始原と現在）冬樹社 一九八〇年五月
- ㉛ 橋本ゆかり氏『光源氏と《山の帝》の会話―女三の宮出家をめぐる―』（源氏物語の〈記憶〉）翰林書房 二〇〇八年四月、初出は『女三の宮の出家をめぐる語らい』（東京女子大学日本文学）七七 一九九二年三月

第四章 中の君の「不食」と述懐

一 中の君についての先行研究と問題提起

宇治十帖は、光源氏の子孫である薫（実は柏木の子）・匂宮と、八の宮の娘である大君・中の君・浮舟が交錯する物語である。薫の思慕を拒否し続け、死に至る大君と、物語最後の女君である浮舟に関しては、これまで様々な方面から考察が進められてきた。他方、中の君に関しては、「紫上と明石君の二番煎じ」であり、構想上の役割も、大君と浮舟をつなぐ橋渡しのもの^①として一蹴されるなど、脇役的な存在として片づけられていた^②。中の君に照明を当てたのが、『紫式部集』と中の君の連関により、「中君の形象は作者の現実の生の内面化」^③であったのではないかとする榎本正純氏の論や、「幸ひ人」の系譜に位置付ける原岡文子氏の論^④である。また、近年では石坂晶子氏によって、中の君の思い悩む様相が詳細に検討されている^⑤。

このような中の君の心情の移り変わりについて、本章では「不食」表現に焦点を当てて考察する。というのも、大君・浮舟と中の君との大きな違いとして、懐妊し、子を儲けることが挙げられる。その懐妊初期に、「不食」表現が三度繰り返し返されている。匂宮と六の君との結婚の話が動き出してから、初めて匂宮が六条院に迎え取られ、その翌日に互って描かれている。その上、「不食」表現の直前には、ある程度まとまった中の君の述懐が語られている。中の君の「不食」表現は悪阻のためであるものの、匂宮の結婚による物思いとも連動し合っている。しかし、「不食」表現が三度描かれた後、出産間近や直後であっても、再び「食」記述が描かれることはない。

本章では、中の君の懐妊初期に、「不食」表現が繰り返し返し描かれる理由を、中の君の心情の変化に注目しながら考察する。また、三度のうち二度の「不食」表現は、周囲（老女房と匂宮）から「見苦し」と思われている。「食」に執着することを憚る『源氏物語』において、中の君の「不食」という行動が、周囲から批判的な評価を受ける

ことについても、併せて考えたい。

二 中の君の懐妊と並行する匂宮の結婚

まず、中の君の懐妊の兆候が、初めて表れる場面を挙げる。

〔1〕さるは、この五月ばかりより、例ならぬさまになやましくしたまふこともありけり。こちたく苦しがりなどはしたまはねど、常よりも物まゐることいとどなく、臥してのみおはするを、(匂宮ハ)まださやうなる人のありさまよくも見知りたまはねば、ただ暑きころなればかくおはするなめりとぞ思したる。さすがにあやしと思しとがむることもありて、^{匂宮}「もし。いかなるぞ。さる人こそ、かやうにはなやむなれ」などのたまふをりもあれど、いと恥づかしくしたまひて、さりげなくのみもてなしたまへるを、さし過ぎ聞こえ出づる人もなければ、たしかにもえ知りたまはず。

(宿木卷⑤三八五頁)

中の君は、五月頃からいつもより食欲がなく、臥せてばかりいる。匂宮は、中の君の懐妊に気づかない。妊婦の症状を疑ってみるが、実際に妊婦を見たことがないため、憶測の範疇を出ない。中の君も周りの女房も懐妊であることを匂宮に明かさない。匂宮は、中の君の懐妊を知る機会を奪われている。なぜ、中の君は懐妊を告げないのだろうか。

これは、「1」の前後に描かれる、匂宮と六の君との縁談が関係していよう。順に並べると、次のように時が明示されている。

右大殿には急ぎたちて、八月ばかりにと聞こえたまひけり。(宿木卷⑤三八三頁)

← 「1」さるは、この五月ばかりより、(宿木卷⑤三八五頁)

← 八月になりぬれば、その日など、外よりぞ伝へ聞きたまふ。(宿木卷⑤三八五頁)

「1」の前には、夕霧が六の君と匂宮の結婚を「八月ばかりに」と進めている。「この五月ばかりより」と遡って、中の君の懐妊の兆候が語られた後、「八月になりぬれば」(三八五頁)とあり、中の君が、匂宮の結婚の日取りを他から聞く、という流れである。匂宮が六条院へ渡る初夜が八月十六日であることは、後の場面からわかる。八月の結婚の話の間に、敢えて五月から続く中の君の体調不良の描写を挟み込むことで、中の君の懐妊による体調不良と、匂宮の結婚を聞いた物思いによる体調不良を連関させているといえる。匂宮は中の君を気遣い、六の君との結婚のことを告げようとしめない。中の君は、他からの噂で聞き、知っている。匂宮の口から語られないことが、余計に中の君を苦しめる。「1」の直前には、匂宮の縁談を聞いた中の君の述懐が長く語られている。次の「2」である。

「2」右大殿(夕霧)には急ぎたちて、八月ばかりにと聞こえたまひけり。二条院の対の御方(中の君)には、聞きたまふに、[Ⓐ]さればよ、いかでかは、数ならぬありさまなめれば、かならず人笑へにうきこと出で来んものぞとは、思ふ思ふ過ぐしつる世ぞかし、あだなる御心と聞きわたりしを、頼もしげなく思ひながら、目に近くては、ことにつらげなることも見えず、あはれに深き契りをのみしたまへるを、にはかに変りたまはんほど、いかがは安き心地はすべからむ、ただ人の仲らひなどのやうに、いとしもなごりなくなどはあらずとも、いかに安げなきこと多からん、[Ⓑ]なほいとうき身なめれば、つひには山住みに還るべきなめり、と思すにも、やがて跡絶えなましよりは、山がつの待ち思はんも人笑へなりかし、かへすがへすも、宮(八の宮)ののたまひおきしことに違ひて草のもとを離れにける心軽さを、恥づかしくもつらくも思ひ

知りたまふ。

◎ 故姫君（大君）の、いとしどけなげにものはかなきさまにのみ何ごとも思しのたまひしかど、心の底のづしやかなるところはこよなくもおはしけるかな、中納言の君の、今に忘るべき世なく嘆きわたりたまふめれど、もし世におはせましかば、またかやうに思すことはありもやせまし、それを、いと深くいかでさはあらじと思ひ入りたまひて、とぎまかうさまにもて離れんことを思して、かたちをも変へてんとしたまひしぞかし、かならずさるさまにてぞおはせまし、今思ふに、いかに重りかなる御心おきてならまし、亡き御影どもも、我をば、いかにこよなきあはつけさと見たまふらん、と恥づかしく悲しく思せど、何かは、かひなきものから、かかる気色をも見えたてまつらんと忍びかへして、聞きも入れぬさまにて過ぐしたまふ。

（宿木卷⑤三八三頁）

匂宮の縁談を聞いた、中の君の心理の流れを見ると、大きく①②③の三つに分けられる。それぞれ次に要約した。

① これまで「人笑へ」になる未来を危惧していたが、対面している時の匂宮は、二人の仲を深く約束してくれていた。急に心変わりされたら、安心してはいられないだろう。

② いずれは宇治に帰らねばならないだろうが、もし戻れば山里の人たちの「人笑へ」になるだろう。故人の宮の遺言通り、宇治から出るべきでなかった。

③ 亡き姉大君が薫を拒み続け、出家をしようとまでしたことは、「重りかなる」英断であった。亡き父や姉は、自分をどんなに軽率だと見ているだろう。

④ ⑤ それぞれに、「人笑へ」の語が見られるように、中の君は常に周囲の物笑いの種になることをひどく恐れていた。④でも、「こよなきあはつけさ」と見られることを想像し、恥ずかしく思っている。ただし、④⑤では気

にする対象が異なる。④では、都に在る、中の君の周囲の人々を気にし、「数ならぬありさま」であることを卑下している。⑤では、宇治に戻ったときの宇治の人々の反応を気にする。⑥では、大君の、生前の深い考えに理解を示し、亡くなった父八の宮や大君が今の自分を見たら「こよなきあはつけさ」と見るだろうと気にする。

中の君は、現在の状況を人に見られ、「人笑へ」となることから逃れるべく、自身をより理解してくれそうな宇治へ、宇治の亡き家族へと、思いを馳せていく。が、宇治の人々や亡き家族からも、軽蔑される考えに陥る。自身の想像の中でも逃げ場がない。結局、共に在る時は優しく接してくれる、匂宮のもとに在る現状から離れられない。匂宮と居続けるため、中の君は、匂宮に自身の気持ちを見せないようにと考える。中の君は、現状を分析し、二手、三手先を想像した上で、「かひなき」と、現状打破できる方法がないことに思い至る。八方ふさがりの状況の中で、いかに現状を生きるか、自身の心を乱さない方法を思案するのである。匂宮に自身の心情を見せないことは、中の君にとって、現時点で最良の処世術であった。

中の君の「思ふ」表現を伴った心中思惟が、懐妊の兆候から出産までの間に繰り返されていることは、石阪晶子氏によって指摘されている。石阪氏は、「ありのままの感情の吐露というよりは、考えを述べているという印象が強く、自分の感じたことを既成の認識を借用することで精一杯割り切ろうとする営みであることがわかるのである。あたかも傷つかない努力をしているかのよう。」と、中の君の思惟の性質を読み解く⁹⁰。これは、大君とは異なる性質であるという。大君は、ひたすら匂宮の不実を恨み抜き、物思いが体調不良へと移行していく。中の君は「思ふ」に逆接を伴ったり「思ひなほ」したりしながら、体調不良が物思いを「規定」していくという。首肯すべき考察である。

中の君は、「2」④で、匂宮が「目に近く」いるときは、薄情な扱いを見せず、普通の夫婦仲と違って「なごりなく」なるようなことはない、信じていた。平気ではいられないと思うが、匂宮との縁が完全に切れてしまふとは考えていない。すぐに人との縁を諦める大君に比べると、中の君は幾分楽観的である。総角巻でも、「たま

さかに対面したまふ時、限りなく深きことを頼め契りたまへれば、さりともこよなうは思し変らじと、おぼつかなきもわりなき障りこそはものしたまふらめと、心の中に思ひ慰めたまふ方あり。」(総角卷⑤二九九頁)、「さばかりところせきまで契りおきたまひしを、さりとも、いとかくてはやまじと思ひなほす心ぞ常にそひける。」(三一四頁)などと、匂宮の宇治への訪れが稀でも、中の君は、対面した時に語る匂宮の約束を、心の慰めにしていく。今回も、匂宮との縁は切れないことを頼りにして、懐妊についても六の君との結婚についても、何事も知らないかのようにやり過ごそうとする。匂宮との仲に波風を立てないことを心がける。匂宮に本心を閉ざすことで、中の君は自身の心の安定を見出そうとするのである。

三 月が回顧させる宇治

次に、中の君の「不食」描写が「3」に現れる。

「3」老人どもなど、「今は入らせたまひね。月見るは忌みはべるものを。あさましく、はかなき御くだものをだに御覧じ入れねば、いかにならせたまはん。あな見苦しや。ゆゆうしう思ひ出でらるることもはべるを、いとこそわりなく」とうち嘆きて、女房「いで、この御事よ。さりとも、かうて、おろかにはよもなりはてさせたまはじ。さ言へど、もとの心ざし深く思ひそめつる仲は、なごりなからぬものぞ」など言ひあへるも、さまざまに聞きにくく、今は、いかにもいかにもかけて言はざらなむ、ただにこそ見めと思さるるは、人には言はせじ、我ひとり恨みきこえんとにやあらむ。女房「いでや、中納言殿のさばかりあはれなる御心深さを」など、その昔の人々は言ひあはせて、「人の御宿世のあやしかりけることよ」と言ひあへり。

(宿木卷⑤四〇四頁)

匂宮が初めて六条院に迎え取られた、八月十六日の夜のことである。匂宮が出かけた後、独り月を眺め続ける中の君に対し、老女房が不吉だと諫めている。その上、「はかなき御くだもの」さえ見ない様子は、「見苦し」とまで言われる。なぜなら、「ゆゆしう思ひ出でらるることもはべる」とあるように、亡き大君を思い出させるからである。大君が「はかなき御くだもの」さえ食べない様子は、二度語られていた。

〔4〕例の、老人出で来て御ありさま聞こゆ。并「そこはかと痛きところもなく、おどろおどろしからぬ御なやみに、物をなむさらに聞こしめさぬ。もとより、人に似たまはずあえかにおはします中に、この宮の御事出で来にし後、いとどもの思したるさまにて、はかなき御くだものだに御覧じ入れざりしつもりにや、あさましく弱くなりたまひて、さらに頼むべくも見えたまはず。世に心憂くはべりける身の命の長さにて、かかることを見たてまつれば、まづいかで先立ちきこえなむと思ひたまへ入りはべり」と言ひもやらず泣くさま、ことわりなり。

(総角卷⑤三一五頁)

〔5〕女房「御心地の重くならせたまひしことも、ただこの宮の御事を、思はずに見たてまつりたまひて、人笑へにいみじと思すめりしを、さすがにかの御方には、かく思ふと知られたてまつらじと、ただ御心ひとつに世を恨みたまふめりしほどに、はかなき御くだものをも聞こしめしふれず、ただ弱りになむ弱らせたまふめりし。うはべには、何ばかりことごとしくもの深げにももてなさせたまはで、下の御心の限りなく、何ごとも思すめりしに、故宮の御戒めにさへ違ひぬることと、あいなう人の御上を思し悩みそめしなり」と聞こえて、をりをりにのたまひしことなど語り出でつつ、誰も誰も泣きまどふこと尽きせず。

(総角卷⑤三三四頁)

〔4〕〔5〕ともに、女房が薫に、大君の重態の様子を説明している場面である。〔5〕は、大君の死後のこと

である。いずれも「はかなき御くだもの」さえ食べなくなったことで、衰弱したと述べる。この前に、両者、「この宮の御事」についての言及がある。つまり、匂宮の中の君に対する粗略な扱いが大君の病状悪化の原因になったというのである。

確かに、大君は、匂宮と中の君の結婚以来、中の君の後見役として心を悩ませてきた。なかなか訪れない匂宮に、中の君以上に苛立ちつつも、中の君を心配させないように平静を装っていた。しかし、紅葉狩のために宇治を訪れた匂宮が、宇治の邸を素通りして都に戻ってしまった一件を機に、大君の嘆きは一層深まり、容態が悪化する。「なほ我だに、さるもの思ひに沈まず、罪などいと深からぬさきに、いかで亡くなりなむ、と思し沈むに、心地もまことに苦しければ、物もつゆばかりまゐらず、ただ亡からむ後のあらましごとを、明け暮れ思ひつづけたまふに、」（総角卷⑤三〇〇頁）と、死を意識し始め、食事もしなくなる。その上、女房たちから、匂宮と六の君の縁談の噂を聞き、いよいよ臥せるようになる。果ては亡くなってしまう。

「5」の女房の言葉には、傍点を付したように、目前の状況から推量したことを表す「めり」が四度使われている。大君の傍で視認してきた女房たちの、なす術のない嘆きが窺える。くだものさえ食べない様子も、視覚的な要素である。だからこそ、中の君のくだものさえ食べない姿が亡き大君と重なり、「見苦し」と感じられる。

中の君は、出かける前の匂宮からも「ひとり月な見たまひそ。」（宿木卷⑤四〇二頁）と言われているが、それでも月を見続ける⁽³⁾。それは、月を見る行為に、忌まわしさとは別の思いを抱いているからではないだろうか。

匂宮は、この日、中の君に知られないように、初めは内裏から六条院へ直接赴こうとしていた。が、中の君と手紙を交わし、一旦二条院に戻る。そして、「よろづに契り慰めて、もろともに月をながめて」（宿木卷⑤四〇二頁）いた。六の君の父である夕霧が、匂宮の訪れが遅いことにやきもきしているよそで、中の君と一緒に月を眺めることは、二人の仲睦まじさ、離れがたさが印象づけられている。しかし、夕霧の使者が訪れて、匂宮を連れて行ってしまふ。中の君は、匂宮が内裏から六条院へ直接向かえば感じることもなかった、見捨てられる事態に

直面する。冷静では居続けられず、匂宮の後ろ姿を見送り、「ともかくも思はねど、ただ枕の浮きぬべき心地すれば、心憂きものは人の心なりけり、と我ながら思ひ知らる。」(宿木巻⑤四〇二頁)と、独り寝を悲しむ涙で枕が浮いてしまうほどの気持ちになる。そして、人の心の情けなき、すなわち匂宮への頼りがたさを思い知る。『岷江入楚』箋注は、「うき物は人の心とは匂宮の只今まてかはるまじきとの契りをしつゝもかくあると思ふ也又それを中の君の我には何とも心にかゝらぬと思へとも枕のうくはかりなるはよく我も心に深く思ふに先は我なから心うきと思ひしると也」と注する。つまり、匂宮が中の君を置いて出かけたことに対し、中の君は何とも思わず冷静を努めていたが、「枕の浮きぬべき心地」がするほど、自身が匂宮を思っていたことを思い知るのである。匂宮に心を閉ざしておこうと判断した中の君の気持ちは、涙とともに溢れてくる。

そこで、改めて、中の君の長い述懐が語られる。「2」の述懐で下した判断の、再検討を行うかのようである。

「6」^④ ⁱ 幼きほどより、心細くあはれなる身どもにて、世の中を思ひとどめたるさまにもおはせざりし人—
 ところを頼みきこえさせて、さる山里に年経しかど、^④ ⁱⁱ いつとなくつれづれにすぐありながら、いと
 かく心にしみて世をうきものとも思はざりしに、^⑤ ⁱ うちつづきあさましき御事どもを思ひしほどは、世
 にまたとまりて片時経べくもおぼえず、恋しく悲しきことのたぐひあらじと思ひしを、^⑥ ⁱⁱ 命長くて今ま
 でもながらふれば、人の思ひたりしほどよりは、人にもなるやうなるありさまを、長かるべきこととは思
 はねど、見るかぎりは憎げなき御心ばえもてなしなるにやうやう思ふこと薄らぎてありつるを、^⑦ ⁱ この
 ふしの身のうき、はた、言はん方なく、限りとおぼゆるわざなりけり、ひたすら世に亡くなりたまひにし
 人々よりは、さりととも、これは、時々もなかはとも思ふべきを、今宵かく見棄てて出でたまふつらさ、
 来し方行く先みなかき乱り、心細くいみじきが、わが心ながら思ひやる方なく心憂くもあるかな、^⑧ ⁱⁱ お
 のづからながらへば、など慰めんことを思ふに、さらに姨捨山の月澄みのぼりて、夜更くるままによるづ
 思ひ乱れたまふ。^⑩ 松風の吹き来る音も、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、いとどのどかになつか

しくめやすき御住まひなれど、今宵はさもおぼえず、椎の葉の音には劣りて思ほゆ。

中の君 山里の松のかげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

来し方忘れにけるにやあらむ。

(宿木卷⑤四〇三頁)

この述懐を、④世間から顧みられない幼い頃、⑧八の宮・大君に死に後れた経験、⑨現時点、の大きく三つに分けた。⑩については後述する。中の君は、現在の「枕の浮きぬべき心地」(四〇二頁)を何とか慰めようと、過去のつらい時期④⑧を回顧し、比較して考える。それぞれは、i 当時の心境、ii 時間経過後の心境に分けられる。

④では、i 「心細くあはれなる身」で世間に執着のない八の宮一人を頼りにして山里で生きてきたが、ii 所在なく物寂しい暮らしの中にも、今のように心にしみて世の中をつらいものとは思わなかった、とある。⑧では、i この上ない悲しみから生きていられそうもなく思っていたが、ii 他人が考えていたよりも人並の暮らしをしていた、匂宮も一緒にいる時は優しく接してくれ、悲しみも薄らいできていた、とある。⑨において、中の君の目の前から、匂宮が立ち去るといふ事態に遭遇する。i 亡き八の宮や大君に比べれば、匂宮は生きている人だから、時々でも会えるだろうと思うものの、今夜このように見捨てて出て行ってしまうつらさを思うと、過去も未来も混沌として、自分の気持ちの收拾がつかず、「心憂く」思われる。ii 「おのづからならへば」と、今後生き長らえた未来に託してみるが、慰めがたい比喻である「姨捨山の月澄みのぼりて」とあるように、中の君は自身の心を慰めようがない^⑩。つまり、④では「心細」かったが、現状ほどではない、⑧ではこの上ない悲しみだったが、匂宮がいたお蔭で悲しみが薄らいできたという。中の君のこれまでの苦痛は、時間の経過とともに、慰められてきた。しかし、⑨で慰められたのは、匂宮の存在ゆえである。当の匂宮に見捨てられるという状況に置かれて、自身の心を慰める術は見つからない。

中の君は、「夜更くるままによろづ思ひ乱れ」、⑩で、二条院での現状と宇治を比較する。二条院はたいそうの

どかで親しみやすく感じのよい住まいだが、今夜はそうは思われぬ。宇治の「椎の葉の音」には劣っているように感じられるといい、「山里の：」歌を独詠する。宇治でこれほど身にしみるような経験はなかったという。「松」には「待つ」が、「秋」には「飽き」が掛けられている。田中仁氏が述べるように、「山里の松のかげ」とは、「宇治で句宮を待っていた頃」^㉔を指すのだろう。その時と比べての悲しさを強調する。ただし、その時とは、まだ大君が存命していた頃である。中の君は、幼い頃に遡って順に回想してきて、句宮に見捨てられたことにより、^㉕だけでなく^㉖も慰めがたいものとなる。「ひたすら世に亡くなりたまひにし人々よりは」と、句宮が生きて会える存在であることによって慰められてきた気持ちが霧散する。^㉗ iに「来し方行く先みなかき乱り」とあるように、中の君の中で、過去・現在・未来が混濁するようである。そのため、^㉘ iiにしか頼り所がなくなり、八の宮・大君の死の現実を差し引いて、宇治への回帰願望が強くなる。

老女房たちは、月を見続ける行為に不吉なものを感じるが、中の君は宇治への想いを月に託しているのだろう。中の君は上京する途次、二月七日の月を見て、「ながむれば山より出でて行く月も世にすみわびて山にこそ入れ」（早蕨巻^㉙三六四頁）と詠んでいた。山から出てまた入っていく月に自身を重ね、宇治に戻る行く末を思う。「6」^㉚ iiで、「姨捨山の月」が上り、「夜更くるままに」思い乱れているのは、句宮に捨てられたことの慰めがたさというとともに、月が中の君の回帰願望を掻き立てるためである。

句宮が宇治を訪れたとき、月末月初であったり、時雨や雪が降っていたりと、月は一切描かれなかった。中の君が訪れない句宮を思っている時にも同様で、描かれない。宇治で中の君に関して月が描かれるのは、大君と二人で見ている時である。橋姫巻の月夜（^㉛一三九頁）や、椎本巻の「有明の月」（^㉜一八八頁）の折である。椎本巻の場合は、この明け方に八の宮の逝去が伝えられている。大君との楽しいばかりの思い出とはいえないが、大君と慎ましやかに暮らしていた頃が回顧される。中の君の「山里の：」歌に対し、草子地として「来し方忘れにけるにやあらむ。」と評している。句宮を待っていた頃という意味でも、月を眺めるといいう意味でも、中の君の

心は大君の生前にまで遡っている。

しかし、「3」の老女房の言葉により、中の君は現実には引き戻される。「はかなき御くだもの」さえ食べないことは、大君の死と、その要因が匂宮であったことを思い出させる。しかも、大君の「不食」状態が死につながったのに対し、中の君は懐妊のためである。匂宮との関係がより強く意識せられ、八の宮の遺言に背いて宇治を離れた愚かさがのしかかってくる。中の君は、匂宮に見捨てられても、二人を結ぶ要素をお腹の中に宿しているのである。女房は、「さ言へど、もとの心ざし深く思ひそめつる仲は、なごりなからぬものぞ」（宿木巻⑤四〇四頁）などと言いつけている。「なごりなからぬ」とは、今までの関係がきれいさっぱり切れてしまうことはない、ということである。中の君を慰めるためであろう。しかし、中の君と匂宮の仲が「なごりなく」ならないことは、「2」④において、「ただ人の仲らひなどのやうに、いとしもなごりなくなどはあらずとも、いかに安げなきこと多からん」（宿木巻⑤三八三頁）と、既に自身で考慮していた。つまり、「もとの心ざし深く思ひそめつる仲」というよりは、匂宮が普通の身分の人でないことに、中の君との関係が切れない要因を見出している。匂宮との仲が完全に断たれてしまわないことは、女房たちに言われるまでもない。ただし、匂宮の心情に担保したものでないものである。

女房たちが「言ひあふ」姿は、この場面に三度描かれている。大君や薫の話題を俎上に載せていることから、宇治から中の君についてきた女房たちなのだろう。中の君はそれらとは相容れず、孤立している。もとは宇治の人であった女房たちと共感し合えないことで、宇治への回帰願望は抑えられる。中の君は、匂宮が不在の中で、匂宮と関係し続けるしかないことを改めて認識する。

四 「見苦し」と思われる行動と心理

中の君の三つ目の「不食」表現は、次の〔7〕である。

〔7〕宮は、常よりもあはれに、うちとけたるさまにもてなしたまひて、句宮「むげに物まるらざるこそ、いとあしけれ」とて、よしある御くだもの召し寄せ、また、さるべき人召して、ことさらに調ぜさせなどしつづ、句宮「見苦しきわざかな」と嘆ききこえたまふに、暮れぬれば、夕つ方寝殿へ渡りたまひぬ。

(宿木卷⑤四一二頁)

句宮が初めて六の君のもとで一夜を過ごした翌朝、二条院に戻った後のことである。句宮は中の君が食事しないことを咎める。「よしある御くだもの」を取り寄せ、調理人を呼んで調理をさせる。だが、中の君は「いと遙か
にのみ思したれば」と、句宮の勧めを拒否する。句宮は、中の君の態度に、「見苦しきわざ」と閉口し、六の君のもとへ渡る準備のため、寝殿に渡る。

まず、句宮が「見苦し」と嘆くことに注目しよう。句宮から「見苦し」と思われることは、〔7〕より前の場面でも見られた。

〔8〕宮も、なまはしたなきに、こまやかなることなどは、ふともえ言ひ出でたまはぬ面隠しにや、句宮「などかくのみなやましげなる御気色ならむ。暑きほどのこととかのたまひしかば、いつしかと涼しきほど待ち出でたるも、なほはればれしからぬは、見苦しきわざかな。さまさまにせさすることも、あやしく験なき心地こそすれ。さはありとも、修法はまた延べてこそはよからめ。験あらむ僧をがな。なにがし僧都をぞ、夜居にさぶらはすべかりける」などやうなるまめことをのたまへば、

(宿木卷⑤四〇七頁)

匂宮が二条院に帰邸し、中の君のもとに渡った直後のことである。中の君の泣き腫らしたように赤らんだ顔、その顔を恥ずかしそうに隠す姿に、匂宮は見惚れるが、昨夜独り寝を強いた後ろめたさもあり、いつものように語らうことはできない。「こまやかなること」、すなわち、第一節で挙げた「契り」のような情愛深い言葉は言い出せず、体調の心配、祈禱の手配などのような「まめごと」を語る。

「まめ」は薫に多く見られ、特に宇治の姫君たちへの実務的な対応、下心を露呈させない実直な性格を表すのに用いられている。匂宮の場合、宇治の人々と関わり始めた頃は、「まめ」「まめやかに」「まめまめしき」には、打消の語を伴っている。例えば、中の君や弁の君からは、匂宮の態度が、それほど本気の付き合いではないと考えられていた（椎本巻⑤一八四頁・総角巻⑤二二〇頁）。本当に中の君に心惹かれていた旨を、薫に訴えるときには、「いとまめやかに」（総角巻⑤二六一頁）話している。これは、薫から「例の、軽らかなる御心ざま」（同）を懸念され、普段とは異なり誠意を見せるためである。紅葉狩の折には、「をかしやかなることなく、いとまめだちて、思しけることどもをこまごまと書きつづけたまへれど、」（総角巻⑤二九四頁）と、慌ただしい中で宇治の邸を訪れられない思いの丈を、真剣に細々と書き送っている。通常なら「をかしやか」に綴るが、それができない状況であり、匂宮の普段の性質とは異なることがわかる。また、薫と中の君の仲を疑う匂宮は、中の君のよそよそしさを「まめやかに恨みられて」（宿木巻⑤四六七頁）いる。つまり、普段「まめ」な性質ではない匂宮は、自身の不誠実が表面化し、それを取り繕う余裕もない場面で、「まめやか」さを示している。それは飾った言葉ではなく、匂宮の直截な心情が優先される。「8」の匂宮の言葉も、涼しくなってもまだ復調しない中の君の体調を気遣うよりも、中の君の体調不良を「見苦しきわざ」とし、祈禱の効験がないことを慮るものである。

そもそも、「見苦し」とは、「苦し」に「見」が上接し、視覚的な要素を含む。目に見える状況をつらいと思う心情である。『源氏物語』中の用例を確認すると、「見苦し」は七八例（動詞「見苦しがる」一例、形容動詞「見苦しげなり」一例、名詞「見苦しき」二例を含む）ある。うち、第三部が四六例で、全体の約五九パーセントを

占める。『源氏物語』では、「人目も見苦しう、」（賢木卷②八六頁）や「世に浮きたるやうにて見苦しかりつる」（藤裏葉卷③四五三頁）、「人笑へに見苦しきことそひて、」（総角卷⑤二七二頁）など、世間の目を「見苦し」の評価基準に据えていることが多く見られる。主観的な感情だけではなく、独身や田舎で落ちぶれたような境遇、色恋沙汰に関する行動、身分や年齢など、貴族的な社会規範にふさわしくない行動や境遇が、語り手や作中人物の目に映ることで、「見苦し」と捉えられているのである¹⁰⁰。

「8」の「見苦し」については、『新編全集』頭注が「世間体の悪さをいう。中の君の病気は宮の結婚に原因する、とでも噂されるのを懸念。」と注している。匂宮が中の君をないがしろにしているから、中の君の体調がなかなか良くならないのだと、周囲や世間から思われることを、匂宮は考える。そのため、「まめごと」を述べ、中の君を見ていてつらいという心情を露呈させている。

匂宮が「見苦し」と思う場面は、もう一例東屋巻にある。匂宮は、タイミング悪く、中の君の洗髪中に訪れたことを「見苦し」という。

「9」夕つ方、宮こなたに渡らせたまへれば、女君は御泔のほどなりけり。人々もおのおのうち休みなどして、御前には人もなし。小さき童のあるして、匂宮「をりあしき御泔のほどこそ、見苦しかめれ。さうざうしくてやながめん」と聞こえたまへば、

（東屋巻⑥五九頁）

匂宮は、このような間の悪さのために、手持ち無沙汰にしていなければならないことが堪えられない。うろうろ歩き回っていると、偶然浮舟を見つけて言い寄る。つまり、匂宮は、他者の行動によって自身の行動が抑制される状態の継続を気まずく思い、「見苦し」い状況の打開を図ろうとする。

実は、『源氏物語』中の「見苦し」の用例で、最も「見苦し」と思われている人物は匂宮である。匂宮は、中の君や明石中宮、右近や時方ら様々な人物から、好色の性格を「見苦し」と捉えられている。多くは浮舟との密通

に関わる。匂宮の度を越えた好色心が、人々の目に映り不快に思われている。そのような周りの評価に、匂宮はあまり左右されない。自身の物差しで能動的に動く自由奔放な性質こそが、匂宮の特性でもあるのだろう。

だからこそ、匂宮が中の君に求める行動と、中の君が匂宮を思つて取る行動に齟齬が生じてくる。ここで、「8」とその後の「7」を比較して、二人の心情の差異を確認してみよう。「8」と「7」は共に、匂宮が六条院に初めて迎え取られた翌朝、二条院の中の君を訪れた折のことである。匂宮は、体調不良の中の君を話題にして気遣い、中の君の反応に「見苦し」と述べる点でも共通する。異なる点としては、匂宮が「見苦し」と思うに至る中の君の態度、「見苦し」と言った後の匂宮の対応の二点が挙げられる。

「8」の直前に、夜離れの悲しみを匂宮に気づかれることを恥じらう中の君の様子が、ほのかに察せられる。中の君の体調を心配した匂宮に対し、中の君は昔から体が弱いが、自然と治るものだと答える。懐妊を打ち明けられるわけではないが、匂宮を心配させまいとする気遣いが見える。また、匂宮と対話し、「今日は泣きたまひぬ。」(四〇八頁)、「すこしほほ笑みぬ。」(四〇九頁)などと、これまで抑圧してきた感情を溢れさせている⁽²⁾。

このような中の君の態度に対し、匂宮は中の君の「なつかしく愛敬づきたる方はこれに並ぶ人はあらしかし」(四〇八頁)と、中の君の親しみやすさを最大限に評価する。中の君のもとに渡つてすぐは気恥ずかしさから「まめごと」(四〇七頁)でしのいでいたが、「後の世まで誓ひ頼めたまふことども」(四〇八頁)を数々語るようになる。同時に、六の君に逢いたい気持ちも湧き起こってきているが、中の君には感づかせない。中の君は、匂宮の言葉を信頼し切ることではできないながらも、「後の契りや違はぬこともあらむと思ふにこそ、なほこりずまにまたも頼まれぬべけれ」(同)と、後世の契りだけでも守ってくれるだろうか、性懲りもなく頼りに思っている。「6」◎の述懐で見つからなかった慰めが、後の世に見つかるのである。

一方の「7」においては、中の君は、ただ「いと遙かにのみ思したれば」とあり、匂宮が勧めた食事を頑なに拒んでいる。中の君に拒絶され、匂宮は「見苦しきわざかな」と述べた後、寝殿へ渡る。「暮れぬれば、夕つ方」

とあるように、時間の経過はあるものの、その間に何の会話も描かれない。「8」で溢れていた二人の感情は、「7」では交わろうとしないのである。

では、なぜ中の君にこのような態度の違いが現れたのだろうか。それは、「8」と「7」の間に、六条院から後朝の文の返事が届くためである。酔っぱらった文使いの気の利かない行動のせいで、匂宮は、中の君の面前でその返事を見る羽目になる。六の君本人からでなく、落葉の宮の代筆であったことがせめてもの救いだ、六条院から帰邸した以上のばつの悪さが漂う。だからこそ、「7」で匂宮は中の君に食事を勧める。食事を勧める行為が話題を逸らすために行われている例は、第一部第三章で光源氏について述べた。匂宮も同様に、気まずい話題を逸らすために、「常よりもあはれに、うちとけたるさまに」、食事を勧める。

中の君は、匂宮が二条院に帰ってから、すぐに自分のもとに渡ったわけではなく、真っ先に後朝の文を書き送っていたことが考え合わされる。昨夜に引き続き、目の前で六の君を優先され、再度見捨てられた気持ちになる。「7」の直前に、中の君の述懐が語られている。

「10」かかる道を、いかなれば浅からず人の思ふらんと、昔物語などを見るにも、人の上にて、あやしく聞き思ひしは、げにおろかなるまじきわざなりけり、とわが身になりてぞ、何ごとも思ひ知られたまひける。

(宿木卷⑤四一二頁)

「10」では、これまで中の君は、昔物語や他人の話で男女が思い悩むのを見て、いぶかしく思っていたが、自身に降りかかって、ようやくそのつらさを理解したという。中の君は、これまでの述懐やその直前でも、その都度、自身の境遇を「思ひ知」ってきた。「2」⑧の波線部に自身が宇治を出て来た軽率さを「恥づかしくもつらくも思ひ知りたまふ。」(宿木卷⑤三八四頁)とあり、「6」の直前にも「心憂きものは人の心なりけり、と我ながら思ひ知らる。」(宿木卷⑤四〇二頁)とあった。「10」では「何ごとも」とあり、中の君の苦悩は頂点に達する。

これまでの述懐、「2」や「6」に比べると、「10」は短い。「10」の直前には、寧ろ語り手の評言が、長々と綴られている。匂宮が妻を複数持つのは非難されることではなく、世の人は、中の君が重々しく扱われていることを、幸運と思いきそすれ、同情する人はいないという。語り手が「中の君との間に距離を置き、どこか皮肉な批判的なまなざしで中の君の苦悩に対してしている」⁽²⁾ことは、原岡文子氏が「3」や「6」①の語り手の評言を取り上げて述べている。「10」の直前の地の文は、さらに言葉を費やして、中の君に距離をとる。中の君は、匂宮からも、周囲の女房や語り手からも孤立してゆくことで、「何ごとも思ひ知り、再度感情を殺す。今度は何事もなないように振る舞うことさえせず、匂宮の勧めを拒むのだろう。

その上、匂宮が食事を勧めることで、別のことが思い出される。かつて宇治で、中の君が匂宮を待っていた頃、紅葉狩に訪れた匂宮が、宇治の邸を素通りして帰ったことである。

「11」かしこには、^薫論なく中宿したまはむを、さるべきさまに思せ。さきの春も、花見に尋ね参り来しこれかれ、かかるたよりに事寄せて、時雨の紛れに見たてまつりあらはすやうもぞはべる」など、こまやかに聞こえたまへり。御簾かけかへ、ここかしこかき払ひ、岩隠れに積もれる紅葉の朽葉すこしはるけ、遣水の水草払はせなどぞしたまふ。よしあるくだもの、肴など、さるべき人なども奉れたまへり。かつはゆかしげなけれど、いかがはせむ、これもさるべきにこそはと思ひゆるして、心まうけたまへり。

(総角卷⑤二九二頁)

もともと紅葉狩は、匂宮が中の君に逢いに来る口実であった。薫もそれを承知の上で、率先して宇治の邸でもてなしの準備をさせる。「よしあるくだもの」「肴」、調理人なども手配する。「よしあるくだもの」と調理人まで呼ぶ点で、「7」と共通する。「よしある」が「くだもの」(食べ物)を修飾する例、もてなしの準備に調理人を手配する例は、それぞれ「7」と「10」の二場面だけである。匂宮がこの時準備していた物を知る由はないだろうが、中の君にとっては苦々しい思い出であろう。これほどの歓待の準備をしていながら、匂宮は、明石中宮の

命により参上した夕霧の子息など、多くの従者の目を忍ぶことができず、宇治の邸を素通りして帰京する。この一件で、大君は重態に陥り、その後亡くなってしまふ。

当時の中の君は、匂宮が来ないことを、何か理由があるのだろうと、自身の心を何とか慰めようとしていた。しかし、大君は亡くなり、慰められない日々が続いた。自身の面前で、六条院からの返事を読む匂宮を見て、中の君は夫婦仲の難しさを「何ごとも」思い知る。しかし、匂宮はいまだに食欲不振の理由に気づかず、食事を勧めてくる。つまり、「食」を勧めることで、中の君への不理解を如実に映し出している。

それゆえ、中の君は、匂宮が勧めた食べ物に対し、「いと遙かにのみ」思う。「遙かに」の本来的な意味としては、遠く隔たっていることをいう。形容動詞「はるかなり」は『源氏物語』中に五五例あり、大きく空間的、時間的、心理的な隔たりを述べる時に使われている。和歌中にも六例見られ、空間・時間・心理のうち二つ以上の意味が重ねられることもある。「7」と同様に、食事の拒否において「はるかに」が使われている例としては、桐壺更衣の死を嘆く桐壺帝の様子がある。

「12」ものなどもきこしめさず、朝餉のけしきばかりふれさせたまひて、大床子の御膳などは、いとほるかに思しめしたれば、陪膳にさぶらふかぎりは、心苦しき御気色を見たてまつり嘆く。

(桐壺卷①三六頁)

食事を拒否し続ける桐壺帝の様子が「もの」「朝餉」「大床子の御膳」という三様の形で語られている。その中でも、「大床子の御膳」は、清涼殿の母屋の大床子に着座し食する正式な食事である。単に「きこしめさず」と食べないことを述べたり、「けしきばかりふれさせたまひて」と消極的な姿勢を示したりするのではなく、心理的に遠くに思われることをいう。古川美知代氏のように、「意図的かつ積極的な職務放棄の実行」⁽²³⁾、ひいては桐壺朝の「廢朝」の一環と捉える向きもある。確かに、帝としての立場ゆえ、桐壺更衣を死に至らしめたという負い目はあるのだろう。帝ゆえの「大床子の御膳」は、最も避けたく思われ、桐壺更衣を偲ぶ。

〔7〕でも同様に、心理的に遠く離れた所に思いを馳せているため、匂宮が勧める食事や匂宮自身を拒む。その心理的な遠くには、大君生前の遙か過去が思い出されているのではないだろうか。「遙かにのみ」とあることで、中の君の拒否の感情がより強調されている。

匂宮が中の君の部屋を退出し、中の君の宇治への帰郷願望は強くなる。中の君は、「おほかたに：」歌を独詠する。

〔13〕風涼しく、おほかたの空をかしきころなるに、いまめかしきにすすみたまへる御心なれば、いとどしく艶なるに、もの思はしき人（中ノ君）の御心の中は、よろづに忍びがたきことのみぞ多かりける。蝸の鳴く声に、山の蔭のみ恋しくて、

中の君 おほかたに聞かましものをひぐらしの声うらめしき秋の暮かな

今宵は、まだ更けぬに出でたまふなり。御前駆の声の遠くなるままに、海人も釣すばかりになるも、我ながら憎き心かなと、思ふ思ふ聞き臥したまへり。はじめよりの思はせたまひしありさまなどを思ひ出づるも、疎ましきまでおぼゆ。このなやましきこともいかならんとすらむ、いみじく命短き族なれば、かやうならんついでにもや、はかなくなりなむとすらん、と思ふには、惜しからねど、悲しくもあり、また、いと罪深くもあなるものを、など、まどろまれぬままに思ひ明かしたまふ。

（宿木卷⑤四一二頁）

蝸の鳴く声から「山の蔭」、すなわち宇治の邸のことが恋しく思われている。中の君の独詠歌は、宇治にいたら何気なく聞いていたであろう蝸の鳴き声が、京にいる今恨めしく聞こえるというものである。「秋」は「飽き」との掛詞で、匂宮の気持ち六の君に移っていることを指す。「聞かましものを」と反実仮想が使われているように、宇治で暮らし続けていたらと想像せずにはいられないものの、現実には都にいる自分を理解している。

中の君の嘆きをよそに、「御前駆の声」が遠くなっていく様子、つまり匂宮が六の君のもとに出かけていく音が

聞こえる。紅葉狩の折も、「かしこには、過ぎたまひぬるけはひを、遠くなるまで聞こゆる前駆の声々、ただなら
ずおぼえたまふ。」（総角巻⑤二九八頁）と、同様の描写があった。大君はこのことで匂宮を深く恨み、妹婿に迎
えたことを後悔する。「13」でも、匂宮と結婚した当初から物思いに悩まされ、今また見捨てられるつらさを疎
ましく思う中の君の様子が語られている。しかし、中の君が「我ながら憎き心かな」と考えているように、中の
君の中で、匂宮への執着もまだ消えていない。しかも、中の君は匂宮の子を身籠っている。妊娠を「このなやま
しきこと」と形容するが、中の君は簡単に匂宮と関係を断つことはできない。お産のついでに死ぬことも考える
が、悲しみと罪深さに思い悩み、中の君の考えは堂々巡りする。

「見苦し」と思われる中の君の行動は、宿木巻に三度繰り返されていた。「3」で老女房から「見苦し」と言
われていることは、匂宮が出かける前、一人で月を見ないよう言い置いていったことにつながるもので、匂宮の
代弁とも取れる。中の君は、自身の目の前から匂宮が去っていく事態に直面することで、匂宮への苦悩を抑制し、
心の安定を図ろうとする。中の君の対処は、匂宮の不在の折、目の前で体調不良が続く姿を見せていること、匂
宮の勧めを直接拒絶すること、と三様であるが、だんだん匂宮に対する拒絶の意思が直接的なものになっている。
一方の匂宮は、中の君の「なつかしく、愛敬づ」く様子に愛しさを感じる。そのため、自身を寄せ付けず、思い
通りにならない中の君を「見苦し」と思う。拒絶が強くなる中の君の行動は、目に見えて「見苦し」さが増して
いるように感じられる。中の君は、匂宮との関係を保つために心を閉ざすが、逆にその行動が、匂宮の心を離れ
させているのである。また、中の君は匂宮に見捨てられ、思惟するたびに、宇治への帰郷願望が高まる。ただし、
八の宮の遺言に背き、宇治を捨てて上京してきた現状、匂宮の子を宿しているという事実に思い当たり、結局考
えはまとまらない。中の君は、現状への苦悩を噛み殺し、匂宮の様子を見続けるしかない。

五 匂宮と中の君の関係の変化

三度の「不食」表現の後、中の君が食べない姿は描かれない。匂宮は二日目、三日目と六条院に通い、三日夜の儀が催される。詳細に「食」の記述があり、盛儀を物語る。

〔14〕宵すこし過ぐるほどに（匂宮へ）おはしましたり。寝殿の南の廂、東によりて御座まゐれり。御台八つ、例の御皿などうるはしげにきよらにて、また小さき台二つに、華足の皿どもいまめかしくせさせたまひて、餅まゐらせたまへり。めづらしからぬこと書きおくこそ憎けれ。（中略）

からうじて出でたまへる御さま、いと見るかひある心地す。主の頭中将、盃ささげて御台まゐる。次々の御土器、二たび、三たびまゐりたまふ。中納言（薫）のいたくすすめたまへるに、宮すこしほほ笑みたまへり。

（宿木卷⑤四一四頁）

この場面は、中嶋朋恵氏により、『花鳥余情』が挙げる『吏部王記』の記述と詳細に比較検証され、『吏部王記』に添って描いたことが指摘されている⁽⁴⁾。この『吏部王記』の記事には、「饌」「菓子」「酒」のような具体的な食べ物も記されている。しかし、「14」では、「餅」以外の「食」描写は、食べ物でなく食器が描かれているだけである。二日夜の儀のメインである餅を強調する意図があるのではないだろうか。また、この場には薫も出席し、匂宮にしきりに酒を勧めている。匂宮は苦笑する。薫の態度に、中の君のことで含みを感じるからだろう。

このような賑やかな三日夜の儀に対し、中の君の心情は語られない。ただ、盛大に行われれば行われるほど、「不食」状態が続く中の君の苦悩が深まることは、想像に難くない。

加えて、匂宮と中の君の三日夜の儀が対照的に思い返される。中の君の婚儀は、「三日に当る夜、餅なむまゐる」（総角卷⑤二七四頁）と、大君が女房たちから促され、三日夜の儀の経験がなく恥ずかしく思いながらも準備を

する。薫が衣などを送ってよすがが、薫本人は来ない。その上、匂宮は内裏で足止めされて、「夜半近くなりて」（二七九頁）ようやく到着する。六の君との婚儀のため、前日よりもさらに早く、「宵すこし過ぐるほどに」六条院にやって来た対応とは大きく異なる。

匂宮は、そのまま二条院への訪れが絶える。中の君の心中思惟が語られる。

〔15〕かくて後、二条院に、え心やすく渡りたまはず。軽らかなる御身ならねば、思すままに昼のほどなどもえ出でたまはねば、やがて、同じ南の町に、年ごろありしやうにおはしまして、暮るれば、また、えひき避きても渡りたまはずなどして、待ち遠なるをりをりあるを、かからんとすることと思ひしかど、さしあたりては、いとかくやはなごりなかるべき、げに、心あらむ人は、数ならぬ身を知らでまじらふべき世にもあらざりけり、とかへすがへすも、山路分け出でけんほど、現ともおぼえず悔しく悲しければ、なほ、いかで忍びて渡りなむ、むげに背くさまにはあらずとも、しばし心をも慰めばや、憎げにもてなしなどせばこそ、うたてもあらめ、など心ひとつに思ひあまりて、恥づかしけれど、中納言殿に文奉れたまふ。

（宿木卷⑤四二二頁）

匂宮の訪れが絶えることは覚悟していたが、さしあたっては、「なごりなかるべき」状態になるとは思っていなかったとする。「2」「3」では、「なごりなく」なるとは思っていなかったが、「15」では、反語によって、実際に訪れが途絶えてしまったことを示す。中の君は宇治を出てきてしまったことを改めて後悔し、これまで以上に宇治への回帰願望が高まる。匂宮に背くわけではないと断っているところから、まだ完全に匂宮への執着を捨てたわけではないことがわかる。だが、「心をも慰めばや」と、二条院にいては、もはや自身の心を慰められないことを示す。そこで、薫に文を送り、対面して、宇治へ連れて行ってほしい旨を願う。

ただし、薫に対面し、薫のあやくな心を知ったことで、中の君は薫を頼つての宇治帰郷を断念せざるを得なくなる。薫は中の君に迫るが、匂宮とのつながりを示す「腰のしるし」（宿木卷⑤四二九頁）、つまり妊婦である

ことを示す腹帯を目にし、思い止まる。大津直子氏が「薫の接近は、彼女に夫の不在という日々への不安を抱かせ、暮らしの安定といういわゆる世俗的幸福の希求へと向かわせた。薫と距離を取るからこそ、父八の宮や姉大君そして宇治の地への思慕の念を帰結させ、都における匂宮との生活を決心させた要因といえよう。」⁽⁵⁾と述べるように、腹帯の存在が明かされることによって、中の君は匂宮との仲を取り戻そうとし始める。匂宮への心を閉ざし、心の安定を図ることを優先する考えを改め、久しぶりに匂宮が訪れた際、「消えせぬほどはあるにまかせておいらかならんと思ひはてて、いとらうたげに、うつくしきさまにもてなしてゐたまへれば、」^(四三三頁)と、匂宮に対して穏やかに振る舞う。一方の匂宮は、中の君の態度を嬉しく思い、ようやく懐妊を知る。お腹がふつくらし、「しるしの帯」(同)が結われていることに感慨深く思っている。

同時に、腹帯に沁み込んだ薫の匂いによって、匂宮は、薫と中の君との仲を疑う。疑念が中の君への執着を強める。翌朝の匂宮と、匂宮が見た中の君の様子が次のように描かれている。

「16」またの日も、心のどかに大殿籠り起きて、御手水、御粥などもこなたにまゐらす。(六条院ノ)御しつらひなども、さばかり輝くばかり高麗、唐土の錦、綾をたち重ねたる(匂宮ノ)目うつしには、世の常にうち馴れたる心地して、人々の姿も、萎えばみたるうちまじりなどして、いと静かに見まはさる。君(中の君)はなよやかなる薄色どもに、撫子の細長重ねて、うち乱れたまへる御さまの、何ごともいとうるはしくことごとしきまで盛りなる人(六の君)の御装ひ、何くれに思ひくらぶれど、(中ノ君ハ)け劣りてもおぼえず、なつかしくをかしきも、心ざしのおろかならぬに恥なきなめりかし。まろにうつくしく肥えたりし人(中の君)の、すこし細やぎたるに、色はいよいよ白くなりて、あてにをかしげなり。かかる御移り香などのいちじるからぬをりだに、愛敬づきらうたきところなどの、なほ人には多くまさりて思さるるままには、

(宿木卷⑤四三六頁)

匂宮は中の君の部屋に「御手水、御粥」を用意させる。通常夫婦は別々の部屋でとる食事を、「こなたに」準備させている。長時間中の君と共にいたいという、匂宮の愛情の表れであろう。そして、匂宮は六条院の様子と二条院を比べ、中の君の美しい姿に目がいく。破線部「目うつし」「見まはさる」などとあることから、「君はなよやかなる」以降の描写は、匂宮の目を通した中の君の姿であろう。衣の襲、雰囲気、体型、肌の色など、事細かに語られていることから、匂宮の中の君への強い関心が窺える。中の君の「食」については語られないが、拒否したとも書かれていない。匂宮は中の君に食事を勧めるのではなく、自身が中の君の部屋で食事する。それにより、これまで匂宮が理解してこなかった中の君の「不食」とは異なった形で、二人の仲を描き出すのだろう。

六 中の君の心の安定

中の君は、匂宮と六の君の結婚を聞き、苦悩する本心を閉ざすことで、自身の心を慰めようとする。しかし、匂宮は、中の君の親しみやすさや可憐さに惹かれている。中の君の行動は逆効果に働く。匂宮は、六の君との関係を重視するようになる。

中の君の悪阻による体調不良、「不食」描写が描かれることで、その様子を見られながらも理解されないことが確認できる。中の君自身も事情を打ち明けられない。匂宮に目の前から去られることで、見捨てられる経験を味わい、ますます匂宮への拒絶を深める。中の君はこの悪循環が、中の君に宇治への想いを強くし、薫に帰郷を願い出るまでに至る。だが、匂宮と中の君を結ぶ腹帯が歯止めとなる。中の君の現実志向による妥協と、匂宮の薫への嫉妬心により、中の君は匂宮の妻として、身籠る子を認識し、二人の仲は回復していく。

中の君は、その後も苦悩し思いを内に巡らせながらも、出産の時期を迎える。いつもより苦しみ出した中の君

を見て、匂宮は出産について「まだ御覧じ知らぬこと」（四七〇頁）であるため、思い嘆き、御修法などを多く命じる。明石中宮からも見舞いが寄せられ、中の君に対する世間での認識が変化する。出産した男子のための産養は三日、五日、七日、九日と、詳細に描かれる。特に、薫から五日の産養が調進される場面では、匂宮と六の君の三日夜の婚儀を凌ぐほど、多くの「食」が描かれる。

〔17〕五日の夜は、大将殿より屯食五十具、碁手の銭、椀飯などは世の常のやうにて、子持の御前の衝重三十、児の御衣五重襲にて、御襠褌などぞ、ことごとしからず忍びやかにしなしたまへれど、こまかに見れば、わざと目馴れぬ心ばへなど見えける。宮の御前にも浅香の折敷、高坏どもにて、粉熟まるらせたまへり。女房の御前には、衝重をばさるものにて、檜破子三十、さまざまし尽くしたることどもあり。人目にことごとしくは、ことさらにしなしたまはず。

（宿木巻⑤四七三頁）

具体的な食べ物だけでも、「屯食」「椀飯」「粉熟」の三つが描かれ、食器類も様々な物が数量と共に列記されている。『源氏物語』中の産養といえば、薫の例があるが、それ以上に多くの描写が見られる。この産養は、『河海抄』では『九曆』を、『花鳥余情』では『吏部王記』を引く。また、日向一雅氏は『紫式部日記』の敦成親王の産養の記事との関連を指摘し、「紫式部の実体験に基づくところが大きかったと思われる。」と述べる⁽¹⁶⁾。中嶋朋恵氏は、『河海抄』が『九曆』の後冷泉帝の産養を先例としたことに意味を見出し、親王にすぎない匂宮の子が、天皇と同じ扱いを受けることで、「その父匂宮の登極の可能性が逆照射されてくると言えるのではなからうか。」と述べる⁽¹⁷⁾。産養の盛儀により、中の君が幸い人として世間でも認められていくことを示す⁽¹⁸⁾。また、「子持の御前」、つまり中の君の御前に衝重が用意されている。「不食」であった中の君の荣誉が、周囲から「食」によって注目されている。中の君は、自身の人生が周囲から幸い人と認識され、その運命を受け入れていくことで、ようやく心の安定を得たのではなからうか。中の君の心の安定により、物語は一段落し、浮舟を中心とした新たな局

面を迎えることになる。

注

- ㉔ 千原美沙子氏「大君・中君」(『源氏物語講座』第四卷 有精堂出版 一九七一年八月)
- ㉕ 他に、藤村潔氏「宇治十帖の世界」(『源氏物語の構造』桜楓社 一九六六年十一月)が「中君の結婚生活は、大君の世界のだめ押しとして描かれた」と述べる。
- ㉖ 榎本正純氏「物語と家集——宇治十帖中君の再検討——」(『国語と国文学』五一・七 一九七四年七月)
- ㉗ 原岡文子氏「幸い人中の君」(『源氏物語 両義の糸——人物・表現をめぐって——』有精堂出版 一九九一年一月、初出は『講座源氏物語の世界』第八集 有斐閣 一九八三年六月)
- ㉘ 石坂晶子氏『源氏物語における思惟と身体』翰林書房 二〇〇四年三月
- ㉙ 石坂晶子氏「思ふ」女の未来学——中の君物語における思惟——(『源氏物語における思惟と身体』翰林書房 二〇〇四年三月)
- ㉚ 月を見る行為が忌事であることは、『白氏文集』や『小町集』などに見える。匂宮の「ひとり月な見たまひそ。」という言葉が、『竹取物語』を踏まえたものであることは、井野葉子氏「中の君物語における竹取引用」(『源氏物語宇治の言の葉』森話社 二〇一一年四月、初出は『国文学研究』九八 一九八九年六月)によつて指摘されている。また、星山健氏「宇治十帖における政治性——中君及び「宿木」巻の役割を中心に——」(『文芸研究』一四七 一九九九年三月)は、この日が八月十六日であることに着目し、中の君が「死ぬことも宇治へ帰ることも許されず、この都で生きていく他ないこと」を「ずらされた『竹取物語』引用」から読み取るべきと論じる。
- ㉛ 「姨捨山の月」とは『大和物語』一五六段「わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山に照る月を見て」(三九二頁、『古今和歌集』巻第一七・雑上・八七八にも所収)に依り、慰めがたい気持ちを言う。『花鳥余情』は「都にておはすて山の月つみのほるといふ事おほつかなし これは上の詞になくさめんといふにつきておはすて山とはいへり たとへは身は都にあれとも心のうちはおはすて山の月にことならぬよし也 又中君の匂宮にすてられたる心をか山の山になすらへたる也」と注する。
- ㉜ 田中仁氏「椎の葉の音——『源氏物語』宿木巻——」(『国語国文』五九・一〇 一九九〇年十月)は、直前の「椎の葉の音」については、「中の君の追憶中の人の宮庇護下の宇治の暮しをさす言葉」と捉える。他に、磯部一美氏「『源氏物語』宇治中の君の孤高性——独詠歌「山里の松のかげにも」の解釈をめぐって——」(『愛知淑徳大学国語国文』二三・二 二〇〇〇年三月)や保坂智氏「『源氏物語』宇治の中君独詠歌考——「かげ」に注目して——」(『古代中世文学論考』第一

四集 新典社 二〇〇五年五月)などの論もある。

(10) 『枕草子』において、「見苦しきもの」章段があるが、外見などの表面に見える醜さを「見苦し」と捉える傾向があり、境遇や社会的立場など、人物の背景にあるものにも目を向ける『源氏物語』とは性質が異なる。

(11) 井野葉子氏「中の君 評価のまなざし」(『源氏物語 宇治の言の葉』森話社 二〇一一年四月、初出は「宇治十帖の中の君——大君・浮舟を評価する主体として」(『論集 源氏物語とその前後』新典社 一九九四年五月)は、「本心を無理やり押さえているからこそ、彼女の心が動揺した時に、一気に宇治帰郷願望がこみ上げ、吹き出してくるのだ。」と述べる。

(12) 注(4)に同じ。

(13) 古川美知代氏「拒食する桐壺帝——「桐壺」巻を中心に——」(『物語文学論究』一一二 二〇〇七年三月)

(14) 中嶋朋恵氏「宿木巻の二つの結婚と産養——源氏物語創造——」(『源氏物語の展望』第四輯 三弥井書店 二〇〇八年九月)

(15) 大津直子氏『源氏物語』中の君の「へしるしの帯」(『國學院雑誌』一〇六・八 二〇〇五年八月)

(16) 日向一雅氏「行事と準抛説——光源氏の人生を中心に——」(『源氏物語研究集成』第一一巻 風間書房 二〇〇二年三月)

(17) 注(14)に同じ。

(18) 七日の産養が明石中宮主催で行われることに注目し、「かつて宇治の八宮が疎外された王権の目標を、その孫である皇子が回復するという、悲願達成への道筋」を捉える小嶋菜温子氏「語られる産養い(2)——宇治中君の皇子と、明石中宮主催の儀」(『源氏物語の性と生誕——王朝文化史論』有斐閣 二〇〇四年三月)のような論もある。

第五章 垣間見る匂宮の食事

一 中将の君の視点

東屋巻は、浮舟物語始発の巻である。この巻で、浮舟の母である中将の君が、匂宮を垣間見ている。浮舟を連れて、中の君の住む二条院を訪れた折のことである。

中将の君は、浮舟の婚約相手に左近少将をと考えていた。だが、左近少将は、常陸介の実娘に乗り換えた。このことを知った中将の君は腹立たしく、日頃受領階級と見下していた今の夫、常陸介の、得意満面な様子が気に食わない。いたたまれなくなり、浮舟を連れて常陸介邸を出た。

中将の君が頼るあてとした中の君は、浮舟の異母姉である。没落した人の宮の娘でありながら、匂宮との間に若君を儲け、世間の羨望を集める存在となっていた。常陸介の実の娘でないことがしろにされた浮舟を中の君に託すことで、中将の君は少なからず同様の幸いを期待していた。

二条院を訪れた中将の君はこのとき、中の君の部屋に渡って来た匂宮を垣間見る。垣間見られた匂宮は、単に高貴さを漂わせているだけではない。夕食と翌日の朝食の二回、日常の食事をしている。

匂宮は、皇族の中でも東宮候補とも目されるほどの人物である。当該場面において、なぜ匂宮が、日常の食事をしている必要があるのだろうか。また、なぜ匂宮の姿が、中将の君の目を通して描かれたのだろうか。この点について考察していきたい。

二 垣間見ること

まず、「垣間見る」とはどのような行為だったのか、というところから考えていきたい。

平安期の王朝物語における垣間見る行為は、今井源衛氏が「恋愛等の発生乃至展開の上に、極めて自然な而も有効な契機」⁽¹⁾だと述べたのを始め、様々論じられている。とはいえ、物語展開の有効な契機となりうるには、垣間見る行為が描かれているだけでなく、垣間見られる人が、垣間見る人の心を動かす必要がある。したがって、垣間見られている人は、概ね教養の高さや美点を示している。

例えば、空蝉巻において、光源氏は、碁を打つ空蝉と軒端萩を垣間見る。ふつくらと肥えて華やかな軒端萩に対し、空蝉は痩せているのをひき隠し、慎み深い様子を見せる。女性に対する当時の一般的な評価としては、軒端萩の方が魅力的だろうが、垣間見られる人の評価は、垣間見る人の価値観に依拠する。ここでは、空蝉を評価する源氏が、一般の評価とは異なる美点を重視する、特異な性質を持つことを明らかにする。また、橋姫巻において、薫は、琴や琵琶を弾く宇治の大君と中の君を垣間見る。姫君たちの姿は、薫の心を動かすような美点を伴っている。

東屋巻においても、「ゆかしくて物のはさまより見れば、いときよらに、桜を折りたるさましたまひて、」(東屋巻⑥四二頁)、「御容貌どもいときよらに似あひたり。」(四三頁)、「ゆかしうおぼえてのぞけば、うるはしくひきつくるひたまへる、はた、似るものなく気高く愛敬づききよらにて、」(四四頁)などと、「きよら」という最上級の美を示す語が散見され、中將の君は匂宮の高貴な美しさを捉えている。

中將の君は、上流貴族に憧れながらも、上流貴族との結婚はつらい目を見るだけと考えていた。この考えは、八の宮のかりそめの情により、浮舟を為したものの、八の宮から認知されなかった過去に基づいている。元は、八の宮の北の方に仕える侍女であった中將の君は、浮舟を産んだことにより、八の宮邸にいられなくなる。その

後、常陸介に嫁し、長年任国の田舎で暮らしてきた。中将の君は、自身の過去の経験をもとに、東屋巻冒頭で薫が浮舟に興味を持っていることを聞いても、身のほどを考え、本気にはできないでいた。

しかし、実際に目にした匂宮の優美さによって、中将の君は上流貴族に対する見方を一変させる。自身のこれまでの考えを「あさまし」（四三頁）く思い、「七夕ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは、いといみじかるべきわざかな」（同）と、匂宮の様子や美貌を見れば、七夕のように年に一度しか逢えずとも、通ってきてくれるだけですばらしいことと褒め称える。そして、理想は高く持つべきと、浮舟の結婚に対する考えを改める。

中将の君は、匂宮を賛美するために、中将の君の近い人と次々比較する。近い人を貶めることにより、匂宮の高貴さを述べる。匂宮が引き連れている五位四位の官人たちは、常陸介よりも立派に見える。常陸介の先妻腹の子は、宮中からの使者として参上するが、匂宮に近寄ることさえできない。翌朝には、「御装束などしたまひておはす。」（四四頁）と、宮中へ参内するために正装した、匂宮の姿が描かれる。匂宮が参内するために伺候する中の一人には、左近少将がいる。「直衣着て太刀佩きたる」（四五頁）武官姿である。匂宮の「きよらに」に対し、左近少将は「きよげだちて、」（四四頁）と記される。「きよら」でも、それより少し劣る「きよげ」でもない。「きよげだつ」とは、「きよら」に振舞おうとしながら、「きよげ」にさえなりきれないのである。匂宮の女房たちは、「きよげだ」つ左近少将を侮り噂し合う。左近少将を無難と考えていた中将の君は、田舎に染まった価値観を自覚する。周囲の評価も考慮しつつ、匂宮の公的な姿を、自身の近い人物と比較する。物語は、中将の君の目を通して、匂宮が、常陸介はもとより、八の宮とも比べ物にならない、公に求められる存在であることを、念押ししていく。

さらに、匂宮の公的な姿との間を縫うように、私的な姿が描かれる。匂宮は、短い几帳を押しやり、妻中の君と隔てなく語る良き夫に見える。また、「若君をえ見棄てたまはで遊びおはす。」（四四頁）、「若君の這ひ出でて、御簾のつまよりのぞきたまへるをうち見たまひて、たち返り寄りおはしたり。」（四五頁）などと、若君をかわい

がる子煩悩な父親としての側面も窺える。匂宮の気取らないプライベートが、中将の君に詳らかにされる。

左近少将の、浮舟から常陸介の実娘への乗り換えは、貴族の血筋よりも実質的な財力を重視していた彼の考えに則る。日頃中将の君から侮られていた常陸介は、貴族の娘である浮舟よりも、自身の娘が認められたことに大喜びで、結婚準備に奔走する。浮舟の結婚のために備えていた部屋まで横取りする。中将の君は、「浮舟が、「常陸介の娘」でもなく、「八の宮の娘」でもない」⁽⁵⁾ことを思い知らされる。だが、浮舟を認めようとしなかった常陸介や八の宮、左近少将が、匂宮の高い品格の前ではかすんでみえる。その上、匂宮は、後見のない中の君や、中の君との子を大切にする。中将の君は、匂宮の心の広さに感激する。公私共の匂宮のすばらしさを見ることにより、恐れ多く感じていた上流貴族への憧れを再構築する。

中将の君は、同じ日に薫をも垣間見る。浮舟を所望してくれる薫を、浮舟の結婚相手として期待するようになる。ここに、浮舟の意思は全く見えてこない。母の中将の君の視点と感情だけが読者に明示され、浮舟と同一視される⁽⁶⁾。吉海直人氏がこれら一連の垣間見を「母娘による浮舟物語展開の伏線的效果」⁽⁷⁾と指摘している。この後の展開で、浮舟が、匂宮と薫の二人から言い寄られ、苦悩する伏線となっている。

八の宮が浮舟を娘として認知しなかったことで、中将の君は浮舟とともに長年東国暮らしを余儀なくされる。浮舟の結婚相手として、上流貴族を視野に入れ、今後の浮舟物語を展開させていくためには、中将の君の過去に基づき築かれてきた結婚観を改める必要があった。八の宮が比べ物にならないほど、世間から注目を集める親王匂宮の公的な姿は、上流志向の強い中将の君の身のほど意識を揺さぶるものであった。なおかつ、匂宮のよき夫、よき父親としての一面をも垣間見る。公的・私的両面の魅力を兼ね備えた匂宮の姿は、中将の君の上流貴族観を転回させ、浮舟の結婚相手としての理想像を確立する基礎となるのである。

三 食事を垣間見ること

「食」に関わる姿が垣間見られている場面といえ、筒井筒で有名な『伊勢物語』二三段がすぐに思い浮かぶだろう。手ずから杓子を取って飯を盛る高安の女の様子を見た男は、疎ましく思っ通うのをやめてしまふ。

『源氏物語』中でも、食事している姿が垣間見られる場合、その対象は軽侮されている。例えば、玉鬘一行と右近が邂逅する場面において、右近は侍女の三条を呼ぶが、「食物に心入れて、とみにも来ぬ、いと憎し」（玉鬘巻③一〇七頁）と、食べ物に夢中であることを咎めている。薫が浮舟を初めて垣間見た場面では、「栗などやうのものにや、ほろほると食ふ」（宿木巻⑤四九一頁）侍女二人の姿を見た薫が、一旦見るのをためらっている。貴族や都人の嗜みを持った人物が、食事に執着する行為を憚ることで、価値観の相違する鄙人の存在を示している。

ただし、玉鬘には粗末な御膳でさし出すことがためらわれており、玉鬘の食事する姿は描かれない。三条が夢中になっている「食物」とは、玉鬘の食膳の残りである。玉鬘があまり手をつけていないことが推定できる。浮舟は、女房からくだものを勧められても、気分悪そうに起きようとし^⑥ない。侍女たちの行動により、田舎暮らしを余儀なくされた境遇を示しながらも、田舎びた感覚に染まり切ることはない玉鬘や浮舟の姿が、「食」描写の取捨選択により明らかになっている。つまり、「食」を貶めることが、食欲のない女君を評価する要因となっているのである。

しかし、句宮の食事を、句宮自身の品位を損なうものと簡単に片づけることができるのだろうか。平安期の王朝物語において、食事が垣間見られている人物は、概して身分の低い者である。しかも、垣間見る人は、食べていることよりも、食欲を露わにしていることに注目し、蔑んでいる。前掲の右近は、自身が呼んでいるにもかかわらず、三条が食べ物に執着していることを憎らしく思う。薫は、「聞き知らぬ心地」（宿木巻⑤四九一頁）とあのように、侍女たちが栗などを食べる「ほろほろ」（同）という音にきまり悪さを感じている。

このような例に対して、匂宮は、単に毎日の食事をしているだけである。垣間見られている匂宮の食事場面を次に挙げた。

④ 宮渡りたまふ。(中将ノ君ハ) ゆかしくて物のほさまより見れば、いときよらに、桜を折りたるさましたまひて、(中略)

帳の内に入りたまひぬれば、若君は、若き人、乳母などもあそびきこゆ。人々参り集まれど、なやましとて、大殿籠り暮らしつ。御台こなたにまゐる。よろづのこと気高く、心ことに見ゆれば、わがいみじきことを尽くすと見思へど、なほなほしき人のあたりは口惜しかりけりと思ひなりぬれば、わがむすめ(浮舟)も、かやうにてさし並べたらむにかたはならじかし、勢ひを頼みて、父ぬし(常陸介)の、后にもなしてんと思ひたる人々、同じわが子ながら、けはひこよなきを思ふも、なほ今より後も心は高くつかふべかりけりと、夜一夜あらまし語思ひつづけらる。

⑤ 宮、日たけて起きたまひて、^{匂宮}「後の宮(明石中宮)、例の、なやましくしたまへば、参るべし」とて、御装束などしたまひておはす。ゆかしくおぼえてのぞけば、うるはしくひきつくるひたまへる、はた、似るものなく気高く愛敬づききよらにて、若者をえ見棄てたまはで遊びおはす。御粥、強飯などまゐりてぞ、こなたより出でたまふ。

(東屋卷⑥四二頁〜四四頁)

④は夕食場面、続く⑤は、翌朝の朝食場面である。この間ずっと、中将の君により垣間見られている。どちらも、匂宮が食欲を顕わにしている様子は見受けられない。

④⑤の「食」描写は共に、「こなた」、つまり中の君の部屋という場所についての明示がある。当時は、夫婦でも別々の部屋で食事をとることが一般的だった。しかし、ここでは通常とは異なり、中の君の部屋に匂宮の食膳が運ばれている。末沢明子氏が、食事は主に日常の場所とは異なるときに物語の中で採り上げられると述べてい

る^㉓ように、場所の違いは「食」を描写する上で重要な要素であった。④⑤は、通常とは異なる場所で食事をとることによって、食事よりも、中の君や子供と離れ難く思っている様子が、より鮮明に映る。

さらに、匂宮の様子を垣間見ている人物が、中将の君であることに着目する。④の傍線部の食事描写、「御台こなたにまゐる」の直後に、「よろづのこと気高く、心ことに見ゆれば」とある。中将の君は、匂宮のあらゆることが高貴で特別に見えるのと、賞賛しているのである。食事を髣髴とさせる文脈の直後に記されていることから、通常、他人に見られるべきでない日常の食事さえも含む、全てのことすがすばらしく見える、という含みをもたせた言い方だといえる。

中将の君は、長年の田舎暮らしにより、都人の価値観とは程遠いものになってしまっている。匂宮を賛嘆する際、今の夫である常陸介や、浮舟との婚約を破棄した左近少将など、自分の近い人物と匂宮を比較した上でしかすばらしさを表現できない。匂宮が参内した後、中将の君は、中の君の面前で、匂宮の姿を大仰に褒め称える。中の君はその様子を、「田舎びたる」（東屋巻⑥四六頁）と思い笑っている。中将の君の鄙びた考え方がわかる。食事は、身分の高さにかかわらず、誰もがとるものである。「田舎びた」中将の君に匂宮のすばらしさを、より現実味をもって知らしめるために、食事する姿は効果的だった。食事する匂宮のすばらしさは、中将の君にとって、雲の上の人であった上流貴族の敷居を下げるための、有効な表現であった。

四 御粥・強飯の食事を垣間見ること

「粥」は水で煮た米、「強飯」^㉔は甑で蒸した米のことである。藤原師輔の「九条殿遺誠」^㉕に記されるように、平安貴族にとって、「粥」は朝起きてまず食べる日常的なものだった。『源氏物語』中に現れる「粥」一三例も、

男女を問わず食するものである。柏木巻における薫の産養に供された一例を除き、全て日常の朝食の場面である。

しかし、「強飯」は常に描かれるものではない。「九条殿遺誠」では「服^レ粥」の後、頭を梳つたり手足の爪を切つたりするなど身支度を整え、出仕すべき日であれば、衣冠を身につける。それから、「朝暮膳」がある。これに「強飯」が含まれると思われるが、具体的な食べ物は記されていない。

夕霧巻では、夕霧が落葉の宮と一夜をともした翌朝、朝食が二人に供されている。「御手水、御粥など、例の御座の方にまゐれり。」(夕霧巻④四八一頁)と、粥が出され、次に「御台はまゐる。」(四八二頁)とある。木谷眞理子氏が「夕霧家のルールに則って、落葉の宮に供する」⁽¹⁰⁾と述べるように、これが夕霧の習慣的行為なのである。この時には「強飯」でなく「御台」と記される。朝食を「御台」と記す例は、夕霧巻にもう一例ある(四二二頁)。

『源氏物語』においては、「食」の露骨表現を避け、器や「もの」などの抽象描写で食事を表す傾向がある。夕霧巻の「御台」も同様である。④の匂宮の夕食も「御台まゐる」とある。女房が食膳をさし出したことが示されるだけで、どのような食べ物が出され、食したのかは描かれない。

一方、翌朝の食事では、具体的に「御粥、強飯」がさし出されたことが描かれている。敢えて「御粥」と「強飯」とが併記されている。なぜこの場面では具体的に描かれたのだろうか。

それは、匂宮の姿を見続けている中将の君の視点を通して、描かれたものであるためだと考える。中将の君が匂宮への距離を狭めることで、抽象描写から具象描写に転換するのではないだろうか。④と⑤の、中将の君が垣間見る描写を比べてみよう。④の破線部は、単に「見る」とある。それに対し、⑤は「のぞく」という語が使われている。「のぞく」は、より近く、物を隔てることのない直線的な視線で、かつ限定された視野を感じさせる動詞である⁽¹¹⁾。このことから、中将の君の興味の深まりが窺える。

④の夕食と⑤の朝食との間には、二重傍線部「なほ今より後も心は高くつかふべかりけりと、夜一夜あらまし

語思ひつづけらる」とあり、中将の君は、浮舟の将来を一晚中思案し続けている。一晚のうちに理想を高く持つべきと考えたからこそ、翌朝も匂宮を垣間見る。前日以上の強い興味があるゆえ、匂宮に近いところで注視し、朝食のメニューについても事細かに目に焼き付けられたのではないだろうか。

さらに、出立する匂宮が若君をあやして、離れがたく思っている。中将の君が眺める匂宮の様子について、「かへすがへす見るとも見るとも飽くまじくにほひやかにをかしければ、出でたまひぬるなごりさうざうしくぞながめらるる。」（東屋巻⑥四六頁）とある。傍線部の反復表現などによっても、匂宮をいくら見ても見飽き足りないという中将の君の思いの強さが分かる。

また、日常的な「粥」と併記される「強飯」が、『源氏物語』中にどのように描かれるかについて見ておきたい。「強飯」は、東屋巻の当該場面の他に三例ある。明確な食事時間のわからない薄雲巻の一例⁽²⁾を除くと、三例全てが朝の遅い時間になってから、起きてきた日の朝食として、「御粥」と併記されている。通常、起床直後に服される「粥」と、時間をおいてから食べる朝食をまとめて食べることにより、普段とは異なる食事として描かれたともいえる。が、朝遅くに起きてきた匂宮が「粥」のみ食している例もある（宿木巻⑤四三六頁）。この時の匂宮は特に食欲がないわけではない。よって、必ずしも、遅く起きると「粥、強飯」をまとめて食した、とはいえない。

この違いは、食事の後に仕掛けるか否かにあると考えられる。「強飯」は、四例全てが男性によって食されており、薄雲巻の一例を除いた三例は、参内を予定している。

ここで、「御粥、強飯」が併記される末摘花巻と橋姫巻について見てみよう。

頭中将おはして、^頭「こよなき御朝寝かな。ゆゑあらむかしとこそ思ひたまへらるれ」と言へば、起き上がりたまひて、^{源氏}「心やすき独り寝の床にてゆるびにけりや。内裏よりか」とのたまへば、^頭「しか。まかではべるままなり。朱雀院の行幸、今日なむ、楽人、舞人定めらるべきよし、昨夜うけたまはりしを、大臣

にも伝へ申さむとてなむ、まかではべる。やがて帰り参りぬべうはべる」と、いそがしげなれば、源氏「さらば、もろともに」とて、御粥、強飯召して、客人にもまゐりたまひて、引きつづけたれど、ひとつにたてまつりて、頭「なほいとねぶたげなり」と咎め出でつつ、頭「隠いたまふこと多かり」とぞ恨みきこえたまふ。

(末摘花卷①二八五頁)

かやうの古人は、問はず語りにや、あやしきことの例に言ひ出づらんと苦しく思せど、かへすがへすも散らさぬよしを誓ひつる、さもやとまた思ひ乱れたまふ。

御粥、強飯などまゐりたまふ。昨日は暇日なりしを、今日は内裏の御物忌もあきぬらん、院の女一の宮、なやみたまふ御とぶらひにかならず参るべければ、かたがた暇なくはべるを、またこのごろ過ぐして、山の紅葉散らぬ前に参るべきよし聞こえたまふ。八の宮「かく、しばしば立ち寄らせたまふ光に、山の蔭も、すこしもの明きらむる心地してなん」など、よろこびきこえたまふ。

(橋姫卷⑤一六三頁)

末摘花卷は、源氏が末摘花と一夜を共にした後朝に、頭中将が来訪した場面である。頭中将は、源氏の朝寝を擲揄し、朱雀院の行幸の準備のため参内しなければならぬことを伝える。父の左大臣にも伝えるため、左大臣邸への帰途、二条院に立ち寄ったのである。源氏も同行することになる。共に朝食をとって出かけるが、源氏はなお眠たそうにしている。橋姫卷では、薫が宇治を訪れた翌日、早朝弁の君から自身の出生の秘密を聞く。思い乱れる中、朝食が供される。今日は、女一の宮のもとへ「かならず」参上しなければならぬという。当該の東屋巻でも、明石中宮の具合が悪く、今日こそは参内しなければならぬことが述べられている。「御粥、強飯などまゐりてぞ、こなたより出でたまふ。」と食事から出立までの流れが、係助詞「ぞ」によって強調されている。

また、橋姫卷では、八の宮が薫に「御粥、強飯など」を供している。八の宮は、光源氏と異母兄弟でありながら、政治的な思惑に巻き込まれ、世間から忘れ去られた存在であった。都から少し離れた宇治に引き籠っていた

が、破線部に示したように、薫がしばしば宇治に立ち寄ってくれることで、山蔭の住まいも少し明るくなるような気がする、喜びを伝えている。前日、薫が宇治に到着した際には、「宮待ちよろこびたまひて、所につけたる御饗など、をかしうしなしたまふ。」（橋姫巻⑤一五六頁）と、八の宮は歓待していた。朝食で供した「御粥、強飯など」も、八の宮による朝食としての最大限のもてなしであろう。

東屋巻を除く三例は、客人に供している点で共通する。末沢氏は、末摘花巻と橋姫巻について、「客人がいるという点で常とは異なり、強飯は鄭重であることを示しているのではないか」と述べる⁽¹³⁾。また、木谷氏は、男性の主から男性客に「粥」が出される例がこの二例のみで、その両方に「強飯」が加えられていることを指摘する。『小右記』寛弘五（一〇〇八）年九月十日条において、中宮彰子が産気づいたとの知らせを受けて集まった公卿・殿上人らに対し、藤原道長が「強飯・粥」をふるまっている記事を挙げ、「起床直後に手水などとともに使われる朝の「粥」は、あまりに日常的な食物、ごく内々で食すべきものであるから、「粥」だけを供するのは憚られ、「強飯」が加えられる、ということであろうか。」と述べている⁽¹⁴⁾。このように、日常的と捉えられていた粥だけでなく強飯を供することは、公にも求められる人物に対する鄭重さを付加している。

中将の君は、八の宮が薫に「御粥、強飯」を供した橋姫巻の場面を見てはいない。が、八の宮の北の方に仕えていた中将の君にとっての都の価値基準は、八の宮が大きく影響を与えていた。その上、東国の田舎に下っていたため、中将の君は八の宮の邸で仕えていた頃から、都の情報が更新されることはない。中将の君にとっても「御粥、強飯」は、これから出かける客人を鄭重にもてなす食事であった。匂宮が、自分の邸での日常の食事に「御粥、強飯」を食し、参内する姿は、自分の経験則によって物事を計る中将の君にとって衝撃的であつたらう。中将の君にもわかる匂宮の高貴さが、より強く印象づけられる。

五 匂宮の食事を垣間見ること

第二節でも触れたが、中将の君は、匂宮を垣間見た同日に、薫をも垣間見ている。薫は匂宮が参内した不在の折を見計らって、中の君を訪ねた。中将の君は、匂宮と薫を対比的に見、その上で薫を浮舟の相手として考えるようになる。では、なぜ対比された垣間見が、匂宮の食事場面と薫の「歩み入りたまふさま」（東屋巻⑥五一頁）だったのだろうか。

まず、中将の君の垣間見た場所が二条院だったことは、大きな要因である。匂宮にとっては自分の敷地内である。中の君や他の者はその行動を制御できる立場にない。丈の低い几帳を押しやり中の君と語らう匂宮の姿は、邸内での奔放な振る舞いを印象づける。匂宮は、中将の君のような女房身分の者に見られようと無頓着であり、浮舟や中将の君の来訪にも気づかない。中の君も告げない。対して、薫は客人である。中の君は、薫の来訪が伝えられると、「例の、御几帳ひきつくろひて心づかひす。」（五〇頁）とあるように、几帳を立てて一定の距離を保つ。薫の自分への興味を浮舟に逸らそうとする意図から、中将の君と浮舟が忍んで来ていることも伝える。そして、中将の君や浮舟の目を気にして、あまり暗くならないうちに早々に薫を追い立てて帰している。食事を供する時間も与えない。それ以上に、慎み深い薫が訪問先の二条院で食事をするとは考えにくい⁽⁵⁾。そもそも、中の君を頼りに二条院を訪れた中将の君に、薫の食事を垣間見る場はなかったのである。

中将の君は、匂宮と薫を垣間見た上で、薫を浮舟の相手にと考える。匂宮が中の君の夫であり、匂宮—中の君、薫—浮舟という関係を考えていたからだろう。しかし、それだけではない。中将の君は、垣間見る人々を自身の価値観に基づいて対比する。対比することで、垣間見られる人のすばらしさが顕かにされる一方、垣間見ることで自身の価値観も更新される。常陸介や左近少将と比較した上で、匂宮の表面から発している「きよら」美を見る。薫を垣間見る際には、匂宮と比較した上で、薫のすばらしさを判断する。薫を垣間見る前提として、中将の

君自身が見た匂宮の様子に並ぶことはできないだろうと、匂宮と比較する用意があった。実際に、薫の「歩み入りたまふさま」を見ると、「げに、あなめでた、をかしげとも見えながらぞ、なまめかしうきよげなるや。」(五一頁)と感嘆する。匂宮の「きよら」には劣る「きよげ」を用い、「なまめかしう」という美的語で薫を形容する⁽¹⁶⁾。梅野きみ子氏は「きよら」が「外面的な容姿美を形容する語」であるのに対比して、「なまめかし」を「感覺美と精神美と、両者の融合された、より深い人間の「風格美」とでも看做すべき」と述べ⁽¹⁷⁾、薫を形容する語の用例数が、「なまめかし」v「きよら」であり、匂宮は反対に、「きよら」v「なまめかし」である点にも注目している。匂宮とは対照的な、内から滲み出る美しさによって薫は捉えられる。

また、中将の君は匂宮を、足掛け二日間凝視している。それに対して、薫を垣間見た際には、「すずろに、見え苦しい恥づかしくて、額髪などもひきつくるはれて、心恥づかしげに用意多く際もなきさまぞしたまへる。」(五一頁)と、自分の姿が見られてはいないだろうかと恥づかしくなるほどであるという。中将の君が垣間見た薫の姿は、「歩み入りたまふさま」の一瞬なのである。ここで、視点は語り手に引き継がれる。薫と中の君の会話などは、中将の君の視点からは語られない。薫は中の君に、中将の君への言づてを頼み、邸を出る。薫の辞去後、「いとめでたく、思ふやうなる御さまかな」(五四頁)と、薫を褒め称える中将の君の感情が、再び描かれ始める。匂宮と同じく、七夕伝説を引合いに出し、天の川を渡ってでも、薫のような彦星の光を浮舟に待ち迎えさせたい、と考える。現実味がないと思っていた、浮舟を薫に妻合せたいという気持ちだが、頭をもたげてくる。薫の芳しさ、勤行の熱心さを噂し合う女房たちの話を聞けば、「すずろに笑みて聞きゐたり。」(五五頁)と笑みがこぼれる。ここでは既に、薫を浮舟の相手との考えを固めている⁽¹⁸⁾。

中将の君は、自身の希望と、匂宮と薫について次のように述べている。

いとど、いかで人とひとしくとのみ思ひあつかはる。あいなう、大将殿の御さま容貌ぞ、恋しう面影に見ゆる。同じうめでたしと見たてまつりしかど、宮は思ひ離れたまひて、心もとまらず。悔りて押し入りたまへ

りけるを思ふもねたし。この君は、さすがに、尋ね思す心ばへのありながら、うちつけにも言ひかけたまはず、つれなし顔なるしもこそいたけれ、よろづにつけて思ひ出でらるれば、

(東屋巻⑥八一頁)

匂宮が浮舟に言い寄り、驚いた中将の君が、すぐに浮舟を三条の小家に隠した後の場面である。二重傍線部「人とひとしく」とは、中の君と同じように、浮舟を世間から羨まれる境遇にさせてやりたい、と願う、中将の君の気持ちの端的に表れている。その願いは「大将殿の御さま容貌」に向かう。薫の、浮舟を求める気持ちがありながら、不躰に言い寄ってこないことに、中将の君は好感を持っている。ここでも匂宮と比較している。もともと、中の君の夫である匂宮は眼中にはないが、浮舟を侮って言い寄ったことで、憎らしさが伴う。

薫を浮舟の相手として認定していくために、薫を垣間見ることは重要な契機となる。しかし、中将の君にもわかりやすい、食事などの私的な面を見せる素地は、客人である薫にはなかった。薫の前に匂宮を垣間見ることで、八の宮という基準しか持ち合わせていなかった中将の君は、真に、公にも求められる高貴な人物像を確立する。中将の君のこれまでの価値観を変え、浮舟の物語を展開させる上で、薫が表し得ない、夫として、父としての魅力、匂宮によって補う必要があったのである。

ただし、公私を織り交ぜて描くことで、公私の区別なく、誰憚ることのない匂宮の姿までもが浮き彫りとなる。薫の持ち得ない、欲望のままに自由に動き、食事し、外へ出ていく姿は、常陸介や左近少将と比べる上ではすばらしさが際立つものの、慎ましい薫を垣間見た後では評価は反転する。垣間見は、見られていることにも気づかず、浮舟に安易に言い寄り本能的な欲望を顕わにする匂宮と、その根本にあるものに気づかぬまま、高貴な匂宮を称賛する中将の君の姿を映し出す。対比される匂宮と薫の描写から、浮舟への今後のアプローチを暗示させるとともに、浮舟の運命を見守り動かす母の目の危うさをも提示しているのではないだろうか。

六 浮舟の運命の先導者

中将の君は、匂宮の公的な姿、私的な姿の両面を垣間見、克明に観察する。匂宮の姿により、自身の経験に基づく結婚観を覆し、浮舟の結婚相手の理想像を思い描くようになる。中将の君は、常に自分の経験則と照らし合わせることによって価値判断を行う。匂宮の食事は、田舎で長年過ごしてきた中将の君にとっても、理解しやすい美しさであった。匂宮を見ることで、雲の上の人であった上流貴族の敷居を下げ、浮舟の結婚相手の指標となる。中将の君は、一晚中浮舟の将来を思索し、翌朝はさらなる興味を持って匂宮に接近し、垣間見る。だからこそ、前日より具体的な描写でもって観察されている。

はつきり映る「御粥、強飯」は、浮舟の父八の宮が薫をもてなしたように、中将の君にとっても客人に供するものである。匂宮は、この「御粥、強飯」さえ日常の朝食として食し、そのまま内裏へ向かう。「御粥、強飯」という「食」の選択に、世間から見捨てられた八の宮とは異なる、今をときめく匂宮の優位性が印象づけられている。

また、中将の君は、この後に薫をも垣間見る。匂宮と薫の高貴さを対比的に認識し、薫が浮舟の相手としてふさわしいことを目に焼き付ける。並外れたすばらしさを持つ二人を比較し、その相違点を見極めることで、薫の特質が表面化する。浮舟の姉中の君と同じ高みを目指す中将の君にとって、薫は匂宮と異なり、浮舟を侮らない（ように見える）。一年に一度の七夕のように逢いに来てくれることを待つだけではなく、薫は、自身が天の川を渡ってでも浮舟と添わせたい人物であった。

浮舟物語の始発の巻である東屋巻において、中将の君の垣間見を通した思い入れが描かれることにより、今後の浮舟物語を先導していく。ただし、この垣間見の視点は、匂宮の高貴さを映し出すよりも寧ろ、観察者中将の

君の田舎びた人間性を浮き彫りにする。中将の君の不確かな目により、この後も決して重く扱われることのない、不安定な浮舟の運命が決定づけられていくのではないだろうか。

注

- ㉑ 今井源衛氏「古代小説創作上の一手法——垣間見に就いて——」（『国語と国文学』二五・三 一九四八年三月）
- ㉒ 辻田昌三氏「『だつ』と『めく』」（『殖生野国文』六 一九七六年二月）は、接尾語「だつ」について、「属性の顕示による事象の推定、確認に働く」と述べる。「きよげ」という状態を今顕わそうとしているが、直後に「なでふことなき人のすさまじき顔したる」（四五頁）とあり、左近少将の「きよげ」になりきれないさまが強調される。他に、南芳公氏『中古接尾語論考』おうふう 二〇〇二年十月、関一雄氏『平安時代和文語の研究』笠間書院 一九九三年十月などの論考を参考にした。
- ㉓ 鈴木裕子氏「中将の君と浮舟——縛る母・『反逆』する娘」（『源氏物語』を（母と子）から読み解く）角川書店 二〇〇五年一月、初出は「（母と娘）」を考える——中将の君と浮舟の場合——」（『伝統と創造』勉誠社 一九九六年三月）
- ㉔ 篠原義彦氏「中将君の問題——浮舟の運命との関連において——」（『高知大國文』四 一九七三年十二月）
- ㉕ 吉海直人氏「『垣間見』の総合分析」（『垣間見』る源氏物語 紫式部の手法を解析する）笠間書院 二〇〇八年七月）
- ㉖ 堀江マサ子氏「浮舟物語の食——食の位相にひき据えられる女君——」（『物語研究』一一 二〇一一年三月）は、「浮舟が、食にしか生き甲斐を見いだせない人々の側にいたことをも示していよう。」と述べる。確かに、浮舟のいた位相は食に執着しているが、ここでは玉鬘の例とも鑑みて、浮舟自身は食事をしていないことに注意すべきだろう。
- ㉗ 末沢明子氏「大堰山荘の強飯」（『福岡女学院大学紀要人文学部編』一八 二〇〇八年二月）
- ㉘ 「強飯」については、第二部第一章でも言及する。
- ㉙ 『群書類従』第二七輯
- ㉚ 木谷眞理子氏「夕霧巻と食」（『成蹊大学文学部紀要』四三 二〇〇八年三月）
- ㉛ 大島資生氏「のぞく（覗）・うかがう」（『日本語研究』七 一九八五年五月）
- ㉜ 源氏が明石の君の暮らす大堰邸を訪れ、「ここはかかる所なれど、かやうにたちとまりましたまふをりあれば、はかなきくだもの、強飯ばかりはきこしめす時もあり。」（薄雲巻②四四一頁）と食事することが描かれる。
- ㉝ 注（七）に同じ。
- ㉞ 木谷眞理子氏「源氏物語と食」（『成蹊国文』四〇 二〇〇七年三月）
- ㉟ 注（12）に挙げた薄雲巻「ここはかかる所なれど」について、『細流抄』は「源の上臈しきやうなりいつくにてもれう

しに物なとまいる事はなけれどもと也」と注し、源氏のような上臈が外食をすることは、通常なら聊爾（無礼、不躰）なことであるとす。さらに慎重な薫ならなおさらであろう。

(5) 『源氏物語大成』『新編全集』校訂付記によると（以下、山括弧内の略号はこれらによる）、大島本・河内本では「なまめかしうあてに」とあるが、青表紙本系統の多数（幽柏横肖榊三）は「なまめかしう」である。また、別本において、「あてに」とする本文もある（宮陽図池国）。「きよら」と「あて」に関しては、伊井春樹氏「源氏物語における人物の美的表現——「あて」「きよら」の周辺と本文——」（『王朝文学の本質と変容 散文編』和泉書院 二〇〇一年十一月）の論考があり、「きよら」を「外見からの清純さをたたえた美」であるのに対し、「あて」を「品格美」とであると対照的に捉えている。異同はあるものの、いずれも薫と匂宮を対比的に描こうとしていることがわかる。

(6) 梅野きみ子氏「光源氏の「なまめく」「なまめかし」美——「きよら」美と対比的に——」（『平安文学論集』風間書房 一九九二年十月）

(8) 『岷江入楚』は、「浮舟の母の、人々の薫をほめ申をきゝて、はやわが物のやうにうれしがり居たるさまなり」と注する。

付章一 「騒ぐ」周囲の視線の作用

一 「騒ぐ」の語義

第一部では、「食」が周囲から見られ、行動や心情が変化している様相を捉えてきた。付章では、「食」において注目した視点・視線の問題から派生して、ある動作を契機とした周辺人物の視点・視線に焦点を当てる。

主要登場人物の多くは高貴な身分の者である。彼らは、常に世間の目に晒され、体面に縛られながら行動している。密通や垣間見など恋愛に関わる事件、また患い、世を去る人の周りにも、人は存在する。周辺人物の存在が、時に場面を俯瞰させ、時に臨場感を与える。そこで注目されるのが、物語のあらゆる局面で、周囲の騒ぐ様子が度々描かれていることである。

「騒ぐ」の語義としては、最古の字書である『新撰字鏡』天治本⁽⁵⁾に次のようにある。

聒（五勞反衆口也佐和久又止と口久）

聒（公活反護聒也誼語也耳孔騒左和久又乃と志留）

躁（又作趨子到反去擾也動也燥也佐和久）

躁（祖到反躁俾趨二形同不安静也佐和久）

嘈（衆聲又鼓聲也止と呂久又佐和久）

「佐（左）和久」の他に、「止と呂（口）久」や「乃と志留」の訓が見られる。「衆口」や「衆聲」から多くの人が声を出す様子、「護聒也誼語也」「不安静也」から落ち着かず、やかましい声であること、「擾也動也」から乱れ動く様子を意味しているといえる。

参考までに『角川古語大辞典』を引くと、「やかましい状態を呈する意。」を大意として、様々な意味に分かれ

ている。

- ① 風・波などが、ざわざわと音を立てる。
- ② 人や動物が大きな声を出す。特に、大勢が口々に声を出す。声とともに動きを伴っている場合が多い。
- ③ ②に伴われた動きの面を主とするもの。入り乱れて忙しそうに立ち働く。せわしく動き回る。
- ④ あれこれと噂する。うるさく言う。
- ⑤ 騒動が起る。事を起す。
- ⑥ 驚いたり恐れたりして、混乱する。あわてふためく。うろろうろする。
- ⑦ 心が動揺する。気持が乱れる。(用例略)

このように多義性を持つ「騒ぐ」の語義について、先行研究は見当たらない^⑧。本章では、『源氏物語』中の「騒ぐ」とそれに類する語の用例を確認し、物語中でどのように用いられているかを検討する。その上で、騒がしい周囲の存在が、話題の中心にいる人物（以下、「中心人物」という）にどのような影響を与え、物語展開にどのように作用しているのかを考察したい。

二 「騒ぐ」人物

まず、調査対象を確認しておく。『源氏物語』中の「騒ぐ」とそれに類する語二八四例である。類する語としては、動詞「騒ぐ」の複合動詞（前項〈言ひ騒ぐ〉「思ひ騒ぐ」など）・後項〈騒ぎ合ふ〉「騒ぎ満つ」など）、名詞「騒ぎ」など、形容詞「騒がし」「もの騒がし」など、形容動詞「騒がしげなり」などが挙げられる。

主格（誰が騒いでいるか）^⑨を確認すると、多くは、名もない群衆や女房、従者などの周辺人物である（一三八

例、四八・六パーセント)。惟光や空蟬の女房である中将など、名前や身分を特定できる端役を含めると、一五六例(五四・九パーセント)となる。

主格(騒ぐ人物)と話題の中心となる事象との関係を踏まえて分類してみると、次のように分けられる。

- ・ 当事者(自身の事象に対して騒ぐ、または用事が立て込んで忙しい) 三八例
- ・ 対峙者(対峙している人、事象に対して(心が)騒ぐ) 四〇例
- ・ 周囲(事象に対して一定の距離感をもって騒ぐ) 一九六例
- ・ 自然(風が騒ぐなど天変地異) 一〇例

主格と事象の距離感は曖昧なものもあり、一概に数値で表すことは難しいが、当事者などに比べて周囲が騒ぐことの多さが認められる。

なお、二八四例の中には、「心騒ぎ」「胸うち騒ぐ」などという心理面での「騒ぐ」や、行事などが立て込んで「(もの)騒がし」という用例も含まれている。当事者や対峙者である主要人物は、そのような場合に主格となる例が多い。本章では、主に行動としての「騒ぐ」に注目する。

次に、周辺人物以外で、どのような人物が騒いでいるのか、具体例を挙げ、『源氏物語』における「騒ぐ」という行動の特質を確認したい。

なお、「騒ぐ」に関わる異同のあるものについては、(イ1)のように記し、『源氏物語大成』により校異と諸本略号を本章末にまとめて掲げた。

i 地方育ちの者

「騒ぐ」ことは、都人とは異質な行為として、時には諧謔的に、時には軽蔑の目で描かれている。端的な例が

近江の君（二例）と常陸介（五例）である。それぞれ一例ずつ挙げた。

〔1〕近江の君「舌の本性にこそははべらめ。幼くはべりし時だに、故母の常に苦しがり教へはべりし。妙法寺の別当大徳の産屋にはべりける、あえものとなん嘆きはべりたうびし。いかでこの舌疾さやめはべらむ」と思ひ騒ぎたるも、いと孝養の心深く、あはれなりと見たまふ。

（常夏卷③二四四頁）

〔2〕守は急ぎたちて、常陸介「女房など、こなたにめやすきあまたあなるを、このほどはあらせたまへ。やがて、帳なども新しく仕立てられためる方を。事にはかになりたれば、取り渡し、とかくあらたむまじ」とて、西の方に来て、起居とかくしつらひ騒ぐ。（中略）北の方見苦しう見れど、口入れじと言ひてしかば、ただに見聞く。

（東屋卷⑥三七頁）（イ1）

〔1〕は、近江の君と父内大臣が問答をしている場面である。内大臣が親孝行の気持ちがあるなら早口を直すようにとからかうと、近江の君は、早口は生まれつきなので、どうやって直したらよいかと思ひ騒いでいる。「いと孝養の心深く」とは、『新編全集』頭注が「素直に応ずる近江の君をからかいつつ、内大臣を茶化す。」と注している。都人の感覚とずれた会話が滑稽さを生んでいる。

〔2〕は、常陸介が実の娘のために婚儀の準備に奔走する姿である。実の娘のために騒ぐ様子は、他にも、中将の君の目を通して、繰り返し辛辣に描かれている。

このように、近江の君は父内大臣や宮中で仕える人々から、常陸介は、都人の価値観を持つと自負する中将の君から、蔑む視点で描かれる。地方出身者とはいえ、玉鬘や浮舟には「騒ぐ」行動は見られない。高貴な人からも評価される人物は、都人の感覚にそぐわない行動をとらないのである。

ii 幼子

高貴な人物であつても、子どもはまだ社会秩序を理解できない。子どもが騒ぐ最たる例が薫である。横笛巻において、よだれを垂らして筥にかじりつく赤子の薫は、無心に這い下り騒いでいる。

〔3〕

源氏うきふしも忘れずながらくれ竹のこは棄てがたきものにぞありける

と、率て放ちてのたまひかくれど、(薫ハ)うち笑ひて、何とも思ひたらずいとそそかしう這ひ下り騒ぎたまふ。

(横笛巻④三五頁)

活発に活動する薫は、源氏に老いを感じさせる。また、薫が自身の子でないことを知る源氏にとって、薫は異分子として映る。ただし、成長した薫に騒ぐ行動は見られない。蜻蛉巻に、浮舟が亡くなったことを右近から聞き嘆きながら帰京する場面では、

〔4〕道すがら、とく迎へとりたまはずなりにけること悔しう、水の音の聞こゆるかぎりは心のみ騒ぎたまひて、骸をだに尋ねず、あさましくてもやみぬるかな、

(蜻蛉巻⑥二三七頁)

とあるが、心理面のみである。「水の音の聞こゆるかぎりは心のみ」というように、時間的にも物理的にも限定されたものである。

iii 光源氏・内大臣

主人公である光源氏や内大臣(頭中将・致仕大臣)にも「騒ぐ」例は見られる。

源氏については、夕顔の死の折（夕顔巻①一六七頁）や亡き藤壺の夢を見た折（朝顔巻②四九五頁）など、胸騒ぎがする場面は見られるが、多くは、自身が騒ぐこと、また周囲が騒ぐことを抑制する、理性的な人物として描かれている。

動作としての「騒ぐ」が見られるようになるのは、壮年期以降^㉔、特に若菜上巻以降である。とはいえ、明石中宮の出産前（若菜上巻④一〇三頁）や、紫の上の発病（若菜下巻④二二三頁）、危篤から蘇生した折（二三五頁）という限られた場面である。しかも、「思し騒ぐ」という行動で、心情的な意味合いが強い。

対する内大臣も、騒ぐ行動がよく見られるようになるのは、壮年期以降（少女巻以降）である。親として子（雲居雁・近江の君・柏木）の行動に感情を顕わにし、騒ぐようになる。夕霧と雲居雁の逢引が発覚し仲を裂かれたことは、度々「騒がる」という受身形をもつて語られている（五例）。夕霧と雲居雁にとっては、降って湧いたような「騒ぎ」であることが強調される。二人の仲に対して、主として騒ぎ立てるのは内大臣である。また、悩乱した柏木の容態を心配し、騒ぐ様子も度々描かれる。

他に親として騒ぐ様子が見られるのは、源氏（明石中宮の父として）や、宇治十帖では明石中宮（匂宮の母として）、中将の君（浮舟の母として）、前述した常陸介（実娘の父として）である。理性的な人物であっても、子のためには騒がずにいられないとも読めるが、内大臣の騒ぎようは当事者の心境に構うことのない、軽薄な印象がある。内大臣の性格について先行研究に述べられるような「単純」で「直情径行型」という人物造型^㉕にもつながる。

iv 自然

人ではない自然が騒ぐ状態についても言及しておきたい。自然に関わる「騒ぐ」例は、若菜上下巻や手習巻に

も見られるが、ほとんどが賢木巻から明石巻と、野分巻に集中している。用法としては、大きく二つに分けられる。「^④実際に風や雷などが騒ぎ、天変地異が起こる様子」と「^⑤天変地異により人々が騒ぐ様子」である。まず、須磨終盤から明石巻にかけて起こる嵐を見てみよう。

〔5〕にはかに風吹き出でて、空もかきくれぬ。御祓もしはず、^⑥立ち騒ぎたり。肱笠雨とか降りきて、いとあわたたしければ、みな帰りたまはむとするに、笠も取りあへず。

(須磨巻②二一七頁)

〔6〕なほ雨風やまず、雷鳴り静まらで日ごろになりぬ。いとどものわびしきこと数知らず、来し方行く先悲しき御ありさまに心強うしもえ思しなさず、いかにせまし、かかりとて都に帰らんことも、まだ世に赦されもなくは、人笑はれなることこそまさらめ、なほこれより深き山をもとめてや跡絶えなまし、と思すにも、浪風に^⑦騒がれてなど人の言ひ伝へんこと、後の世までいと軽々しき名をや流しはてん、と思し乱る。

(明石巻②二二三頁)(イ2)

〔5〕は、突然暴風雨に見舞われ、人々が騒いでいる様子である。明石巻巻頭の〔6〕では、降りやまない雷雨に、源氏も心弱くなっている。が、ここで騒ぐことは、後の世まで「軽々しき名」を流すことになると考え、源氏は思い乱れつつ自制する。一・iiiで述べた理性的な源氏の姿が表れている場面といえる。

〔7〕その年、朝廷に物のさとししきりて、^⑧もの騒がしきこと多かり。三月十三日、雷鳴りひらめき雨風^⑨騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御気色いとあしうて睨みきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことども多かり。源氏の御事なりけんかし。(朱雀帝ハ)いと恐ろしういとほしと思して、后(弘徽殿太后)に聞こえさせたまひければ、弘徽殿太后「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞはべる。軽々しきやうに、思し驚くまじきこと」と

聞こえたまふ。

(明石巻②二五一頁)

さらに、天変の騒ぎは続き、朱雀帝の御代を不穏なものにする。故桐壺院の幻まで現れる。弘徽殿太后は、故桐壺院の幻を、荒天、つまり「雨風騒がしき夜」のせいとして、朱雀帝の対応を「軽々し」と咎める。「6」の、源氏の「騒ぎ」に対する反応と対比される。源氏は須磨で、暴風雨の「騒ぎ」に遭遇しているが、故桐壺院の夢を見た折には、「よくぞかかる騒ぎもありけると、なごり頼もしううれしうおぼえたまふこと限りなし。」(明石巻②二三〇頁)と、天変も自身にとって意味あることと考えている。朱雀院方では、その後も太政大臣薨去に続き、弘徽殿太后にも「物の怪」や「物のさとし」の影響があり、ついに源氏は帰京を赦される。「騒ぎ」は源氏方と朱雀帝方双方に起こるが、その結果や反応は対照的で、源氏方に優位に働く。

次に、野分巻で起こった野分についても見てみよう。

「8」年ごろかかること(紫ノ上ヲ見ル機会)のつゆなかりつるを、風こそげに巖も吹き上げつべきものなり
 けれ、さばかりの御心ども(用心ノ行き届イタ人々ノ心)を^㉞騒がして、めづらしくうれしき目を見つる
 かな、とおぼゆ。

(野分巻③二六六頁)

「9」^{大宮}「ここらの齢に、まだかく^㉟騒がしき野分にこそあはざりつれ」と、ただわななきにわななきたまふ。

(野分巻③二六八頁)

「8」の夕霧の心中によると、あまり花に心を止めない人や普段は心を騒がせない人の心まで騒がせるほどの激しい野分であるという。大宮さえ、「9」でこれまで経験したことがないと語るほどである。人々の常になく騒ぐ隙が、夕霧の紫の上垣間見の機会を作り出した。視点となる人物である夕霧^㊱によって、「8」のように解釈されていることが、周囲の騒がしさと垣間見との関連性を裏付ける。

このような「騒ぐ」を、世の中の空気の動きとして捉えたとき、「騒ぎ」として度々話題に上る過去の事件が注目される。主に二つある。一つは、前述の夕霧と雲居雁の恋が発覚し、父内大臣らによって仲を裂かれたこと、もう一つは、源氏と朧月夜の君の密会が発覚し、源氏が須磨へ退去した一連の事件（またはその一部始終）である⁽⁸⁾。

後者について「世の騒ぎ」などと後に取沙汰される例は、全体で七例見られる。特に、須磨帰京後の潯標巻とその並びの巻々、また若菜上巻で源氏が朧月夜の許を訪問する場面で、当事者の二人や朧月夜の女房である中納言の君の心中で回顧されている。この事件の発端を見ると、次のように雷が鳴り、人々が騒ぐ様子が描かれる。

「10」大臣（右大臣）はた思ひかけたまはぬに、雨にはかにおどろおどろしう降りて、雷いたう⁽⁹⁾鳴りさわぐ
 暁に、殿の君達、宮司など⁽¹⁰⁾立ちさわぎて、こなたかなたの人目しげく、女房どもも怖ぢまどひて近う集
 ひまゐるに、いとわりなく出でたまはん方なくて、明けはてぬ。御帳のめぐりにも、人々しげく並みゐた
 れば、（源氏ハ）いと胸つぶらはしく思さる。

（賢木巻②一四四頁）

周囲が騒ぎ、集まってくることで、源氏は外に出られないまま夜が明ける。雷雨が鳴り止んだ頃、右大臣が朧月夜の許を訪れ、源氏を見つける。朧月夜との仲が右大臣方に露顕したことが直接的な原因となって、源氏は須磨へ退去する。須磨退去中の天変地異の騒ぎについては前述の通りである。騒がしさは事件の発覚につながり、大きなうねりとなって、物語展開に影響を及ぼしている。

三 「騒ぐ」ことによる作用

騒ぐ主格が、事象の周囲の人物に多いことは、第二節で述べた。周囲が騒ぐと、どのような作用があるだろうか。視点や視線の動きに注目すると、(一) 行動の抑制 (二) 行動の促進 (三) 静かさの強調 (四) 大きく三つに分類できる。具体的に見ていこう。なお、「騒ぐ」ことによる作用それぞれについて、図示したものを付す。

i 行動の抑制

周囲から中心人物が注目される、また、周囲が騒がしいことで、中心人物の行動が抑制される。周囲が騒ぐ状況を脱したい中心人物は、周囲を警戒したり避けたりする。

〔10〕の朧月夜との密会の場面で、周囲の騒がしさから、源氏は外へ出られなくなっていた。他の密会場面では、騒ぎ始めた周囲の存在によって別れを余儀なくされている。

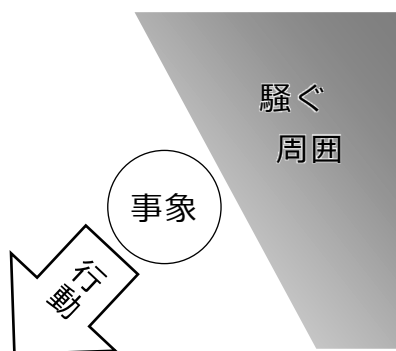
〔11〕ことと明くなれば、障子口まで送りたまふ。内も外も人騒がしければ、(襖ヲ)引き立てて別れたまふほど、心細く、隔つる関と見えたり。

(帚木卷①一〇四頁)(イ3)

〔12〕わづらはしく思ふことならずは、何かつつまむ。もし、すかいたまふか」とも言ひあへず、人々起き騒ぎ、上の御局に参りちがふ気色どもしげく迷へば、いとわりなくて、扇ばかりをしるしに取りかへて出でたまひぬ。

(花宴卷①三五八頁)

〔13〕若うをかしき声なれど、誰ともえ思ひたどられず、なまむつかしきに、化粧じ添ふとて、騒ぎつる後見



ども、近う寄りて人騒がしうなれば、いと口惜しうて立ち去りたまひぬ。

(少女卷③六二頁)(イ4)

〔11〕は源氏が空蟬と契りを交わした明け方、〔12〕は源氏と朧月夜との初めての逢瀬で扇を交換して別れる場面、〔13〕は夕霧が惟光の娘(藤典侍)に懸想した場面である。いずれも周囲の騒がしさが別れを誘引し、逢瀬は終了する。

また、逢瀬の場面以外でも、騒がしさに急き立てられるように、中心人物の行動が決まる例が見られる。

〔14〕桂の院に人々多く参り集ひて、ここにも殿上人あまた参りたり、御装束などしたまひて、源氏「いとほし
たなきわざかな。かく見あらはさるべき隈にもあらぬを」とて、騒がしきに引かれて出でたまふ。

(松風卷②四一五頁)

〔15〕まほにめやすくものしたまひけりと心とまりぬれど、「御車率て参りぬ」と、人々騒がしきこゆれば、
宿直人ばかりを召し寄せて、薫「帰りわたらせたまはむほどに、かならず参るべし」などのたまふ。

(橋姫卷⑤一五〇頁)(イ5)

〔14〕では、源氏が大堰邸を訪れていた折、近くの桂の院に、冷泉帝をはじめ人々が集まっている。「軽々しき隠れ処」(四一八頁)とする大堰邸にも、殿上人が多く参上する。源氏は、大堰邸が騒がしい場となることを阻止するため、桂の院に出向かざるを得ない。〔15〕の薫は、まだ宇治に留まりたいと思うが、従者たちが出発を催促するため、やむを得ず帰京する。

さらに、賢木巻で朱雀帝が病床の桐壺院を見舞う際には、「春宮も、一たびにと思しめしけれど、もの騒がしきにより、日をかへて渡らせたまへり。」(賢木巻②九六頁)(イ6)とある。東宮はもの騒がしさから、見舞いの日程をずらしている。少女巻では、紫の上や花散里が完成した六条院に移る中、「騒がしきやうなりとて、中宮はすこし延べさせたまふ。」(少女卷③八〇頁)(イ7)とあり、秋好中宮は騒がしさによって転居の日を延期させ

ている。つまり、高貴な人々は騒がしくなることを避けようとする傾向がある。

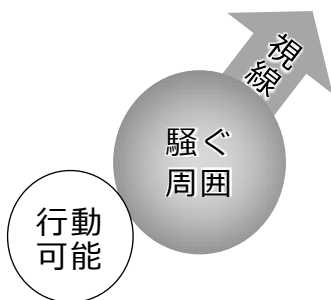
行事などの忙しなさを理由に、なかなか逢いに行けない状況も描かれる。特に、薫は、「さわがしきほど過ぐして参でむと思す。」（権本卷⑤一八四頁）、「公私もの騒がしきころにて、五六日人も奉れたまはぬに、」（総角卷⑤三一五頁）などと七例見られる。源氏が年中行事や儀式で「（もの）騒がし」とする例もあるが、薫は七例中六例が宇治行きに関わる。薫の場合、騒がしい時期を過ごしてから宇治を訪れようとする、あるいは、京（または石山寺）での騒がしさから宇治に行けない、という限定された用法である。残る一例も、「内宴など、もの騒がしきころ過ぐして」（早蕨卷⑤三四八頁）、匂宮を訪れ、亡き大君への忘れがたい思いを訴え、宇治の様子を語り合う場面であり、同じく宇治に関わる。

このように、貴族など品位を弁えた人々にとって、騒がしさは避けるべきものであり、自身が騒ぎの中心になることもよしとしない。『源氏物語』では、騒ぐ周囲と一緒にあって、中心人物が騒ぐ例も見られない。中心人物は、常に世間と距離をとって生活しようとする。そのため、これらの人々の行動は抑制されるのである。

ii 行動の促進

次に、周囲が騒ぎ、視線が別の方向に向かう例を挙げる。中心人物は、その隙をついて、大胆な行動が可能となっている。

〔16〕宰相（夕霧）もあはれなる夕のけしきに、いとどうちしめりて、「雨気あり」と人々の騒ぐに、なほながめ入りてみたまへり。（内大臣ハ）心ときめきに見たまふことやありけん、袖を引き寄せて、内大臣「などか、いとこよなくは勘じたまへる。今日の御法の縁をも尋ね思さば、罪ゆるしたまひてよや。残り少なく



なりゆく末の世に、思ひ棄てたまへるも、恨みきこゆべくなん」とのたまへば、

(藤裏葉卷③ 四三三頁)

大宮の一周忌で極楽寺に詣でた場面である。雨が降りそうな様子で人々が騒ぎ、周囲の視線から疎外されたところで、夕霧は、「なほながめ入りてゐたまへり」と、周囲の視線とは別方向に視線を送る。ぼんやりと物思いにふける夕霧に、内大臣は語りかける。これまで雲居雁との仲を認めず、寧ろ積極的に仲を裂いた内大臣にとって、自分が若き夕霧に折れることは、ばつが悪い。しかし、夕霧の縁談の噂に焦り、「わが御方さまにも人笑はれに、おのづから軽々しきことやまじらむ、」(四三一頁)と、世間の物笑いとなり、格式を落とすようなことになる前に、屈服することを決めた。ただし、「とかく紛らはして、なほ負けぬべきなめり、と思しなりぬ。」(四三二頁)とあることから、屈服するにしても、世間から目立たないようにして、と内大臣は考えている。雨で周囲の視線が拡散しているこの場だからこそ、内大臣は夕霧と和解する機会を作ろうとする。

二・iでは、逢瀬の終了の折に、騒ぐ周囲が描かれていることを述べた。垣間見や密事が、騒ぐ周囲の間隙に行われている例もある。例えば、柏木が女三の宮を垣間見る場面でも、周囲が騒いでいる様子が描かれている。

〔17〕御几帳どもしどけなく引きやりつつ、人げ近く世づきてぞ見ゆるに、唐猫のいと小さくをかしげなるを、すこし大きな猫追ひつづきて、にはかに御簾のつまより走り出づるに、人々おびえ騒ぎてそよそよと身じろきさまよふけはひども、衣の音なひ、耳かしがましき心地す。

(若菜上卷④ 一四〇頁)

人々が猫に注目し、「おびえ騒ぐ」ことと、柏木が女三の宮を垣間見る隙が生じる。

〔18〕ここにやあらむ、人の衣の音すと(薰ハ)思して、馬道の方の障子の細く開きたるより、やをら見たまへば、例、さやうの人のゐたるけはひには似ず、はればれしくしつらひたれば、なかなか、几帳どもの立てちがへたるあはひより見通されて、あらはなり。氷を物の蓋に置きて割るとて、もて騒ぐ人々、大人三

人ばかり、童とゐたり。

(蜻蛉卷⑥二四八頁)

〔19〕こなたの対の北面に住みける下臈女房の、この障子は、とみのことにて、開けながら下りにけるを思ひ出でて、人もこそ見つけて騒がるれと思ひければ、まどひ入る。この直衣姿を見つくるに、誰ならん心騒ぎて、おのがさま見えんことも知らず、簀子よりただ来に來れば、(薫ハ)ふと立ち去りて、誰とも見えじ、すきずきしきやうなりと思ひ隠れたまひぬ。

(蜻蛉卷⑥二五〇頁)

〔18〕は、御八講が終わった夏の夕方の場面で、薫は釣殿で涼んでいると、人の衣ずれの音がする。障子が細く開いている所からそつと見てみる。御八講の後の模様替えのためにいつもより片付いており、かえって立てちがえた几帳の間から中がよく見通せる。薫の視線の先には、女房らが氷を持って騒いでいる。こうした場と人の状況により、薫は女一の宮を垣間見ることが可能になる。

ただし、〔19〕のように、薫の垣間見の終わりも「騒ぎ」が要因となっている。つまり、下臈の女房が、障子を開けたままにしていた失敗を、人に見つけられたら騒がれてしまい大変と、慌てて戻ってくる。女房は直衣姿の影を見つけ、誰かが覗いていたのではと胸騒ぎがする。薫は立ち去るしかない。この場面では、垣間見できる状況も、垣間見をやめさせる状況も、周囲の騒ぐ行動により決定されている。垣間見の開始はへi 行動の促進の作用であり、終了はへi 行動の抑制の作用であるといえよう。

また、〔20〕では、明石中宮の見舞いに、上達部らが多く集まり騒がしくしている。

〔20〕宮(明石中宮)、例ならずなやましげにおはすとて、宮たちもみな参りたまへり。上達部など多く参れ集ひて騒がしけれど、ことなることもおはしませず。かの内記(大内記)は政官なれば、おくれてぞ参れる。この御文も奉るを、宮(匂宮)、台盤所におはしまして、戸口に召し寄せて取りたまふを、大将(薫)、

御前の方より立ち出でたまふ側目に見通したまひて、切にも思すべかめる文のけしきかなと、をかしさに立ちとまりたまへり。

(浮舟卷⑥ 一七一頁)

大勢の視線が明石中宮の容態に向かう中で、匂宮は大内記から文を受け取る。浮舟からの文である。人は大勢集まっているものの、視線が別方向を向いているからこそ、受け取りが可能になる。さらに、匂宮は誰も見えないと安心していう中で、薫が匂宮の様子に気づく。周囲の視線が注がれない中で、浮舟の文を見る匂宮を、薫が見ているという二重構造になっている。中心人物は、周囲の視線と異なる物に視線を送り、その近くにいる主要人物も、同じように周囲の視線とは異なる所に目を留めるのである。周囲の騒がしさが、中心人物たちを異なる空間に切り離し、特別な場を作り出している。

さらに、病者の周囲の者が騒ぐ例として、柏木巻を挙げておきたい。

〔21〕大臣は、かしこき行者、葛城山より請じ出でたる、待ちうけたまひて、加持まゐらせむとしたまふ。御

修法、読経などいとおどろおどろしう騒ぎたり。(中略)

柏木 「いであな憎や。罪の深き身にやあらむ、陀羅尼の声高きはいとけ恐ろしくて、いよいよ死ぬべくこそおぼゆれ」とて、やをらすべり出でて、この侍従と語らひたまふ。

大臣は、さも知りたまはず、うちやすみたと人々して申させたまへば、さ思して、忍びやかにこの聖と物語したまふ。

(柏木巻④ 二九二頁)

一、iiiでも述べたように、柏木の父致仕大臣は、柏木の容態悪化を騒ぎ立てていた。柏木は落葉の宮の許から親元に戻される。父大臣は病氣平癒のため、あらゆる行者や験者、陰陽師などを召し、加持祈禱をさせている。その一方で、柏木は小侍従を介して女三の宮に歌を贈る。小侍従は女三の宮から返事を得て、父大臣の知らない

間に、柏木に渡す。柏木は、父大臣が手を尽くして呼び寄せた聖の陀羅尼の声さえ憎らしく思い、逃れ出る。つまり、父大臣が「騒ぐ」ことにより、柏木が女三の宮と通じる隙が生まれているのである。

他に、騒がしさの合間を縫って交流することで、相手への強い気持ちが見える例もある。明石巻において、源氏が明石を出立する日、明石の君からの歌に対し、「騒がしけれど、」（明石巻②二六九頁）と、源氏は慌ただし中で返歌する。藤裏葉巻でも、夕霧が、賀茂祭の使いになつていた藤典侍（惟光の娘）をねぎらい、歌を贈る。藤典侍は「いともの騒がしく、車に乗るほどなれど、」（藤裏葉巻③四四八頁）（イ8）返歌を贈る。夕霧と雲居雁との結婚が決まり、藤典侍にとっては穏やかならぬ気持ちでいたのだが、この返歌に夕霧は心憎く思い、結婚後も関係が絶えてしまうことはない。

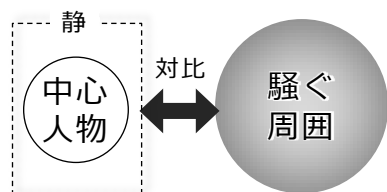
以上のように、騒がしさにより、周囲の視線の隙を縫った中心人物たちの行動は、促進されている。へi 行動の抑制が人間関係や物語展開の終結の場面であるのに対し、へii 行動の促進では、周囲の視線が拡散していることで、主要人物の人間関係をつなぎ、新たな物語を生み出している。

iii 静かさの強調

騒ぐ人々の一方で、冷静な人々や閑静な場が描かれる。これらが対照的に描かれることで、静かさがより際立つ。

例えば、「22」には、源氏が帰京して世の人々が喜び騒ぐ中、源氏から忘れ去られた末摘花が描かれる。

「22」さるほどに、げに世の中に赦されたまひて、都に帰りたまふと天の下のよるこびにて立ち騒ぐ。我もいかで人より先に深き心ざしを御覧ぜられんとのみ思ひきほふ



男女につけて、高きをも下れるをも、人の心ばへを見たまふに、(源氏ハ)あはれに思し知ることさまざまなり。かやうにあわたたしきほどに、さらに(末摘花ノコトヲ)思ひ出でたまふ気色見えで月日経ぬ。

(蓬生卷②三三四頁)(イ9)

世の中の騒ぎ声が響くことで、源氏の訪れもなく没落していく一方の末摘花を、より惨めなものにする。

〔23〕わが御殿の、明け暮れ人繁くても騒がしく、幼き君たちなどすだきあわてたまふにならひたまひて、(一条宮ハ)いと静かにもあはれなり。

(横笛卷④三五二頁)(イ10)

普段夕霧が暮らす三条邸では、いつも人の出入りが多く、幼い子が群がり騒がしい。その三条邸からやってきた〔23〕の夕霧には、一条宮の静かさがより好ましく感じられる。場が対比され、評価されることは、そこに住む落葉の宮の好印象にもつながる。夕霧は落葉の宮を思慕するようになる。

〔24〕^{供人}「網代は人騒がしげなり。されど氷魚も寄らぬにやあらん、すさまじげなるけしきなり」と、御供の人々見知りて言ふ。あやしき舟どもに柴刈り積み、おのおの何となき世の営みどもに行きかふさまどもの、はかなき水の上に浮かびたる、誰も思へば同じごととなる世の常なきなり。我は浮かばず、玉の台に静けき身と思ふべき世かはと思ひつづけらる。

(橋姫卷⑤一四九頁)(イ11)

〔24〕は、自身の過去を知っていそうな弁の君の昔語りを聞き、うちとけた態度を見せない大君と歌を贈答した後の場面である。薫の供人が網代の様子を気にかけることで、皆の視線はそちらに向けられる。薫も網代の騒がしさに耳を傾けるが、周囲とは異なり、自分の中で考えを巡らせ始める。「水の上に浮かびたる」漁師たちの生活にはかなさを感じ、我が身は「浮かばず、玉の台に静けき身」でありながら、同じく無常観に苛まれる。『弄花抄』は「薫玉の台に住て水の上にかはね共思へはかなしき事なりと也」、『細流抄』は「我はしつのはななどは

せされともさりとしてそれを至極とも思ふべきにあらすいづれもおなじかりの世といへる也」と注する。離れた所から聞こえる騒がしさが薫の孤独感を一層強めている。「21」の柏木も同様のことがいえるだろう。

〔25〕かく、やむごとなき御心どもに、かたみに限りもなくもてかしづき騒がれたまふ面だたしさも、いかなるにかあらむ、心の中にはことにうれしくもおぼえず、なほ、ともすればうちながめつつ、宇治の寺造ること急がせたまふ。

(宿木卷⑤四七七頁)

〔25〕は薫が女二の宮を三条宮に迎えようとする場面である。女二の宮降嫁が、今上帝や女三の宮から支援されることは晴れがましいことだが、薫に嬉しさはない。うわの空で、ただ宇治の御堂造立に心を傾ける。宇治の御堂は、もともと亡き大君の人形を据えたいという薫の願いによるもので、薫は京にいらながらも、宇治に思いを馳せる。

物語最後の女君である浮舟も、騒ぐ人々に囲まれている。特に、失踪後、浮舟の「死」を悲しみ騒ぐ人々が再三描かれるが、ここでは〔26〕〔27〕を挙げ、失踪の前後を比較してみたい。

〔26〕心知りたるかぎり(右近ヲ、浮舟ト匂宮ノ関係ヲ知ル者)は、みなかく思ひ乱れ騒ぐに、乳母、おのが心をやりて、物染め営みゐたり。

(浮舟卷⑥一八二頁)(イ12)

〔27〕乳母よりはじめて、あわてまどふこと限りなし。思ひやる方なくてただ騒ぎあへるを、かの心知れるどち(右近・侍従)なん、いみじくものを思ひたまへりしさまを思ひ出づるに、身を投げたまへるかと思ひ寄りける。

(蜻蛉卷⑥二〇一頁)

浮舟巻において、薫は匂宮と浮舟の関係を知ったことで、宇治の警固を厳しくした。薫の行動を聞いた浮舟は

苦悩し、死にたいとまで思う。浮舟と匂宮の関係を知る右近や侍従などは、思いつめる浮舟を気遣いながらも、「26」のように、「思ひ乱れ騒ぐ」。それに対し、事情を知らない乳母は、浮舟の上京準備に執心している。一方、浮舟失踪後の「27」では、右近や侍従以外の女房は事情が分からないため、ただ騒ぐしかない。浮舟失踪前後で、騒ぐ・騒がない人物が反対になっている。

したがって、騒がしさと冷静さが対比されることで、より冷静さが強調されている。騒がしさが周辺人物の描写であり、中心人物は周辺人物とは距離を置こうとしているからである。周囲が騒がしいことで、中心人物は自身の内面を含め、より静かな空間へ入り込んでいこうとする。

四 中心人物と周囲の関係

「騒ぐ」という動作は、不意の出来事によって、通常の状態が乱されることが多い。突発性に対処できず、大きな声を出し、身体を揺り動かして直情的に表現するしかない。この理性を失った行動は、都人の価値観を弃えない地方出身者や社会秩序を解さない乳児に見られるように、侮蔑の意味が込められる。騒ぐ行動が集団になった時、中心人物との対立はさらに明確になる。

高貴な人物は自身の体面を守るために周囲の視線を避ける。騒がしさと交わらないように警戒することで、中心人物の行動は抑制されるのである。

周囲の騒がしさと中心人物とは、常に対比的に描かれる。これにより、周囲の者の不理解を露呈するとともに、中心人物に焦点が当てられ、冷静さを保つ中心人物の心中が明らかになる。中心人物の心境は、直情的な周囲と対立し、隔絶されたところで、より深く複雑に描かれる。

ただし、子や愛しい人の緊急事態では、源氏など高貴な人物でも、一人の人間として騒がざるを得なくなる。普段退ける行動に出るほどの、深い愛情が窺えるが、時に親さえも騒がしい周囲の一部となる。中心人物は騒ぐ親と距離を置こうとする。

高貴な人物は、騒がしい周囲の視線に晒される存在である一方、周囲が騒ぐことで、視線の間隙が生じることもある。それは、垣間見などの行動を促進させ、物語を新たに切り拓く。周囲に見咎められる危険性と隣り合わせであることで、緊迫感を生み、相手への強い執着が伝わる。

周囲の騒がしさは、相容れない中心人物の視点と対置されることで、中心人物の心情により深く立ち入ることができる。周囲の視線と中心人物との関係は、中心人物の心情と現象を表面化させ、物語を縦横に展開させていく力を持つのである。

校異（イ） ※以下、「騒ぐ」に関わる異同のみ、『源氏物語大成』により校異と諸本略号を記す。

- (1) しつらひーナシ【別】御保
- (2) さはかれてーさはかされて【青】横陽三【河】平大尾
- (3) 人さはかしかければー人さはかしうあはたゝしければ【河】河【別】国
- (4) さはきつるーさはききつる【青】肖ーそゝきつる【河】河【別】讚陽保ーとかくさはきつる【別】麦阿、人さはか
しうー人しけう【河】河【別】陽保ー人けう【別】讚
- (5) さはかしきこゆればーさはかしかければ【別】宮保国麦阿ー物さはかしかければ【別】横
- (6) ものさはかしきによりーものさはかしかるへきにより【河】河【別】陽ーものさはかしかるへきより【別】御ーさは
かしかるへしとて【別】相ーさはかしかるへきによりて【別】国
- (7) さはかしきーものさはかしき【河】河【別】讚陽保国
- (8) 物さはかし【底本大島本】ーものさはかしく【青】御横池肖三【河】河ー物さはかしく【別】
- (9) たちさはくーたちさかく【青】御ーへたち補入ゝさはく【青】横ーたちさはくを【別】
- (10) 人しけくて物さはかしくーひとさはかしく【別】保ー人しけくものさはかしく【別】飯麦阿
- (11) 人さはかしかけなりされとーものさはかしかけなりされと【別】保ー人のさはかしかけれとも【別】麦阿

(12) さはく—いひさはく【別】宮—いひさはく【別】国

注

- ① 京都大学文学部国語学国文学研究室編『新撰字鏡 天治本 附・享和本・群書類従本』臨川書店 一九六七年十二月
- ② 「騒ぐ」についての論考としては、土居裕美子氏「平安・鎌倉時代における「さわぐ」を構成要素とする複合動詞語彙」『鎌倉時代語研究』二二三 武蔵野書院 二〇〇〇年十月)があるが、複合動詞について論じたもので、語義を考察するものは見出せなかった。
- ③ 受身形「AがBに騒がれている」の場合、騒いでいるのはBなので、Bを主格として考察した。
- ④ 高橋亨氏(「色」のみの文学)『色』のみの文学と王権』新典社 一九九〇年十月)は、この場面の薫の姿が「柏木と女三宮との密通のうとましき」を重ねた発想であることを指摘し、松井健児氏(『源氏物語』の小児と筍——身体としての薫・光源氏の言葉——)『源氏研究』一一一九九六年四月)は、薫の流す唾液に着目し、薫の誕生が「言葉」によって「秩序化された世界像に対峙するものとしての、より感覚的な世界の、その蠱惑的な生命の力動」と捉え、それが老いを意識する源氏に不安や恐怖を喚起させると述べる。
- ⑤ 蛭巻において、玉鬘の姿を蛭火で蛭宮に見せようと画策する場面で、「まことのわが姫君をば、かくしももて騒ぎたまはじ、うたてある御心なりけり。」(蛭巻③二〇〇頁)とあり、玉鬘が自身の子ではないから、源氏は騒ぎ立てていると捉えることができるが、婉曲表現である。ただし、騒ぐことを「うたてある御心」と語られていることには注目しておきたい。
- ⑥ 武原弘氏「頭中将論—その人物像の変貌と主題との関連性—」(『日本文学研究』一〇 一九七四年十一月)、目加田さくを氏「源氏物語行幸の巻論—内大臣家の人々造型—」(『日本文学研究』二二二 一九八六年十一月)、森一郎氏「頭中将論」(『源氏物語作中人物論集』勉誠社 一九九三年一月)などの論がある。
- ⑦ 野分巻の夕霧の視点人物としての性格については、伊藤博氏「野分」の後——源氏物語第二部への胎動——(『文学』三五・八 一九六七年八月)、三谷邦明氏「野分巻における〈垣間見〉の方法——〈見ること〉と物語あるいは〈見ること〉の可能と不可能——」(『物語の方法Ⅱ』有精堂出版 一九八九年六月)などの論がある。
- ⑧ 他に、一例のみだが、八の宮が巻き込まれた政争も「騒ぎ」(橋姫巻⑤一二五頁)として語られる。

付章二 「ののしる」が及ぼす影響力——「騒ぐ」と比較して——

一 「ののしる」の語義と先行研究

前章において、『源氏物語』中の「騒ぐ」という語に注目し、その作用を考察した。「騒ぐ」の類義語に、「ののしる」がある。『新撰字鏡』にも「聒（公活反護聒也 誼語也 耳孔騒左和久又乃と志留）」とある⁽³⁾。『類聚名義抄』には「聒」の訓として「ノ、シル」が挙げられている⁽⁴⁾。動作を伴う「騒ぐ」に対し、「ののしる」は音声に重点がある⁽⁵⁾。

現代語で「非難する・罵倒する」意として用いられる「ののしる」だが、室町期までの「ののしる」はすべて「大声で騒ぐ」意に集約できると述べるのは、藁谷隆純氏である⁽⁶⁾。評判や噂を立てる意にも用いられる⁽⁷⁾が、大きな声・音を立てる原義から派生したものである。藤原浩史氏はそれらを踏まえ、「伝達力が強い、非対話型の発話行為」という意味をもつ抽象度の高い動詞」と定義づけている⁽⁸⁾。また、関谷浩氏は、上代の「のる（宣る・聒る）」という動詞が、平安期に語形変化する中で、「宣る」のもつ重々しく仰々しい態度が、「大声で言う」意に移行したと語源に言及する⁽⁹⁾。

「ののしる」の語義については首肯される。ただし、類義語「騒ぐ」と比較した時、「ののしる」が選択され記された際の効果については検討の余地がある。本章では「騒ぐ」と比較し、「ののしる」が物語世界の人物の行動・心情にどのような影響を及ぼしているのか、『源氏物語』を中心に考察する。

なお、「ののしる」「騒ぐ」に関わる異同については、引用文末に「(イ1)」のように記し、『源氏物語大成』により校異と諸本略号を後にまとめて掲げた。

二 「ののしる」の持つ影響力

『源氏物語』中の「ののしる」は、複合動詞（「言ひののしる」「ののしりをる」など）を含めて五七例ある。この数は、動詞「騒ぐ」の八一例（複合動詞「泣き騒ぐ」「騒ぎ満つ」などを含む）と比べると三分の一以下である。音声に特化した「ののしる」と、音声・動作を含み込む「騒ぐ」との意味の許容範囲の差が、用例数の差に表れているのだろう。

ではまず、「ののしる」とはどのような印象を与える行動なのかを見ていく。「騒ぐ」が都人の価値観や社会秩序から外れた動作として諧謔的に捉えられることが多かったのに対し、「ののしる」はそうとは限らない。

〔1〕儀式など、常の神事なれど、いかめしうののしる。祭のほど、限りある公事に添ふこと多く、見どころこよなし。

（葵卷②二〇頁）

〔2〕さるは、女二の宮の御裳着、ただこのころになりて、世の中響き宮みののしる。よろづのこと、帝の御心ひとつなるやうに思しいそげば、御後見なきしもぞ、なかなかめでたげに見える。

（宿木卷⑤四七〇頁）（イ1）

〔1〕は、新斎院が立つのに伴い行われる、諸々の儀式の様子である。「いかめし」が共起する例は他にも見られ、儀式の荘厳さを示す。他に「めでたし」「いつくし」「尊し」などと共起する例もあり、「ののしる」が仰々しい雰囲気の中で用いられていることがわかる。〔1〕の直後の御禊の日には、行列を見物する様子が「一条の大路所なくむくつけきまで騒ぎたり」（葵卷②二二頁）と描かれている。重々しさが重視される「儀式」と、庶民たちも大勢見ることのできる御禊の行列とが、対照的に描かれている。また、〔2〕は今上帝女二の宮の裳着の

準備の様子である。女二の宮には後見がないものの、今上帝の意向によって行われる準備は、かえってすばらしく見えるという。表面的なものではなく、今上帝の威厳を含み込んだ本質的な盛大さなのである。「ののしる」は重厚感を纏い、辺り一帯を同様の雰囲気で充満させる影響力を持つ。

このような影響力により、評判を立てる意へと派生する。

〔3〕^{僧都}「この世にののしりたまふ光る源氏、かかるついでに見たてまつりたまはんや。世を棄てたる法師の心地にも、いみじう世の愁へ忘れ、齡のぶる人の御ありさまなり。いで御消息聞こえん」とて立つ音すれば、帰りたまひぬ。

(若紫卷①二〇九頁)

〔4〕一品の宮(女一の宮)の御なやみ、げにかの弟子の言ひしもしろく、いちじるきことどもありて、おこたらせたまひにければ、いよいよいと尊きものに言ひののしる。

(手習卷⑥三四四頁)(イ2)

〔3〕の僧都の言葉は、光源氏が北山を訪れていることを尼君に告げ、源氏が世の評判となる人物であることを示す。世間の声望を集めている受身的な意味にもとれるが、尊敬語「たまふ」を伴うことから、「ののしる」は源氏の能動的な行動である。源氏自身の発する魅力が、世間の評判になっていると捉えているのだろう。源氏を見ると、寿命が延びるような心地がするという。

これに対し、「4」は世間を主語として中心人物である横川の僧都の評判を描く。女一の宮の病を祈禱によって平癒させた功績により、横川の僧都が尊い人物だと評判になる。「ののしる」によって表される影響力は、「3」では源氏から周囲へ拡散し、「4」では周囲の中で伝播しながら横川の僧都へと向かう。中心人物、周囲の、どちらが主語の場合も、「ののしる」ことで、中心人物を俎上に載せる。中心人物に対する評価は、一定の範囲内で画一化される。

勿論、「ののしる」が都人にとってよい意味のみで使われるわけではない。

〔5〕(大君ハ)かの入りたまふべき道にはあらぬ廂の障子をいとよく鎖して、対面したまへり。薫「一言聞こえさすべきが、また人聞くばかりののしらむはあやなきを、いささか開けさせたまへ。いといぶせし」と聞こえたまへど、^{大君}「いとよく聞こえぬべし」とて開けたまはず。

(総角卷⑤二六三頁)

〔6〕守(常陸介)、少将のあつかひを、いかばかりめでたきことをせんと思ふに、そのきらきらしかるべきことも知らぬ心には、ただ、あららかなる東絹どもを、押しまろがして投げ出でつ、食物もところせきま
でなん運び出でて、ののしりける。下衆などは、それをいとかしこき情に思ひければ、君(左近少将)も、いとあらまほしく、心賢くとり寄りにけりと思ひけり。北の方、このほどを見棄てて知らざらんもひがみたらむと思ひ念じて、ただするままにまかせて見ふたり。客人の御出居、侍所としつらひ騒げば、家は広けれど、源少納言、東の対には住む、男子などの多かるに、所もなし、この御方に客人住みつきぬれば、廊などほとりばみたらむに住ませたてまつらむも飽かずいとほしくおぼえて、とかく思ひめぐらすほど、
宮(匂宮邸)にとは思ふなりけり。

(東屋卷⑥四〇頁)(イ3)

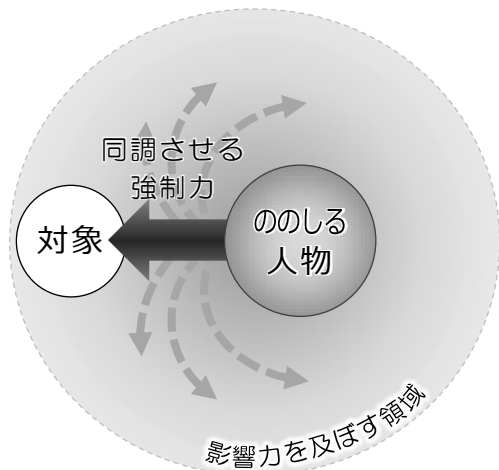
〔5〕では、薫が「ののしる」ことに躊躇を示している。大君は、薫が中の君に鞍替えしたと思ひ込んでおり、中の君の部屋への通路だけは錠を外してある。自室は固く閉ざし、薫とは廂の襖越しに対面する。薫の大君への恋情は変わっていない。薫は襖を開けて語りたいと訴える。薫が「ののし」れば襖に隔てられた大君にも声は届くが、他の女房らにも聞かれる。そのことを憚るだろう大君の心情を利用し、開けさせようとするのである。大君はこのままでもよく聞こえると薫の訴えを一旦はねのけるが、事を穩便に済ませようと、「かばかりも出でたまへる」(総角卷⑤二六四頁)。薫が「ののしる」ことを回避する行動である。その折を逃さず、薫は大君の袖を

とらえ、思いの丈を述べる。薫の述べる「ののしる」とは、大君に向かうものでありながら、周囲にも拡散する威力を持つ。拡散への恐れにより、大君は折れて姿を見せるのだろう。

〔6〕では、常陸介が実の娘婿となる左近少将を歓待している。できる限り豪勢にもてなそうと、東絹や食物を多く運び出す。常陸介が指示する姿が「ののしる」と記される。上流貴族から見れば滑稽な場面ではあるが、下衆や左近少将からは心遣いの行き届いた理想的なもの見え、喜ばれている。常陸介の北の方、中将の君は既に呆れ果て、常陸介の為すがままに任せて傍観している。中将の君はよく思うわけではないが、居合わせた者が快く思う、常陸介の「ののしる」行動の勢いに負け、「ののしる」が発散する雰囲気に取り込まれているといえよう。

ただし、破線部では「しつらひ騒」ぐという表現を用いている。同じく常陸介が左近少将を迎える過剰な支度ではあるが、「しつらひ騒」ぐ中で、浮舟が暮らしていた西の対を明け渡すことを強いられる。部屋を追われた浮舟は、異母姉である中の君が住む匂宮邸（二条院）に預けられることになる。「ののしる」は、周囲の者を取り込もうとする力が働くのに対し、「騒ぐ」は、中心人物の回避行動へとつながっている。

以上のように、「ののしる」は、対象とする人物に一方的に向けられる、鋭い槍のような直線的な大音声である。下に簡単に図示したが、同時にその音声は周囲にも拡散し、その場の空気を一様に感化させる。「騒ぐ」が波紋のように力を及ぼし、中心人物が避けようとする性質とは異なる。



三 「ののしる」が生み出す領域の内外

「ののしる」が音声に特化した語であることは先行研究でも述べられているが、それがわかる効果的な例を確認しよう。「ののしる」ことで、ある雰囲気が充満する。その領域の内部と外部が区別される場合である。次に二例挙げた。

〔7〕近衛府の名高き舎人、物の節どもなどさぶらふに、さうざうしければ、「その駒」など乱れ遊びて、脱ぎかけたまふ色々、秋の錦を風の吹きおほふかと思ゆ。ののしりて帰らせたまふ響きを、大堰には物隔てて聞きて、なごりさびしうながめたまふ。御消息をだにせと大臣も御心にかかれり。

(松風巻②四二一頁)

〔8〕かくののしる馬車の音をも、物隔てて聞きたまふ御方々は、蓮の中の世界にまだ開けざらむ心地もかくやと心やましげなり。

(初音巻③一五二頁)

〔7〕は桂の院での饗応が終わり、帰京する人々の様子である。引出物の桂が「秋の錦」に喩えられるごとく、壮麗たる有様である。帰京する人々の中には源氏もいるが、源氏ら一行の姿は、明石の君からは見えない。明石の君は身分の低さを気兼ねし、大堰に住む。源氏の妻妾として表舞台に立つことは叶わない。「ののしる」響きのみを聞き、「なごりさびしう」物思いに沈む。

六条院での臨時客の盛会を伝える〔8〕でも、行事を見ることができない「御方々」(花散里や明石の君など)が、馬車の音のみを聞き、「蓮の中の世界」に思いを馳せる。「蓮の中の世界」とは、『仏説観無量寿経』に「下品下生者(中略)、於蓮花中、満十二大劫、蓮花方開」とある⁸⁾ように、下品下生の者は極楽往生しても蓮のつぼみの中にいて、花が開くまで十二大劫という極めて長い時を待たねばならない、という考えに基づく。身分の高く

ない花散里や明石の君は、「ののしる」音が聞こえてくることにより、臨時客の場と隔絶された自分の身のほどを思う。

〔7〕〔8〕は、ともに「物隔てて聞」いている。つまり、視覚を遮断され、聴覚によって賑わいを認識している。音を聞くだけの人にとってはその場に参加できない身分差が、「ののしる」という重厚な音によって感じさせられる。「ののしる」音声は遠くまで届くものの、「ののしる」の影響下に置かれるか否かは視覚情報の有無に関わる。見えないが聞こえるという状態が、全くの別世界とはなりきれず、かえって物思いを助長する。

また、「ののしる」音声は、同調した一定範囲の空間を作り出す。その仰々しさが内部を権威化し、外部の者の侵入を拒む。階層意識が顕在化される。〔9〕は犬の吠える声だが、「ののしる」声の外側にいる匂宮は、内側にいる浮舟を想う。

〔9〕宮は、御馬にてすこし遠く立ちたまへるに、里びたる声したる犬どもの出で来てののしるもいと恐ろしく、人少なに、いとあやしき御歩きなれば、すずろならむ者の走り出で来たらむもいかさまにと、さぶらふかぎり心をぞまどはしける。

（浮舟巻⑥一九〇頁）

薫の命により、浮舟に誰も近づけないよう、宇治の邸は厳戒態勢である。『河海抄』は『白氏文集』の「犬は吠えて村胥鬧し」と『和漢朗詠集』巻下所収の都良香の詩「家を守る一犬は人を迎へて吠ゆ」を引く。『和漢朗詠集和談鈔』は、この詩について、「守家一犬者、田家ノ風情也。狗ハ吠レ非^ル其主^ニト云事、老子ノ言也。苞子曰、犬ハ以^{スト}守禦^ヲ云ヘリ」と注しており^⑥、田家の中で犬は主を守る存在だという。犬の「ののしる」声は、浮舟に密かに逢うために宇治に来た匂宮にとつては、恐怖の対象であるが、秩序ある、しつけられた犬の声である。宇治の邸を取り仕切る薫の権限の大きさを示し、「いとあやしき御歩き」である匂宮一行との、この場での力関係が対比される。匂宮と浮舟の仲が薫に知られ、事態は切羽詰まった状況にまで追い込まれている。匂宮は「ののしる」声

の向こうにいるはずの浮舟に想いを寄せながらも、結局逢うことができず帰京する。「ののしる」声の圧倒的な存在感が外部の者に身分差や力の差を実感させ、行動に出られないまま物思いにふける。「ののしる」行動を避けるというよりは、遮断され入ることができない。ただ、動揺するだけである。

では、「ののしる」行動に取り込まれた領域の内部にいる者は、どのように描かれているのだろうか。

〔10〕文など講ずるにも、源氏の君の御をば、講師もえ読みやらず、句ごとに誦じののしる。博士どもの心にもいみじう思へり。かうやうのをりにも、まづこの君を光にしたまへれば、帝もいかでかおろかに思されむ、中宮、御目のとまるにつけて、春宮の女御のあながちに憎みたまふらんもあやしう、わがかう思ふも心憂しとぞ、みづから思しかへされける。

藤壺 おほかたに花の姿を見ましかば露も心のおかれましやは

御心の中なりけむこと、いかで漏りにけん。

(花宴卷①三五五頁)(イ4)

〔10〕は花の宴の一場面である。講師が源氏作の漢詩を披講する。『河海抄』が「只毎句秀逸なる故に数反講頌之間誦しやらす称美したるよし也」と注するように、あまりに立派な詩であるため、講師は一気に読みおおせず一句ごとに噛みしめて誦ずる。「誦ず」に「ののしる」が下接し、大声を張り上げる意が含まれる。源氏の詩のすばらしさは、同座する博士らの心に深く染み入る。「誦じののしる」声によって、同座する者は源氏を称賛する感情を共有する。源氏の作った詩を、講師が「誦じののしる」ことで、この場の中に源氏も取り込まれているといえる。

また、この場には桐壺帝や藤壺中宮も同座し賛嘆している。藤壺中宮については心中密かに詠み、それが漏れ出てしまったという歌まで記される。鈴木日出男氏は「藤壺が、源氏への愛憐の情を自ら制御せねばならぬことを運命の痛恨として思念の基底にたたえることになるのは、それだけ源氏に対する彼女の執着が深く切実である

ことを証して「よう」と述べる⁽¹⁰⁾。藤壺中宮自身、制御せねばならぬと思いつつも、源氏に惹かれずにはおれない強い思いが、露わになっているのである。つまり、「ののしる」により源氏への称賛の眼差しが立ち込めた場の中では、普段は心の内をさらけ出すことをしない藤壺中宮でさえ、源氏への思いを表面化させる。「ののしる」が、中心人物である源氏に注目せずにはいられなくなるのである。

賑やかさの中で全く別のことを考えている例はあるが、次の「11」「12」のように逆接を伴っている。

「11」(源氏八) 道のままに、かひある逍遙遊びののしりたまへど、御心にはなほかかりて思しやる。

(濔標卷②三〇七頁)

「12」宮の御文を、すぐれたりと誦じののしれど、(匂宮八) 何とも聞き入れたまはず、いかなる心地にてかかることをもし出づらむと、そらにのみ思ほしほれたり。

(浮舟卷⑥一四八頁)(イ5)

匂宮の詩作を講師が声高に誦ずる「12」は、「10」と同様の状況である。だが、匂宮はその場にいながらにして、うわの空で浮舟のことばかり考えている。「11」も、源氏が住吉詣からの帰りの一行の中にいて、明石の君のことを気にかけている。「ののしる」集団の中において行動に移すことはないが、心が別のことで埋め尽くされている。通常「ののしる」領域の内部におれば、それに同調するはずとの想定がある。だが、源氏や匂宮は同調していないため、逆接が用いられているといえる。

他方、「騒ぐ+逆接」を確認すると、行動を伴っている。例えば、源氏は明石を発つ朝、狩衣に添えられた明石の君の歌に目を止める。出立前の慌ただしい時で、「騒がしけれど、」(明石卷②二六九頁)返歌をする。祭の使いの藤典侍も、夕霧からの歌に対し、「いともの騒がしく、車に乗るほどなれど、」(藤裏葉卷③四四八頁)(イ6)返歌する。「騒ぐ」中であって普通なら無理だが、無理を押し歌を贈ったという含みを持たせている。基本的には、「いと暗うもの騒がしきほどなれば、またの日、関のあなたよりぞ御返りある。」(賢木卷②九四頁)(イ7)、

「賀茂の祭など騒がしきほど過ぐ、して、二十日あまりのほどに、例の、宇治へおはしたり。」（宿木卷⑤四八七頁）（イ8）のように、「騒がしさ」を避けて交流しようとする傾向がある。「騒ぐ」が行動を制御したり促進したりするのに対し、「ののしる」は直接行動につながるものではなく、心情を動かすものなのである。

四 祈禱する声と効験

『源氏物語』では、死や病が多く描かれる。死や病の周囲にも、「ののしる」行動が描かれている。特に、僧が加持や祈禱^(三)する声を「ののしる」と記す表現が注目される。加持・祈禱・修法・読経・祭・祓において、どのような動詞を用いられているかを見ると、「す」「まゐる」「仕うまつる」「候ふ」「たてまつる」などが多い。参考に三例挙げる。

〔13〕瘡病にわづらひたまひて、よろづにまじなひ、加持などまゐらせたまへどしるしなくて、あまたたびおこりたまひければ、

（若紫卷①一九九頁）

〔14〕年返りぬ。桐壺の御方近づきたまひぬるにより、正月朔日より御修法不断にせさせたまふ。寺々、社々の御祈禱、はた、数も知らず。

（若菜上卷④一〇二頁）

〔15〕^僧「一品の宮（女一の宮）の御物の怪になやませたまひける、山の座主御修法仕まつらせたまへど、なほ僧都参りたまはで験なしとて、昨日二たびなん召しはべりし。（中略）」など、いとはなやかに言ひなす。

（手習卷⑥三三二頁）

〔13〕は源氏が瘡病を患った時に行わせた加持であるが、効験はない。そのため、北山へ行くことになる。〔14〕は明石女御の出産間近の頃である。正月朔日から、源氏は、安産祈願のための修法を絶え間なくさせ、多くの寺社で祈禱も行わせる。しかし、出産直後に急逝した葵の上のことが頭をよぎり、不安で仕方ない。〔15〕は女一の宮の病氣平癒のための修法である。山の座主が修法を行ったものの、下役らしい法師は横川の僧都が参上しなくては効験がないと、参内を求め。これらは基本的に、誰が、いつ、どこで行うかに主眼があり、効験がはっきりとは見えない。その他、「始む」「果つ」「延ぶ」のような動詞も、時間的な局面が重視されている。

それに対して、「ののしる」(六例)や「騒ぐ」(一二例)は、加持や祈禱をどのように行うか、つまり大音声で行うことが強調されている点で、特殊だといえよう。そこで、加持や祈禱が「騒ぐ」「ののしる」と記されるとき、どのような意識が働いているかを確認したい。

先に「騒ぐ」について見ておこう。「騒ぐ」は高貴な人々にとってあまり好ましくない行動として捉えられている。加持や祈禱は病者のために行うものだが、前後に心情が描かれるような視点となる人物が、どのように見えているかが問題である。

例えば、柏木の病氣平癒のために、父致仕大臣はあらゆる所から行者や験者を召し集める。そして、「御修法、読経などいとおどろおどろしう騒ぎたり。」(柏木巻④二九三頁)とある。柏木を助けようと必死な致仕大臣に対して、当人である柏木は陀羅尼の声を恐ろしく思い、その場から「すべり出でて」(同)、小侍従と語らう。柏木は小侍従から、女三の宮の返事を得る。僧たちが行う修法や読経は柏木のためだが、快く思わない柏木の視点に立ち、「騒ぐ」と記されるのだろうか。

視点となる人物は、加持や祈禱を受ける者に限らない。〔16〕は女三の宮の出産前夜の場面である。

〔16〕宮(女三の宮)はこの暮つ方より、なやましようしたまひけるを、その御けしきと見たてまつり知りたる人々騒ぎ満ちて、大殿(源氏)にも聞こえたりければ、驚きて渡りたまへり。御心の中は、あな口惜しや、

思ひまざる方なくて見たてまつらましかば、めづらしくうれしからまし、と思せど、人にはけしき漏らさじと思せば、験者など召し、御修法はいつとなく不斷にせらるれば、僧どもの中に験あるかぎりみな参りて、加持まゐり騒ぐ。

(柏木卷④二九八頁)(イ9)

女三の宮が産気づいたため慌ただしくなる女房たちと加持を行う僧たち、二者の「騒ぐ」行動の間には、源氏の複雑な心情が挟まれている。源氏は生まれてくる子が自身の子でないことを知っており、手放しに喜べない。しかし、その気持ちを周囲に覺られぬように、強いて大仰に僧を呼び、修法をさせる。「騒ぎ満ち」る人々の声が源氏に届き、源氏は女三の宮のもとに渡る。また、不義の子である事実を「人にはけしき漏らさじ」と思う心境が、絶え間ない修法につながり、大勢の僧が集まってくる。「大殿にも聞こえたりければ」「人にはけしき漏らさじと思せば」と、「騒ぎ満ち」た声を聞いた源氏の行動や、源氏の心情が「まゐり騒ぐ」へとつながる流れが、単純接続の「て」や順接確定条件の「ば」で構成されている。源氏の複雑な胸中が、女房らの行動を「騒ぎ満ち」と捉え、僧の行う加持を「まゐり騒ぐ」と認知させるのだろう。

また、病臥する匂宮を見舞った薫は、心中において、世間が匂宮を心配し、修法などをする様子を「騒ぐ」と表現している。

〔17〕見たまふ人とても、なのめならず、さまさまにつけて限りなき人をおきて、これ(浮舟)に御心を尽くし、世の人立ち騒ぎて、修法、読経、祭、祓と、道々に騒ぐは、この人(浮舟)を思すゆかりの御心地のあやまりにこそはありけれ、

(蜻蛉卷⑥二二二頁)(イ10)

世間の大仰な注目が、匂宮の重々しい身分を意識させる。だが、匂宮の病の實の理由は、社会的立場を伴わない浮舟の死によるものである。薫はその事情に感じており、修法などの愚かしさを眺めている。眞の事情を知ら

ず無闇に行われる修法などであるため、「騒ぐ」と表現されるのだろう。つまり、状況を見つめる人物によって、「騒ぐ」と評される加持や祈禱は、無駄、もしくは実情にそぐわず好ましくないと考えられている。

「騒ぐ」が実情に沿わない祈禱であるのに対し、「ののしる」祈禱は基本的に中心人物たちの目的に即したものである。周囲が一体となって病氣平癒や安産を願っている。「ののしる」の直線的な発言力、周囲を同調させる作用と関わるだろう。

〔18〕こなたはただ大きな対二つ、廊どもなむ廻りてありけるに、御修法の壇ひまなく塗りて、いみじき驗者ども集ひてののしる。母君（明石ノ君）、この時にわが御宿世も見ゆべきわざなめれば、いみじき心を尽くしたまふ。

（若菜上巻④一〇三頁）

〔18〕は出産間近の明石女御のための修法である。明石女御は陰陽師の進言で六条院冬の町に移っている。実母である明石の君にとって、この出産は自身の人生、一族の運命をも左右する重大な転機である。生まれてくる子が男皇子なら次代の帝となる。明石入道が夢見た悲願である。それゆえ、自身の宿運を見つめさせる修法の声は、明石の君に重々しく響く。

その重みゆえに、「ののしる」は一定の効果をあげる。〔19〕では、紫の上に取り憑いていた六条御息所の死霊が、紫の上の病氣平癒のための修法や読経の声を「ののしる」と表現し、脅威に感じている。

〔19〕よし、今は、この罪軽むばかりのわざをせさせたまへ。修法、読経とののしることも、身には苦しくわびしき炎とのみまつはれて、さらに尊きことも聞こえねば、いと悲しくなむ。

（若菜下巻④二三七頁）

このように、「ののしる」は効験を期待させる力を持つ。ただし、必ずしも結果を伴うとは言い切れない。一条御息所が突然苦しみ出し息を引き取った際、律師らの行動は「騒がし」や「騒ぎたつ」とともにではあるが、「の

のしる」と記されている。

〔20〕御物の怪のたゆめけるにやと人々言ひ騒ぐ。例の験あるかぎりいと騒がしうののしる。宮をば、「なほ渡らせたまひね」と、人々聞こゆれど、御身のうきままに、後れきこえじと思せば、つと添ひたまへり。

（夕霧卷④四二六頁）（イ11）

〔21〕物の怪なども、かかる弱目にところ得るものなりければ、にはかに消え入りて、ただ冷えに冷え入りたまふ。律師も騒ぎたちたまうて、願など立てののしりたまふ。深き誓ひにて、今は命を限りける山籠りを、かくまでおぼろけならず出で立ちて、壇こぼちて帰り入らむことの面目なく、仏もつらくおぼえたまふべきことを、心を起こして祈り申したまふ。宮の泣きまどひたまふこと、いとことわりなりかし。

（夕霧卷④四三七頁）（イ12）

〔20〕では、一条御息所が夕霧に歌を贈った後、突如苦しみ出したため、人々は物の怪が油断させていたのかと「言ひ騒ぐ」。験力のある法師たちが行う修法は、結果としては効果を上げず、一条御息所は死に至る。ただし、「例の」に効験を期待させる要素がある。この律師は、「物の怪など払ひ棄て」（夕霧卷④三九六頁）たこともある、信頼に足る人物として登場する。「いと聖だちすくすくしき律師」（四一六頁）とも形容されている。比叡山に籠って里には出まいと誓っていたが、一条御息所の要請によって、特別に麓まで下山していた。実際に祈禱を受けた一条御息所は、効験のあったことを喜んでいた。これに対し律師は、「大日如来虚言したまはずは。などてか、かくなにがしが心をいたして仕うまつる御修法に験なきやうはあらむ。悪霊は執念きやうなれど、業障にまとはれたるはかなものなり」（同）と、しわがれた、怒ったような声で、自身の行う修法に対する絶対の自信を表明する。その強い験力が〔20〕でも発揮され「ののしる」と表現されるのだろう。

しかし、一条御息所の病勢急変は、御息所が夕霧と娘落葉の宮の間に実事があったと誤解し、それにもかかわらず夕霧が無責任な態度を取ることを悲嘆したためである。そして、誤解のきっかけを作ったのは、他ならぬ律

師なのである。夕霧が落葉の宮の部屋から出てくるところを見たという法師の話を、律師が一条御息所に伝えたことに端を発する。律師の尊さや能力の高さは認められるものの、齒に衣着せず物を言う性格が仇となり、「騒がし」と捉えられる状況を作っていく。

一条御息所が危篤に陥った「21」では、突然息を引き取ったことに「騒ぎたち」、願などを立てる。確かに願を立てる能力は立派であり「ののしる」と捉えられる。だが、急死による焦りと、山籠りを中断してわざわざ下山したのに失敗できないという虚栄心がないまぜになり、「騒ぎたつ」のだろう。

このように、「ののしる」の持つ重々しさ、仰々しさは、験力の強さを示し、祈禱を受ける者の社会的地位を強調する。その重々しさが、祈禱の結果起こり得る事態を想像させ、「ののしる」声を聞く者の心情を揺さぶる。また、「騒がし」が「ののしる」を修飾することで、視点となる人物にとって不都合な事態を推察させる。

五 物の怪と祈禱の攻防

祈禱は病氣平癒や安産のために行われるが、一方で描写や妊婦に害を為す物の怪のわめく声も、「ののしる」と表現されている。「22」は『紫式部日記』の彰子出産直前の場面である。

「22」今とせさせたまふほど、御物の怪のねたみののしる声などのむくつけさよ。(中略)物の怪にひき倒されて、いといとほしかりければ、念覚阿闍梨を召し加へてぞののしる。阿闍梨の験のうすきにあらざ、御物の怪のいみじうこはきなりけり。宰相の君のをぎ人に、叡効をそへたるに、夜一夜ののしり明かして、声もかれにけり。

『紫式部日記』 一三五頁)

彰子がいよいよ出産という時になって、物の怪が不気味にわめいている。物の怪は憑坐を引き倒すまでの力を持つ。念覚阿闍梨を召し加え祈禱を行うが、物の怪の威力のすさまじさは、一晚中大声で読経し、声がかかるほどであった。「ねたみののしる声」を持つ物の怪の、周囲を支配しようとする力の大きさが見て取れる。物の怪を「ののしる」声によって、ねじ伏せようとする僧らとの攻防の末、彰子は安産で皇子を産む。

『源氏物語』中に物の怪の動作を「ののしる」と表現する例は四例ある。そのうちの二例を次に挙げた。

〔23〕心違ひとはいひながら、なほめづらしう見知らぬ人の御ありさまなりやと爪はじきせられ、疎ましうなりて、あはれと思ひつる心も残らねど、このころ荒だててば、いみじきこと出で来なむと思ししづめて、夜半になりぬれど、僧など召して加持まゐり騒ぐ。呼ばひののしりたまふ声など、思ひ疎みたまはんにとわりなり。

(真木柱卷③三六六頁)(イ13)

〔24〕弟子の阿闍梨とりどりに加持したまふ。月ごろ、いささかも現はれざりつる物の怪調ぜられて、物の怪「中略」「ののしる」。

(手習卷⑥二九四頁)

〔23〕は鬚黒の北の方に取り憑く物の怪の声である。鬚黒は北の方に灰をかぶせられ、今晚玉鬘のもとへ訪問できなくなった。物の怪が原因の乱心ではあるが、疎ましく思わずにはいられない。しかし、腹立たしさを抑え、僧などを召して加持をさせる。鬚黒にとってはただ体面を保つための処置である。心は玉鬘で占められている。それゆえ、「騒ぐ」と語られる。「まゐり騒ぐ」加持をもともせず、物の怪に取り憑かれた北の方の「呼ばひののしる」声が届く。同様に、北の方のための「修法などし騒げど、御物の怪こちたく起りてののしるを聞きたまへば」(真木柱卷③三六九頁)と僧らが「騒ぐ」様子と物の怪の「ののしる」様子が併記されている。「し騒げど」と逆接で語られるように、修法をもともせず、物の怪の「ののしる」声は別室にいる鬚黒に聞こ

えてくる。鬚黒は恐ろしきから近づきたがらない。「23」でも北の方を疎んじることが「ことわりなり」とまで語られる。「ののしる」声の威力が窺える。

また、「24」は浮舟に取り憑いていた物の怪が調伏させられて姿を現した場面である。憑坐に駆り移された物の怪は長々と取り憑いた理由を述べる。物の怪が相手に訴えかける言葉を、「ののしる」と記す。横川の僧都はこの物の怪に対し何者かと尋ねており、言葉を聞く用意があることを示す。

それに対して、物の怪が「もの騒がし」と描かれている場面がある。葵の上が出産した場面である。

「25」ほどなく生まれたまひぬ。うれしと思ふこと限りなきに、人に駆り移したまへる御物の怪どもねたがりまどふけはひいともの騒がしうて、後のことまたいと心もとなし。言ふ限りなき願ども立てさせたまふけにや、たひらかに事なりはてぬれば、山の座主、何くれやむごとなき僧ども、したり顔に汗おし拭ひつつ急ぎまかぬ。

(葵卷②四一頁)(イ14)

六条御息所の生霊が姿を現し、声を静めてまもなく男子(夕霧)が生まれる。一同安堵するが、憑坐に駆り移らせた物の怪がお産を妬ましがっている。その「けはひ」が不安を煽る。接頭語「もの」によって漠然とした焦点の定まらない心情であることがわかる。後産のこともあり、予断を許さない状況であるが、物の怪は勢力を弱め、燻っている状態である。

つまり、物の怪の「けはひ」に対して「もの騒がし」と感じられている「25」に対し、物の怪が「ののしる」時、何かを訴えかける発信力を有する。祈禱により鎮められることはあるものの、「ののしる」声は祈禱をも突き抜けるほど強く伝播し、聞く者の心情を揺さぶるのである。

六 「ののしり騒ぐ」と「騒ぎののしる」

ここまで、「ののしる」と「騒ぐ」の違いについて述べてきた。では、両者の複合語「騒ぎののしる」「ののしり騒ぐ」はどのように解すればよいのだろうか。

「ののしる」が下接する動詞（「ののしる」）を、「程度が甚だしい」意に解せるとする関谷浩氏の説¹²⁾に対して、藤原浩史氏は、そのように解すると「発話行為であることが消滅し、表現の意図のずれや、文意の混乱、状況描写の臨場感の消滅などの問題が生ずる」¹³⁾と指摘する。確かに、音声による一方的な力を「ののしる」は纏っており、周囲の心情に訴えかける発信力は「騒ぐ」とは性質を異にする。ただし、関谷氏の述べるように、「ののしり騒ぐ」と「騒ぎののしる」は弁別して考えるべきであろう¹⁴⁾。

『源氏物語』中に「ののしり騒ぐ」は一例のみで、「騒ぎののしる」はない。平安時代の他作品を確認すると、「ののしり騒ぐ」は『栄花物語』に三例、「騒ぎののしる」は『大和物語』『平中物語』『蜻蛉日記』『紫式部日記』『栄花物語』に各一例見られる。これらの例を確認すると、いずれも意味の重心は後項にある¹⁵⁾。まず、「ののしり騒ぐ」の例を挙げる。

〔26〕内裏に御消息聞こえたまふほどもなく絶え入りたまひぬ。足を空にて誰も誰もまかだたまひぬれば、除目の夜なりけれど、かくわりなき御さはりなれば、みな事破れたるやうなり。ののしり騒ぐほど、夜半ばかりなれば、山の座主、何くれの僧都たちもえ請じあへたまはず。今はさりとともと思ひたゆみたりつるに、あさましければ、殿の内の人物にぞ当たる。

（葵卷②四六頁）

〔27〕日の暮るるままに、法興院の内どよみののしり騒ぎたる有様、あはれに悲し。御参りや御産屋など、たびたびののしりし御いそぎのさまにひきたがへ、悲しきことかぎりなし。

『栄花物語』卷第二十六 楚王のゆめ②五二二頁)

〔26〕は葵の上が急逝した場面である。除目の夜で、皆宮中に出払っていた。その隙をつくような事態である。夜半のことなので、僧侶たちを呼び寄せるの間にも間に合わない。突然の死に戸惑い、皆どうしてよいかわからずうろたえている。〔27〕は嬉子の葬送の場面である。法興院の内では大声を張り上げて泣き騒ぐ人々がいて、しみじみと悲しい。「どよむ」も音が鳴り響く意で、嬉子の死を悲しむ泣き声が法興院の内に立ち込めているが、嬉子の入内や出産準備の時「ののしりし」様子と対比される。話題の人物を中心として、目的に沿った賑やかさを「ののしる」、やり場のない感情が大声に乗り、全体としてざわざわしている様子を「ののしり騒ぐ」と表現する。『栄花物語』の他二例は、定子が産気づいた時の女房らの様子と、嬉子の出産直前に物の怪が数多く現れた様子である。いずれも特定の人物に入れ込み訴えたいというような思いは持たない。大きな音を立ててはいるが、その様子が騒々しいというように、「騒ぐ」の要素が「ののしる」の前面に出ている。

次に、「騒ぎののしる」の例を三例挙げる。

〔28〕五条にぞ少将の家あるにいきつきて見れば、いとみじうさわぎののしりて、門さしつ。死ぬるなりけり。

『大和物語』一〇一 逢はぬにちぎる 三二三頁)

〔29〕鬼やらひ来ぬるとあれば、あさましあさましと思ひ果つるもいみじきに、人は、童、大人ともいはず、「儼やらふ儼やらふ」と騒ぎののしるを、われのみのどかにて見聞けば、ことしも、こことよげならむところのかぎりせまほしげなるわざにぞ見えける。

『蜻蛉日記』中卷 天禄二年十二月 二六八頁)

〔30〕内よりはいつしかと御剣もてまゐり、おほかた御有様心ことにめでたし。世のおぼえことに、騒ぎのしりたり。元方の大納言かくと聞くに、胸ふたがる心地して、物をだに食はずなりにけり。

『栄花物語』巻第一 月の宴①(二五頁)

〔28〕では、公忠が少将からの死を予感させる歌を見て、五条の邸を訪れる。人々が大声を出して騒いでおり、門が固く閉ざされている。それにより、少将が亡くなったことを窺い知る。〔29〕は大晦日の追儼に大声で騒ぐ人々の声である。兼家の行動に苦しむ作者は、追儼に騒ぎ大声をあげている人々が、皆順調な生活をしているように見え、独り追儼を静観する。〔30〕では、安子が村上天皇の第二皇子憲平親王を出産する。政権を握る師輔の娘腹の皇子の誕生に、世間は祝福に湧き立っている。元方の大納言は娘が第一皇子を産んでいるが、「騒ぎののしる」声を聞き、政権への期待が潰れてしまったことを感じる。食事も喉を通らなくなる。「騒ぎののしる」例は全て、「騒ぎののしる」様子を離れた場所から見えており、聴覚が強調されている。遮断された場から響く音声によってその様子を窺い、憂愁の念に埋没していく。これは、「ののしる」の要素が強いためと思われる。用例数としては少ないものの、「ののしり騒ぐ」と「騒ぎののしる」には明らかな違いが認められる。前項の要素に後項が覆いかぶさり、後項の効果が強く発揮されているといえよう。

七 遠ざかる「ののしる」声

「騒ぐ」は中心人物が不都合と感じる心情に伴って語られる。同心円状に影響を及ぼし、その影響を避けようとする人に回避行動を働きかけていく。「騒ぐ」に対し、「ののしる」の発信力は、直線的でありながら、放射線状に、辺り一帯を影響下に取り込み、同調させる。「ののしる」の発する重々しさ、仰々しさによって、「ののしる」が影響を及ぼす領域から外れた者は身分差に苛まれ、身のほどを意識し、自己の世界に埋没してゆく。視覚が遮断され、聴覚のみによって情報が入ってくる時、より効果を発揮する。

また、病者や妊婦の周囲でも同様で、「ののしる」声を受ける者は、「ののしる」が持つ重厚感に心情を揺り動かされる。だからこそ、「ののしる」祈禱は高い験力を示し、物の怪は祈禱をも凌ぐ脅威を示す。

そして、「ののしる」声が去った時、次のように描かれている。

〔31〕夜更けてぞ帰らせたまふ。残る人なく仕うまつりてののしるさま、行幸に劣るけぢめなし。飽かぬほどにて帰らせたまふを、(桐壺院ハ) いみじう思しめす。

大后も参りたまはむとするを、中宮のかく添ひおはするに御心おかれて、思しやすらふほどに、おどろおどろしきさまにもおはしまさで隠れさせたまひぬ。

(賢木卷②九七頁)

東宮と源氏が重態の桐壺院を見舞い、夜更けに退出する。東宮と源氏の一行にすべての人が付き随う様は、行幸にも劣らない仰々しさである。桐壺院は引き止めたく思うが、そのまま一人残される。去りゆく「ののしるさま」が、東宮や源氏との別れを決定的なものとし、「ののしる」領域から疎外される桐壺院は次文で薨去する。「ののしる」声が遠ざかっていくことは、桐壺院が自己の世界の極致、つまり死に至る前兆として描かれるのである。

「騒ぐ」「ののしる」という細かな行動描写の差異ではある。だが、それぞれの行動の特質は登場人物の心情を捉える手立てとなる。その特質が人間関係を表面化させ、物語展開を助けるのだろう。

校異(イ) ※以下、「騒ぐ」に関わる異同のみ、『源氏物語大成』により校異と諸本略号を記す。

- (1) いとなみ―ナシ【別】陽
- (2) いひのゝしる―いひのゝしり【別】陽
- (3) のゝしりける―ける【別】陽
- (4) すしのゝしる―すむしのゝしる【青】肖
- (5) すんし―すし【青】横平肖―すゝへゝミセケチ、し書入【青】三―かうし【別】桃

- (6) 物さはかし【底本大島本】—ものさはかしく【青】御横池肖三【河】河—物さはかしく【別】別
- (7) いとくらうものさはかしく程なれは—くらきほといとさはかしかければ【河】宮—くらきほとにていとさはかしかければ【河】大、ものさはかしく程なれは—さはかしくおほされて【別】御国—ナシ【別】陽—ものさはかしくて
- 【別】相
- (8) さはかしく—物さはかしく【別】阿
- (9) かちまいりさはく—ナシ【別】国
- (10) たちはきて—たちはさき【河】御—さはき【別】陽
- (11) いひさはく—さはく【別】陽保国麦阿
- (12) のしり給—のしる【別】陽保麦阿—のしり【別】国
- (13) よはる—ナシ【別】長、こゑ—さま【別】長—けはひ【別】麦阿
- (14) いと物さはかしくて—いとものさはかしくて【青】横池肖

注

- (一) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『新撰字鏡 天治本 附享和本・群書類従本』臨川書店 一九六七年一二月。天和本・享和本ともに同文。
- (二) 『類聚名義抄』風間書房 一九七八年十二月
- (三) 『岩波古語辞典』には、「類義語サワギは、音・声と動きとが一緒に起る意」とある。
- (四) 藁谷隆純氏「『ののしる』考」(『日本文学研究』一九一九八年二月)
- (五) 参考までに、『角川古語大辞典』が掲げる「ののしる」の語義を挙げておく。
- ① やかましく騒ぐ。大声でわめく。② 物音や動物の鳴き声などが響き渡る。どよめく。③ 盛んに噂する。大げさに騒ぎ立てる。④ はぶりを利かせる。時めく。⑤ となり散らす。大きな声で悪口を浴びせる。
- (六) 藤原浩史氏「平安和文における「ののしる」の意味構造」(『日本語の歴史地理構造』明治書院 一九九七年七月)
- (七) 関谷浩氏「動詞「ののしる」の考」(『野州国文学』一六 一九七五年十二月)
- (八) 「大正新脩大蔵経テキストデータベース」により、私に読点を施した。
- (九) 『和漢朗詠集古注釈集成』第三卷 大学堂書店 一九八九年一月
- (十) 鈴木日出男氏「公人と私情——光源氏論③」(『講座源氏物語の世界』第二集 有斐閣 一九八〇年十月)
- (十一) 重松信弘氏『源氏物語の仏教思想』平楽寺書店 一九六七年八月によると、加持と祈禱の違いは大きく分けて、①行われる場の相違(加持は受ける枕頭か隣室の近接した場一箇所、祈禱は近接した場・遠隔地かわららず多くの場で行われる)、②行われることの意味の相違(加持は疾病・横死など身心に関わる狭い意味、祈禱は広汎な意味で願われる)にあ

るとするが、「物語の用例の上からは必ずしもはっきり分けられるとは限らず、同じことを指す場合もある」と述べる。また、修法については、加持・祈禱の上位概念に当たるとする。ただし、本稿ではそれぞれを特に区別せず「加持や祈禱」と記し、「ののしる」「騒ぐ」に焦点を当てる。

(12) 注(7)に同じ。

(13) 注(6)に同じ。

(14) 複合動詞の弁別については、関一雄氏『国語複合動詞の研究』笠間書院 一九七七年二月、山王丸有紀氏「中古複合動詞意味重点の一考察」(『成蹊国文』二七 一九九四年三月)等を参考にした。

(15) 土居裕美子氏「平安・鎌倉時代における「さわぐ」を構成要素とする複合動詞語彙」(『鎌倉時代語研究』二三 二〇〇〇年十月)は、「もとめさわぐ」と「さわぎもとむ」の意味用法を例に挙げ、時代や文章ジャンルによって複合順が逆になることがあると述べるが、本稿では平安時代の物語作品に絞って検討した。

第二部 交流の媒介となる「食」の働き

第一章 光源氏の大堰での食事

一 食事する光源氏ともてなす明石の君

薄雲巻において、光源氏は明石の君の住む大堰邸を訪れる。前年の十二月、明石の君は娘明石姫君を手放した。姫君は二条院に引き取られ紫の上の養女となった。山里の大堰では、娘と離れ離れになった明石の君と、その母明石尼君が寂しく暮らしている。源氏が「山里のつれづれ」(薄雲巻②四三五頁・四三八頁)を思いやって出かけたのは、年が明けて公私の諸行事が落ち着いたころ、嫉妬する紫の上をなだめてからようやくやくのことである。年末に「忍びて」(四三七頁)訪れて以来である。

大堰邸において、源氏は明石の君と琴・琵琶を掻き合わせ、姫君のことを細やかに語る。その後食事する様子が次のように描かれている。

ここはかかる所なれど、かやうにたちとまりたまふをりをりあれば、はかなきくだもの、強飯ばかりはきこしめす時もあり。近き御寺、桂殿などにおはしまし紛らはしつつ、いとまほには乱れたまはねど、またいとけざやかにしたなくおしなべてのさまにはもてなしたまはぬなどこそは、いとおぼえことには見ゆめれ。女も、かかる御心のほどを見知りきこえて、過ぎたりと思すばかりのことはし出でず、また、いたく卑下せずなどして、御心おきてにもて違ふことなく、いとめやすくぞありける。おほろけにやむことなき所にてだに、かばかりもうちとけたまふことなく、気高き御もてなしを聞きおきたれば、近きほどにまじらひては、なかなかいと目馴れて人侮られなることどももぞあらまし、たまさかにて、かやうにふりはへたまへるこ

そ、たけき心地すれ、と思ふべし。

(薄雲卷②四四一頁)

ここで源氏が食事をすることについて、『新編全集』の頭注は「源氏が大堰の邸で軽い食事をとるのは、打ち解けた態度である。」と注している。確かに、波線部に描かれるように、源氏は「おぼろげにやむごとなき所」では「うちとけ」ず「気高き」態度をとる。大堰だからこそ「うちとけ」た態度をとっているといえる。ただし、必ずしも「うちとく」を現在の「うちとける」と同じ意味で捉えることはできない。「うちとく」とは、源氏にとって、また明石の君にとってどういった態度であったのだろうか。また、なぜその「うちとく」態度が「はかなきくだもの、強飯」を食べることにつながったのだろうか。

既に末沢明子氏が当該場面の強飯について考察し、「明石君、乃至は明石一族にとっては残された威信を示し、源氏にとっては「上臈しき」ことを保つこと、その二つが重なったものであった。」と論述している³⁰。本論では、「くだもの」についても考察を加え、この場面における食事の意図を検討したい。

二 「うちとく」光源氏

源氏は、近くの御寺や桂の院などに来ることが主要目的であるかのように装って、大堰に来ている。今回大堰に行く前に紫の上をなだめすかして出て来ており、源氏にとって紫の上が第一である。破線部にあるように、明石の君に対し「いとまほには乱れ」ない。しかし、明石姫君と別れ、大堰の山里で寂しく暮らしながら、「見る度ごとに、やむごとなき人々などに劣るけぢめこよなからず、容貌、用意あらまほしうねびまさりゆく」(薄雲卷②四四〇頁)明石の君のことを思うと、「またいとけざやかにしたなく、おしなべてのさまにはもてなしたまはぬ」

とあるように、そっけなく通り一遍の扱いで済ますことはできない。源氏にとって、その通り一遍ではない対応が、他所とは異なり「うちとけ」た態度を示す食事である。では、源氏にとって「うちとけ」た態度とはどのような意味を為すのだろうか。『源氏物語』中の「うちとく」の用例を検討してみる。

『源氏物語』中に表れる「うちとく」の用例は、名詞化、形容詞化したものも合わせ、計一七〇例ある^②。そのうち、源氏が「うちとく」主体となる例は一三例ある。どのような時に源氏が「うちとけ」ているのかを、次の【表1】に示した。

まず、源氏はひと気のあまりない所で「うちとく」ことができる。表1・2夕顔巻では、車をやつし、先払いもつけずに出かけ、自分が光源氏だと知らない者ばかりの環境に行くことで、「うちとけ」ている。表1・3夕顔巻もその意味では同様の状況である。源氏は夕顔を「なほうちとけて見まほしく」^③（夕顔巻①一五七頁）思い、廢院に伴う。そして、夕顔と数人の従者しかおらず、「らうがはしき隣」^④（一五六頁）の声も「踏みとどろかす唐臼の音」^⑤（同）も「白栲の衣うつ砧の音」^⑥（同）もしない廢院で、「うちとけたまへるさま」^⑦（一六二頁）表1・3）を見せるのである。

次に、身内には親近感を覚え、「うちとけ」ている。表1・13幻巻では、紫の上の死によって御簾の内に籠りきりであった源氏を、蛸宮が訪う。源氏は弟にあたる蛸宮ならばと、「うちとけ」た部屋で対面しようと返事をす。表1・5紅葉賀巻では、源氏は兵部卿宮に「うちとけ」た態度で接している。兵部卿宮自身は、なぜ源氏がそのような態度なのか知る由もない。が、兵部卿宮は源氏が愛した二人の女性の身内である。藤壺の兄であり、紫の上の父である。それゆえ源氏は「睦まじう」^⑧（紅葉賀巻①三二八頁）思い、「こまやかに」^⑨（同）語りかける。兵部卿宮は源氏の「うちとけ」た姿を「いとめでたし」^⑩（同）と思うのである。

表 1 光源氏が「うちとく」場面

※視点については、地の文であっても「うちとけ」た姿を見て主観的な感想が描かれている場合は、見ている人物の視点からの描写であると判断した。

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	巻・頁	対象	場所	視点	本文	場面
幻 521	若菜上 26	行幸 294	玉鬘 119	松風 411	松風 411	賢木 124	賢木 118	紅葉賀 318	末摘花 297	夕顔 162	夕顔 136	帚木 91						
蛭宮	—	(玉鬘)	紫の上	—	明石の君	朱雀帝	(紫の上)	兵部卿宮	末摘花	夕顔	—	—						
六条院	(朱雀院居所)	(六条院)	六条院	大堰邸	大堰邸	内裏	(雲林院)	三条宮	—	廢院	五条周辺	左大臣邸						
源氏	朱雀院	語り手	右近	明石尼君	語り手	語り手	語り手	兵部卿宮	語り手	語り手	語り手	語り手						
<p>大臣も渡りたまひて、うちとけたまへれば、御几帳隔てておはしまして、御物語聞こえたまふを、御車もいたくやつしたまへり、前駆も追はせたまはず、誰とか知らむとうちとけたまひて、げに、うちとけたまへるさま世になく、所がらまいてゆゆしきまで見えたまふ。</p> <p>さまことにさならぬうちとけわざもしたまひけり。</p> <p>宮も、この御さまの常よりことになつかしううちとけたまへるを、いとめでたしと見たてまつりたまひて、</p> <p>陸奥国紙にうちとけ書きたまへるさへぞめでたき。</p> <p>我もうちとけて、野宮のあはれなりし曙もみな聞こえ出でたまひてけり。</p> <p>来し方のことものとたまひ出でて、泣きみ笑ひみうちとけたたまへるとめでたし。</p> <p>いとなまめかしき桂姿うちとけたまへるを、いとめでたうれしと見たてまつるに、</p> <p>うちとけ並びおはします御ありさまども、いと見るかひ多かり。</p> <p>白き色紙に、いとうちとけたる御文、こまかに気色ばみてもあらぬが、をかしきを見たまうて、またうちとけて、戯れ言をも言ひ乱れ遊べば、その方につけては、似るものなく愛敬づき、</p> <p>兵部卿宮渡りたまへるにぞ、ただうちとけたる方にて対面したまはんとて、</p>																		
<p>暑さでくつろぐ源氏を前に、左大臣は気を使って御几帳を置くが源氏は苦く思う。</p> <p>やつした車のため誰も自分とわからないだろうと気を許す源氏。</p> <p>源氏が廢院で夕顔を前にくつろぐ様子。</p> <p>源氏は末摘花に対し普通なら失礼にあたるような細かなことまで世話を焼いた。</p> <p>藤壺宮や紫の上の縁からうちとけた様子の源氏に対し、事情を知らぬ兵部卿宮。</p> <p>雲林院から紫の上宛に文を贈る。</p> <p>朱雀帝が齋宮下向のことを語るの源氏も心安く語る。</p> <p>大堰邸の庭の修繕などについて源氏は指図しながら、明石での思い出話を語る。</p> <p>大堰邸でくつろぐ源氏の姿を明石尼君は見えて感激する。</p> <p>右近は、源氏と紫の上がくつろいで並ぶ姿を見事と思う。</p> <p>源氏から玉鬘宛に入内を勧める文(懸想文でない)。</p> <p>朱雀院、源氏の並外れた素晴らしさを称賛。</p> <p>喪に籠る源氏だが、蛭宮に対しては私室で対面。</p>																		

宮武利江氏は、「うちとく」について用例を調査し、表1・12若菜上巻の例を挙げて、「源氏は大勢の前でも「うちとけ」た姿を見せ、またそれが賞賛されるといふ点で他とは少し異なっている」と述べる⁽⁵⁾。確かに「うちとけ」た姿が賞賛されるのは、源氏特有の描写だといえるが、表1・12は朱雀院の言葉である。直前の「うるはしだちて、はかばかしき方に見れば、いつくしくあざやかに目も及ばぬ心地するを」(若菜上巻④二六頁)と対比的に描写されていることから、表立った場面で「うちとけ」ているとは言い切れない。源氏が朱雀院に対して「うちとけ」ている例は、表1・7賢木巻に見られる(当時は朱雀帝)。伊勢下向の折に朱雀院が会った齋宮の容姿が美しかったことや源氏が野宮へ六条御息所を訪ねていったことなど、通常の帝と臣下の関係では語り合わないような不謹慎なことを語り合っている。朱雀院は帝であったとはいえ、源氏の兄である。朱雀院が想定した源氏の「うちとく」姿は、このように身内に対してうちとける姿ではなかっただろうか。

源氏は紫の上に対しても「うちとけ」ている。表1・10玉鬘巻では、源氏と紫の上が二人で「うちとけ並びおはします御ありさま」(玉鬘巻③一一九頁)が、右近により目撃されている。源氏も他の登場人物と同様に、ひと気のない場所で、身内や信頼のおける心安い間柄の人物に対しては、「うちとく」のだといえる。

なお、表1・1帚木巻の例は、「あまりうるはしき御ありさまの、とけがたく恥づかしげに思ひしづまりたまへる」(帚木巻①九一頁)とあるように、あまりにも他人行儀な正妻葵の上を物足りなく思い、源氏は若い女房たちと戯れる。源氏の「暑さに乱れたまへる御ありさま」(同)は、女房に「見るかひあり」(同)と思われている。そこへ葵の上の父である左大臣がやってくる。左大臣は、源氏の「うちとけ」た様子を、はしたないというわけではなく、自分に見られたら源氏が困るだろうとの配慮から、御几帳で隔てて話をする。源氏の「うちとけ」た姿と、葵の上・左大臣の「うちとけ」ない様子が対照的に描写されており、源氏は、「うちとけ」ない葵の上、意図的に「うちとく」源氏の姿を隠そうとする左大臣を、苦々しく思う。源氏にとって、「うちとけ」た姿は親愛表現なのである。

反対に、源氏が「うちとけ」ぬ場面は六例ある。そのうち、六条御息所に対して二例を含んでいることに着目したい。

明け暮れうちとけてしもおはせぬを、心もとなきことに思ふべかめり。

(夕顔卷①一四九頁)

心ゆるびなく恥づかしくて、我も人もうちたゆみ、朝夕の睦びをかさはむには、いとつつましくところのありしかば、うちとけては見おとさるることやなど、あまりつくろひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし。

(若菜下卷④二〇九頁)

夕顔卷では、六条御息所の女房である中将が、六条御息所のもとに「うちとけ」て訪ねてこない源氏を不安に思っている。若菜下卷は、源氏が紫の上に対し、往時の女性関係を語る場面である。源氏は、六条御息所に対し「うちとけ」て接すれば、見下されるのではないかと考えていたことを明らかにしている。主観的にも客観的にも、「うちとけ」ていない間柄であったことがわかる。

また、六条御息所自身の「うちとけたらぬもてなし」(夕顔卷①一四八頁)や、「うちとけぬ」(葵卷②三四頁)気持ちも語られている。他の例からも、源氏が上流貴族に対して「うちとけ」ることができない様子が表れている。

表1・9においては、明石尼君は源氏のくつろいだ桂姿を「いとめでたううれし」(松風卷②四一一頁)と喜ばしく見ているが、源氏は尼君の存在に気づくと、「尼君はこなたにか。いとしどけなき姿なりけりや」(四一二頁)と言って、直衣を身につける。明石尼君の前では「うちとけ」た姿を見せるべきではないと考えている。年上の尼君であることはもとより、明石尼君の祖父が中務宮であったことも影響しているだろう⁵⁾。

この松風卷で、源氏が大堰邸を訪れた翌朝、近くの桂の院に人々が集まっている。源氏の訪問を聞き及んで駆けつけた人々だった。源氏は、「いと軽々しき隠れ処見あらはされぬこそねたう」(四一八頁)と話している。

大堰は「軽々しき隠れ処」であり、大勢の人に見つけられることを厭いたくなる場所であった。「うちとけ」られなくなるからである。通常の大堰邸は、都の喧騒から少し離れ、「やむごとなき」人とはほぼ縁のない場所である。東の渡殿近くの母屋に住む尼君さえ、目の届かない場所であれば、源氏が「うちとく」には最適な場所であった。表1・8のように、「泣きみ笑ひうちとけのたまへる」（四一一頁）と表情を全面に出しうちとけて話すことも許される。源氏にとって「見あらはされ」ることを気にせずにいられる居心地のよい空間であった。

源氏は明石の君と琴・琵琶を掻き合わす。食事が描かれる直前の記述である。「かの明石にて小夜更けたりし音も、例の思し出でらるれば、」（薄雲巻②四四〇頁）と語られるように、明石での別れを明後日に控えた夜、琴を奏で合い、形見としたことが思い出されてのことである。源氏は明石でのこの夜、初めて明石の君の姿を目にする。間近に見たことで、明石の君を捨て去り難く思い、どうにかして京に迎えたいと思うようになる。この後、和歌を交わし、箏の琴を弾き交わす。和歌の贈答は、源氏が明石の君のもとに押し入った夜以降初めてである。初夜からこれまでの間にも、源氏は明石の君のもとに何度となく渡っていた。だが、源氏の心中には、京に戻れば二度と明石には帰れないだろうという、明石の君との仲を、半ば諦めている感が漂っていた。琴を弾き交わしたこの夜から、源氏の出立直前の「騒がし」（明石巻②二六九頁）い時まで、和歌の贈答は堰を切ったように立て続けに、三回計六首が交わされる。この夜を契機に、源氏と明石の君との関係は、行きずりの恋ではなく、源氏が帰京しても潰えないものへと変化したといえる。

薄雲巻の明石での夜を思い出しているの弾奏も、源氏の「うちとく」態度の一端であろう。明石の君が畏まるべき上流貴族でないことも、「うちとく」ことができる一因ではあるが、葵の上の前で「うちとけ」、夕顔に対して「うちとけ」たいと思ひ、紫の上と「うちとけ」並んでいるように、「うちとく」ことは明石の君への格別の親愛表現なのである。

三 くだものと強飯の性質

源氏が大堰で食事をする前置きとして、「ここはかかる所なれど」と、逆接が置かれている。これについて、『弄花抄』は「大かたなる所にては物まいりなとする事聊爾（11）にもなかりしにや」とし、『細流抄』は「源の上臈しきやうなりいつくにてもれうし（12）に物なとまいる事はなけれどもと也」と注する。どちらにも見られる「聊爾」とは、『日葡辞書』に「無礼、不躋」とある（13）。つまり、源氏のような「上臈しき」人が通常外で食事をすることは不躋であると思われる。にもかかわらず、源氏は敢えて大堰邸で「きこしめす」のである。この語には、勧められて食べる意識ではなく、自ら食べる意識が認められる。では、なぜ源氏は「うちとく」ことを示す態度を「くだもの」と「強飯」を食すことで表したのだろうか。

まず、「強飯」について見てみよう。第一部第五章でも述べたが、「強飯」とは、甑で蒸した米のことである。現在のおこわにその名残が見える。伊藤博氏は、『うつほ物語』吹上上巻（二六九頁）を引き、「神饌の飯は、強飯を用いるのが普通。」とする（14）。また、『厨事類記』によれば、強飯は正月に献じられており、晴れの場の食であったことがわかる（15）。木谷眞理子氏は、『小右記』の「強飯、粥」の例（16）や『源氏物語』中の用例を挙げ、「起床直後に手水などとともに使われる朝の「粥」は、あまりに日常的な食物、ごく内々で食すべきものであるから、「粥」だけを供するのは憚られ、「強飯」が加えられる、ということであろうか。」と述べる（17）。末沢氏も、「強飯は鄭重であることを示しているのではないか」と考察している（18）。これに同意したい。

次に、「くだもの」について考えてみよう。『倭名類聚抄』は、木の上になるものを「久太毛乃」（19）、地上になるものを「久佐久太毛乃」と称す。ただし、小島幸枝氏が、「古くクダモノは、果実は勿論、酒の肴・副食物・間食をも総称した」と述べる（20）ように、この頃の「くだもの」は果実に限定されることなく、現在の「くだもの」

よりも広義で捉えられていた。

実態の判然としない「くだもの」であるが、物語中に「くだもの」と描かれている以上、「くだもの」という総称として、どのような意図をもって描かれていたのかを考えるべきである。果実も含んでいようし、果実でないものも含んでいるかもしれないが、「くだもの」という総称で書かれたことに意味があると考ええる。

『源氏物語』の中に描かれる「くだもの」は、ほとんど悪い印象を与えない。『枕草子』には、「つれづれなくさむもの」の章段に、「くだ物」(二五四頁)が見られ、所在なさを紛らわしてくれる物として、良い印象があったことが窺われる。『和漢朗詠集』巻下には大江朝綱の詩句として、

菓則上林苑之所献 含自消
(菓は則ち上林苑の献ずる所 含めば自ら消ゆ)

酒是下若村之所伝 傾甚美
(酒は是れ下若村の伝ふる所 傾くれば甚だ美なり)

(酒・二五九頁)

とある。ここでの「菓」は「甘棠」という梨のことである。酒と対にして、くだもの美味を称賛している。『和漢朗詠集永濟注』でも、「クタモノヲホメタルナリ」と注されている⁽¹⁴⁾。

また、小林章氏が多肉多汁のくだもの(液果)について、「宮廷や一部の階級官吏にだけ食用が許され、一般人は祭時にだけ解禁された。」と述べる⁽¹⁵⁾ように、くだものは当時の贅沢品であった。

『源氏物語』中に「くだもの」は二六例⁽¹⁶⁾現れる。供される対象を性差別に見た場合、一七例(約六五パーセント)が男性に対して供されている。残り九場面が女性である。女性の場合はほぼ全てにおいて出されたくだものを拒否しており⁽¹⁷⁾、食欲のないことが表現されている。それに対し、くだものを供された男性は、食べたかどうか判然としない場合もあるが、全く拒否していない。なお、くだものが供される対象は、源氏八例、薫四例、夕霧と匂宮が各二例、冷泉帝一例である。男性が供された例を見ると、方違えで源氏が紀伊守邸を訪れた際、紀伊守が源氏にくだものをふるまったり(帚木卷①九五頁)、新年の挨拶に訪れた薫に対し、藤侍従がくだものや

酒をもてなしたりするように（竹河巻⑤六九頁）、客人をもてなすのに用いられる。さらに、

御くだものなごめづらしきさまにてまゐらせ、人々に酒強ひそしなどして、おのづからもの忘れしぬべき夜のさまなり。

（明石巻②二四四頁）

御くだものよしあるさまにてまゐり、御供の人々にも、肴なごめやすきほどにて土器さし出でさせたまひけり。

（椎本巻⑤二一一頁）

とあるように、源氏や薫には「くだもの」、お供の者には「酒」や「肴」を出している。椎本巻で、大君が薫にくだものをさし出している場面は、宇治の邸の主であった八の宮が亡くなってからのことで、大君は客人である薫をこの家の主としてもてなす必要がある。くだものは、上流貴族をもてなす際に使われていたことがわかる。つまり、「くだもの」によつて、主は相手を供人と区別し、客として厚く待遇しようとしているのである。

以上のように、「くだもの」も「強飯」も一概に「うちとけた態度」を示すとは言い切れない。しかも、「はかなきくだもの、強飯ばかりはきこしめす時もあり」と描かれるように、明石の君が供したとはいえ、「はかなきくだもの、強飯」を選択し食したのは源氏である。明石の君と「うちとく」ために、なぜ客人に供され鄭重であることを示す「はかなきくだもの、強飯」を選択したのだろうか。

『源氏物語』において、女君（二〇）から男君に供される食べ物を見てみると、七例中五例が宇治十帖においてであるが、ほぼ「くだもの」（二〇）ばかりである。総角巻において、大君が薫の指示により匂宮をもてなす準備をするころについては、木谷氏が「くだもの、肴など」は、女主人が親疎とりまぜた男性客人たちをもてなすのにふさわしいメニューなのである」と言及しているように、くだものは女君から男君に供される食べ物としてふさわしいものであった。だからこそ、通常は外で食事しない源氏が食べる物として、明石の君に「はかなき」という控え

めなニュアンスを含ませた「くだもの」を供させたのだろう。併記した順序からも、「くだもの」を主としていたことが窺える。

だが、この中で薄雲巻の「強飯」は明らかに異質である。他に「くだもの」と「強飯」が合わせて供されている例として、『うつほ物語』菊の宴巻を挙げることができる。あて宮に心を奪われ妻子をないがしろにしていた実忠が、偶然北の方と再会する場面である。北の方は、実忠が妻子を顧みなくなっていた間に息子の真砂子君を亡くし、悲しみに暮れ、娘の袖君を連れて志賀に隠棲していた。実忠はあて宮の東宮への入内の噂に心落ち着かず、比叡山に籠っていた帰り道であった。ここで、北の方は松の実やくだものを盛って、きのこなどを混ぜた尾花色の強飯をさし出す。

出だして、しばしばかりありて、透箱四つに、平杯据ゑて、紅葉折り敷きて、松の子・菓物盛りて、菌などして、尾花色の強飯など参るほどに、雁鳴きて渡る。北の方、かはらけに、かく書きて出だし給ふ。

秋山に紅葉と散れる旅人をさらにもかりと告げて行くかな

源宰相、

旅と言へど雁も紅葉も秋山を忘れて過ぐす時はなきかな

北の方、

あき果てて落つる紅葉と大空にかりてふ音をば聞くも効なし

などいへど、気色も見せず。

(菊の宴巻三四八頁)

二重傍線部「気色も見せず」とあるように、北の方は自分が実忠の妻であるとは素振りも見せない。木谷氏が述べるように、「くだもの、強飯」は、妻が夫に出す食事らしくないといえる。

「強飯」ではないが、米から作られたものと「くだもの」が並列して語られる例として、『うつほ物語』には、

他に次の二例が見られる。

種松、三月三日の節供なんど、かばかり仕うまつれり。(中略) 乾物・菓物・餅など調じたる様、めづらかなり。
(吹上上巻二五〇頁)

頭の中將、御前どもの物など参らせ給ふ。いぬ宮の御前には、白銀の折敷、同じ高杯に据ゑて十二、御器ども、檜破子三十荷、むくにの窪の杯ども、餅四折敷、乾物四折敷、菓物四折敷、敷物・心葉、いと清らなり。
(蔵開上巻五一七頁)

吹上上巻では三月三日の節供に客人をもてなしており、蔵開上巻はいぬ宮の五十日の儀である。どちらも、晴れの場である。

『源氏物語』において、儀礼中に食べ物が描かれる例は、ほとんどが人生の転機、年の変わり目に関わる祝い事である。具体的な食べ物が見られる儀礼の場面と食べ物を、次頁の【表2】に挙げる。

その中で描かれる食べ物は、主食である米類が多数を占める。米類とは屯食、餅、粥、椀飯である。米からできてくる点では、酒も同様である。

他には、若菜、御くだもの、粉熟がある。若菜については、若菜上巻で源氏四十賀の際、源氏に献上されたものであり、別途考察の必要がある¹⁰⁾。粉熟は宿木巻の匂宮と中の君の男君の産養に見られる¹¹⁾。『花鳥余情』に、「五穀を五色にかたとりて粉にして餅になしてゆて、甘葛をかけてこねあはせてほそき竹の筒をして其中にかたくをし入てしはしをきてつき出て其姿双六の調度のことくまなふ也」と注される菓子的一种であった。くだものは、行幸巻において大原野行幸に欠席した源氏が冷泉帝に御酒とともに献上している(行幸巻③二九二頁)。描かれた晴れの場の食は、「米」と「くだもの(菓子を含む)」が重要な位置を占めていたといえよう。

【表2】 儀礼に見られる食べ物

巻	場面	食べ物
桐壺 初音 行幸 若菜上 若菜下 柏木	源氏元服の儀の引出物 齒固めの祝い 大原野行幸、源氏から献上品 源氏四十の賀 住吉社頭の管絃御遊	屯食 餅鏡 御くだもの 若菜（献上品）、若菜の御羹 精進物 御粥、屯食
	薰五十日の餅	餅

『源氏物語』中において、米から作られたものと「くだもの」が並列して語られる例は、少女巻に見られる。大臣大饗も終わった頃、内大臣邸での私宴の夜に、皆が「御湯漬くだもの」を食している。

暗うなれば、御殿油まゐり、御湯漬くだものなど、誰も誰も聞こしめす。姫君はあなたに渡したてまつり、たまひつ。しひてけ遠くもてなしたまひ、御琴の音ばかりをも聞かせたてまつらじと、今はこよなく隔てきこえたまふを、「いとほしきことありぬべき世なるこそ」と、近う仕うまつる大宮の御方のねび人どもささめきけり。

（少女巻③三八頁）

夕方頃、夕霧が来訪し、勧められて笛を吹く。内大臣はこれに合わせて笏拍子を打ち唄う。暗くなってきたため、皆「御湯漬くだものなど」を食す。この食事には、主である内大臣の思惑が入り込んでいる。つまり、食事

の一文の直後、破線部に見えるように、内大臣は雲居雁を夕霧から遠ざけようとするのである。

『枕草子』「宮仕へ人のもとに来などする男の」の章段において、「宮仕へ人」である女の家で男が食事をすることは疎ましく思われている。しかも、「さらに湯漬をだに食はせじ。」(三二六頁)と断固拒絶しようとするほど、女のもとで食事をするのは、女にとって厭わしいことであった。『新編全集』頭注は「恋人の逢瀬に、食物などが登場するとはもつてのほか、という感覚。」と述べている。夕霧を雲居雁の結婚相手とは認めない内大臣だからこそ、恋人に供することが疎まれる湯漬や、客人に供するくだものを出させるのである。

さらに、『落窪物語』には、落窪の君に使える侍女あこぎが、道頼と落窪の君との三日夜の餅の準備に奔走している様子が描かれている。

夜さりは三日の夜なれば、へいかさまにせむ、今宵餅いかでまゐるわざもがな〜と思ふに、またいふべきか
たもなければ、和泉殿へ文書く、

「いとうれしう。聞こえさせたりし物を、賜はせたりしなむ、よろこびきこえさす。またへあやし〜と
は、思さるべけれど、今宵餅なむ、いとあやしきさまにて、用侍る。取り交ずべきくだ物など侍りぬべ
くは、少し賜はせよ。

(巻之一 五五頁)

あこぎは叔母に文を贈り、餅と取り合わせのためのくだものを頼んでいる。三日夜の餅では、くだものも共に出されていたことがわかる。

先述した『枕草子』のように、恋人関係では食べ物を供することは憚られる。しかし、正式な結婚においては、「食」は重要な意味を持っていた。高群逸枝氏は、男が女の許に通い三日目に行われる「ところあらはし」が、「忍び婚で寝ている現場を暴露し、その現場で婿をとらえて、否応なしに婿の口へ妻方の餅をおしいれる。そうすることによって、婿は妻方の家族とされてしまうといういみをもつ呪法である」とし、「婿が妻族と同火共食す

ることをいみするものである」と述べる⁽³²⁾。服藤早苗氏は、正式な妻の要件として、「身分が同等であり、さらに「三日設」としての供餅儀を行い、正式な結婚をしたこと」を挙げている⁽³³⁾。

源氏と明石の君との間に、三日夜の餅は描かれない。初夜以降の描写を見てみよう。

御文いと忍びてぞ今日はある。あいなき御心の鬼なりや。ここにも、かかるといかに漏らさじとつづみて、御使ことごとしうもてなさぬを、胸いたく思へり。かくて後は、忍びつつ時々おはす。ほどもすこし離れたるに、おのづからもの言ひさがなき海人の子もや立ちまじらんと申し憚るほどを、さればよと思ひ嘆きたるを、げにいかならむと、入道も極樂の願ひをば忘れて、ただこの御気色を待つことにはす。いまさらに心を乱るも、いといとほしげなり。

(明石巻②二五八頁)

後朝の文さえ内容は示されず、専ら源氏から紫の上への良心の呵責が語られる。これ以降の源氏の訪問は「時々」であり、「忍び」の仲であることが強調されている。身をやつして下向していることと紫の上への後ろめたさが、明石の君との関係をためらわせる。通常であれば歓待されるはずの文使いも「ことごとし」く扱われない。このような状況で「ところあらはし」ができるはずもない。

源氏と明石の君の前で食事の場面が描かれるのは、薄雲巻のこの場面が初めてである。源氏は、明石での夜を思い出し、明石での夜、松風巻で大堰邸を訪れた際に続き、琴・琵琶を掻き合わせた後、晴れの場で供される「くだもの、強飯」を自ら食す。それによつて、「ところあらはし」を再現し、明石の君に強いてきた「忍び」の関係への埋め合わせをしようとしているのではないだろうか。

四 「うちとけ」ぬ明石の君

前節までは、源氏の視点を中心に見てきた。源氏は自ら「はかなきくだもの、強飯」を選択し、食した。明石の君は、「御心おきてにもて違ふことなく」と描かれるように、源氏の意向に背くことはない。ただ、「うちとく」源氏の様子を見て、「近きほどにまじらひては、なかなかいと目馴れて人侮られなることどもぞあらまし、たまさかにて、かやうにふりはへたまへるこそ、たけき心地すれ、」と、源氏の側近く、つまり二条院に住まうことになった時のことを考える。他の「やむことなき所」では異なる、源氏の「うちとけ」た態度が、明石の君の気を揉ませている。では、明石の君にとって、「うちとけ」た態度とはどのようなものだったのだろうか。

明石の君自身が「うちとけぬ」人物であることは、明石巻から語られていた。明石の君の「心ざま」によって、源氏は、身をやつした自分を侮っているのか、と「ねたう」さまざま悩むほどである。

うちやすらひ何かとのたまふにも、かうまでは見えたてまつらじと深う思ふに、もの嘆かしうてうちとけぬ心ざまを、こよなうも人めきたるかな、さしもあるまじき際の人だに、かばかり言ひ寄りぬれば、心強うしもあらずならひたりしを、いとかくやつれたるに侮らはしきにや、とねたうさまざまに思しなやめり。

(明石巻②二五六頁)

源氏と明石の君との初めての逢瀬の場面では、「ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。」(明石巻②二五七頁)とある。六条御息所が源氏に「うちとけ」ず、源氏も「うちとけ」られないことについては先述したが、明石の君の「けはひ」は、その六条御息所を髣髴とさせている。明石の君は、「うちとけ」(同)ていたところを源氏が突然押し入ったことにより、近くの部屋に入って固く閉じ籠る。源氏に対して「うちとけ」ていた姿を隠すのである。

野分巻でも、源氏の訪れを察すると「うちとけなえばめる姿」(野分巻③二七七頁)を、小桂を羽織って押し込

める。若菜上巻では、実の娘である明石女御に対して、「常にうちとけぬさま」（若菜上巻④一二三頁）の対応をしている。明石の君は誰に対しても「うちとけ」ることをよしとしないのである。

若菜下巻で、源氏は紫の上を前に女性を論評する際、明石の君がうわべは人の言いなりになっていて、穏やかに見えながら、「うちとけぬ気色」（若菜下巻④二一〇頁）を内心に秘めていることを指摘している。紫の上も「うちとけにく」（同）い人であることに納得している。「うちとく」ことで親愛を表現する源氏や、その源氏と「うちとけ並」（玉鬘巻③一一九頁Ⅱ表1・10）んでいた紫の上にとって、明石の君は異なった価値観を持つように見える。

一方の源氏は、そのような「うちとけ」ぬ明石の君に対して「うちとけ」て見せる。明石巻の、源氏が明石の君に対して、まだ慰み程度に逢いたいくらいにしか思っていなかった頃、明石の君を何とか人目に立たずに自分の居所に來させるよう、明石入道に要請する。それに対し、明石の君本人は、人の数にも思われない自分などが、一時都から下ってきているだけの人の「うちとけ言」（明石巻②二五三頁）につられて、軽率に逢うのは物思いの種を作るだけであるという。つまり、源氏の言葉は「うちとけ言」であり、明石の君はそれを聞き入れることを憂慮する。ただ源氏が明石にいる間に、文のやり取りをすることだけを、明石の君は幸せに思おうとしている。

結果的に明石の君はその「うちとけ言」に乗る。その後、娘を為し、上京し、大堰邸に住む。表1・8松風巻では、源氏が明石の君の前で、須磨・明石での往時を回想し、「泣きみ笑ひみうちとけ」（松風巻②四一一頁）話をしている。この場面は、明石の君が上京し、大堰邸に入っすぐのことと、源氏は大堰邸の造園などを指示している。明石の君も源氏のこの様子については、「いとめでたし」（同）（同）と感じている。あるじ然としてふるまい、自分たちのこれから住む大堰の修繕に力を入れる源氏の「うちとけ」た姿は、すばらしく感じられる。

しかし、上京した明石の君には、様々な状況が見えてくる。「人の御ありさまもここのの御中にすぐれたまへるにこそは、」（薄雲巻②四二八頁）と、紫の上には敵わないのだと思ひ知る。「やむごとなき所」では、大堰でのよ

うな「うちとけ」たふるまいはしないことを聞く。明石の君は、他と比較し、常に自身の「身のほど」を意識してきた。「やむごとなき所」とは異なる自身の「身のほど」が、源氏を「うちとけ」させ食事させることを認識する。

源氏がたまにわざわざ足を運んでくれるという状況に対し、明石の君は「たけき心地すれ」と思う。藤原克己氏が「彼女の心高さが、光源氏や六条院の秩序によって、あるいは彼女自身の身のほど意識じたいによって、きびしく抑圧されながらもそれに抵抗し、あるいは忍従しつつ、かろうじてわが身を「たけ（高）く」思うというのが、明石の君の人物造型に一貫する基本型である。」と指摘する⁽⁵⁾ように、明石の君にとっての「たけし」とは、自身の本音を押し込め、身のほどにあった妥協できる気持ちを表出し、自分を納得させた結果である。明石の君の本心は、「うちとく」とも「たけし」とも別のところにある。

この直前には、明石の君の危惧が「いとど、目馴れ」と述べられているように、源氏は既に明石の君に「目馴れ」ているから食事をするのである。が、明石の君は、人目につく二条院に移って、これ以上源氏に「目馴れ」られ、それを人に侮られるようなことがあればと不安がる。確かに源氏は、今は客人にもてなすような、しかも晴れの食である「くだもの、強飯」を選んで食べている。しかし、このような源氏の「うちとけ」た態度の延長線上に、常に「身のほど」を意識し、「うちとけ」ることのない明石の君の危惧があるのである。

五 明石の君の身のほど意識

源氏の「うちとけ」る態度は、ひと気のない場所での安息や、親兄弟などを中心とした信頼に値する人物に対しての親愛表現である。自分より身分の高い貴族などには、畏れ多く思い「うちとく」ことを慎んでいる。都か

ら離れ、身分が低いながらも信頼に足る、明石の君のいる大堰は、源氏にとって、「うちとく」ことのできる場所であった。源氏は「うちとく」ことのできる場所を求めて大堰を訪れ、食事をする。とはいえ、通常「聊爾」と思われる場所での食事であり、品位を欠くようなものは食さない。明石の君を尊重する意味もあっただろう。源氏は、「ねびまさりゆく」明石の君との仲をつなぎ止めるために、明石の夜を思い出す琴を掻き合わせ、「はかなきくだもの、強飯」を食するのである。

一方の明石の君は、源氏の前で出過ぎたことはせず、卑下しすぎることもない。源氏の意向のままに、「はかなきくだもの、強飯」を供する。翻って考えると、「はかなきくだもの、強飯」を供することは、源氏の意向に背かない明石の君の姿を描かしめる行為であった。明石の君にとっては、「やむごとなき所」では為されない「うちとく」こと、すなわち食事自体が品位を欠くものであった。それは、自分の前だけに限った源氏の態度という喜びではない。致し方ないとはいえ、明石の君が「やむごとなき所」にはなり得ないことを思い知らされる、矜持を揺るがす態度であった。それでも明石の君が自身の心を打ち明けることはない。若菜下巻で源氏が論評するように、明石の君は「うはべは人になびき、おいらかに見えながら、うちとけぬ気色」(若菜下巻④二一〇頁)を内に秘めている。阿部秋生氏は、

それまでの「身のほど」ばかりを気にしてゐる源氏の忍び妻の一人にすぎなかつた明石の君は、「身のほど」はどう足掻いてみてもどうにも変へることのできないことを知つたのであらう、そこに拘泥してゐるよりは、受領の娘といふ「身のほど」の自分が、どれほどやむごとなき御方々に劣らずに動けるものかをやつてみようと思つたかのやうに、冷静な、しかも張りつめたやうな生活を始めるやうになる。

と述べる⁽²⁶⁾。明石の君は本心まで「うちとけ」ることはない。それは、常に「身のほど」意識に苛まれてきた明石の君が、「やむごとなき」人々の中で「たけき心地」を保ち暮らすための処世術であつたのだろう。宮武氏が述べるように、「うちとけ」た関係にはかなり段階性がある⁽²⁷⁾。明石の君は、人目につく場所で「うちとく」源

氏の態度がエスカレートし、「い、い、とど目馴れて人侮られなること」を恐れている。大堰邸での食事は、「うちとく」源氏と「うちとけ」ぬ明石の君の間に潜んでいる、気持ちのずれを映し出すものではないだろうか。

注

- ㉑ 末沢明子氏「大堰山荘の強飯」（『福岡女学院大学紀要 人文学部編』十八 二〇〇八年二月）
- ㉒ 動詞一六〇例（「うちとけゆる」「うちとけゆく」などの複合動詞を含む）、「うちとく十名詞」八例（「うちとけわざ」「うちとけごと」など）、「うちとく十形容詞」二例（「うちとけがたし」「うちとけにくし」）を合わせる。
- ㉓ 「うちとけて見まほしく」は、源氏の願望であり、実際に「うちとけ」ているわけではないため、【表1】には含めなかった。
- ㉔ 宮武利江氏「「うちとくる」女性の非貴族性―『源氏物語』の用例から―」（文教大学文学部『文学部紀要』二二・二二〇〇九年三月）
- ㉕ 「昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど語らせたまふ」（松風卷②四一三頁）とある。
- ㉖ 『邦訳日葡辞書』岩波書店 一九八〇年五月
- ㉗ 伊藤博氏「食事」（『平安時代の信仰と生活』至文堂 一九九二年一月）
- ㉘ 『厨事類記』（群書類従第十九輯）続群書類従完成会 一九三二年十月
- ㉙ 『小右記』寛弘五（一〇〇八）年九月十日条において、辰の剋、中宮彰子が産気づいたとの知らせを受けて集まった公卿・殿上人らに対し藤原道長が「強飯・粥」をふるまっている。
- ㉚ 木谷眞理子氏「源氏物語と食」（『成蹊国文』四十 二〇〇七年三月）
- ㉛ 注（一）に同じ。
- ㉜ 「菓蓴 唐韻云説文木上曰果、字或作菓日本紀私記云古乃菓俗云久太毛乃地上曰蓴力果反和名刈樹久太毛乃漢書注張晏曰有核曰菓無核曰蓴核見菓具應劭曰木實曰菓草實曰蓴」（京都大学文学部国語国文学研究室『諸本集成倭名類聚抄（本文篇）』臨川書店 一九六八年七月（元和古活字那波道圓本））
- ㉝ 小島幸枝氏「菓子」（『講座日本語の語彙』第九卷 明治書院 一九八三年）
- ㉞ 『和漢朗詠集古注釈集成』第三卷 大学堂書店 一九八九年一月
- ㉟ 小林章氏『果物と日本人』日本放送出版協会 一九八六年八月
- ㊱ 東屋巻に、弁の尼が薫にくだものをさしあげている場面では「くだもの」の語自体は二例見られるが、今回は同一場面であるため一例として数えた。以下同じ。

(17) 薄雲巻において、明石姫君が二条院に迎えられ、到着直後に、「こなたにて御くだもの参りなどしたまへど、やうやう見めぐらして、母君の見えぬを求めてらうたげにうちひそみたまへば、乳母召し出でて慰め紛らはしきこえたまふ。」(薄雲巻②四三五頁)とくだものが出されている。これについて、『大系』『評釈』『新編全集』などは「お菓子を召し上がる」と訳すが、宮腰賢氏「源氏物語・薄雲」御くだものまゐりなどし給へど」の解釈——尊敬語「まゐる」考——(『学芸国語国文学』九 一九七四年一月)は、「まゐる」の用例について分析し、この場面は「紫の上の室でおめざのお菓子を整えたりなさるけれど、ようよう目覚めて周囲を見まわし、生母明石の上を目で探して、いかにも可愛らしくべそをおかきになる」(傍点ママ)と述べ、明石姫君が実際に「御くだもの」を食したわけではないことを指摘している。その説に従えば、くだものが女性に供された全ての場合において、女性はいくらものを食べていないことになる。食べていたとしても、母のいないことに気づいてくだものから興味が移ったことに重点がある。なお、「(御)くだもの」のみで考えると、拒否するのは女性だけであるが、柏木は「はかなき柑子」を拒否している。これについては第一部第一章で考察した。

(18) 女房が主体となって動いているものに関しては、含めない。

(19) 「(御)くだもの」以外には、「強飯」(薄雲巻)、「橘」(胡蝶巻)、「肴」(総角巻)、「蓮の実」(手習巻)がある。「蓮の実」以外は「(御)くだもの」と併記、またはくだものの一つとして記され、「蓮の実」も果実と考えられる。

(20) 四十の賀での若菜は、『河海抄』に様々な種類の植物が列記されるように、生命力溢れる植物の総称である。また、『河海抄』には、「四十よりはしめて数の満を賀する也春の初若菜を摘て是を便にて祝也」とあり、「若菜」の生命力にあやかっけて長寿を祝うものである。名称に示される特質が、祝いの場に深く意味を与えている。そのため、他の場面にも描かれ得る穀類やくだものとは分けて考える。

(21) 『源氏物語』中に「粉熟」は二例見られる。もう一例は宿木巻の藤の宴においてである。晴れの場ではあるが儀式ではないので今回は挙げなかった。

(22) 高群逸枝氏『招婿婚の研究一』(高群逸枝全集第二巻) 理論社 一九六六年三月

(23) 服藤早苗氏「『落窪物語』にみる婚姻儀礼——平安中期貴族層の結婚式——」(『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』六 二〇〇六年十一月)

(24) 「いとめでたし」は地の文であるが、玉上琢彌氏『源氏物語評釈』第四巻 角川書店 一九六五年九月によると、「いとめでたし」と明石の御方がそして作者、また読者が、見るのである」と解説されており、それに従う。

(25) 藤原克己氏「たけき心地——明石の君の人物造型——」(『人物造型からみた『源氏物語』』至文堂 一九九八年五月)は、この薄雲巻での「たけき心地」についても、「愛情の満足感とは遠い」と述べる。

(26) 阿部秋生氏『源氏物語研究序説下』東京大学出版会 一九五九年四月

③
注 (4)
に同じ。

第二章 玉鬘に贈るかりのこ——「柑子、橘などやうに紛らはして」——

一 玉鬘物語の先行研究

真木柱卷は、鬘黒が玉鬘を強引に得たことから始まる。光源氏は養女玉鬘にあやにくな感情を抱きつつ、世間体との葛藤から、尚侍として出仕させることを決めた。その矢先の出来事に、複雑な心境である。

前卷藤袴卷からは唐突とも思われる鬘黒・玉鬘の結婚だが、次代の権勢を握るであろう鬘黒の政治的な面から、「十分な現実性」を孕むとする^①積極的な評価が為されてきた。また、玉鬘物語を「源氏が玉鬘を手に入れそこなつた失敗譚」と捉える論^②、光源氏の創り出した六条院世界の翳りを読み解く論^③などがある。さらに、坂本昇氏は、鬘黒と北の方の娘真木柱が明石姫君立後のライバルとなりうる存在であり、「入内資格喪失の事情を玉鬘に絡ませて描く意図があつたとする^④」。

源氏三十八歳の三月、源氏は鬘黒邸に引き取られた玉鬘に、かりのこを「柑子、橘などやうに紛らはして」贈る。添え文を見た鬘黒は、返事を書きかねている玉鬘に代わり、源氏に返歌を贈る。普段風流めいたところのない鬘黒にしては珍しい返歌に、源氏は苦笑し、心中玉鬘が自分の手の届かぬところに行ってしまったことを切なく思う。

この場面について、斎藤曉子氏^⑤や竹下円氏^⑥は、源氏が鬘黒に対して敗北を認め、玉鬘との断絶を決定的なものにする場面と捉えている。かりのこが贈られたことについては、熊谷義隆氏が「雁の子」^⑦「仮の子」^⑧を際立たせるための道具立て^⑨との見解を示し^⑩、前述の坂本氏の論を引いて、鬘黒は玉鬘を得たことで、立后できる存在であつた真木柱を失うことになり、源氏は玉鬘を失つたものの政治的には「決して敗北していない」とする。

しかし、かりのこは源氏が玉鬘に贈ったものである。源氏は万一人に見られても問題ないよう、恋情を入念に押し隠して文を書いているが、鬘黒が代筆するとは予期していなかったはずである。「親」らしい立場を強調して贈る源氏が、「仮の子」を匂わせる必要はない。「仮の子」を指摘したのは鬘黒であって、源氏の歌には「かひ(卵)」が見えるだけである。

本章では、かりのこが源氏から玉鬘に贈られたことに焦点を当て、なぜ玉鬘物語終結のこの場面で、「柑子、橘などやうに紛らはして」かりのこを贈ったのかについて考察したい。

二 山吹が想起させる玉鬘

まず、かりのこを贈る直前の場面④から、それに連なる⑤への流れについて検討する。

④ 三月になりて、六条殿の御前の藤、山吹のおもしろき夕映えを見たまふにつけても、まづ見るかひありて
 むたまへりし御さまのみ思し出でらるれば、春の御前をうち棄てて、こなたに渡りて御覧ず。呉竹の籬に、
 わざとなう咲きかかりたるにほひ、いとおもしろし。源氏「色に衣を」などのたまひて、

源氏「思はずに井手のなか道へだつともいはでぞ恋ふる山吹の花

顔に見えつつ」などのたまふも、聞く人なし。かくさすがにもて離れたることは、このたびぞ思しける。げにあやしき御心のすさびなりや。

⑤ かりのこ⑥のいと多かるを御覧じて、柑子、橘などやうに紛らはして、
 わざとならず奉れたまふ。御文は、
 あまり人もぞ目立つるなど思して、すくよかに、

源氏おぼつかなき月日も重なりぬるを、思はずなる御もてなしなりと恨みきこゆるも、御心ひとつにのみ

はあるまじう聞きはべれば、ことなるついでならでは、対面の難からんを、口惜しう思ひたまふる。
 など、親めき書きたまひて、

「おなじ巢にかへりしかひの見えぬかないかなる人か手ににぎるらん
 などかさしもなど、心やましうなん」

(真木柱卷③三九三頁)

三月、源氏は、六条院春の町の藤や山吹の夕映えを見る。「見るかひ」があつた玉鬘を懐旧し、かつて玉鬘が暮らした夏の町西の対へ赴く。呉竹の籬に山吹が咲きかかる様子を興趣深く感じ、独詠する。玉鬘への断ちがたい想いに、語り手は「げにあやしき御心のすさびなりや」と評し、源氏がかりのこを贈る流れへと移る。

この、④山吹を見て独詠↓⑤かりのこを贈る流れには、源氏の気持ちの必然性があるといえる。言葉の上でも、④「わざとなう」―⑤「わざとならず」、④「思はずに」―⑤「思はずなる」という対応が見える。つまり、源氏は山吹により玉鬘の「もて離れたること」を実感し、それでも恋しさが募り、かりのこを贈つたのである。

玉鬘巻の衣配りで、玉鬘に「山吹の花の細長」が調進され、野分巻で源氏と寄り添う玉鬘の姿が夕霧によって山吹に喩えられたように、山吹は、六条院の主、源氏との関係における玉鬘を象徴する花であつた^⑥。山吹は、夕顔と頭中将の娘であることを意識させる「撫子」とは、異なる意識下にある。「夕映え」「呉竹」は玉鬘と亡き母夕顔に共通して見られ、母子関係をつなぐ機能が指摘される^⑦。山吹が「呉竹の籬に、わざとなう咲きかかりたる」如く、玉鬘は夕顔の面影を包含しながらも、独自の美しさを見せる。源氏はそのような玉鬘を、未だ忘れがたく思っていた。

この三月の情景が、源氏の独詠の契機となる。端を発する「色に衣を」、和歌に続く「顔に見えつつ」はいずれも『古今和歌六帖』歌で、「おもふともこふともいはじくちなしのいろにころもをそめてこそきめ」(第五「くちなし」三五〇八)、「夕されば野べに鳴くてふかほどりのかほにみえつつわすられなくに」(第六「かほどり」四四

八八) が引歌とされる。山吹の黄色から染料となるくちなしの色を連想させ、口に出せない玉鬘への想いの色を衣にでも染めて表したい、そのような源氏の心が独詠へとつながる。「顔に見えつつ」には「夕」「顔」が詠み込まれ、玉鬘の面影を忘れがたく思う気持ちに夕顔への想いも含まれている。

二月にも、源氏は玉鬘と歌を交わしていた。玉鬘が鬚黒邸に引き取られた翌月のことである。源氏は鬚黒の手前、ちよつとした冗談の手紙では贈りづらい状況にあった。それゆえ、春雨の所在なさにかこつけて文を贈る。「(源氏ハ) 恋しう思ひ出でられたまふ。」(真木柱卷③三九〇頁)、「(源氏ハ) いみじう恋しければ、」(三九一頁)、「(玉鬘ハ) 恋しや、」(同) と、「恋し」の語が源氏・玉鬘双方に見られるように、離れた場所でも共感可能な雨によって、心のつながりがより強く求められる。しかも、玉鬘との雨の日の語らひは、四月の雨の名残(胡蝶卷③一八五頁)、五月の長雨(蛩卷③二一〇頁)、野分(野分卷③二七七頁⁽¹²⁾)があったが、「のどけきころの春雨」(真木柱③三九一頁)はない。二人の雨の思い出が追加されるだけで、二人の仲を引き裂くものでない。それに対し、三月には玉鬘を想起させる山吹の情景が整う。これが玉鬘本人の不在を痛感させる。源氏の和歌を聞く人もいない。④の傍線部において、係助詞「ぞ」が「このたび」を強調しているように、同じ情景を分かち合えない状況に至ってようやく、源氏は玉鬘の「もて離れたる」ことを実感する。この後玉鬘が山吹に喩えられることはない。その実感のもとでも動く「あやしき御心のすさび」が、玉鬘に文を贈る口実を求め、かりのこを見つけるのである。

三 かりのこを贈る

かりのことは、「鴨の卵」「雁の卵」、総称として水鳥の卵などの諸説がある⁽¹²⁾。『枕草子』は「あてなるもの」

「うつくしきもの」として挙げている。『うつほ物語』藤原の君巻では、あて宮の求婚者の一人である実忠が、「めづらしく出で来たるかりのこ」（七一頁）をあて宮に贈っている。このことから、かりのこは、高貴な相手に獻じるのにふさわしいものだといえる¹³⁾。『うつほ物語』には他に鶯と鶴の卵が見られる。鶯の卵は、実忠に、北の方が贈ったものである。あて宮にうつつを抜かし家庭を顧みない実忠を非難するため、春雨に濡れる鶯の卵を涙に濡れる実忠の子の喩えとして用いている。鶴の卵は、三日夜の露頭（結婚）や産養などの祝宴での和歌に見られ、実物ではない。

また、『蜻蛉日記』では、真木柱巻と同じく三月に、作者道綱母から夫兼家の妹愆子へかりのこが贈られている。

三月つごもりがたに、かりのこの見ゆるを、これ十づつ重ねるわざをいかでせむとて、手まさぐりに生絹の糸を長う結びて、ひとつ結びてはゆひ、結びてはゆひして、引き立てたれば、いとよう重なりたり。なほあるよりはとて、九条殿の女御殿の御方に奉る。卵の花にぞつけたる。なにごともなく、ただ例の御文にて、端に、「この十重なりたるは、かうてもはべりぬべかりけり」とのみ聞こえたる御返り、

愆子数知らず思ふ心にくらぶれば十重ねるものとやは見る

とあれば、御返り、

道綱母思ふほど知らではかひやあらざらむかへすがへすも数をこそ見め

それより、五の宮になむ、奉れたまふと聞く。

（上巻 康保四年三月 一五一頁）

かりのこ（または鳥の卵）を十づつ重ねることは、『伊勢物語』五〇段の、恨み言を言ってきた女を恨んで男が詠んだ歌「鳥の子を十づつ十はかさぬとも思はぬひとを思ふものかは」（一五六頁）や『古今和歌六帖』において「女をはなれてよめる」を詞書に下の句「人のこころをいかがだのまん」とする歌群のうちの一首「かりのこをとをづつとをはかさぬとも」（第四「ぎふの思」二一九七）に見られる。『蜻蛉日記』の『新編全集』頭注による

と、道綱母はこれらを下敷きに、かりのこを十重ねるといふ、非常に困難なことも、生絹の糸でつなげれば可能になるように、「あなたは思ってくださなくても、わたしはあなたを思っているということをおもしろく述べた一種の遊戯的表現。」とする。後に五の宮(後の円融天皇)に献上されていることからやはり貴重なものであり、本気の恨み言の応酬ではなく、言語遊戯の趣が強いことが窺えよう。ただし、篠塚純子氏は「直接の相手は、怱子であることは間違いありませんけれど、道綱母のひそかな思いは夫兼家に向けられているのではないでしょうか。兼家を直接相手にしない、このようななぐさみごとに、かえって、彼女はその思いの濃さをはばからず表現することができるからです」と述べる⁽⁵⁾。自分をないがしろにする兼家への苦悩の和歌が前場面にくつことから、この場面でも、怉子に宛てた和歌の背後に兼家への思いを読み取ることができるだろう。

和歌でも、『伊勢物語』『古今和歌六帖』歌を下敷きにして、人の心の頼りがたさを詠んだ用例が見られる。

A

みつね

あた人をたのまんほとゝかりのこを かさねて見むといつれまされり
又返し

とりのこはかさねてしはしありぬとも 人をたのまむことのはかなさ

〔『忠岑集』一三九・一四〇、『躬恒集』二五二・二五三〕

B かりのこを十たてまつり給へれば、北方

かりのこにうらみをさへぞかさねつるいとどつらさのかずをみすれば

〔『朝光集』八五〕

C かりのこを人のおこせたるに

いくつづついくつかさねてたのまましかりのこのよの人のこころを

〔『和泉式部集』七〇六、『続千載和歌集』卷第七 雑体にも所収〕

Aは、「いつれまされり」と問う忠岑に躬恒が返歌する問答歌群中の一首で、浮気な相手を頼りにすることと、かりのこを重ねることの不安定さを比べている(註)。Bは、朝光が贈ったかりのこに対し、北の方が積み重なった恨みを述べ、Cでは、かりのこの贈り主に、「仮の此の世」との掛詞で人の心の頼みがたさを嘆く。累卵は、中国の故事では危険な状態の喩えだが、和歌ではつれない人への思いを積み重ねた不安定さを、累卵の不安定さになぞらえている。

ただし、先に見たB・Cともにかりのこの贈り主の歌は記されていない。Bは私家集であるが北の方の歌のみで、この歌に対する朝光の返歌も収載していない。そこで、次に贈り主の歌を挙げた。

D かりのこをたてまつるとて

おさなくておやとなれたるかりのこを みやたてしてもおもふへきかな

〔忠見集〕一五六

E このかたしたる〇、さいす（わりこを）けち（祭主）かかりてかへすとて、かりのこをいれて

いせれま（ママ）によさのうみよりとひかよふ うはの空にもかひになしけり

かへし

とひによふよさのしまをぞ人は とりと（本マ、）めはかひはあらまし

〔和泉式部集〕五一五・五一六

F ものまうすにつれなくのみゆる女に、とりのこをいつやるとて

すにすめる身をわひつゝもとりのこの いつかひありとものおもはむ

〔能宣集〕二八七

Dは、どのような場面で献上したのか分からないが、かりのこを子に喩えて子の成長を思う。Eは、祭主輔親（大
中臣輔親）が借りた破子に、かりのこを入れて返した時の歌である。歌中の伊勢は輔親の任国、与謝は和泉式部

の夫保昌の任地丹後国の地名である（「いせれま」につき、『新編国歌大観』は「いせじま」と校訂する）。「かひ」に「卵」と「効（甲斐）」を掛ける。Fでは、求愛しても冷たくあしらう女に、鳥の卵を五つ贈る。かりのこではないが、『伊勢物語』と同様、複数の鳥の卵を贈る例である。ただし、和歌は『伊勢物語』を踏まえて女を非難するわけではない。Eと同様、「五つの卵」―「いつ甲斐あり」の掛詞である。

このように、かりのこに添えて贈る歌には、累卵の不安定さと比較し、相手に恨み言を述べるような傾向は見られない。むしろ親が生んだ卵であることに重きを置いたり、「卵」―「効（甲斐）」の掛詞で自身の想いを卵自体に喩えたりする。前述の『うつほ物語』でも、実忠がは、かりのこをあて宮への想いの比喩として、多くの求婚者の中で目を惹くと考えたため贈ったのであろう。貴重なかりのこを贈ることに、受取主への想いが少なからず読み取れるからこそ、受取主は、相手の頼み難さを、かりのこを重ねる不安定さになぞらえ、恨み言を返すのであろう。贈り主は、たとえ恨み言を言われかねない状況でも相手との関係を保ちたいと思い、かりのこを贈ったともいえる。

源氏は玉鬘との離別を実感しながらも、諦めあぐねている。このような源氏にとって、『蜻蛉日記』にも「三月つごもりがた」に描かれるかりのこは、山吹の咲きほこる晩春の風物として、ふさわしいものであった¹⁶⁾。手紙には、「おぼつかなき月日も重なりぬるを」と記している。かりのこが不安定な心の重なりによそえられてきたことを前提に据えたものである。そのため、逆接「を」に続けて、玉鬘に逢えない現状が玉鬘の心ひとつによるものではないと擁護する。かりのこを贈ってはいても、『伊勢物語』などのような恋人への恨み言ではないとの弁明でもある。飽くまでも「すくよかに」、「親め」いた立場を堅持する。文中で「恨みきこゆる」、「聞きはべれば」¹⁷⁾「思ひたまふる」と謙譲語・丁寧語を多用していることから、かしまった態度が窺える¹⁸⁾。和歌でも累卵の不安定さには触れない。「おなじ巢」に孵ったはずの卵が見当たらないと、親の立場からの歌として言葉を選んでいいる。物語の構成としては鬚黒の代筆歌に「仮の子」を詠み込ませるためであったとしても、源氏は山吹の風景

を見て、甲斐のないことを理解しながらも、抑えがたい想いの丈を詠み込むためにかりのこを贈ったといえる。

四 「柑子、橘などやうに紛らはして」贈る意味

では、なぜこのかりのこを「柑子、橘などやうに紛らはして」贈る必要があったのだろうか。玉上琢彌氏は「そのまま玉鬘に贈ったのでは、礼を失するであろう、紙に包んだりして柑子橘に見せたのである。」と述べる¹⁸⁾。しかし、かりのこそのものに飾り付けをして贈る例は見られない。

『源氏物語』中の「紛らはす」の用例を見ると、自分の真意やよくない部分を他から分らないようにすることに眼目があり、決して元のものを飾り付けてよく見せることに重点が置かれていない。つまり、「紛らはす」は本心を隠すことに意義がある。隠した本心が他人に知られることはない。それに対して、当該場面では紛らわした元の姿であるかりのこに寄せて歌が詠まれ、全く紛らわされていない。「柑子、橘」は紛らわしたことが記されるだけで、贈答歌や消息の文言に関わってこない。ここで注目したいのが、源氏の歌に「かひの見えぬかな」とある点である。かりのこが紛らわされていることで、歌の意味が成り立つ。同様の例が蜻蛉巻に見える。薫は匂宮に橘の折枝を付けて郭公の歌を贈る。折枝と歌の組み合わせによって、薫の見た「御前近き橘の香のなつかしきに、ほととぎすの二声ばかり鳴きてわたる。」(⑥二二三頁)という情景が表されている。匂宮は薫の意図を察し、返歌に橘とほととぎすを詠み込んでいる。源氏はかりのこを紛らわして異なる形に見せることで、「かひの見えぬ」状態を表したのではないだろうか。

では、なぜ紛らわした姿が「柑子、橘」であったのだろうか。まず、山吹と同色の黄色であることが大きい。源氏の独詠歌の前に口ずさんだ「色に衣を」は、前述した『古今和歌六帖』歌であり、衣をくちなしの色(黄色)

に染める。かりのこは『中務集』において「ゆきを、かりのこにつくりて」の詞書で、「かりのこもとしとゝもにやかへるらん ゆきをふるすにかひのみゆるは」(二二三)とあるように、白さが際立つものである。その白いかりのこを黄色に染める行為(黄色の染料で染める、もしくは黄色の紙で包む方法が考えられる)は前場面の源氏の気持ちと通じている。

しかし、黄色に染めたかりのこは、山吹によって形容されない。『萬水一露』が「願五月の比の心興あり」と注するように、三月のこの場面で、かりのこを夏の景物のように紛らわすことは示唆的である。「柑子、橘」のうち、「橘」については、「さつきまつ花橘のかをかげ昔の人の袖のかぞする」(『古今和歌集』卷第三夏歌一三九よみ人しらず、『伊勢物語』第六〇段)に代表される、昔の人を恋うよすがであり、それだけにとどまらず、橘の実は源氏と玉鬘の間でしか分らない胡蝶巻のやり取りを想起させる。

なごやかなるけはひの、ふと昔思し出でらるるにも、忍びがたくて、源氏「見そめたてまつりしは、いとかうしもおぼえたまはずと思ひしを、あやしう、ただそれかと思ひまがへらるるをりこそあれ。あはれなるわざなりけり。中将の、さらに、昔さまのほひにも見えぬならひに、さしも似ぬものと思ふに、かかる人もものしたまうけるよ」とて涙ぐみたまへり。箱の蓋なる御くだものの中に、橘のあるをまさぐりて、

源氏「橘のかをりし袖によそふればかはれる身とおもほえぬかな

世ともの心にかけて忘れがたきに、慰むことなくて過ぎつる年ごろを、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ思ひなすを、なほえこそ忍ぶまじけれ。思し疎むなよ」とて、御手をとらへたまへれば、女かやうにもならひたまはざりつるを、いとうたておぼゆれど、おほどかなるさまにてもものしたまふ。

玉鬘袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ

(胡蝶巻③ 一八五頁)

源氏が亡き夕顔を思い出す拠り所として玉鬘に気持ちを傾け、初めて慕情を告白する場面である。これまで源

氏を養父としてしか見ていなかった玉鬘は、「うたて」と思いながらも穏やかに返歌する。ここで、源氏がくだものの中から橘を取り「まさぐ」る様子が描かれている。この橘の実は、源氏と玉鬘の贈答歌の中で玉鬘によそえられ、源氏は玉鬘の「御手をとらへ」る。この時には源氏の手の中にあつた玉鬘だが、「おなじ巢に」歌で示唆するように、今は別の人の手に握られている⁽¹⁹⁾。そして、「見るかひ」のあつた玉鬘が、今は「かひの見えぬ」状態となり、源氏には手の届かないところにある。

源氏が玉鬘にあやくな想いを持っていることは、源氏と玉鬘以外の人には知りえない。薄々感づいていたのが右近であり、二月にそのことが描かれている。源氏はもともと夕顔に仕えていた右近を、玉鬘との仲介役として頼りにしながらも、そのために玉鬘への思慕を自由に伝えられなかった。玉鬘の「ゐやゐやしく書きなし」(真木柱卷③三九二頁)た返事からも、源氏を恋しく思いながら、外見は父娘の体裁を取り繕わなければいけないことが窺われる。だからこそ三月には別の方法を取った。娘を卵に喩え、さも会えないことを寂しく思う親であるかのように見せた文を、かりのこに添える。鬚黒が「すきずきしや」(三九六頁)と非難するように、確かに源氏の文は親からの手紙にしてはあだめいている。しかし、源氏の真意は「かりのこ」とは別のところにある。鬚黒が玉鬘に代わって詠んだ歌「巢がくれて数にもあらぬかりのこをいづ方にかはとりかへすべき」(同)が、かりのこに注目していることは、源氏にとっては思う壺ともいえよう。思うがままに伝えられない想いだからこそ、紛らわせた後の姿である果実に、くだものの中から橘を選び取って告げた想いを隠す。また、「柑子、橘などやうに」と、並べて表現することで、第一部第一章で述べたように、語り手が源氏を評した「あやしき御心のすさび」に通じる、源氏の玉鬘へのあやくな情が、よりはつきり意識される。他者には「おなじ巢に」歌で視点をかりのこ自体に向けさせ、玉鬘にしか分からない形で未だ忘れられない玉鬘への慕情を打ち明けたのである。

五 光源氏と玉鬘の関係の終焉

源氏は玉鬘の比喻として用いられてきた山吹を見て、玉鬘が「もて離れたる」ことを実感する。既に甲斐ないことを知りつつ繋ぎ止めたいたい気持ちだが、かりのこを贈らせる。三月の風物であるかりのこは貴重で、贈物にふさわしいものであった。また、『伊勢物語』や『古今和歌六帖』では、卵を重ねることが不安定な心の頼みがたさと比較される。これを下敷きに、源氏は玉鬘に会えない月日が重なったと述べる。とはいえ、表向きは飽くまで「おなじ巢にかへりし」子の親としての文である。恋人への恨み言になりそうなかりのこも、文の中でその可能性を打ち消し、累卵と離れた掛詞を用いて「すくよか」な印象を残す。鬘黒がいぶかしむように、養女へ宛てたものにしては過度な執着が見えるものの、親として言い逃れできる範囲の文なのである。

しかし、文も歌もかりのこの修辭に終始し、玉鬘以外の者が読めば、視線がかりのこに向かうよう計算されていた。源氏と玉鬘との間でしか通じない記号「橘」などのようになりのこを紛らわすことで、源氏がくだもの中から橘の実を選び「まさぐり」、玉鬘に初めて慕情を打ち明けた場面を想起させる。前月に文の仲介を頼んだ右近にさえ、玉鬘への思慕を知られることを懸念し、十分な想いを伝え得なかった。それゆえ、源氏は幾重にも自分の気持ちを覆い隠し、六条院にいた右近を介さず、玉鬘にしか分からない方法を目論んだのであろう。

ただし、玉鬘からの返事はなく鬘黒からの代筆歌が届く。この三月の応酬を最後に、源氏と玉鬘との交渉は描かれなくなる。玉鬘が次に登場するのは若菜上巻の源氏四十の賀で、鬘黒夫人として若菜を献上する。源氏が初めて慕情を打ち明けた際に自身の手の中にあつた橘は、皮肉にも源氏と玉鬘の関係の完全なる終焉を突き付けるものとなったのである。

注

- ① 秋山虔氏「玉鬢をめぐって―源氏物語ノオトより―」（『文学』一八・一二 一九五〇年十二月）
- ② 吉岡曠氏「玉鬢物語の構造」（『源氏物語論』笠間書院 一九七二年十二月、初出は「学習院大学国語国文学会誌」一五 一九七二年一月）
- ③ 田坂憲二氏「玉鬢十帖の結末について―若菜卷への一視点―」（『源氏物語の人物と構想』和泉書院 一九九三年十月、初出は「語文研究」四九 一九八〇年六月）、伊井春樹氏「玉鬢十帖の主題」（『源氏物語研究集成』第一卷 風間書房 一九九八年六月）
- ④ 坂本昇氏「明石姫君と真木柱」（『古文学』三九 一九八七年五月）
- ⑤ 斎藤暁子氏「玉鬢の結婚をめぐって」（『源氏物語の探求』第八輯 一九八三年六月）
- ⑥ 竹下田氏「玉鬢十帖の結末」（『むらさき』四三 二〇〇六年十二月）
- ⑦ 熊谷義隆氏「かりのこ―仮の子を得て実子を手放す物語」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』No. 37 真木柱 二〇〇四年十一月）
- ⑧ 引用本文中の「鴨の卵」「雁の子」はすべて「かりのこ」と平仮名表記に改めた。
- ⑨ 河添房江氏「花の喩の系譜―源氏物語の位相―」（『源氏物語の喩と王権』有精堂出版 一九九二年十一月、初出は「日本の美学」三 一九八四年十月）によると、「六条院に養女格として迎え取られながら、娘分とも妻妾ともつかぬ玉鬢の、なんとも半端で生きがたい位置の象徴にほかならなかった」と述べられている。
- ⑩ 「夕映え」については伊藤夏穂氏「源氏物語」の「夕映え」（『日本文学論究』六九 二〇一〇年三月）により、「呉竹」については笹生美貴子氏「源氏物語」に見られる「呉竹」―『夕顔・玉鬢母子物語』の伏線機能―」（『語文』一二四 二〇〇六年三月）により指摘されている。
- ⑪ 野分巻の源氏と玉鬢の応酬の場面自体に「雨」の語はないが、同日夕霧が紫の上を垣間見た場面では村雨が降っており、夕霧は玉鬢の姿を「八重山吹の咲き乱れたる盛りに露かかれる夕映え」（野分巻③二八〇頁）に喩えていた。また、玉鬢への源氏の返歌に「した露に」（同）とある。
- ⑫ 黒田長禮氏『雁と鴨』修教社書院 一九三九年二月、黒田長久氏・森岡弘之氏監修『世界の動物 分類と飼育（ガンカモ目）』東京動物園協会 一九八〇年十二月によると、マガンやカリガネ等のガン類は冬鳥として日本に渡ってくるものの、日本での繁殖の記録はない（ユーラシアや北アメリカの極北部で六〜八月に一腹四〜七個の卵を産む）。これに対し、カルガモは本邦中部での繁殖期を四月下旬〜七月（太陽暦）とし、一腹六〜一〇個或いは八〜一三個であるという。『蜻蛉日記』のかりのこを贈る場面が三月下旬であること、『古今和歌六帖』等にかりのこを十ずつ重ねる和歌が見られること、また、橋姫巻で宇治八の宮が「うち棄ててつがひさりにし水鳥のかりのこの世にたちおくれけん」（⑤一二二頁）と詠むことなどから考えて、水面または潜水して採食することの多い鴨類であろう。『新撰字鏡』「鴨」項にも「加利」の和訓がある。なお、榊原邦彦氏「あてなるもの」の段の解釈」（『枕草子論考』教育出版センター 一九八四年三月）は

平安文学作品に現れるかりのこを全て軽鴨の卵とする。

(13) 『河海抄』は「献鴨子事多在之」と注する。

(14) 篠塚純子氏「かげろふ日記ノート⑩―あて名のない手紙―」（『形成』二七・六 一九七九年六月）

(15) 『躬恒集』二五二番歌では二句目が「たのまぬほとと」との異同があるが、不安定さを比べているため、打消の助動詞「ぬ」ではなく、『忠岑集』のように婉曲の助動詞「ん（む）」であろう。

(16) 源氏の独詠歌中に見られる井手の山吹は『古今和歌六帖』では「山ぶき」項の他「いまはかひなし」項に二首見える。また、藤田加代氏「山吹」の物語―源氏物語における玉鬘造型について―（『日本文学研究』三四 一九九七年三月）が指摘するように、『万葉集』から山吹は実のない花として知られており、「実||種子||卵がない」というつながりの可能性も見えてくる。

(17) 伊藤和子氏「源氏物語にあらはれた「給ふる」と「侍り」（『国語国文』二二・一 一九五三年一月）や杉崎一雄氏「源氏物語の敬語法―特に、いわゆる「謙讓語」「丁寧語」の使用と身分―」（『平安時代敬語法の研究―「かしこまりの語法」とその周辺―』有精堂出版 一九八八年一月）によると、下二段活用動詞「給ふ」「侍り」は「かしこまりあらたまつた、いわば他人行儀の物言いになる場面」に用いられる。

(18) 玉上琢彌氏『源氏物語評釈』第六卷 角川書店 一九六六年。『満水一露』も「閑かうしたちはななとやうに鴨のこをつゝみたる也（傍点執筆者）」と注する。

(19) 中西智子氏「真木柱巻の玉鬘と官能性の表現―『源氏物語』における風俗歌および古歌の引用をめぐる―」（『国文学研究』一五二 二〇〇七年六月）によると、源氏に「まさぐ」られていた橘の実が真木柱巻で「かりのこ」に姿を変えたという。

第三章 塩の歌に寄せる想い

一 製塩の地、須磨

光源氏は都を離れ、一時須磨に退去する。到着した源氏の感慨を深めるのが、同じく一時須磨に蟄居した在原行平の歌である。

田むらの御時に事にあたりてつづくにのすまといふ所にこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける
在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつつわぶとこたへよ

〔古今和歌集〕卷第一八 雑歌下 九六二

「おはすべき所は、行平の中納言の藻塩たれつつわびける家居近きわたりなりけり。」（須磨卷②一八七頁）と、源氏は行平が歌を詠んだ家の近くに住まいすることを嘯みしめている。

行平が須磨に籠った理由は「事にあたりて」とあるのみで、史料からも窺えない。が、須磨に暮らす憂愁の情は源氏と通じるものがある。須磨流離の準拠として、古注では、菅原道真、源高明、在原業平、小野篁、藤原伊周、周公旦、白居易など様々な人物が挙げられている。その中でも、行平は本文中に固有名が二回見え、共に須磨での歌を引く。源氏の退去先を須磨とした大枠に行平の歌があったことは明らかである。

その行平が「藻塩たれつつ」と詠むように、須磨といえば製塩地であった。『万葉集』に所収される「須磨」の歌三首は、いずれも「塩」が詠み込まれる。ただし、源氏の頃には既に塩業は廃れていた。須磨巻冒頭で、源氏が須磨を選んだ理由を次のように記している。

かの須磨は、昔こそ人の住み処などもありけれ、今はいと里ばなれ心すごく、海人の家だにまれに、な

ど聞きたまへど、人しげくひたたけたらむ住まひはいと本意なかるべし、さりとして、都を遠ざからんも、古里おぼつかなかるべきを、人わるくぞ思し乱るる。

(須磨卷②一六一頁)

昔は人家もあつたものの、今は海人の家さえ稀と聞く。自主謹慎のような形をとる源氏にとつては、都からそれほど離れておらず、人の賑わいのないこの地が好都合であつた(モ)。

このような寂れた須磨ではあるが、塩焼きのイメージは『源氏物語』の中に引き継がれている。『源氏物語』中「しほ」の用例は、複合語や異同のあるものを含め、六九例ある(モ)。そのうち土地と関わる「しほ」の多くが須磨を表している(モ)。和歌に用例が多い(二四例)ことから、感興を催すものであつたことが分かる。『源氏物語』に描かれる自然の景観について、松井健児氏が「その関心は、いわゆる実景にあるのではなく、故事や詩歌、あるいはことばの象徴性によつて現象する表象空間としてのそれであり、ことばによつて構成された仮想の空間といてよいものであつた」と述べる(モ)ように、既に廃れていた須磨の塩の風景は、登場人物たちの心情を揺さぶり、また代弁するための情景として創り出された。

では、須磨の仮想空間を表象する「しほ」は、『源氏物語』の中でどのような情景を構築しているのだろうか。本章では、特に「しほ」の歌に着目し、考察を進める。

なお、「しほ」には海水の「潮(汐)」と生成された「塩」がある。田村勇氏が「塩」は「潮」の具象として位置づけられる。したがって、「塩」には「潮」のもつ概念もその中に包含されている」と述べる(モ)ように、本章ではどちらの「しほ」も同根の概念として扱う。ただし、「高潮」「満潮」などの潮流を表す「潮」と、人間の手によつて「塩」へと生成される前段階の海水である「潮」(「潮汲む」など)は、区別して考えたい。「潮汲む」↓「塩(潮)垂る」↓「塩焼く」は塩生成の一工程として考えられるからである。また、漢字表記については生成途中の海水である「しほ」(「塩垂る」など)も「塩」と記す。

二 塩の歌の世界

まず、「塩垂る」「塩焼く」とはどのようなものであったかを押さえておきたい。諸説あるが、乾燥した藻に海水を注ぎ（塩垂る）、焼いて水分を飛ばして塩分を濃縮した後、それを水に溶かしたもの（鹹水という）を煮詰める（塩焼く）方法が有力なようである⁽⁹⁾。また、「潮汲む」は溶出用の海水を運ぶ作業である。「藻塩」については、海藻を利用した製塩法によって生成された塩や、それを製するための海水、または鹹水を指す場合がある。廣山堯道氏は「藻塩〇〇」の和歌での頻出時期が、「海藻利用の製塩がほとんど姿を消し、塩浜法が一般化する平安中期からである」ことから、「も塩」の「も」あるいは「藻」は作歌の語呂、すなわち五音にするために塩に「も」を付した文芸用語であることがわかる⁽¹⁰⁾と述べる⁽¹¹⁾。『源氏物語』中の贈答歌を見ても、「藻塩」と「塩」の使い分けにこだわりは見られないようである。

律令時代の中央政権は、主として調・庸によって、塩を調達していた。その塩が「給料の一部として流通し、また中央官庁の余剰塩が都の東西市で販売された」という⁽¹²⁾。塩は、調味料としては勿論、儀式などにおいても使われ、馴染みのあるものではあるが、和歌では、実際に見たことがないであろう製塩の風景ばかりが詠まれてきた。後代のものであるが、『八雲御抄』や『色葉和難集』が「もしほ」に付した注⁽¹³⁾や、源融が河原院に海水を運んできて塩竈の景を模したという伝承⁽¹⁴⁾からも、貴族が製塩に興味を示し、塩に京とは異なる場を想像していた一端が窺えるだろう。その塩の源流の一つが須磨であり、都人は歌語によってのみ情趣を感じていたのである。

次に、須磨の塩の用例について検討する。先述の通り、『万葉集』における「須磨」の歌三例は、全て「塩」を

詠み込んでいる。

大網公人主宴吟歌一首

須麻乃海人之 塩焼衣乃 藤服 間遠之有者 未二著穢一

(卷第三 譬喻歌 四一三)

過二敏馬浦一 時山部宿祢赤人作歌一首 并短歌

御食向 淡路乃嶋二 直向 三大女乃浦能 奥部庭 深海松採 浦廻庭 名告藻苺 深見流乃 見卷欲跡
 莫告藻之 己名惜二 間使裳 不レ遣而吾者 生友奈重二

反歌一首

為間乃海人之 塩焼衣乃 奈礼名者香 一日母君乎 忘而将レ念

右作歌年月未レ詳也 但以レ類故載二於此次一

(卷第六 雑歌 九四六・九四七)

須麻比等乃 海邊都祢佐良受 夜久之保能 可良吉戀乎母 安礼波須流香物

(卷第一七 三九三二)

「しほやききぬ」とは、塩焼きをする人が着ていた藤布の粗末な着物のことである。四一六番歌の類似歌に、『古今和歌集』巻第一五「すまのあまのしほやき衣をさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ」(恋歌五 七五八題しらず よみ人しらず)があり、目の粗い「まどほ」な塩焼き衣を、訪れない恋人に対する嘆きの歌へと転じている。山部赤人の長歌に対する反歌である九五二番歌、塩の辛さから「からきこひ」を詠む三九五四番歌、いずれも恋歌であり、塩は恋人との距離の遠さを思い嘆き、涙を連想する塩辛さによって悲恋が詠まれていた。『古今和歌集』でもその傾向は変わらない。先に挙げた行平の九六二番歌とよみ人しらずの七五八番歌の他、すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり

(巻第一四 恋歌四 七〇八 題しらず よみ人しらず)

などがある。これは仮名序中、「たとへ歌」の例歌としても挙げられている。この前に「わがこひはよむともつきじありそうみのはまのまさごはよみつくとも」が例示されており、仮名序のこの歌は、恐らく後代に注記補入されたものようである。が、本田恵美氏が、裏の意味（意外な人になびいてしまった恋人を煙に喩える）を読むことができる点で、「わがこひは」歌より「たとへ歌」にふさわしいと見なしている⁽¹⁵⁾ことは注目される。『伊勢物語』第一一二段にも『古今和歌集』と同じ歌が見え、須磨の塩焼きの風景に、心が離れてしまった恋人への想いを詠んでいる⁽¹⁶⁾。

むかし、男、ねむごろにいひちぎりける女の、ことさまになりにつければ、

須磨のあまの塩焼くけぶり風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり

(第一一二段 二〇九頁)

「煙」は「思ひ」の「火」の縁語である。その煙が風に吹かれ、予想外の方向になびいてしまったことを、心変わりした恋人の姿に喩えている。『源氏物語』真木柱巻では、この下二句の意をとって、予想外に鬚黒と結婚することになってしまった玉鬘が「塩やく煙のなびきける方をあさまし」（真木柱巻③三八九頁）と思っている。盗み出されるようにして鬚黒の自邸に連れてこられた玉鬘は、この時点では鬚黒を忌み嫌っている。塩焼きの「煙」は塩の辛さと相俟って、自分の思うようにいかない「からき恋」の宿世を嘆くのだろう。

三 塩の歌を贈る

須磨の源氏の家には、荘園の役人や、源氏の邸に出入りし親しい間柄であった摂津守などが訪れている。その

ため、全くの孤立無援ではないものの、源氏の話し相手になれそうな相手はいない。その心境を「知らぬ国の心地」(須磨卷②一八八頁)と形容するように、京がはるか遠くに感じられる。その寂しさは、行平の「藻塩たれつ」歌を重ねることによって倍加する。行平が侘び住まいの寄る辺なさを歌にして「宮のうちに侍りける人」に贈ったように、源氏も女君たちへ歌を贈る。いずれにも「塩」を詠み込み贈っている。

- A (源氏↓藤壺宮) 松島のあまの苦屋もいかならむ須磨の浦人しほたるるころ
 A' (藤壺宮↓源氏) しほたるることをやくにて松島に年ふるあまも嘆きをぞつむ
 B (源氏↓朧月夜) こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼くあまやいかが思はん
 B' (朧月夜↓源氏) 浦にたくあまだにつつむ恋なればくゆる煙よ行く方ぞなき
 C' (紫の上↓源氏) 浦人のしほくむ袖にくらべみよ波路へだつる夜の衣を
 D₁ (六条御息所↓源氏) うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれもしほたるてふ須磨の浦にて
 D₂ (六条御息所↓源氏) 伊勢島や潮干の潟にあさりてもいふかひなきはわが身なりけり
 D'₁ (源氏↓六条御息所) 伊勢人の波の上こぐ小舟にもうきめは刈らで乗らましものを
 D'₂ (源氏↓六条御息所) 海人がつむ嘆きの中にしほたれていつまで須磨の浦にながめむ

(須磨卷②一八九頁〜一九五頁)

本文に記される順にアルファベットを振り、プライム記号(´)は返歌を示す。なお、源氏から紫の上への贈歌は記されない。六条御息所との贈答は、源氏の方が返歌である⁽¹⁶⁾。

まず、源氏の歌に着目すると、藤壺宮宛、六条御息所宛には「塩垂る」、朧月夜宛は「塩焼く」という違いがある。紫の上宛の源氏の歌はないが、紫の上の返歌から、「潮汲む」を詠み込んだ可能性が想定できる。この「塩垂る」や「塩焼く」の違いについては、まず掛詞や情景の裏の意味から考える必要がある。先述した通り、「塩垂る」は涙で袖を濡らす意で用いられ、行平の歌を念頭に置いているのだろう。塩釜まで海水を運搬する「潮汲む」も、

同じく涙でぐつしよりと衣が濡れた姿を思わせる。他方、「塩焼く」や焼くことにより立ち上る「煙」は「思ひ」の「火」の縁語であり、恋心に身を焦がす姿を想起させる。源氏は京から遠く離れ不遇な暮らしをする嘆きの涙を、京にいる藤壺宮や伊勢の御息所に知ってほしいと思うが、朧月夜に対しては、今なお忘れ難い恋心の火を伝えていいる。紫の上の「潮汲む」は、源氏の贈歌が描かれないのはつきりとは言い難いが、海水を汲むため海に入った姿を想像させ、他の女君よりもさらにしとどに濡れる嘆きを思わせる。

さらに、個々の贈答歌について見てみよう。源氏が藤壺宮に宛てた歌（A）は、藤壺宮出家後の新年、年賀に参上した折の歌が踏まえられている。

源氏
ながめかるあまのすみかと見るからにまづしほたるる松が浦島

と聞こえたまへば、奥深うもあらず、みな仏に譲りきこえたまへる御座所なれば、すこしけ近き心地して、

藤壺
ありし世のなごりだになき浦島に立ち寄る浪のめづらしきかな

とのたまふもほの聞こゆれば、忍ぶれど涙ほろほるとこぼれたまひぬ。

（賢木卷②一三六頁）

源氏は「すこしけ近き心地」のする、藤壺宮の声もほのかに聞こえる位置で、藤壺宮と対面することができた。この時には、「松が浦島」を、尼になった藤壺宮の住処と眺め、源氏は永遠に叶わぬ恋となった相手を前に涙していた。しかし、今は「松が浦島（松島）」の様子さえ見えない須磨にいる。それゆえA歌で「いかならむ」と問い、須磨で「しほたるる」しかない。

また、須磨退去前、別れの挨拶に藤壺宮を訪ねた源氏は「かく思ひかけぬ罪に当たりはべるも、思うたまへあはすることの一ふしになむ、空も恐ろしうはべる。惜しげなき身は亡きになしても、宮の御世だに事なくおはしまさば」（須磨卷②一七九頁）と述べていた。須磨退去を「罪」の結果とし、藤壺との間に生まれた東宮（後の冷泉帝）の御世の安泰を願い、「罪」と東宮とを結びつける。藤壺宮も「みな思し知らるることにしあれば、御心の

み動きて聞こえやりたまはず。」(同)と、源氏の言わんとするところを悟っていた。源氏が「浦島に立ち寄り」ことができず、須磨で涙に濡れていることに、藤壺宮は心動かされずにはおれない⁽¹³⁾。「松島」で同じく「しほた」れて、嘆きを積み重ねているとの返歌(A')には、源氏に同調する気持ちが見える。源氏と同じ「しほたる」を用いつつ、製塩の次の工程「やく」「(役)」と「焼く」との掛詞)や「なげきをぞつむ」(塩を焼く薪(投げ木)を積む)を詠み込む。源氏の思慕を拒絶し続けてきた藤壺宮が「からき恋」を匂わすのである。

それに対し、朧月夜宛(B)には「塩垂る」が用いられない。『紫明抄』や『河海抄』は『古今和歌六帖』の「しらなみはたちさわぐともこりずまのうらのみるめはからんとぞ思ふ」(第三「みるめ」一八七〇)を引く。この歌で「刈らん」とする「こりずまの浦のみるめ」を「見る目」と掛け、源氏は朧月夜に「見る目ゆかしき(逢いたい)」と願う。また、朧月夜の返歌(B')に「煙」が見られる。京と須磨で引き裂かれた今もお、くすぶり続けている恋心を連想させる。源氏の須磨退去の表面的、直接的な要因は朧月夜との密通であろう。そのため、「塩垂る」によつて、須磨で落ちぶれて涙に暮れる源氏の姿を示唆するよりも、「こりずま」の歌枕から、懲りずに「からき恋」に身を焦がす姿を詠む方が、朧月夜との関係においてふさわしいのである。

森一郎氏は、源氏が藤壺・朧月夜それぞれに対し、異なる愛情問題を須磨退去の理由として述べ、納得させることで、かえって予言に裏打ちされた光源氏像を浮き彫りにする様を論じている⁽¹⁴⁾。須磨に至っても、源氏はそれぞれの女君との関係を保ち、深めるために言葉を選んでいく。藤壺宮も朧月夜も、京から遠く離れた「塩」の歌に感じ入り、源氏の心と通わすような返歌を贈る。都人にとつての須磨のイメージであり、鄙から都へと運ばれてくる塩を源氏は歌に乗せて贈ることによつて、須磨の侘しさを誇張し都の女君との関係を結ぼうとする。

六条御息所との贈答では、御息所の贈歌(D₁)に「もしほたる」とあることにより、源氏は「しほたれて」と返している(D'₂)。ただし、御息所が一首中に詠み込んでいた「うきめ刈る」と「もしほたる」を、源氏は二首に分けて返している。二人の贈答四首を順に検討すると、D₁では、「塩」や「海人」という伊勢と須磨の共通項

を示すことで、「もしほたる」須磨から「うきめ（憂き目）刈る」伊勢への心寄せを求め、D₂では伊勢での「いふかひなき」我が身を嘆く。D'₁で、伊勢人のこぐ小舟に乗ったらよかったのに、と嘆きを共有しているようでありながら、「うきめは刈らで」とあるように、伊勢ではなく須磨で「うきめ刈る」源氏の姿をつきつける。最後のD'₂では須磨で「しほたれ」る源氏自身を詠んでいる。小町谷照彦氏は、D₂とD'₂がそれぞれ自身の不遇な生活を嘆くものとして自己完結した「独詠的な性格」を持つことを指摘し、「この二首連続の贈答は、相互の心情の交流と自己の現状の述懐と二面の構造を持って、両者の不遇な環境を幅広く取り入れたものとなっている」と述べる⁽¹⁰⁾。D'₁の前の源氏の情報部分に「おなじくは慕ひきこえま、しもの、を、などなむ。」（須磨巻②一九五頁）とある。D'₁でも反実仮想の助動詞「まし」＋逆接の接続助詞「ものを」を用いている。源氏は六条御息所と別れた後悔を口にするものの、須磨で「しほたれて」いる現状を認識し、御息所との関係修復には踏み込まない。源氏の歌では、「うきめ刈る」と「もしほたる」だけでなく、「伊勢」と「須磨」も一首中に詠み込むことをしない。六条御息所は伊勢の「潮干」で我が身を思い、源氏は須磨で「しほたれて」いるという、伊勢と須磨の越えられない厳然たる距離を物語るのである。

四 潮の力

前節では、須磨に到着した源氏と、遠く離れた女君との関係をつなぐ贈答歌の中で、「しほ」の用例を見てきた。しかし、源氏の退去した須磨に、塩焼きの風景はない。「煙のいと近く時々立ち来るを、これや海人の塩焼くならむと思しわたるは、おはします背後の山に、柴といふものふすぶるなりけり。」（須磨巻②二〇七頁）とあるように、須磨ならではの眼前に映った「煙」は、源氏の期待を裏切り、柴というものをいぶす煙であった。

そして、須磨卷末尾から、同じ音を持つ「潮」⁽⁶⁾が迫り来る。三月上巳の祓を行っている最中、急に嵐が起る。風が吹き荒れ、雷が鳴り響き、雨脚が強くなる。「高潮」といふものになむ、取りあへず人損はるとは聞けど、いとかかることはまだ知らず」(須磨卷②二二八頁)と人々は言い合う。「高潮」は津波のことである。津波があつという間に人を呑み込んでしまうことは聞くが、このような暴風雨で波にさらわれてしまいうことになることは聞いたことがない、というほどのひどい嵐である。明石巻に入ると、実際に津波が起こる。

そのまたの日の暁より風いみじう吹き、潮高う満ちて、浪の音荒きこと、巖も山も残るまじきけしきなり。

(明石巻②二二五頁)

雨風が静まり、嵐の去った後を眺める源氏たちの目には「潮の近く満ち来ける跡」(明石巻②二二七頁)がまざまざと映り、海人たちが「この風いましばし止まざらましかば、潮上りて残る所なからまし。神の助けおろかならざりけり」(二二八頁)と、何もかも津波にさらわれる前に風が止んでくれたことを「神の助け」と感謝している。源氏はその話を聞き、

海にます神のたすけにかからずは潮のやはあひにさすらへなまし

(明石巻②二二八頁)

と詠じる。恐るべき「高潮」であるものの、「神のたすけ」がなければ潮流の集まる所をさすらっていたことだろうとする。「潮」は源氏の須磨の邸を襲う災厄であるものの、人的被害に及ばないことを神意として捉えている。阿部秋生氏はこの須磨・明石の物語の構造の支柱として、「神意・宿世・豫言」を用いていることを指摘する⁽⁷⁾。この場面においては、高潮のみならず、故桐壺院の霊が「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」(明石巻②二二九頁)と告げ、翌朝住吉の神に導かれた明石入道が迎えに来るなど、須磨から明石、さらには京へと源氏を動かすために「超自然性」⁽⁸⁾が付与されている。鈴木日出男氏は、「源氏の流謫の物語が最終的に彼の意識を超えた形でしめくくられるという構造は、彼自身の政治的な意識をそこに封じこめ、物語じたい

の展開としては巨大な宿世の流れの脈絡を形づくっていることになる」と述べる⁽²³⁾。その人知を超えた力の一つとして「潮」がある。「塩」の歌は須磨の源氏と京にいる女君たちをつないでいた。「潮」は、さらに大きな空間性をもって源氏と神とをつなぎ、源氏を明石へと導いていく。

五 塩の実景

明石に移った源氏は明石の君と契りを結び、その後、帰京の宣旨が下る。嬉しい反面、残していかねばならない明石の君への執着が増す。出立が明後日という頃になり、夜も更けぬうちに源氏は明石の君のもとを訪れ、初めてはつきりと明石の君の顔を見る。それにより、「見棄てがたく口惜しう」（明石巻②二六四頁）思い、何とかして京へ迎えたいと考えるようになる⁽²⁴⁾。一方の明石の君は、源氏の「言ふ方なくめでたき御ありさま」（同）を見、かえって「わが身のほど」（同）の卑しさを噛みしめ、源氏との距離を感じる。

この背景に、塩を焼く煙がかすかにたなびいている。『源氏物語』中唯一描かれる実際の塩焼き風景である。波の声、秋の風にはなほ響きことなり。塩焼く煙かすかにたなびきて、とり集めたる所のさまなり。

源氏 このたびは立ちわかるとも藻塩やく煙は同じかたになびかむ

とのたまへば、

明石 かきつめてあまのたく藻の思ひにも今はかひなきうらみだにせじ

（明石巻②二六四頁）

「波の声、秋の風」に「塩焼く煙」の景色を加えることで、五感でこの空間を味わい、あらゆる風情をとり集めた場のように思われる。源氏は「塩焼く煙」などの実景によって、明石だけでなく、須磨での思い出をも思い

起こしているのだろう。波の音も秋風も須磨の頃から感じていたものだった。須磨では実景としての「塩焼く煙」はなかったが、行平の歌に喚起されながら、京の女君たちに逢えないことを「しほたれて」、「塩焼く煙」の火に心を焦がした。塩の歌によって京と須磨の隔たった距離を結んできた。帰京を許された源氏は、言葉に乗せて京へ送るしかなかった「塩」を自身の足で京へ運ぶことさえ可能になった。だからこそ、源氏の目に須磨・明石を総括する塩焼きの実景が映るのではないだろうか。

そして、明石の君との別れを前に、「藻塩焼く煙」のなびく方向を一にして、明石の君との関係をつなごうとする。源氏、明石の君共々、「塩焼く煙かすかにたなび」く光景に、前掲した『古今和歌集』や『伊勢物語』の「すまのあまのしほやく煙風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり」を投射させている。ただし、「おもはぬ方」を「同じかた」に曲げようとする源氏に対し、明石の君は「藻の思ひ（物思ひ―火）」に心を焦がし、「今はかひなきうらみだにせじ」と、帰京する源氏との関係を諦めている。煙のたなびく方を見ようとしな。京を臨む源氏との距離が感じられるだけである。塩焼きの実景は、源氏と明石の君の気持ちの差異を映し出すものとして、源氏と明石の君との別離の背景に描かれる。

さて、帰京が決まり実景の塩を目にした源氏は、出立までの間に明石の君と三度、明石入道と一度贈答歌を交わしているが、「しほ」の歌を詠むことはしない。出立の日、明石の君は用意した狩衣に「寄る波にたちかさねたる旅衣しほどけしとや人のいとほむ」（明石巻②二六八頁）という歌を添えていたが、源氏の返歌である「かたみにぞかふべかりける逢ふことの日数へだてん中の衣を」（二六九頁）には、涙に濡れる意の「しほどく（潮解く）」を詠み込むことはしない。明石入道も「世をうみにこころしほじむ身となりてなほこの岸をえこそ離れね」（同）と詠むが、「都出でし春のなげきにおとらめや年ふる浦をわかれぬる秋」（二七〇頁）と、源氏は「しほじむ（潮染む）」を詠み返すことはしない。源氏は、涙を拭う姿を見せるが、その返歌は都を出た時の嘆きを思い出し比べているものである。既に気持ちは都に向かっていく。都とつながろうとする塩の歌はもう不要なのである。

塩焼きの実景は明石のイメージとして定着し、大堰に移り住んだ明石の君との再会の折にも思い出される。

乳母の、下りしほどはおとろへたりし容貌ねびまさりて、月ごろの御物語など馴れ聞こゆるを、あはれに、さる塩屋のかたはらに過ぐしつらむことを思しのたまふ。

(松風卷②四一〇頁)

明石姫君を世話するために遣わしていた乳母に対し、源氏は明石での暮らしを労う。「塩屋」は明石での暮らしの象徴である。須磨で遠くにいる女君たちと交わす和歌の中にしかなかった「塩」が、「潮」によって誘われた明石の実景として、目に焼きついている。

明石一族は、その後上京してからも、望郷の念に「しほ」のイメージを乗せている。若菜上巻において、明石尼君が出産前の明石の女御に生い立ちを語り、明石三代で唱和する。この場面でも、尼君と女御が「しほたる」と詠っている。

尼君 「老の波かひある浦に立ちいでてしほたるあまを誰かとがめむ

昔の世にも、かやうなる古人は、罪ゆるされてなむはべりける」と聞こゆ。御硯なる紙に、

明石の女御 しほたるあまを波路のしるべにてたづねも見ばや浜のとまやを

御方もえ忍びたまはで、うち泣きたまひぬ。

明石の君 世をすてて明石の浦にすむ人も心の闇ははるけしもせじ

など聞こえ紛らはしたまふ。別れけむ暁のことも夢の中に思し出でられぬを、口惜しくもありけるかなと思す。

(若菜上巻④一〇七頁)

尼君は、孫が天皇の子を産むという晴れがましきから涙する。涙を不吉と目配せする明石の君を尻目に、この涙を誰も咎められないだろうと詠む。そこに、「波」「かひ(貝)」「しほたる」「海人」という、明石を思わせる

「浦」の縁語が散りばめられている。女御は、「しほたるるあま」に「波路のしるべ」となってもらい、「浜のまや」（明石）を訪れたいと応じる。明石の君は、女御の生い立ちをまだ知らせるべきでないと思っていた。だが、尼君に同調し明石を故郷と捉えている女御の歌に、涙を隠しきれない。

三者の和歌のうち、共に「しほたるるあま」と詠む尼君と女御が対になり、明石の君の歌が「異質」であることについては、小町谷照彦氏により言及されている⁽³⁵⁾。明石の君の歌は、「明石の浦にすむ人」、すなわち入道の、子孫を思う心の闇に思いを馳せており、女御の出産後、明石入道が入山する展開への足掛かりとして位置づけられる。ただし、亀田夕佳氏が指摘するように、「すむ人も」とあることから、「女御を案じる明石君自身の親心」が込められている⁽³⁶⁾といえる。その親心を喚起させるのは、明石での記憶を持たない女御が「しほたるる」に明石への思いを巡らし、尼君の歌に和しているさまであろう。明石一族にとって塩は、故郷明石の実景と結びついて、長年遠く離れた京に上り苦しい思いをしてきた歳月を回顧させ、一族の結束を強めるものとなる。

六 須磨を想起させ続ける「塩」

明石一族にとっての塩は明石の実景を伴うものであった。しかし、源氏と京にいた女君たちとの関係において、実体を持たない言葉の「塩」は、やはり須磨を思い起こすものであった。若菜下巻において、源氏は出家した朧月夜を見舞い、

あまの世をよそに聞かめや須磨の浦に藻塩たれしも誰ならなくに

（若菜下巻④二六二頁）

と詠む。須磨巻でのやり取りで「塩焼く」歌を贈った朧月夜に対し、ここでは須磨へ下向した過去を「藻塩たれ

し」と詠む。藤壺宮と同じように尼になり、永遠に拒絶されたがゆえに、「藻塩たれし」と嘆いてみせ、もはや「塩焼く」ことは叶わない。

帰京の翌年の関屋巻に遡る。源氏は石山詣の折に空蟬と再会し、右衛門佐（昔の小君）を通じて歌を贈る。

わくらばに行きあふみちを頼みしもなほかひなしやしほならぬ海

（関屋巻②三六二頁）

「しほならぬ海」とは琵琶湖を指すが、敢えて「しほ」を用い、初句「わくらばに」と詠みかける。行平の「藻塩たれつつ」の歌を踏まえ、源氏が須磨で侘び住まいをしていたことを髣髴とさせる。空蟬は右衛門佐と共に、夫の任国に随い常陸国に下向していた。その下向は「おぼえぬ世の騒ぎありしころ、ものの聞こえに憚りて常陸に下りし」（関屋巻②三六一頁）とあるように、政治情勢の変化を察知し、世間を憚ったためであった。このことから、源氏は帰京後、右衛門佐と少し距離を置いていた。が、偶然再会した近江ではおくびにも出さず、昔のように空蟬への文の仲介を右衛門佐に頼んだ。和歌に行平歌を匂わせることで、右衛門佐や空蟬に、源氏不遇の折の対応を後ろ暗く思わせる。それゆえ、右衛門佐も空蟬に返歌を促し、空蟬も気後れしつつ返歌したのである。

また、紫の上の死を四季の風物と共に悼む幻巻において、出家準備を整える源氏は、女房に過去の手紙を焼かせる。その時、紫の上からの手紙に書きつけた歌が左記である。

かきつめて見るもかひなし藻塩草おなじ雲居の煙とをなれ

（幻巻④五四八頁）

「藻塩草」とは、『歌ことば歌枕大辞典』によれば、「塩を採取するために用いる海藻。多く筆跡の美称として用いられた」とある⁽²⁷⁾。海藻を掻き集めて海水を注ぐことから、「掻く」——「書く」の連想により手紙の喩となる。藻塩草と呼ばれる手紙を、かき集めて見ても甲斐がない、亡き人と同じように燃えて煙となれと詠む。では、なぜ手紙の喩として「藻塩草」という語が使われたのか。その契機に、製塩の光景を想起させる須磨の情景があ

る。

源氏は、過去の手紙をこれまでも何かのついでに破らせていたが、「かの須磨のころほひ、所どころより奉りたまひけるもある中に、かの御手なるは、ことに結ひあはせてぞありける。」（幻卷④五四六頁）とあるように、須磨で女君たちとやり取りした手紙のうち、紫の上のものは別にまとめて束にしていた。出家を前に、今回はそれをも破らせる。ここで、殊更「かの須磨のころほひ」を取り上げていることに注意したい。

源氏は、亡き紫の上の筆跡を見ると、目が見えないほど涙があふれてくる。女房たちの目を憚る源氏は、手紙を押しやって、「死出の山越えにし人をしたふとて跡を見つともなほまどふかな」（五四七頁）と詠む。死出の山を越えた紫の上を慕って出家を決意したものの、現世にある紫の上の筆跡に思い乱れる。女房たちも、源氏が見ていた手紙が紫の上のものであると察し、心打たれる。この後、「かきつめて…」歌を詠み、破らせていた手紙を焼くことにする。

小町谷照彦氏は、源氏の「死出の山…」歌と「かきつめて…」歌の間には、「非常に大きな飛躍がある」と指摘している⁽³⁸⁾。破却から焼却への転換点に何があったのか。二首間の本文を確認する。

〈「死出の山…」歌〉さぶらふ人々も、まほにはえひきひろげねど、それとほのぼの見ゆるに、心まどひども
 おろかならず。この世ながら遠からぬ御別れのほどを、いみじと思しけるままに書いたまへる言の葉、げに
 そのをりよりもせきあへぬ悲しさやらん方なし。いとうたて、いま一際の御心まどひも、女々しく人わらく
 なりぬべければ、よくも見たまはで、こまやかに書きたまへるかたはらに、〈かきつめて…〉歌と書きつ
 けて、みな焼かせたまひぬ。

（幻卷④五四七頁）

「この世ながら遠からぬ御別れ」とは、須磨退去の折の別れを指す。紫の上が亡くなった今に比べれば、近距離の、同じ世での別れであった。須磨退去直前の紫の上との贈答において、源氏は「生ける世の別れを知らで契

りつつ命を人にかぎりけるかな」（須磨卷②一八六頁）と詠んでいた。当時でさえ悲しかった別れだが、今やさらに遠い、世を分かち別れである。その「言の葉」は心を慰める術にはならない。むしろ、紫の上の言葉だけが現世に存在していることが自身を惑わせる。それゆえ、源氏は「よくも見たまはで」紫の上の文を燃やし、燃えた煙を、紫の上の火葬の煙と同じ、空に送ろうとする。伊井春樹氏が「自らの情念との決別」の場を意味するとし⁽²⁹⁾、松木典子氏が「紫の上追憶の日々の分岐点ないし終着点」と見なす⁽³⁰⁾ように、紫の上と今生の別れとなる。ただし、源氏は「かきつめて…」歌を紫の上の手紙に書きつけ焼かせている。つまり、源氏と紫の上の筆跡を共に煙にするのである。

塩焼く煙を火葬の煙と重ねる例は、須磨卷にもあった。離京の挨拶に、亡き葵の上の実家左大臣邸を訪れた折のことである。源氏は、若君（夕霧）の乳母である宰相の君を介して、葵の上の母大宮からの消息を受け取る。その言葉に涙し、

鳥辺山もえし煙もまがふやと海人の塩やく浦見にぞ行く

（須磨卷②一六八頁）

と、返事でもないように口ずさむ。須磨の塩焼く煙が、鳥辺山で葵の上を荼毘に付した煙に似ていないか見に行くのだという。『源氏物語』中、「しほ」に須磨のイメージを包含させる初例である。大宮は早くに娘葵の上を亡くし、娘婿であった源氏までもが、今去らんとする。惑乱する大宮への慰めに詠んだ歌であろうが、源氏は大宮と言葉を交わしながら、亡き葵の上に思いを馳せているのだろう。塩の歌は、ここでも遠くにいて逢えない女君に向けて贈られている。

源氏は紫の上の言葉（藻塩草）に自身の塩の歌を書きつけ、煙としてあの世へ送る。それにより、今生で紫の上と決別し、自身も「おなじ雲居の煙」となる。したがって、源氏は亡き紫の上とあの世で通じ合おうとするのではないだろうか。それは、遠く離れた女君たちとの仲を結ぶために詠まれてきた、須磨を想起させる塩の歌だ

からこそ、可能なのである。

七 関係を結ぶ塩の歌

伝統的詩情に基づいた仮想の塩の情景は、涙や「からき恋」を連想させ、都から遠く離れた須磨で侘び暮らしをする源氏に、さらなる憐情を掻き立てる。源氏はそのような塩の歌によって、遠くにいる女君たちと通じ合おうとした。それは海で生成された塩が京へ運ばれるように、言葉に乗せて遠路を結びつける。

また、「塩」の源流は「潮」である。潮によって源氏は神とさえ通じ合う。潮に導かれるままに、須磨から明石へと移され、明石では塩の実景を目の当たりにする。塩焼きの実景は、帰京の決まった源氏の眼前にたなびき、京へと導いているようである。

源氏にとって、塩は須磨での侘び暮らしを象徴する言葉の上のものであるが、明石一族にとっては明石の風景の中のものだった。上京し栄達を手にしてもそれは変わらず、望郷の念を催す。源氏と明石の君の気持ちのずれは、塩の実景に対する想いの差異によっても窺われる。

源氏にとって塩は、飽くまで須磨の伝統的詩情によるものである。その塩焼きの煙は、火葬の煙に見立てられることで、須磨よりも遙か遠くの亡き人とさえ通じ合おうとする。「塩」「潮」に着目した時、言葉によって形成される仮想空間が、実景以上の力をもって登場人物を動かす、他者と結びつく様相が見えてくるのではないだろうか。

注

- ① 岩下均氏「在原行平と須磨」（『目白学園国語国文学』四 一九九五年三月）に詳しい。
- ② もう一例は、古来名文といわれる「須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかかる所の秋なりけり。」（須磨巻②一九八頁）であり、行平の「たび人はたもとすずしくなりにけりせきふきこゆるすまのうらかぜ」（『続古今和歌集』巻第一〇 羈旅歌 八六八）を引く。
- ③ 『万葉集』などの和歌から須磨と塩のつながりは見出せるが、史料からは見えてこない。
- ④ 「須磨」は「スミ（隅）」や「ツマ（端）」に由来するといわれる五畿内の西の端である。西隣の明石は畿外となる。広瀬唯二氏「光源氏の須磨下向―境界としての須磨―」（『関西文化の諸相』二〇〇六年三月）は、律令の「假寧令」が畿外に出る際に天皇の許可を命じていること、『類聚三代格』寛平七（八九五）年十二月三日の太政官符が「五位以上及孫王」の畿外に出ることを禁じていることなどを挙げ、源氏の自主退去という意識が畿外に出ることを選択させなかったと述べる。
- ⑤ 複合語として「（も）しほたる」「（も）しほやく」「しほじむ」「しほなる」「しほどく」など、また副詞「しほしほと」などもある。「しほたる」は涙に袖を濡らす意であり、悲しみに気を落とす「しほる（しをる）」との異同が甚だしい。
- ⑥ 六九例は『源氏物語大成』校異編において「しほたる」の異同を持つものを全て含めた数である。
- ⑦ 土地と関わる、すなわち「塩」を詠み込む和歌の歌枕（引歌も含む）や、「塩」を描く風景として一定の場所を想定できる「塩」の用例は、二三例（「小塩山」二例を除く）である。うち「須磨」一二例、「明石」五例、「松島」「松が浦島」「伊勢」「難波」（「夕潮」）「近江」（「しほならぬ海」という否定表現）が各一例見られる。
- ⑧ 松井健児氏「海辺の風景―『源氏物語』の須磨・明石から大堰へ」（『文学』七・五 二〇〇六年九月）
- ⑨ 田村勇氏『塩と日本人』雄山閣 一九九九年八月
- ⑩ 平島裕正氏『ものと人間の文化史・塩』法政大学出版局 一九七三年五月、廣山堯道氏『塩の日本史（第二版）』一九九七年七月、同氏『古代日本の塩』雄山閣 二〇〇三年六月、一島英治氏『万葉集にみる食の文化―五穀・菜・塩―』裳華房 一九九三年九月など。
- ⑪ 廣山堯道氏「藻塩と塩歌」（『古代日本の塩』雄山閣 二〇〇三年六月、『日本歴史』三〇三 一九七三年八月初出の論稿に追記されたもの）
- ⑫ 廣山堯道氏『塩の日本史（第二版）』雄山閣 一九九七年七月
- ⑬ 『八雲御抄』は「もしほ もにくみかけてたる、也」（片桐洋一氏編『八雲御抄の研究 枝葉部 言語部』和泉書院 一九九二年二月）と記し、『色葉和難集』は「和云、もしほとはもといふうみの中にある草の鹽のしみたるに猶うしほ汲みかけ／＼して干つけてそれをやきてそのはひをたる、なり。是を藻鹽たるとも、焼くとも云なり。」（久曾神昇氏編『日本歌学大系』別巻二 風間書房 一九六六年二月）と注する。なお、徳原茂実氏「歌語「もしほ」考」（『武庫川国文』

四四 一九九四年十二月)によると、「もしほ」は平安時代以後の和歌の世界にのみ存在した幻の製塩法にかかわる歌語」であり、当時既に過去のものとなっていた製塩法の実態に即したものでないという。

(13) 源融が塩竈の景を模して河原院を造ったことは『伊勢物語』第八一段や『今昔物語集』巻二四に見えるが、そこで塩焼きに興じたということは後代の史料でしか見られない。ただし、地名「塩竈」から「塩焼き」の景を想像する基盤がこの伝承にあり、塩焼きの景を都とは異なる興深い景色として受容されてきたことはいえよう。

(14) 本田恵美氏「須磨の海人の塩焼く煙」考—『伊勢物語』一一二段の和歌の位相—(『国語国文研究と教育』三九二〇〇一年三月)

(15) 『万葉集』巻第七に「しかのあまの之加乃白水郎之しほやくけぶり焼塩煙かぜをいたみ風乎疾たちはのぼらず立者不やまに上山たなびく山尔軽引(雑歌 一二四六)、『古今和歌六帖』第一では初句が「すまのうらの」、四・五句が「たちはのぼらで山にたなびく」(「けぶり」七九七)、第三では初句が「いせのあまの」(「しほ」一七八三)という異同のある歌が見える。

(16) 花散里からの和歌も見えるが、源氏の離京により荒れていく邸の嘆きを訴えた「荒れまさる軒のしのぶをながめつつしげくも露のかかる袖かな」(須磨巻②一九六頁)のみで、源氏の返歌は描かれない。源氏の対応は家司に修理を要請する実務的なものであり、本章では取り上げない。ただし、敢えて「塩」を詠み込まず、涙で濡れる袖を長雨の「露」で示していることは源氏と花散里の関係を考える上で注目されよう。

(17) 藤壺宮の死後、夜居の僧都が冷泉帝に奏上する話の中で、源氏の須磨退去の時、藤壺宮が「いよいよ怖ぢ思しめして、重ねて御祈禱どもうけたまはりはべりし」(薄雲巻②四五一頁)ことが語られている。密通の罪と須磨退去を重ねて考え、祈禱をさせていたことが窺える。

(18) 森一郎氏「須磨流謫をめぐる光源氏像——源氏物語の表現と構造——」(『源氏物語作中人物論』笠間書院 一九七九年十二月)

(19) 小町谷照彦氏「光源氏の「すき」と「うた」」(『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会 一九八四年八月)

(20) 『日本国語大辞典』などによれば、「塩」の語源は「ウシホ(潮)」の略とするのが穏当なようで、「ウシホ」は「ウミシホ」に由来するとされる。

(21) 阿部秋生氏「須磨・明石の構造」(『源氏物語研究序説 下』東京大学出版会 一九五九年四月)

(22) 柳井滋氏「源氏物語と霊験譚の交渉」(『源氏物語研究と資料—古代文学論叢第一輯—』武蔵野書院 一九六九年六月)

(23) 鈴木日出男氏「光源氏の須磨流謫をめぐる——『源氏物語』の構造と表現——」(『文学』四六・七 一九七八年七月)

(24) 源氏は明石の君の顔を見る以前は、帰京後の明石の君との関係を諦めている節があった。第二部第一章を参照。

(25) 小町谷照彦氏「唱和歌の表現性」(『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会 一九八四年八月)

(26) 亀田夕佳氏「明石一族の〈ことば〉——若菜上巻の唱和歌をめぐる——」(『日本文学』五九・四 二〇一〇年四月)

(27) 久保田淳氏・馬場あき子氏編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店 一九九九年五月

- ② 小町谷照彦氏「『幻』の方法についての試論——和歌による作品論へのアプローチ」『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会 一九八四年八月)
- ③ 伊井春樹氏「紫上の悔恨と死——二条院から六条院へ、そして二条院へ——」『研究講座源氏物語の視界3 光源氏と女君たち』新典社 一九九六年四月)
- ④ 松木典子氏『源氏物語』紫の上追憶攷——幻卷・文焼却の検討を通して——」(『中古文学論攷』一八 一九九七年十二月)

第四章 くだものをさし出す弁の尼——「くだもの急ぎ」に見えた薫の姿——

一 従来の解釈と問題の所在

東屋巻における浮舟は、常陸介の邸から中の君の住む二条院、三条の小家、宇治へと、他者に導かれるままに、転々と居場所を変える。薫によって宇治に連れて来られることにより、宇治十帖の最後の女君としての舞台が整う。次の浮舟巻では、自分の運命に煩悶し、向き合うことになる。この前座ともいえる東屋巻の巻末に、弁の尼が薫にくだものをさし出す場面が描かれている。

尼君の方よりくだものまゐれり。箱の蓋に、紅葉、蔦など折り敷きて、ゆゑなからず取りまぜて、敷きたる紙に、ふつつかに書きたるもの、隈なき月にふと見ゆれば、目とどめたまふほどに、くだもの急ぎにぞ見えける。

弁の尼やどり木は色かはりぬる秋なれどむかしおぼえて澄める月かな

と古めかしく書きたるを、恥づかしくもあはれにも思されて、

薫里の名もむかしながらに見し人のおもがはりせるねやの月かげ

わざと返り事とはなくてのたまふ、侍従なむ伝へけるとぞ。

(東屋巻⑥一〇一頁)

箱の蓋に紅葉や蔦を折り敷いたくだものがさし出されている。敷紙に和歌が書かれており、月明かりでふと薫の目にとまる。和泉市久保惣記念美術館蔵の土佐光吉筆「源氏物語手鑑」にも採られる一場面である。この場面以前の経緯を簡単に説明すると、薫は秋に宇治を訪れ、弁の尼から、浮舟が三条の小家にいることを聞く。そこで、弁の尼に仲立ちを依頼し、三条の小家で強引に浮舟と一夜を共にした。翌朝、浮舟を抱きかかえ、侍女の侍

従・弁の尼を伴い、宇治に戻ってきた。引用箇所はその夜のことである。

巻末の当該場面は、『河海抄』では弁の尼の歌に、『花鳥余情』では薫の歌について、以前の場面の歌との関連が指摘された外、『一葉抄』を初例として、「くだもの急ぎ」という語に注が付されてきた。すなわち、弁の尼の和歌に注目したはずの薫が、くだものを急いで食べたがっているような姿に見えた、という、語り手の戯言として捉えられてきた。

この解釈については、近年別の見解が示されている。『源氏物語』中の名詞「いそぎ」が「急ぐ(hurry)」の意味で使われることはなく、多くは、儀式や法会の準備の意味に用いられているためである。匂宮と中の君の若君の五十日の祝いの準備を「餅のいそぎ」(宿木卷⑤四七七頁)とし、格助詞「の」が間に入るものの、「食べ物+いそぎ」の例もわずかに一例見られる。このような例をもとに、鈴木温子氏は、「急ぎ」を「大事な人生儀礼の準備」と解釈する⁽³⁾。その上で、薫が浮舟と一夜を共にした翌日であることに着目し、「婚礼に供されるくだもの」としての意味を見出そうとする。秋山虔氏・室伏信助氏編『源氏物語大辞典』「くだものいそぎ」項は、「急ぐ」と「準備」を折衷し、「果物を急いで準備した様子。」と説明している⁽⁴⁾。また、渡瀬淳子氏は、くだものに添えられた書き付けが、薫や語り手の目に「果物を整えた挨拶文のようなものかなにか(果物の色づく秋になりました、といったような)、そうした通り一遍の書き物と思ったのではないだろうか。」という新たな説を提起している⁽⁵⁾。

確かに、類例のない「くだもの急ぎ」の語義については、注目されてしかるべきである。しかし、薫が和歌に目をとどめるといふ行為は、普段であれば目に止まらないだろう山里の夜に、供されたくだもの敷紙に和歌がしたためられていたこと、「隈なき月」が出ていたことが重なって、為されたものである。弁の尼がくだもの敷紙に添えた「やどり木は…」の和歌は、薫が亡き大君から浮舟に心変わりしてしまったとするものである。これは、物語の流れに沿うものである。にもかかわらず、弁の尼の演出によってくだものが贈られたこと、そのくだ

ものを薫が実際どのような心境で受け取ったかという点は、置き去りにされ、あまり言及されてこなかった。

本章では、弁の尼が薫に趣向を凝らしてくだものをさし出すという場面が、東屋巻巻末に置かれている意味について、特に弁の尼の視点から考察する。それを踏まえて、古注釈から受容されてきた、「くだものいそぎ」の説から見える物語の奥行を検討する。

なお、弁の尼は、総角巻における大君の死をもって出家する。原則として、出家以前は、弁や弁の君、出家後は弁の尼と呼称する。

二 東屋巻の弁の尼の役割

弁は、薫に出生の秘密をうちあける老女房として、橋姫巻に登場する。中野幸一氏は、橋姫巻とそれ以後の働きが異なり、以後は「薫を大君の部屋に手引きすること」、「匂宮を中の君の部屋に導き入れること」、「薫と浮舟を逢わせること」という恋を助長する三つの役割を担っていると述べる^④。橋姫巻とそれ以後の役割を連関させた、弁の統一像を示すものとしては、徳江純子氏や外山敦子氏の論がある。徳江氏は、弁が柏木や大君の死について深く嘆き悲しみ追悼することで、対比的に死を実感できず形代を求め薫を映し出すと述べる^⑤。外山氏は、恋を失うたびに形代によってやり直そうとする、「薫の〈原点回帰〉指向」を、「昔物語」を要請される弁の尼が証し立てていると論じている^⑥。共通するところとして、弁は薫の心を汲み、助け、その心情を表面化させる役割を持つといえる。また、「老人の語り」という点に注目し、「その力が現実をきり開いてゆく、という、自在かつ積極的な意志として物語がある」と述べた永井和子氏の論^⑦などもある。

その一方で、陣野英則氏は、弁の尼が薫と浮舟との仲介について消極的であり、「薫は、浮舟との関わりをひら

いてゆく上で、媒にして語り手たるにふさわしい弁の尼を超える位置にまで来てしまう」と指摘している^⑧。弁の尼の視点で考えてみると、三条の小家にいる浮舟への言付けを薫から頼まれた際には「今さらに京を見はべらんことはものうくて。」（東屋巻⑥八六頁）、「人済すこともはべらぬに。聞きにくきこともこそ出でまうで来れ」（八七頁）と断るが、これまでになく積極的な薫に押される形で、しぶしぶ京に上る。薫が浮舟を抱いて宇治に戻る際も、中の君に会わずに帰ることを不都合として、一旦は同行を断っている。「例ならず」（同）強い口調の薫に逆らうことはできないながらも、薫と浮舟を結びつけることに、直接関わらないでおこうとする姿勢が窺える。

弁の尼のそのような姿勢は、京から宇治に戻る車中、薫に影響を与え始める^⑨。長くなるが、次に引用する。

君（浮舟）ぞ、いとあさましきにももおぼえで、うつぶし臥したるを、薫^⑩石高きわたりは苦しきものを」とて、抱きたまへり。薄物の細長を、車の中にひき隔てたれば、はなやかにさし出でたる朝日影に、^A尼君はいとはしたなくおぼゆるにつけて、故姫君（大君）の御供にこそ、かやうにても見たてまつりつべかりしか、ありふれば思ひかけぬことを見るかなと悲しうおぼえて、つつむとすれどうちひそみつ泣くを、侍従はいと憎く、もののはじめに、かたち異にて乗り添ひたるをだに思ふに、なぞかくいやめなると、憎くここに思ふ。老いたる者は、すずろに涙もろにあるものぞと、おろそかにうち思ふなりけり。

②君（薫）も、見る人は憎からねど、空のけしきにつけても、来し方の恋しさまさりて、山深く入るままにも、霧たちわたる心地したまふ。うちながめて寄りゐたまへる袖の、重なりながら長やかに出でたりけるが、川霧に濡れて、御衣の紅なるに、御直衣の花のおどろおどろしう移りたるを、おとしがけの高き所に見つけて、引き入れたまふ。

薫かたみぞと見るにつけては朝露のところせきまでぬるる袖かな

と、心にもあらず独りごちたまふを聞きて、いとどしぼるばかり尼君の袖も泣き濡らすを、若き人、あやし

う見苦しき世かな、心ゆく道にいとむつかしきこと添ひたる心地す。^B 忍びがたげなる鼻すすりを聞きたまひて、^③ 我も忍びやかにうちかみて、いかが思ふらんといとほしければ、^薫「あまたの年ごろ、この道を行きかふたび重なるを思ふに、そこはかとなくものあはれなるかな。すこし起き上がりて、この山の色も見たまへ。いと埋れたりや」と、強ひてかき起こしたまへば、をかしきほどにさし隠して、^④ つつましげに見出だしたるまみなどは、いとよく思ひ出でらるれど、おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる。いといたう児めいたるものから、用意の浅からずものしたまひしはやと、なほ、行く方なき悲しさは、^{むな}しき空にも満ちぬべかめり。

(東屋巻⑥九四頁)

弁の尼は、二重傍線部Aのように、大君の御供として薫を拝見したかったと涙している。それに対して、三条の小家からここまで、薫が形代であるはずの浮舟を前にし、触れながら、亡き大君を思い出す描写が為されることはない。傍線部①に「石高きわたりは苦しきものを」とあるように、浮舟の身体を気遣い抱きかかえてさえる。傍線部②に「君も」、③に「我も」とあり、薫の心の動きが二重傍線部A・Bの弁の尼の涙を受けてのものであることがわかる。また、傍線部②「君も、見る人は憎からねど」、④「つつましげに見出だしたるまみなどは、いとよく思ひ出でらるれど」とあるように、薫が見た浮舟の姿には逆接を伴う。浮舟のことは憎からず思い、大君に似ているところはあるものの、大君とは異なる部分が目につくようになる。そして、薫は弁の尼の涙をきっかけに、秋の「空のけしき」によって、大君への恋しさに浸っていく。大君の不在を嘆く悲しさが「むなしき空」に満ちるような心地がすると感じている。

秋の明け方の「空」は、次に挙げた宿木巻の場面を連想させる。これは前年の秋、薫が宇治で弁の尼と語り合った場面である。

宇治の宮を久しく見たまはぬ時は、いとど昔遠くなる心地して、すずろに心細ければ、九月二十余日ばか

りにおはしたり。(中略) 薰「いかながめたまふらんと思ひやるに、同じ心なる人もなき物語も聞こえんとてなん。はかなくも積もる年月かな」とて、涙をひと目浮けておはするに、老人はいとどさらにせきあへず。
弁の尼「人の上にて、あいなくものを思すめりしころの空ぞかしと思ひたまへ出づるに、いつとはべらぬ中にも、秋の風は身にしみてつらくおぼえはべりて、げにかの嘆かせたまふめりしもしるき世の中の御ありさまを、ほのかにうけたまはるも、さまざまになん」と聞こゆれば、薰「(中略)言ひても言ひても、むなしき空にのぼりぬる煙のみこそ、誰ものがれぬことながら、後れ先だつほどは、なほいと言ふかひなかりけり」とても、また泣きたまひぬ。

(宿木卷⑤四五三頁)

傍線部に見えるように、薰はこのとき、亡き大君を偲ぶ「同じ心」を持つ人が、弁の尼以外にいないと涙していた。弁の尼は大君の死後出家し、中の君が上京しても独り宇治に残った。出家という形で亡き大君に仕え続ける弁の尼が、ますます涙を止めえず、「空」を眺めている。その「空」によって、薰は共に亡き大君を偲び、「むなしき空」にのぼってしまった大君の火葬の煙を思い起こす。右の場面でも、薰は弁の尼の涙をきっかけに、秋の空の情景によって、大君への想いに立ち戻っていく⁽¹⁰⁾。弁の尼が宇治行きの車中で、大君への思いをめぐらせる契機も、「はなやかにさし出でたる朝日影」であった。朝日により、尼姿が露わになることを、弁の尼は厭い、出家の理由となった大君の死を嘆くのである。

宇治で大君を追懐するよすがとなる弁の尼は、飽くまで自らは大君に仕える立場で、大君と浮舟を別人として扱っている。例えば、宿木卷巻末において、薰が「かく契り深くてなん参り来あひたると伝へたまへかし」(宿木卷⑤四九五頁)と浮舟への伝言を頼んだ折には、「うちつけに、いつのほどなる御契りにかは、」(同)と笑い、いつの間に浮舟との縁が結ばれたのかと冗談にとっている。浮舟巻では、亡き大君が存命ならば、中の君などのように幸いを得ていただろうと追懐する弁の尼に対し、中将の君が「わがむすめは他人かは」(浮舟巻⑥一六五頁)

と、浮舟も姉たちに劣るまいとして反発を覚えている。

弁の尼は薫と浮舟との仲立ちに消極的でありながらも、結局薫の行動を制御しない。盲目的に薫の思慮深さを信じているからであろう。「奥なくあはあはしからぬ御心ざまなれば、おのづからわが御ためにも、人聞きなどはつつみたまふらむ」（東屋巻⑥八七頁）と、弁の尼は、薫の要請を受けて上京することを決める。薫が三条の小家を訪れた折にも、当惑する浮舟や乳母に対し、「あやしきまで心のどかに、もの深うおはする君なれば、」（九一頁）と、薫を擁護する。翌朝、九月の結婚を忌まわしいものと嘆く人々に、「おのづから思すやうあらん。」（九三頁）と慰める。弁の尼は薫の心持ちに疑いを抱かないだけで、決して大君の形代としての浮舟を慮るわけではない。弁の尼にとって浮舟は、大君とは別次元で考えられるべき人物である。

宇治に到着した薫は、亡き大君の魂が見ているのではと思ひ、車を降りて一旦浮舟の許から立ち去る。その後、薫と浮舟に、食事の用意が別々に為されている。「御庄より、例の、人々騒がしきまで参り集まる。」（九七頁）とあるように、薫のもとには莊園の人々が、騒がしいまでに参り集い、食事を奉仕している。対して、「女の御台は、尼君の方よりまゐる。」（同）とあり、浮舟の食事は弁の尼が準備している。莊園の人々がいるからとはいえず、そこから離れた場所で、尼であるため車を降りる場所さえ憚る弁の尼によって、浮舟に食事が供されている。後述するが、椎本巻や総角巻で、大君は薫にくだものを供していた。宇治において、浮舟は客人であり、薫に食事を供することのできる大君とは、異なる存在なのである。

以上のように、弁の尼は、一見薫に同調し、大君の形代となる浮舟との仲を取り持つように見える。しかし一方で、薫が浮舟に傾斜することを押しとどめ、亡き大君を想い続ける薫の心を表面化させる役割を担っているといえる。

三 弁の尼の和歌とくだものの役割

次に、弁の尼の歌「やどり木は色かはりぬる秋なれどむかしおぼえて澄める月かな」に焦点を当てる。この歌は、『河海抄』で、一年前に薫が宇治を訪れた翌朝の、次のやり取りを念頭に置いたものとされている。

木枯のたへがたきまで吹きとほしたるに、残る梢もなく散り敷きたる紅葉を踏み分けける跡も見えぬを見わたして、とみにもえ出でたまはず。いとけしきある深山木にやどりたる蔦の色ぞまだ残りたる。こだになどすこし引き取らせたまひて、宮へと思しくて、持たせたまふ。

薫やどり木と思ひいはずは木のもとの旅寝もいかにさびしからまし

と独りごちたまふを聞きて、尼君、

弁の尼 荒れはつる朽木のもとをやどり木と思ひおきけるほどの悲しさ

あくまで古めきたれど、ゆるなくはあらぬをぞいささかの慰めには思しける。

(宿木卷⑤四六二頁)

薫は、中の君も上京し、訪れる人のない寂しい宇治の邸を見渡す。昔の思い出の残る「やどり木(＝宿りき)」と思わなければ、この宇治での旅寝はどんなに寂しいものを感じるだろう、と独りごつ。傍線部「深山木にやどりたる蔦の色ぞまだ残りたる」という描写からも、薫がいまだ大君への未練を残していることが暗示される。薫の歌に呼応する弁の尼は、荒れ果てた宇治の住まいを「やどり木」と気にかけてくれる薫に心揺さぶられている。前日、「同じ心なる人もなき物語も聞こえんとてなん。」(宿木卷⑤四五四頁)と思っていた通り、薫は弁の尼を、宇治において共感し合える唯一の人物であると認めていた。その翌朝の右のやり取りでも、薫は弁の尼の返歌を「いささかの慰めには思しける。」と、一定評価している。

傍線部「色ぞまだ残りたる」とあった「やどり木(蔦)」は、東屋巻巻末の当該場面では「色かはりぬる」とあ

る。弁の尼の「やどり木は…」歌では、「やどり木」の住人が大君から浮舟に変わってしまったことを暗示する。大君を追懐させ、浮舟への心変わりを難じているのである。

なぜ弁の尼は、このような歌を薫に贈ったのだろうか。先述の通り、京から宇治に近づくにつれ、薫の大君への追慕の情は、弁の尼により強まっていった。到着した薫は、大君の魂が見ているのではないかと、浮舟との接触が憚られ、一人で車を降りる。時間を置いて、薫は再度浮舟と対面し、今後の扱いについて考えを巡らせる。浮舟の田舎びた装束、女二の宮にもひけをとらない髪の見事さ、始終遠慮がちな様子などを検分し、最終的に今は頼りなくても、大君の形代たるように「教へつつも見てん」（東屋巻⑥九九頁）と、「思ひなほ」（同）す。薫の理想像である大君に近づけるべく、教養や立ち居ふるまいなどから教え育てようというのだろう。ひとまず大君の魂が宿るための入れ物として、浮舟を必要としたのだろう。

そこで、薫は人の宮遺愛の琴や箏の琴を弾き、浮舟と語らう。父八の宮に認知されぬまま長年東国で暮らしてきた浮舟は、琴を弾けず、八の宮の思い出も共有できない。ただ恥ずかしがって白い扇をもてあそんでいるだけである。だが、その姿が大君を思い起こさせもする。薫は浮舟を教えたいという気持ちをさらに強め、浮舟に問いかける。

薫「これはすこしほのめかいたまひたりや。あはれ、わがつまといふ琴は、さりとも手ならしたまひけん」
 など問ひたまふ。浮舟「その大和言葉だに、つきなくならひにければ、ましてこれは」と言ふ、いとかたはに心おくれたりとは見えず。ここに置いて、え思ふままにも来ざらむことを思すが、今より苦しきは、なのめには思さぬなるべし。琴は押しやりて、薫「楚王の台の上の夜の琴の声」と誦じたまへるも、かの弓のみ引くあたりにならひて、いとめでたく思ふやうなりと、侍従も聞きあたりけり。さるは、扇の色も心おきつべき閨のいにしへをば知らねば、ひとへにめできこゆるぞ、おくれたるなめるかし。事こそあれ、あやしくも言ひつるかなと思す。

(東屋卷⑥一〇〇頁)

東国にいた浮舟なら、「わがつま(＝吾妻)」という和琴は弾けるかと勧める薫に対し、浮舟は、大和言葉の和歌もろくに詠めないのに、まして「やまごと」といわれる和琴など弾けないと拒む。浮舟の機知ある返答に、薫は潜在する才能を見出してさえた。そして、「琴は押しやりて」詩を誦じる。琴を押しやる動作は、琴を弾かない意志表示として、『源氏物語』中に用例が見える⁽¹³⁾。薫は、大君に近づけるために琴を教えたいと思ったものの、浮舟の返答によって弾く必要を感じなくなっている。ここに、大君の形代としてではない、浮舟自身に惹かれ始めている薫の姿が看取できる。

薫が口ずさんだ「楚王の台の上の夜の琴の声」は、『和漢朗詠集』所収の尊敬の詩「班女が閨の中の秋の扇の色 楚王の台の上の夜の琴の声」に拠る。上の句は、寵愛を失い嘆き悲しむ班婕妤の故事に基づいたもので、浮舟がもてあそぶ白い扇が、班婕妤の白い団扇を連想させる。浮舟の、班婕妤のような不幸な運命を暗示しているとされる。また、上の句の下敷きとなったであろう班婕妤作「怨歌行」(『文選』)の第三・四句には、「裁爲合歡扇 團團似明月」とある⁽¹⁴⁾。弁の尼の「やどり木は…」歌には、「色」「秋」「月」が並んでおり、班婕妤の故事を思わせる。返歌でないものの、薫が弁の尼に和して詠んだ「里の名も…」の歌にも「閨」という語が含まれている。弁の尼の和歌は、薫の口ずさんだ詩を聞き、理解した上で詠まれたものといえる。

対する浮舟は、「侍従も聞きぬたりけり」とあるように、詩の意味も分からず、侍従とともに、薫の声に聞きほれているだけである。つまり、薫の詩を理解できず、思い出を共有できない浮舟や侍従と、詩の意味を理解し、薫と共感し合える弁の尼という対立的な構図を浮き彫りにしている。教養を理解する弁の尼の行動は、橋姫巻での月下の垣間見⁽¹⁵⁾が示すような、大君の、浮舟にはない教養深さを思い起こさせることにもなる。

薫は「楚王」の詩を口ずさむ時点では、その詩が班婕妤の故事を暗示させることに気づいていなかった。河村奈穂子氏も述べるように、決して浮舟に落胆して、「楚王」の詩を口ずさんだわけではない⁽¹⁴⁾。しかし、その詩

が寵愛を失う浮舟を暗示していることに、口ずさんだ後、内心奇妙に思うことで、逆に現時点で薫が浮舟に心が動いていることを映し出すことになる。その薫に、弁の尼からくだものがさし出され、歌が贈られる。「やどり木は：」歌の二・三句目「色かはりぬる秋なれど」を、班婕妤の故事を踏まえて読むと、班婕妤のように寵愛を失ったのは、浮舟より寧ろ大君である。弁の尼は薫の心変わりを感じ取り、危惧を抱いたからこそ、大君を偲んで和した、宿木巻でのやり取りを踏まえ歌を贈る。和歌が「古めかしく」と形容され、全体の印象が「ゆゑなからず」と語られることも類似する。弁の尼は、大君から浮舟への心変わりを示唆しつつ、けれども薫が宇治を訪れたのは、今も亡き大君を思い続けているからなのだ、薫の大君への想いを念押ししていく。

では、「やどり木は…」の和歌の上に乗せた「くだもの」とは、どのようなものだったのだろうか。『源氏物語』中に「くだもの」が、上流貴族に供される位相語であったことについては、第二部第一章で述べた。当該の東屋巻で弁の尼が贈ったくだものに折り敷かれる「紅葉、蔦など」の様子は、「ゆゑなからず」と語られている。くだものを含め、弁の尼の薫に対するもてなしとしても、情趣を解したふさわしいものであったことが窺える。

薫がくだものを供されている場面は四場面五例ある。うち二例が当該の東屋巻である。竹河巻で玉鬘邸を訪問した折、藤侍従からもてなされる一例を除いた残り二例は、宇治で大君から供されている。

(大君ハ薫ニ)御くだものよしあるさまにてまゐり、御供の人々にも、肴などめやすきほどにて土器さし出でさせたまひけり。

(椎本卷⑤二二頁)

(大君ハ薫ニ)御くだものなど、わざとはなくしなしてまゐらせたまへり。御供の人々にも、ゆゑゆゑしき肴などして出ださせたまへり。

(総角卷⑤二二二頁)

いずれも薫にはくだもの、供人たちには肴や酒などが供されている。木谷眞理子氏は、「宇治の邸では主人が誰

であるかによつて、客人の薫に供する食べ物異なっている」ことに着目し、大君が女主人として客をもてなすのにふさわしいくだものを薫にもてなすことで、「男女の関係ではなく、あくまでも父の友人として薫を礼儀正しくもてなす」意思表示となつていと述べる⁽⁵⁾。確かに、椎本巻の例は、日が暮れようとするのに帰らない薫が、大君を京の邸に迎え入れたいと申し出た直後の場面であり、総角巻の例の後には、薫が大君のもとに押し入り、実事のないものの共に朝を迎えている。大君にとつてくだものは、薫の恋慕に対する拒否の姿勢ではあるものの、身分などを考えた上で薫にさし出されたものである。同様に、当該場面の弁の尼は、宇治でくだものを供することによつて、薫に大君を回顧させているのではないだろうか。

薫の「里の名もむかしながらに見し人のおもがはりせるねやの月かげ」という歌は、大君から浮舟に心変わりしたのではなく、大君が浮舟に「おもがはり」したのだ、自分の心は変わらず大君を想っているとす。薫は、大君と浮舟を同一視しており、二人を別人と捉える弁の尼の歌には与しがたいものがある。それゆえ、薫は返歌でなく詠む。だが、大君の形代としての浮舟の物足りなさを認めざるをえない。弁の尼は、薫が無意識にも浮舟に執着し始めている姿に感じながら、それを打ち消すように、大君を思い起こさせるくだものや和歌によつて、薫の大君を追慕する感情を湧き立たせていく。東屋巻巻末におけるそのような弁の尼と薫の感情のせめぎ合いが、浮舟巻における薫の、浮舟との向き合い方を定めていくのである。

四 東屋巻巻末に描かれた意味

では、なぜこのような場面が、東屋巻巻末に置かれ、「くだもの急ぎ」に見えたことが描かれたのだろうか。

ここで、「急ぎ」と表されることに焦点を当ててみよう。「いそぐ」の原義は、『角川古語大辞典』によると「目

的を早急に果すためにせつせと行動する意。」とある。そこから「早く物事を行う」意と「準備する」という意が派生した。『源氏物語』中の「いそぐ」を確認しても、目的があり、無闇に焦っているわけではない。主格となる人物も貴賤を問わない。この点、派生した意味双方に通底する。

この「急ぐ」について、薫に関わる例に注目した時、ある傾向が見られる。すなわち、女二の宮との関係で、急いで降嫁を決めること、結婚後急いで参上することを億劫に思う描写が繰り返されている。他方、居心地が悪くその場から立ち去る時や、匂宮に協力する時、また、宇治の御堂の造営のために急いでいる。例えば、

かく、やむごとなき御心どもに、かたみに限りもなくもてかしづき騒がれたまふ面だたしさも、いかなるにかあらむ、心の中にはことにうれしくもおぼえず、なほ、ともすればうちながめつつ、宇治の寺造ることを急がせたまふ。

(宿木卷⑤四七七頁)

とある。女二の宮との結婚は、今上帝や女三の宮から格別の後押しがあり、晴れがましいことである。しかし、薫にとっては、嬉しいとも思われない。薫は宇治の御堂造営に執心する。夜な夜な宮中に参内することを億劫がって女二の宮を三条宮に迎えても、亡き大君を恋しくばかり思い、「寺のいそぎにのみ」(宿木卷⑤四八七頁)没頭している。このように、女二の宮降嫁と宇治の御堂造営は、相反する事象として考えられている。

宇治の御堂造営は、「やどり木と…」と詠んだ前日に、阿闍梨に提案していたことである。もとは、中の君に語った、宇治に人形を据えて勤行したいという願いに基づく。薫は中の君から浮舟の存在を聞き、「人形の願ひばかりには、なかは山里の本尊にも思ひはべらざらん。」(四五二頁)と述べる。この時から、宇治に浮舟という人形を据えることが念頭にあった。その御堂が完成し、浮舟を宇治に連れてきた。一旦浮舟から離れた薫は、京へ手紙を送る。手紙には、「まだなりあはぬ仏の御飾りなど見たまへおきて、今日よろしき日なりければ、急ぎものしはべりて、」(東屋卷⑥九八頁)と記している。完成しきっていない仏の御飾りをそのままにしていたというの

は口実ではあるが、「仏の御飾り」を浮舟に変換すると、現状と符合する。宇治に着き、大君の亡き魂がここにいるように思われた薫にとつて、浮舟は不完全な「飾り」に過ぎなかったのだろう。

そして、弁の尼とのやり取りを通して、「くだもの急ぎ」に見えたことが描かれ、東屋巻は幕を閉じる。薫と弁の尼による東屋巻巻末の場面を転換点として、次の浮舟巻では、どのような展開されるのだろうか。

季節は晩秋から冬に移っている。浮舟巻冒頭では、匂宮が浮舟を忘れ得ないこと、その匂宮の様子を見て、異母妹の素性を教えるわけにはいかないと苦悩する、中の君の心情が描かれる。他方、宇治から京に戻った薫は、頻繁に宇治に行くことができない。

かの人（薫）は、たとしへなく①のどかに思しておきてて、待ち遠なりと思ふらむと、心苦しうのみ思ひやりたまひながら、ところせき身のほどを、さるべきついでなくて、かやすく通ひたまふべき道ならねば、神のいさむるよりもわりなし。されど、いまいとよくもてなさんとす、山里の慰めと思ひおきてし心あるを、すこし日数も経ぬべきことどもつくり出でて、②のどやかに行きても見む、さて、しばしは人の知るまじき住み所して、やうやう、さるかたにかの心をも③のどめおき、わがためにも、人のもどきあるまじく、なめにてこそよからめ、にはかに、何人ぞ、いつよりなど聞き咎められんもの騒がしく、はじめの心に違ふべし、また、宮の御方の聞き思さむことも、もとの所を際々しう率て離れ、昔を忘れ顔ならん、いと本意なし、など思ししづむるも、④例の、のどけさ過ぎたる心からなるべし。渡すべき所思しまうけて、忍びてぞ造らせたまひける。

（浮舟巻⑥一〇六頁）

ここで、「のどか」、またはそれに類する語が近接して四語現れる。薫の「のどか」な性格は、以前から繰り返して語られてきた。大君にも、「のどか」「のどやか」に対応するよう心がけていた。これは「急ぐ」の対極にある。傍線部①は浮舟が「待ち遠なり」と思っているだろうと推測しているものの、なかなか宇治へ行けない様子であ

る。こののどかさは「たとしへなく」と形容されている。居場所が分かれれば、「あるまじき里まで尋ねさせたまふ」(浮舟巻⑥一〇六頁) 匂宮と対比した上で、譬えようもないのである。ただし、薫は浮舟のもとへ行つた時、傍線部②「のどやかに」過ぎたいと思ひ、浮舟の心まで、傍線部③「のどめおき」たいと思う。京でも宇治でも、また他者に対してものどかさを求める薫の性質が見て取れる。したがって、薫は単に浮舟に幻滅し、対応が悠長となつてゐるわけではない。薫は浮舟のために「渡すべき所」を造り始めている。表立つての行動でないため、傍線部④「例の、のどけ過ぎたる心」と語り手から揶揄されるものの、浮舟への対応が決定している。世間を気にし、とりわけ中の君から「昔を忘れ顔」と思われることに我慢ならない薫だが、薫なりの方法で浮舟と対峙しようとする。

薫は宇治の御堂完成を急ぎ、東屋巻では強引に浮舟を宇治に迎えながらも、浮舟をどのように扱うべきか逡巡していた。薫の自邸に正式に妻として迎えることは世間体不都合であるが、召人として扱うことは大君の形代という本意にもとる。しばらくの間宇治に隠しておこうと思うが、逢えない間は物足りなく思われる。

この迷いが浮舟巻巻頭ではひとまず整理されている。浮舟巻において、匂宮と薫双方から対比的に愛される浮舟という存在を描き出すためには、浮舟を宇治に据えた上で、薫の浮舟への対応を定義する必要があつた。

浮舟への対応の転換点となるのが、東屋巻巻末の浮舟との対話であり、弁の尼とのやり取りである。宿木巻で浮舟は大君の形代として語り出され、東屋巻で京から宇治への道程を経て、大君との差異が明らかになる。他方、弁の尼によつて抑制されつつも、薫の中では大君との思い出とは別の、浮舟個人への思いが醸成されている。それにより、大君追慕の物語から、薫・匂宮それぞれから別の形で愛され、形代を脱し成長する浮舟の物語へと転じるのではないだろうか。

このような場面において、「くだもの急ぎ」で見えたことが描かれる。第一節でも述べたように、「くだもの急ぎ」は、『一葉抄』以来、語り手が戯れて述べた、くだものに執着する薫の姿だと解されてきた。ここに、旧注で

の指摘を列挙しておく。

『一葉抄』「双紙地也哥にめをとめ給へハくた物に心のうつるやうにみゆるそ也され事也」

『萬水一露』「したにかきたる物にとゝめて見給ふをくた物に心を入たるやうに見えけるとの給ふ也」

『林逸抄』「双昏地也哥に目をとめ給へはくた物に心のうつるやうに見ゆるそ也されこと也」

『孟津抄』「弁のかたより哥あり此哥をみるとすれはくた物いそくになると也」

『岷江入楚』「ざれてかけり」

『湖月抄』師説「双紙地也。歌にめをとめ給へば、くだ物に心のうつるやうに見ゆる也。たはぶれことなり。」さらに、享徳二年（一四五三）成立とされる『光源氏一部歌』には異同があり、「くひ物いそき」と記す。もてなす物に「くひ物」という直接的な表現を用いており、早い時代から諧謔的な場面として受容されてきたことが確認できる⁽²⁰⁾。近代以降も、『新編全集』頭注が「くだものを早くほしがっている様子に。語り手の戯れの言辞。」と注するなど、中世・近世の注釈書に従う。

くだもの自体も、薫が注目したはずの和歌も、亡き大君を想起させるものである。しかし、薫の「急ぐ」という一連の行動の中で、古注釈の解するような「くだもの」という食に向かつて急ぐ姿は異質であり、はしたない姿に見える。この姿に見えることは、薫や弁の尼の意図とは異なり、情趣を壊すものである。薫と共感し合える弁の尼に対して、情趣を解さず共感し合えない浮舟らの構図で見ると、浮舟らに近いものである。つまり、この光景は、浮舟に執着し始めている薫の内面をほの見せているのではないだろうか。このことは、大君を追慕し続ける薫とは別の様相を示し、続く浮舟巻への転換点になっているのである。

五 「食」と交わる薫の性質

では、なぜ薫が無意識に浮舟に執着する姿は、くだものを急いで食べたがっているという、食物に執着するように見える姿として、受容されてきたのだろうか。

まず、鈴木温子氏も指摘していることだが、横笛巻の赤ん坊の薫を髣髴とさせるからだろう。筍にかぶりつく薫を見て、源氏は「食物に目とどめたまふと、ものいひさがなき女房もこそ言ひなせ」（横笛巻④三五〇頁）と冗談めかし笑いながらも非難し、「いとねぢけたる色ごのみかな」（同）と感じている。不義の子薫に対する皮肉と、源氏自身に迫り来る老いとは対照的な、若き生命への恐懼を含んだ感慨である⁽¹⁶⁾。無分別な赤子と成人した男性貴族の違いはあるが、ここに、本人の意識とはかかわらず、薫を食に執着するように見える人物として描き出す素地があった。

出生の事情から憂いを帯び、道心を志向する薫だが、それと相反した描かれ方が為されていることは、既に論じられている。菊池克子氏は、物語中の「何も知らない人々」により作られた理想的男性としての薫像と、必ずしも道心堅固な人間とは描いていない作者による薫像の二つがあることを論じる⁽¹⁷⁾。鈴木日出男氏は、薫の人生観を示した直後の否定的な評言に着目し、「薫の現世離脱の観念を壊すまいと擁護しながら現世執着の場にひき出している」と述べる⁽¹⁸⁾。このように、語り手の薫を見る視線は、時に厳しいものがある。語り手による薫への批判的表現については、山田利博氏によって詳細に考察されている⁽¹⁹⁾。そして、八の宮への物質的援助に終始するなど、「世俗的安定の中におさまってしまう」薫の性質は、清水好子氏が「薫が食べ物の心配までしてやった」と書き添える⁽²⁰⁾ほどに、その時々々に食事によって顕示されてくる。

例えば、宿木巻で薫が浮舟を垣間見る場面では、侍女が「栗などやうのものにや、ほろほると食」（宿木巻⑤四九一頁）っている。薫は今まで見聞きしたことのないものときまり悪く思い、一旦引き下がるが、また見たくな

って浮舟を垣間見る。田舎びた侍女の様子も気にならないほどの浮舟への強い執着が窺えるが、その薫を傍から見ればどう見えるだろうか。行儀悪く食い散らかす侍女に興味を示す薫の姿が映し出される。

横笛巻では、薫の無心な姿が源氏によって解釈されているだけである。宿木巻や東屋巻の当該場面でも、薫自らが食に執着していたわけではない。源氏や語り手からそのように見えたのである。普段は道心深い薫が、置かれる食と、それを見つめる語り手も含めた人物により、薫の現世に執着する内面を映し出す。つまり、薫を見つめる視点は、薫の目に映る食を交え、その世俗的なものに対する執着を物語っている。自らの意志ではさらけ出すことのない薫の異性に対する欲望は、同じく本能的欲求である食欲に仮託して、表出させられているのではないだろうか。

同じ東屋巻で、浮舟の母中将の君は、匂宮の食事する姿を垣間見ていた。第一部第五章で述べたが、匂宮の日常の食事姿を見せることは、薫の私的な魅力を補完し、中将の君に対し、上流貴族の敷居を下げる役割をしている。その一方で、誰に対しても開放的な姿を見せる匂宮と、なかなか内面を露わにしない薫が対比的に描かれる。後に、浮舟に安易に言い寄る匂宮の性質を表しているが、それに気づかず匂宮を称賛する中将の君の人間性をも映し出す。当該場面では、薫の実際に食べている姿ではなく、周囲からそのように見える姿を描くことで、薫から見え隠れする浮舟への執着と、本人の意図しない姿に見てしまう、周囲の様子を映し出す。

東屋巻は、「侍従なむ伝へけるとぞ。」で結ばれる。薫の和歌の語り手役を侍従が担っている。薫の誦じた「楚王の台の上の夜の琴の声」の意味も分からず、聞きほれていただけの侍従は、「わざと返り事とはなくてのたまふ」薫の真意にも気づけなかったのだろう。弁の尼が薫と浮舟の仲に割って入り、薫と同じ合うことで、語り手は、月明かりにくらまされ、薫が和歌に目をとめたはずの姿を見失う。弁の尼の趣向を理解できない浮舟や侍従と同様の価値観で薫を見つめ、果ては侍従にとって代わる。語り手が薫の意識と離れ、視点を変化させることにより、物語は新たな局面を迎えるのではないだろうか。

六 弁の尼が動かす物語

弁の尼は、薫が浮舟に執着し始めるとそれを阻み、薫に大君追慕の情を喚起させる役割を担っている。浮舟を物足りなく思う薫の気持ちを顕在化させることで、大君の「人形」として、浮舟を宇治に据えようとする薫の計画を妨げていく。

当該場面でも、薫が口ずさんだ「楚王の台の上の夜の琴の声」の詩から、大君から浮舟への「色かはり」を危惧し、和歌によって大君を思い続けている薫像を提示する。上流貴族である薫をもてなす教養を備え、風趣を理解した趣向の和歌やくだものを贈ることで、教養がなく、薫と共感し合えない浮舟の物足りなさを執拗に示す。薫は、大君と浮舟を別人として考える弁の尼の歌には賛同しかねるものの、弁の尼の歌によって、形代の浮舟ではなく、大君本人への思慕に立ち返っていく。

しかし、その和歌に注目した薫の姿は、薫がくだものに執着しているという、食欲を顕わにする姿に見える。近年、「くだもの急ぎ」に別の見解が示されるものの、横笛巻や宿木巻など、薫の姿が「食」への執着と関連付けて描かれてきたように、東屋巻でもそのように解する素地があったのだろう。上流貴族に供されるくだものだが、それに執着しているように見えることで、卑しい姿へと変換される。すなわち、無意識にも薫が情趣を解さない浮舟に執心し始めていることを、月明かりに垣間見せる。

大君への追慕により浮舟が物足りなく思われる気持ちと、浮舟に執着する感情、その両面を東屋巻巻末で示した上で、薫と浮舟、弁の尼三者のやり取りを通して、薫は宇治に据えられる浮舟への対応を規定する。浮舟を心憎く思いながらも、大君の形代となりきれないゆえに、宇治に放置し、対照的に熱烈な愛情を注ぐ匂宮に付け入

る隙を与える。東屋巻巻末で薫の心情、立場が整理されることによって、大君追慕の物語から、浮舟が中心の物語へと転換する。ここで、くだものをさし出す弁の尼がキーパーソンとなり、薫やそれを見つめる人々の関係を動かし、物語を推し進める核となっているのである。

注

- ① 鈴木温子氏 『源氏物語』 「くだもの急ぎ」 への一考察——注釈を見直す——（『物語研究会会報』 三三 二〇〇三年三月）
- ② 秋山虔氏・室伏信助氏編 『源氏物語大辞典』 角川学芸出版 二〇一一年二月
- ③ 渡瀬淳子氏 「くだものいそぎ」とは何か（『北九州市立大学文学部紀要』 八四 二〇一五年三月）
- ④ 中野幸一氏 「弁の君と女房たち」（『講座源氏物語の世界』 第八集 有斐閣 一九八三年六月）
- ⑤ 徳江純子氏 「老女房「弁」について——薫とのかかわりを視座として——」（『平安朝文学研究』 五 一九九六年十二月）
- ⑥ 外山敦子氏 『源氏物語』 老女房弁の「昔物語」——薫の〈原点回帰〉の契機として——（『日本文学』 五二・二 二〇〇三年二月）
- ⑦ 永井和子氏 「老人の語りとしての源氏物語——虚構と時間——」（『源氏物語の人物と構造』 笠間書院 一九八二年五月）
- ⑧ 陣野英則氏 「弁の尼を超える薫——『源氏物語』 「宿木」「東屋」巻の言葉から——」（『源氏物語の新研究——宇治十帖を考える』 新典社 二〇〇九年五月）
- ⑨ 吉海直人氏（『源氏物語』 東屋巻の薫と浮舟——逢瀬と道行き——）『國學院雑誌』 一一一・一二 二〇一〇年十二月）は、宇治行の車中、四人の心情が「すれ違い錯綜する」さまについて指摘している。
- ⑩ さらに遡って秋の明け方の空を眺める場面を見てみると、薫が大君と実事なく朝を迎え、「空のあはれなるをもるともに見」（総角巻⑤二二七頁）た場面が挙げられる。薫はこの時大君に対し、「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも、同じ心にもて遊び、はかなき世のありさまを聞こえあはせてなむ過ぐさまほしき」（同）と、「同じ心」の重要性を語っている。
- ⑪ 『源氏物語』中の「おしやる」の用例は二三例。うち、琴や箏の琴など楽器は七例である（他に、「几帳」七例、「衣」三例など）。楽器は男女問わず、弾くよう求められても「おしやる」ことで弾くことを拒否したり、琴を「おしやる」ことで弾くのを中断したりしている。
- ⑫ 『新釈漢文大系』 明治書院による。

- (13) 「扇ならで、これしても月はまねきつべかりけり」(橋姫巻⑤一三九頁)と言う中の君に対し、大君は「入る日をかへす撥こそありけれ、さま異にも思ひおよびたまふ御心かな」(同)と返す。両者漢故事に基づくやり取りである。余田充氏(「扇で月を招くこと」と「白き扇」——『源氏物語』橋姫巻と東屋巻——)「四国女子大学紀要」一一・二 一九九二年三月)は、東屋巻巻末の薫は「橋姫の合奏を初めて垣間見た折のことを想起していたに違いない」と扇にまつわる漢故事を引く橋姫巻と東屋巻が対比的に描かれていることを指摘する。
- (14) 河村奈穂子氏(『源氏物語』東屋巻「楚王の台の上の夜の琴の声」——白雪曲・廻雪曲との関連について——)「甲南大学紀要 文学編」一四三 二〇〇六年三月)は、「薫が班婕妤の故事に気づくのは口ずさんだ後である。琴を奏で、浮舟と語らう中で口ずさまれた詩句は、本来はその時の薫の感情や状況を表現したその場にふさわしい内容であったとまづ考えるべきではないか」と問題提起している。
- (15) 木谷眞理子氏「源氏物語と食」(『成蹊国文』四〇 二〇〇七年三月)
- (16) 『源氏物語』中の「食ひ物」の用例は三例(玉鬘巻・横笛巻・東屋巻)あるが、いずれも食物に執着することを他者が蔑む例である。
- (17) 横笛巻の薫については、高橋亨氏「色ごのみの文学」(『源氏物語とその周辺の文学 研究と資料—古代文学論叢第十輯—』武蔵野書院 一九八六年五月)、「横笛の時空——源氏物語の音楽とその主題的表現——」(『源氏研究』四 一九九九年四月)、松井健児氏「『源氏物語』の小児と笛——身体としての薫・光源氏の言葉——」(『源氏研究』一 一九九六年四月)などで詳しく論じられている。
- (18) 菊池克子氏「薫論」(『平安文学研究』三四 一九六五年六月)
- (19) 鈴木日出男氏「薫大将」(『源氏物語講座』有精堂出版 一九七一年八月)
- (20) 山田利博氏「薫の墮落——源氏物語続編理解の方法として——」(『源氏物語と平安文学』二 早稲田大学出版部 一九九一年五月)
- (21) 清水好子氏「源氏物語の俗物性について」(『国語国文』二五・七 一九五六年七月)

結章 『源氏物語』における「食」の取捨選択

——胡蝶巻の中宮御読経における「引茶」をめぐって——

一 儀礼の中の「食」

これまで、主に褻の「食」を中心に、ある場面に「食」が描かれる意図を探ってきた。何気なく置かれているように見える「食」だが、文脈を辿ってみると、物語の主題と関わり合いながら、意図的に厳選して描かれていることがわかる。「食」の表現によって、作中人物の個性が、別の視座から明らかとなる。それとともに、「食」と、「食」を見つめる視点に着目することは、中心人物を取り囲む端役も含めて、様々に絡み合う人間関係によって、さらに読みの世界が深まることを示す。

晴れの「食」については、さらに多くの人の目に止まる。詳細に描かれることで、儀式の盛大さを表すことは、第一部第四章などでも述べた。個々の記述を史料から実際の儀礼に即して裏付けることは、儀礼の方面からの研究に詳しいが、第二部第一章で述べたように、食べ物が描かれている儀礼の多くが、人生の転機、年の変わり目に関わる祝い事である。主食となる米類が多いことについても確認した。餅をはじめとした米の神秘性は、柳田国男氏によって既に提唱され⁵⁾、通過儀礼において米を素材とした食物が多いことについては、民俗学の分野からの指摘もある。平安時代においても、行事において米が重要な役割を担っていたことが窺える。たとえば、正月に長寿を祝う歯固めの祝いでは、『花鳥余情』に「たかつき六本におしきをすゆ 一のたいにもちる大根たち花をもるなり」と注されている。様々な食物が供されていたことがわかるが、『源氏物語』本文ではメインの餅以外は全て省略されている。倉林正次氏は、宴席で御飯を食べる行為は、行事的意味があり、「厳重な祭りの忌みから解除されるための方法、解齋のてだてとして持たれた」と述べている⁶⁾。儀礼の中の食でさえ、晴れの場から褻

の場合へと戻る日常のものとしての役割を担っていた。したがって、話の流れ上必要最低限の食べ物を書き表す意識があったと考える。

二 描かれなかった「食」

では、『源氏物語』に描かれなかった「食」は、単に省略されただけなのだろうか。『源氏物語』本文に描かれていないものの、古注釈の中で受容されてきた「食」もある。描くことにも意味はあったが、描かないことにも意味があったのではないだろうか。結びにかえて、胡蝶巻の中宮御読経を起点として、描かれなかった「食」に焦点を当てて考察を行う。

光源氏三十六歳の年、花盛りの晩春三月下旬のことである。折から六条院に里下がり中であつた秋好中宮により中宮御読経が催される。

今日は、中宮の御読経のはじめなりけり。やがてまかでたまはで、休み所とりつつ、日の御装ひにかへたまふ人々も多かり。障りあるはまかでなごしたまふ。午の刻ばかりに、みなあなたに参りたまふ。大臣の君をはじめたてまつりて、みな着きわたりたまふ。殿上人なども残るなく参る。多くは大臣の御勢ひにもてなされたまひて、やむごとなくいづくしき御ありさまなり。

(胡蝶巻③ 一七一頁)

前日、春の町では秋好中宮の女房たちを招き、紫の上により舟樂の宴が行われていた。その宴に夜通し興じていた人々は差し障りのない限り皆、正午頃に秋の町へ移動する。「日の御装ひ」つまり束帯に着替え⁶⁾、殿上人なども一人残らず参上する。『源氏物語』中、中宮御読経は六条院での一度しか描かれませんが、束帯に着替えて赴く

べき公的行事であり、参集客の多い大規模なものであったことが窺える。『河海抄』はこの「中宮のみどきやう」について次のように注する。

本朝月令二月云々^④

国史云天平十七年九月平城中宮請僧六百人令讀大般若經是濫觴也

季御読経とは春秋内裏にて大般若を講読せらるゝ也

引茶とて僧に茶をひかるゝ也中宮東宮これにおなし

中宮御読経は、季御読経と同一視され、季御読経の来歴と主な内容が説明されている^⑤。この記述が『年中行事歌合』と類似することから、松本大氏は『河海抄』への影響関係を指摘する^⑥。この注は、『孟津抄』『萬水一露』『岷江入楚』『湖月抄』にも引き継がれ、一定首肯される理解であったと考えられる^⑦。この中で、「引茶」という僧に茶を施す儀礼があったことが知られる。

『源氏物語』本文での中宮御読経についての言及は、前掲しただけで、儀式の次第など詳細は語られない。引用部の後、紫の上から供養の心ざしに、史実の季御読経や中宮御読経では行われない鳥や胡蝶の童舞が献じられる。前日の舟樂の宴と同様、華やかな様子が詳細に描かれる。寡黙な秋好中宮御読経の描写とは対照的である。「茶」の一字も見えない。中宮御読経と同一視された季御読経とその中の引茶がどのようなものであったかを推察した上で、本文に描かれなかった「茶」の意義を通して、描かれないことにどのような意識が働いていたか、描かれないことで物語にどのような効果を与えているか、描写の取捨選択について考察する。

三 季御読経の中の引茶

季御読経とは国家安泰を祈願して宮中に僧を招き、大般若経を転読する仏教法会である。この起こりを『河海抄』では、「天平十七年九月」とする。『続日本紀』天平十七（七四五）年九月二十三日条に、平城中宮に僧六百人を請じて大般若経を読ましめた記述^⑧が見られ、このことだろう。これは、先頃から患っていた天皇の病氣快癒のためであり、この頃の御読経はまだ臨時的な性格を有していた。

臨時的なものから公的な性格を賦与されるに伴って、季御読経の形態も凡そ決まってくる。陽成朝には四季から春秋二季に改められた^⑨。東宮や冷泉院のような比較的私的な場所で行われる場合が多かったが、清和朝には紫宸殿や大極殿を使用するようになった。

引茶が史料に見られるようになるのは平安中期（一〇世紀から一一世紀半ば）以降である。引茶は茶を施すことである。「引」には、「引出物」などというように、用意して供する、贈物をする意がある。その意味の「引」であろう。『西宮記』^⑩卷三・三月条に、

一日着朝座 可尋寛平九年日記應例

同日差造茶使事

所承和例云、三月一日、差造茶使、粮並雜物、行内藏寮者使一人、侍醫、校書殿執事一人、共造之、校書殿使摘茶進所、菓殿生以舛量請、造法見例文也

とある。「造茶使」という職名があり、典菓寮の官人の中から任じられたという^⑪。初めて日本で喫茶の記録が見られるのは『日本後紀』^⑫弘仁六（八一五）年四月二十二日条で、永忠は嵯峨天皇に自ら茶を煎じて勧めている。平安京に至ると「主殿寮東」^⑬に茶園があった。引茶以前から茶は貴族生活に組み込まれていた。

『江家次第』^⑭季御読経事の条によると、

三个日毎夕座、侍臣施煎茶衆僧、相加甘葛煎、亦高朴・生薑等随要施之、紫宸殿所雜色等参上施件茶、於大極殿修時亦同、但茶用器等見所例也、
藏人式、

甘葛煎や高朴、生薑を好みに従って茶に加えている。「随要施之」から僧の好みが多様に分かれ、それに応じた対処ができるほどに茶が親しまれていた。このような茶を三日間夕座ごと、僧に施している。平安後期以降の『年中行事秘抄』『雲笈抄』『公事根源』等によると、季御読経は四日間にわたり、二日目に引茶、三日目に論義が行われている。しかし、平安中期における季御読経の引茶は期日が固定されることなく、初日から概ね三日間行われていた。『親信卿記』天延二（九七四）年五月条⁽¹⁾には次の記録が見える。

八日、卯、季御読経初也、其儀如常、行事典雅參御前、上卿、左大臣・源大納言・源中納言・中宮大夫・右衛門督・左大辨・修理大夫、但上卿不召、令打鐘直以參上、夕座引茶如例、

（中略）御読経朝座了、上卿退出、

九日、御物忌也、朝夕座講演如例、

十日、依可有御論義、已剋僧侶參上、修朝座、藏人頭伊陟朝臣奉仰、召候清涼殿之威從、仰可注進南北二京学生等名簿之由、件御論義事、藏人典雅昨夕承仰以可開食之狀、仰僧都覺忠、是真言宗也、縱雖可仰僧綱、理須仰頭宗僧綱、況不仰威從、直仰覺忠哉、依此太政大臣有不快之氣色云々、繆之又繆也、不問故矣、仍今日依例改仰之云々、未一剋僧徒參上、威從以学生名

簿、授頭伊陟朝臣、々々々々奏聞、召候御前律師禪芸於弓場殿、仰可番五番之由、本自敷筵、仍於南間定奉、奏番文、律師書以

一通、此間侍臣引茶、々々了之後、掃部寮參上敷座、廂第五間迫御簾、南北妻敷黃端疊一枚、為論者座、孫廂南第三間敷綠端疊二枚、為從南殿召度僧座、件座朝座了、承可有論義之由、理須夕座初敷之者也、又去年夕座初敷之、而今日引茶之後、官人參上敷敷、未知故實、可尋先達、々々々々南殿僧移參着座了、律師召可進候之僧名、謂、其法師答、不称唯、直着座、一々如此、（後略）

一日目は、「引茶如例」とあり、引茶は恒例的であった。三日目には、已剋（午前十時頃）に僧侶が参上する。朝座が修せられた後、弓場殿で藏人頭源伊陟が中心となり論義に参加する僧侶の番文が定められた。論義とは経論について問答形式で講説することである。結番が決まるまで、両殿で侍臣が茶を施している。引茶終了後、選ばれた僧が清涼殿に集められて論義が施行された。論義の定着とともに、引茶は季御読経の儀礼形態の中に組み込まれていったといえる。ただし、儀式の中で形式的に茶が施されたというよりは、当初は結番が決まるまでの待ち時間に、供応として行われていたのではないだろうか。

時が経つうちに引茶も季御読経のうちに形式的に組み込まれ、二日目のみに実施されるようになった。相馬範子氏は「法会の中で盛会であった喫茶儀礼は、時が経つにつれ、僧侶への感謝というよりも饗応の派手さがめだち、儀式本来の厳肅さが薄らいだ風潮が見られてきたのではなからうか。そのような中、煎茶の接待も慎むべきだとする意見も出てくるようになった。」と、天台座主良源が天禄元（九七〇）年に『二十六箇条起請』⁽¹⁶⁾を挙げて述べている⁽¹⁷⁾。ここから、「当時の山門僧侶の綱紀肅正をはかり、諸法会での過度な振る舞いを規制し、うち煎茶をもって供することを停止した」ことが見える。

当時中国で飲まれていた餅茶（团茶）⁽¹⁸⁾と呼ばれる茶は、国家のためのものであった⁽¹⁹⁾。引茶の茶が餅茶であるか葉茶であるかは説が分かれるところだが、『入唐求法巡礼行記』⁽²⁰⁾に慈闍大師円仁が唐で茶を飲んだり自ら茶を出したり、仏の供養のために茶を献じたりした記録が見える。このように遣唐使として入唐した多くの僧が茶に触れたであろうことは推測できる。それならば、茶がどのような性質をもって供されていたかは自ずと理解され、日本にも同じ概念で伝わるのではないだろうか。

『年中行事秘抄』⁽²¹⁾に「第二日有引茶、第三日有論義、已上秋無之」とあるように、秋の季御読経には引茶は通常行われなかった。ただし、『為房卿記』⁽²²⁾寛治元（一一〇八七）年七月二十三日条によると、「春季入秋被行之時、或無引茶事、依為代初、被行之」とあり、天皇の代始であるがゆえに、特例として引茶が行われたと見られる。季御読経は国家安寧を願う公的行事である。季御読経にとって引茶は豪奢を左右する儀式であった。中国で重んじられていた茶は、日本の法会でも公的な場にふさわしい贅沢な品として扱われていた。『二十六箇条起請』は、三日間引茶が行われていた『親信卿記』天延二年条と時代が前後するので、影響があったかはわからない。だが、茶はまだこの時代高価なものであり、贅沢の一種であった。それゆえ、規制の一部に加えられた。平安後期にはさらに仏教色が強まる中で、儉約の風潮が生まれてきたのかもしれない。また、平安中期に一箇所から紫宸殿・清涼殿二箇所で転読が行われるに伴い請僧数が増えたことも、引茶縮減の理由として考えられる。

しかし、『源氏物語』の描かれた頃にはまだ、季御読経の初日から概ね三日間引茶が行われていた。豪華の極みを求めた時代である。季御読経はそれを示すのに適した法会だったといえる。ただし、『親信卿記』に見えるように、論議の結番が決まるまで待っている僧に施す性格を有していた。酒が人を酩酊させるのに対し、茶は覚醒させるものである。これから延々と経を唱える僧を覚醒させるのに役立つだろう。水や湯でもなく、ましてや酒でもなく茶が施された事実は、当時貴重であった茶の性質を見極めた上でのことである。単に豪華絢爛の派手さを表すのではなく、荘厳で公的な法会を肅々と行い、僧をもてなすのにふさわしいものとして、茶が選ばれたのではないだろうか。

四 中宮御読経と秋好中宮

『源氏物語』の舞台となる時代は、年中行事や音楽など様々な立場から延喜・天暦の頃と言われる。秋好中宮の準拠としても、その時代の徽子女王・その娘規子内親王だと考えられている。徽子女王は醍醐天皇第四皇子重明親王娘である。朱雀天皇の承平六（九三六）年、八歳で伊勢齋宮に卜定され、九年間その任にあたった。母の摂政藤原忠平女寛子の死により退下、のち天暦二（九四八）年、二十歳の時村上帝に入内、第四皇女規子内親王を儲けた。絵合巻における冷泉帝御前での絵合は、史上の村上朝の天徳内裏歌合をその準拠としている。物語の冷泉天皇と史上の村上天皇との対応は、徽子女王と物語中における齋宮女御とを一層重ならせる。賢木巻で六条御息所は娘の齋宮に添って伊勢へ下向する。母子同行の『源氏物語』以前の例としては、規子内親王が、円融朝の貞元二（九七七）年に母の徽子とともに伊勢へ下向した例のみである。徽子は六条御息所、娘規子は秋好中宮の準拠としても考えられる。

しかし、甲斐稔氏が、秋好中宮御読経は「彰子主催中宮季御読経に類似しており、恐らく、彰子の例を念頭に叙述された」と論じている⁽³³⁾。主催法会の持つ意義と共に中宮立后の経緯にしても、彰子と類似することから首肯される。彰子中宮御読経の初見は、長保二（一〇〇〇）年四月二十日から四日間である⁽³⁴⁾。彰子は同年二月二十五日に立后、四月七日に入内している。その直後のことである。甲斐氏は「請僧・荘嚴具等の準備を考えると、入内以前から計画されていたに違いない。」と指摘する。それほど藤原道長がこの法会を重視していたことが窺える。道長は、中宮季御読経始修の前年、長保元年閏三月二日に自邸において季読経を行い、同様の法会を中宮御在所でも開催させた。『枕草子』でも、「きらきらしきもの」として「季の御読経」（四三一頁）を挙げる。既に中宮となり中宮御読経を催していた⁽³⁵⁾。定子に対抗し、新中宮の権威を明確にするためには中宮季御読経の主催は絶好の機会であった。

秋好中宮も内大臣女の弘徽殿女御や式部卿宮女の王女御との立后争いを経て、源氏の意向により決定している。中宮御読経により、秋好中宮はもとより後見者たる源氏の権勢を示威することになる。また、彰子中宮御読経は、基本的に朝廷の季御読経が行われた後日催される春秋二季の恒例の法会として確立している。春は三月下旬に行われることが多い点も秋好中宮御読経と通じる。

湯浅幸代氏は、彰子以前の穩子・遵子の中宮御読経についても秋好中宮との類似性を示している⁽³⁶⁾。醍醐帝中宮の穩子は中宮御読経の濫觴といえるが、わずか四回ながら三年連続で三月に行っており、秋好中宮の父前坊と穩子の早世の子・保明親王の関連性が見える⁽³⁷⁾。円融天皇中宮の遵子は史料に見られる限り八回にわたり、また皇太后になってからも御読経を行っているが、春秋に限らず断続的である。ただ、皇子のいない「素腹の后」であり、後宮において藤原兼家の女、女御詮子というライバルがいた点が秋好中宮と共通する。

秋好中宮は他と呼応して、その時々役割を変える。そもそも秋好中宮の登場の仕方からして唐突である。葵巻冒頭で桐壺帝が譲位したことが語られた後の、「まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫宮、齋宮にゐたま

ひにしかば、大将の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし、とかねてより思しけり。」(葵巻②一八頁)の一文が最初である。この後、葵の上に取り憑いた生霊の正体が六条御息所であると、源氏に知られるところとなり、山田利博氏が指摘する⁽²⁸⁾ように、「母の御息所を伊勢に伴い、源氏と別れさせるという役割」を担わされている。六条御息所の退場を促すこと、源氏の盤石の政治的権勢を顕示すること、紫の上の曖昧な位置付けを確たるものにすることに、秋好中宮は携わっている。胡蝶巻で帰結する春秋争いも、紫の上に勝ちを譲ることによって、それまで源氏の傀儡のような存在であった紫の上を、中宮にも劣らぬ理想の人間として完成させた。秋好中宮は常に他との関わり、他からの必要に応じて変化する。そのため、モチーフも様々なイメージを盛り込んでいるのだろう。

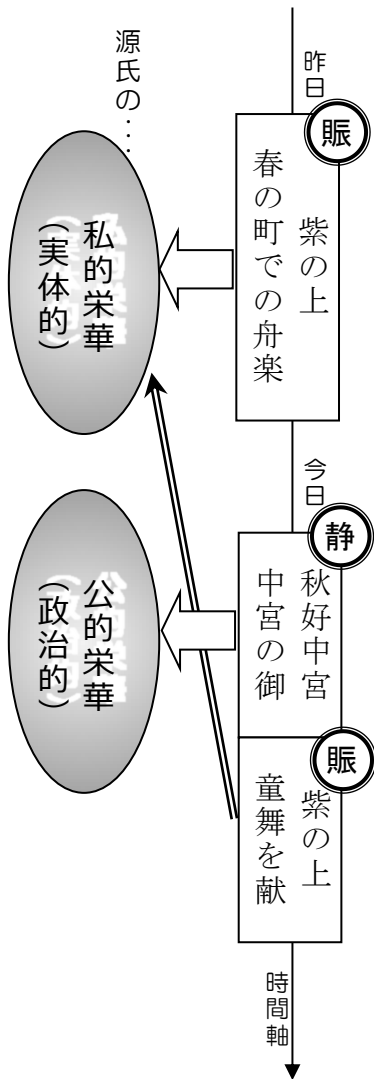
中宮御読経において、「引茶」の記述は見られない。数々の注釈書が季御読経と同一視したように、実際にも季御読経と同じ次第で行われ省略されたのだろう。様々な儀式が事細かに描かれる『源氏物語』において、ここは春の良さを出し、春秋優劣論を終結させるための場面である。とはいえ、この御読経における豪華な描写は引用部分以降に描かれる、史実にはない、紫の上から献じられた鳥や胡蝶の童舞ばかりである。豪華を左右する引茶は描かれず、秋好中宮の勝る点はほとんど描かれない。中宮御読経によって源氏の公的栄華を示すためにはもつと盛大に、細密に描いてもよいはずであろう。なぜ季御読経は、簡素な描写にとどまるのだろうか。

五 法会の公式性と春秋争いの終結

まず、中宮御読経の仏教法会としての性質に着目する。『源氏物語』中の仏教法会は、中宮御読経の他に、仁王会、御八講(法華八講)などがある。その描写は文量の多少はあるが、時・開催理由・参集客の数(人が多く集

まっていること）・場の雰囲気（尊し、いかめし、まことの極楽思ひやらるなど）を主に表す。荘厳具や飾りなどの具象描写が詳細に描かれているのは、賢木巻の御八講（藤壺宮主催）、若菜上巻の源氏四十賀に伴う薬師仏供養（紫の上主催）、鈴虫巻の持仏開眼供養（女三の宮）、御法巻の法華経千部供養（紫の上主催）である。藤壺宮は、この御八講の最終日に出家する。紫の上は、源氏から出家の許しを得られず、法華経千部供養はせめてもの法会である。女三の宮は出家後初めての法会であり、詳細に描かれるには出家との関わりが強い。その上主催者は、公的な場から退いた者（落飾者）、または公的な場に出られない者である。対して、桐壺院の追善供養を目的とした濡標巻の御八講（源氏主催）では、「世の人なびき仕うまつること昔のやうなり。」（濡標巻②二七九頁）とのみ描かれる。蜻蛉巻の御八講（明石中宮主催）では、経を唱え供養した姿が「いかめしく尊くなんありける。」（蜻蛉巻⑥二四七頁）とあり、五巻の日には多くの人が見物に来たことを描くだけである。どちらも派手やかな飾りつけ等は描かれない。

胡蝶巻では、前日に春の町で舟樂の宴が興じられ、中宮御読経を挟んで、紫の上から鳥や胡蝶の童舞が献じられる。御読経における童舞は史実にはない。舟樂を含め、紫の上によるこれらの私的な行事が殊更賑やかに描写されることで、源氏の実体的な栄華を象徴している。それに対して、秋好中宮御読経は、「やむごとなくいつくしき御ありさま」と、敢えて詳細を描かないことで、静粛さを示していると考えられる。中宮御読経は「大臣の御勢ひにもてなされたまひ」た受身的なもの、秋好中宮の使役感・存在感は伝わってこない。後ろから、源氏の「勢ひ」という目に見えない影響力が放たれている。寧ろ、源氏の公的栄華を示し、政治的に大きな存



在であることを強調している。したがって、胡蝶巻のこの場面において、源氏は公私ともに栄華を極めた存在であることが位置づけられる。

次に、この場面が春秋争いの帰結する場面であることに着目する。前日の舟楽で、秋好中宮は中宮であるために気軽に春の町へ赴くことはできず、女房のみが春の町へ渡る。「行く方も、帰らむ里も忘れぬべう、若き人々の心をうつす」(胡蝶巻③一六八頁)ような春の町の華やかさに、秋好中宮の女房たちは圧倒される。さらに、中宮御読経の後に、紫の上から童舞が献じられ、中宮に手紙が贈られる。

紫の上花ぞののこてふをさへや下草に秋まつむしはうとく見るらむ

宮、かの紅葉の御返りなりけりとほほ笑みて御覧ず。昨日の女房たちも、「げに春の色はえおとさせたまふまじかりけり」と花におれつつ聞こえあへり。(中略)

御返り、中宮「昨日は音に泣きぬべくこそは。」

こてふにもさそはれなまし心ありて八重山吹をへだてざりせば」

とぞありける。すぐれたる御労どもに、かやうのことはたへぬにやありけむ、思ふやうにこそ見えぬ御口つきどもなめれ。

(胡蝶巻③一七二頁)

女房たちは、「げに春の色はえおとさせたまふまじかりけり」と春を褒め称える。秋好中宮の返歌に、「へだてざりせば」とあり、この日の朝、「朝ぼらけの鳥の囀を、中宮は、物隔ててねたう聞こしめしけり。」(一六九頁)と、夜通し宴が催されていた春の町の様子を悔しく思っていた。秋好中宮は一人「へだて」られ、「鳥の囀」や女房たちが浮かれて話し合う声など、周りからの「声」によつてしか、窺い知ることができない。そのため、春のすばらしさがより一層引き立てられる。秋好中宮の返事に「昨日は音に泣きぬべくこそは。」とある。これは、『古今和歌集』巻第十一の「わがそのの梅のほつえに鶯のねになきぬべきこひもするかな」(巻第一一 恋歌一 読人

しらず 四九八)を引歌とし、「声」に出して泣きたいと思うほど舟樂がすばらしかったことを示す。ただし、飽くまで「泣きたいほど」であり、実際に泣いたわけではない。「無言」であることが本拠である中宮にとって、「声」に出してしまふほど」という「音声」を強調した表現は、紫の上に対する最上級の褒め言葉である。中宮御読経の描写の静寂によってその意味合いが印象付けられた直後であるだけに、よりその「音声」は紫の上を高めていく。ただし、それによって源氏の公的栄華を表す秋好中宮の地位が揺らぐことはない。敢えて「泣きたいほど」に留め、中宮の品位を落とすことなく、紫の上の地位を上げることに成功しているといえる。秋好中宮の返歌の後に、破線部「すぐれたる御労どもに、かやうのことはたへぬにやありけむ、思ふやうにこそ見えぬ御口つきどもなめれ。」と、語り手は紫の上・秋好中宮両者の歌をこき下ろしている。物語作者の手による歌であることから謙虚な姿勢を示すと共に、歌の優劣については痛み分けともいえる。ただ、源氏の栄華にとつて、この場面での主眼は、春秋に分かれて主張し合う両者を融和させることである。だからこそ、この場面の末尾に、「こなたかなたにも聞こえかはしたまふ。」(一七四頁)と、両者の親交が語られるのだろう。

したがって、この場面では、賑やかに描かれる私的な行事と、静謐に描かれる公的な行事により、源氏の権威を示す。紫の上は、後に女三の宮が降嫁し源氏の正妻となるように、公に出られる立場にはない。そのため、圧倒的な政治権力を有する秋好中宮が、紫の上を立てる形で春秋争いを終わらせ、融和を図ることにより、六条院の栄華が公私ともに極まった様子を見せつける。

このような饗宴において、重要な要素が音楽と食である。暮れから「皇聲といふ楽」(二六八頁)が奏でられ、楽人と呼び「弾物、吹物」(同)様々に演奏する。「食」については控えめだが、前日からの宴で酔いが回り「そら乱れ」(二七〇頁)した螢兵部卿宮の様子、源氏と螢宮が「御土器」(同)を交わす様子は描かれていた。中宮御読経でいえば、読経の声(音)と引茶の味(食)とで、広義として饗宴といえる。『源氏物語』中、法会における僧の描写は決して多いわけではない。賢木卷の御八講における「今日の講師は、心ことに選らせたまへれば、」

(賢木卷②一三〇頁)、藤裏葉卷の灌仏会における「御導師おそく参りければ、」(藤裏葉卷③四四四頁)、鈴虫卷の持仏開眼供養における「講師参上り、」(鈴虫卷④三七五頁)など、僧が選ばれたこと、または参上したことを記すだけである。茶も豪華を左右するような特別なものであったとはいえず、「食」としての性質から、日常とかけ離れた仏教法会などでは、全く食べ物には描かれなかった。秋好中宮御読経でも、僧の声、引茶、そのいずれもを、読者の視界から遠ざけて描かないことで、法会としての荘厳性を高め、源氏の権勢に焦点を当てたのではないだろうか。

六 今後の展望

胡蝶卷は、紫の上と秋好中宮それぞれが主催する、二つの「宴」が描かれる。その背後には、源氏の影響力が窺える。三十六歳になり人間的にも政治家としても成熟した、源氏の栄華を存分に描き出す。賑やかさによって私的な性格を表す紫の上主催の舟楽の宴に対し、秋好中宮御読経は敢えて詳細を描かない。描かないことで公的性のある行事の盛会を示した。

しかし描かずとも、後世『河海抄』等の古注釈に「茶」の文字が見えるように、読者はその意図を認識していた。茶は、当時豪華を左右するものでありながら、『親信卿記』で論議の結番が決まるまで待つ僧に施していたように、人をもてなす性質があった。また、大内裏に茶園を有する^(註)ほど、公的な性格を持つものであった。吉村亨氏によると、中国・日本ともに産育や婚礼・葬礼において古くから用いられ、キョメやコミュニケーションツールとして本来的に「聖なる性質」を有していたという^(註)。水でも湯でもなく、茶が季御読経に用いられたのは、「茶」の持つ晴れの性質を踏まえた上でのことだった。茶の晴れの性質は、物語が内包する奥行きの一つとして、

描かれないことで、源氏の権勢をより強く示すことにつながった。

源氏の公私にわたる繁栄の情景が、動と静の両極から示されることにより、春の町を中心とした六条院の盤石さが示される。その後、季節が夏へと変わり、玉鬘の求婚譚が語り始められる。安定した栄華を誇る六条院ゆえに、玉鬘という異分子の存在が内外に波紋を投げかけていく。

これまで考察してきたように、「食」は、描くことだけでなく、描かれないことにも意味が見出される。「食」は、日常性や穢れ意識などから忌避される一方で、人と人とのつながりを強める働きもする。この両面性を持つ「食」が、人々の関係を示している。本論では、主に男女関係を取り扱ったが、親子関係や政治的な関係についても、今後考察を進めていきたい。

付章でも述べたように、行動と視覚との密接な関係は、「食」以外の問題にも広がり得る。中心人物や端役の人物論を越えて、さらに、名もない群衆に目を向けることで、物語展開の大きな流れが見えてくるだろう。

本論では、『源氏物語』の「食」を中心として、文脈を読み解く方法論を探った。「食」の問題は、『源氏物語』にとどまるものではなく、勿論他の時代、他作品にも表れる。作品によって異なるであろう「食」描写の性質を見極めながら、逐次検討する必要があるだろう。本章で『河海抄』に施された注に着目したように、一つの作品の時代による享受の差異も見えてくる。第二部第四章では、「くだもの急ぎ」において、その一例を示した。特に、褻の「食」に関わる注は、中世後期以降になって増える傾向にある。注釈の上でも、晴れと褻の意識は働いている。古注釈が注を付す「食」などの受容の面についても、さらに検証を加えたい。

以上、『源氏物語』研究、「食」文化研究における、さらなる多様な観点からのアプローチの可能性を提示し、
摺筆する。

注

- ① 柳田国男氏「食物と心臓」(『定本柳田国男集』第一四卷 一九六二年五月)
- ② 倉林正次氏『饗宴の研究 文学編』桜楓社 一九六九年八月
- ③ 『紫明抄』『河海抄』は、「ひの御よそひ」を「緋也」「緋御装束也 赤色也」としているが、それ以降の注釈書は「昼の衣裳」、束帯としている。『小右記』万寿二(一〇二五)年十一月二十九日条では帯刀束帯で参上しており、それに倣う。
- ④ 『源氏物語古注釈大成第六卷 河海抄・花鳥余情』日本図書センター 一九七八年では、「本朝月令三月云々」と異同がある。
- ⑤ 『源氏物語』本文でも、青表紙本系統の横山本・池田本、河内本系統、また別本で、「今日は、中宮の御読経」を「中宮の季、御読経」とする異同があり、中宮御読経は、季御読経と同様のものと考えられていたことが窺える。
- ⑥ 松本大氏『河海抄』の注記形成と二条良基——『年中行事歌合』との接点から——(『国語と国文学』九一・八 二〇一四年八月)
- ⑦ 『浮木』では少し表現は異なるが、「二八両季二大般若経を講読ある事也 昔ハ請僧六百人参て引茶など云事ありしや禁中にての法会なるヲ御里六条院にて被行也 東宮ノ御方にもある事也」とあり、同様に季御読経の説明が為されている。
- ⑧ 『国史大系』第二卷
- ⑨ 『日本三代実録』元慶元(八七七)年三月二十六日条
- ⑩ 『神道大系 朝儀祭祀編二』
- ⑪ 『百寮訓要抄』(『群書類従』第五輯)によると、典薬寮は医薬、薬園、枸杞園、乳牛牧、茶園などを司る。
- ⑫ 『日本後紀』卷二四(『国史大系』第一部五)
- ⑬ 『西宮記』卷八・諸院条
- ⑭ 『神道大系 朝儀祭祀編四』
- ⑮ 『大日本史料』第一編之一三
- ⑯ 『大日本史料』第一編之一三
- ⑰ 相馬範子氏「季御読経における引茶について」(『藝能史研究』一六九 二〇〇五年四月)
- ⑱ 『茶経』によれば、餅茶とは摘んだ茶を蒸し、杵でつき、円形や方形などの形に詰めて固めたものを焙炉で乾燥させたもの。飲むときは炙った後に碾(薬研)で粉末にし、この茶末を釜で沸かした湯に投じて煮出し、上澄みをすくって飲む。
- ⑲ 石田雅彦氏『「茶の湯」前史の研究——宋代片茶文化完成から日本の茶の湯へ——』(雄山閣 二〇〇三年一月)。論拠として、『文献通考』卷十八征榷考「(片茶)以充歳貢及邦國之用。(中略)(散茶)以充歳貢。及邦國之用。泊本路食茶。」

- や、『宣和北苑貢茶録』「即北苑造團茶。以別庶飲」を挙げる。片茶は宋代に固形茶のことを総称する言葉である。
- (20) 円仁著、足立喜六氏訳注・塩入良道氏補注『入唐求法巡礼行記』一・二(平凡社東洋文庫一五七・四四二 一九七〇・一九八五)
- (21) 『群書類従』第六輯
- (22) 『大日本史料』第三編之一
- (23) 甲斐稔氏「胡蝶巻の季の御読経」(『中古文学』三八 一九八六年十一月)
- (24) 『御堂関白記』(『覆刻日本古典全集』長保二年四月二十日に「宮季御読経初」、二十三日に「宮御読経結願」と見える。
- (25) 『権記』に、長徳元(九九五)年十月七日発願、十日結願の記事が見える。
- (26) 湯淺幸代氏「秋好中宮の季御読経―史上の「中宮御読経」例、再考―」(『文学研究論集』(明治大学大学院) 二三 二〇〇五年九月)
- (27) 『花鳥余情』は、賢木巻の「十六にて故宮に参りたまひて(後略)」(②九三頁)項において、「朱雀院の立坊は源氏四歳の時也 それよりさきの東宮にてまし／＼しによりて前坊とは申侍り 保明太子小一条院などの例なり」、『湖月抄』師説は、葵巻の「前坊」(②十八頁)項において、「坊のうちには早世し給ふをも前坊と申す也。文彦太子(保明親王)などのごとし。前の春宮坊の心也。」(括弧内執筆者)と注し、平安期における「前坊」の例は悉く保明親王を指す。穩子が中宮御読経を始める以前に、保明親王が計十三回御読経を催している。穩子は延長元年に薨去した保明親王の御読経を引き継ぐものとして行ったのではないかと考えるのが、湯淺氏の論である。保明親王の薨去が三月二十一日であったことも、胡蝶巻が「三月二十日あまりのころほひ」と設定されることとの関係性を匂わせる。
- (28) 山田利博氏「秋好中宮論―その機能的側面についての考察―」(『宮崎大学教育学部紀要 人文科学』八三 一九九七年九月)
- (29) 『西宮記』臨時五 諸院項に「茶園。(在ニ主殿寮東。)」とある。
- (30) 吉村亨氏「産育・葬送儀礼にみる日中茶俗の比較研究」(『比較日本文化研究』八 二〇〇四年十一月)において、出産や結納に際して茶を贈ったり乳児に茶を飲ませたり、また霊前に茶を供えたり入棺時に茶で沐浴させたり死者の口に茶を含ませたりする習慣が見える。葬礼や祭祀の茶については古くは西周・南北朝の齊などに見えるところという。漢民族はもとより、少数民族も葬礼や祭礼に茶を用い、茶を「聖なるもの」とみなしている。

初出・原題一覧

本論文に所収するにあたり、既発表論文については改稿を行った。

第一部 「食」の視線・意識

第一章 『源氏物語』の柑子——藤壺宮と柏木を結ぶ——（『古代中世文学論考』新典社 二八卷 二〇一三年三月）

第二章 新稿

第三章 新稿

第四章 新稿

第五章 「東屋巻における垣間見る食事——中将の君の視点を通して——」（『日本文芸学』四八 二〇一二年三月）

付章一 『源氏物語』における「騒ぐ」について——周囲の視線を中心に——（『平安文学研究・衣笠編』五 二〇一四年三月）

付章二 『源氏物語』中の「ののしる」が及ぼす影響力について——「騒ぐ」との比較を中心に——（『平安文学研究衣笠編』六 二〇一五年三月）

第二部 交流の媒介となる「食」の働き……………

第一章 「大堰での食事——『源氏物語』薄雲巻における——」（『論究日本文学』九五 二〇一一年十二月）

第二章 『源氏物語』真木柱巻における「かりのこ」を贈る——「柑子 橘などやうに紛らはして——」（『立命館文学』六三〇 二〇一三年三月）

第三章 「塩の歌——光源氏の須磨退去を中心に——」（『平安文学研究・衣笠編』四 二〇一三年三月）

第四章 『源氏物語』東屋巻巻末の薫の姿——「くだもの急ぎにぞ見えける」の解釈を通して——」（『立命館文学』六四二 二〇一五年三月）

結章 『源氏物語』の茶——胡蝶巻の中宮御読経をめぐる——」（『日本文芸学』四六 二〇一〇年三月）